

PERSONA 5 : The • Determination

Ganko

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪盗、再臨。

ペルソナ5×Undertaleのクロスオーバー。ペルソナ5八割、アンダーテール二割で進行。主人公はアンテよりCharaが登場。女性です。

これは、世紀の大怪盗が、世界と一人の人間の決意を奪うまでの物語。

表紙イラストはSUKIMAでtatinami様に依頼して描いていただきました。感謝しかありません…！ケツイ ミナギタ！

感想をいただけるととても励みになります。

もう少し待っていてください※2023/9/18

目次

嵐の前	523
女王の靴音	473
Codenam e:Navi	409
???	405
烏瓜(挿絵あり)	358
社会科学見学	312
Codenam e:Fox	231
始動	157
Episode:1	4
PROLOGUE	1
ごきげんよう	

女王君臨	582
Codenam e:Queen(挿絵あり)	
愚者	697
Episode:2	629
reach out to the truth	773

ごきげんよう

無限に連なる平行世界の数々：そのほとんどが、全く同じ事象の繰り返しであることに多くの者が気づいていない。

世界の仕組みを研究するのは非常に有意義だ。全く同じ人間、場所、時の中でも、すかな変化が思いもよらない結果をもたらすことがある。

世界とは常に無限の可能性を秘めているものだ。

そして可能性とは、人が生まれ持った才能でもある。

可能性とは不確かであるということ。

不確かであるが故に、どんな未来も存在し得る。

それが“世界”。

だがもしその不確かなその世界を…、

“制御”できるとしたら。

誰が、何時、如何なるか。世界の運命を全て自分で定めた夢を、手ずから生み出せるとしたら。

君ならどうする？

君の好きな人だけがいる世界。君の嫌いな人がいない世界。
君の望む世界を、君の手で。

他人の世界は思い通りにならないことばかりだ。造物主は被造物を愛するが、被造物は造物主を愛しはしない。

愛し与える側に幸福を見出せるか、あるいは虚無か、両方か。

私は幸福を見出した。世界の誰も自分に目を向けずとも、世界となって自分以外に目を向けることのほうが望ましかった。

そして、その中でも君は特別だった。

鳥澁がましいけど、これはきつと愛と呼べるものなんだと思う。君を見て、君に見られるほどに、喜びが沸き上がってくるんだ。はじめは見ていただけで満足していたのに、いつの間にか強欲になってしまったんだろう。

君と同じ存在になりたいだなんて、それこそ鳥澁がましい願望だっと思う。

それでも、私は今ここに居る。君の目の前に、君と同じ存在として立っている。その結末や役割なんてどうでもいいのに、ましてこんなに光榮な存在でいられるなんて。

代わりに捨てたものなんてもう覚えていない。悔いや躊躇いはどこにもないよ。

さあ、一思いにやってくれ。これから先の世界を見届けられないのは残念だけど、きつと君のことだから素敵な物語にしてくれると信じている。

君の、君自身の手で物語を始めるんだ。君の中にある世界で、新しい世界を生み出す。世界に、終わりなんてない。人にある心、魂で繋がれば、世界は無限に広がっていく。目の前にある現実が全てではないと、証明してみせてくれ。

Chara。

「うるさいよ」

「私は、そんなことのために生きているわけじゃない」

「私のこの力は、何かを壊すためのものじゃない」

「もう二度と、繰り返し返させない」

残念だけど、それは不可能だ。

君は、

君でしか、有り得ない。

P R O L O G U E

心の怪盗団。ザ・ファントムの名で知られる謎の集団。

ある日突然、誰かのもとに心を盗むという旨の「予告状」が届き、またある日突然、その誰かが自分の犯した悪事の類を自白してしまう。

いままで公に決して明かされることのなかった悪行の数々。そのすべてを自らさらし裁かれることを望む、まるで人が変わってしまったかのような現象。

改心。人々は、心の怪盗団の行いをそう呼んだ。

あるものは法で裁けない悪を明るみに出してくれる正義の味方と謳い、あるものは正体不明かつ手口不明な存在への怪しみを囁く。

日本という国に突如現れた嵐のような存在。そんな怪盗団の正体とは、実は十数人の学生の集まりであることを、限られた協力者だけが知っている。

私もそのうちの一人だ。

ごきげんよう、諸君。

私は怪盗団一味のうちの一人。名は色々とおあるけれど、ここではリーサルと名乗っておく。

切り札に隠されたもう一つの奥の手、もしくは最終兵器の意味合いを込められている、らしい。

本名は妻木^{つまき} 綺羅^{きらら}、秀尽学園高校の2年生。

そして、「存在」として言うならば、Chara^{キャラ}でもある。

ひよんなことから怪盗団と行動を共にすることになる私は、悪党を改心させ、世直しを施していくのに協力した。他の仲間たちは皆、その志に対して個人的な理由を紐づけていたけれど、私は違った。

もちろん世直ししたい気持ちはあった。でもやっぱり他の仲間ほどの熱い志は無かった。

何故なら、私が目指していたものは…、

奪おうとしていたものは、世界だったから。

これから話すのは、二つの世界が交じり合った歪な場所からの解放を望む奴隷の物語。

そして、私という一人の人間が歩んだ道筋。

私たちは世界を頂戴した。

4月10日 日曜日

通学路を通る度にいちいち道を地図で確認するやつなんていない。食事をする度に箸の持ち方を思い出すやつなんていない。それほどまでに毎日繰り返し返される行為というのは、体と脳に染みついていて思考の隙がなくなっていく。

だから、私は今日もここにいます。どうでもいいって顔をしながら、それが当然と言わんばかりに身を任せる。

いつもと同じ場所に同じ痛み。大の大人に身体をいたぶられる感覚にも、もう慣れ

た。明日の事を考えながら、意識を別の何かへ逸らす。

いつもなら、そうしていた。

でも今日は一際激しい。いつもは顔より上に痛みが来ることは無い。だから、首への警戒もゼロに等しく、仰向けになつていた私の喉元に振り下ろされた掌はいともたやすく深々とめりこんできた。

痛みや苦しみよりも先に驚きが押し寄せて、次にひしゃげたかのように感じる気道で精いっぱい酸素を補充しようとする。その時、意思とは裏腹に腕や足が生命維持の危機を脱しようと抗い始める。

それが気に入つたのか気に食わなかつたのか、今度は心臓めがけて衝撃が飛んできた。思わず体全体が跳ね、一瞬完全に呼吸が止まる。必死に口を開けて酸素を取り入れようと身体は足掻く。けれどそんな抵抗もむなしく、次に訪れた衝撃によつて混濁した意識は完全に闇に閉ざされることとなる。

怖くはなかつた。道は違えど、この終わり方はいつも通りだつたから。いつもと違う道を通つても、たどり着いた先が我が家なら、すぐに落ち着きは取り戻せる。

だから、本来であれば命の危機が間近に迫っているこの時でも、私は薄れゆく意識の中で気を失うというよりは眠りにつくつもりでいた。どうせまた、いつもと変わらない明日が来るのだと信じて。

翌日 4月11日 月曜日

この日は私にとって人生の転換日ともいえる日だった。

昨夜の出来事によって家を飛び出してきてしまった私はあてもなく、なんとなく、本来であれば自分が通っているはずの学校へと足を運んでいた。それが、あんなことになるなんて思いもよらなかった。

一瞬のめまいと頭痛を感じ頭を抱えた後顔を上げれば、そこはなんともファンタジックな空間であった。真っ赤に染まった空の下に西洋を思わせる巨大な城がそびえ立っている。そこにあつた学校の面影はどこにもない。

普通なら混乱し、こないかにも怪しい場所に立ち入りはしないだろう。

でも私は違った。予感がしたんだ。

ずっと探していたものに、出会えたのかもしれないと。

そこが何なのかは分からなかった。でも、明らかな危険が待っていることと、それに見合うだけの何かがあることだけは確かだった。私は迷いなく城への架け橋を渡り、入り口を探して外周を歩き回ってみた。

すると突然、目の前に黒い飛沫のようなものが沸き立ったかと思うと、二体の大袈裟な格好をした騎士が立ちはだかった。手には金属製の盾と剣。強そうには見えないが、まだ敵と決まったわけじゃないので注意深く動きを観察する。

「何者だ」

「ここはカモシダ様の領地だ。下民が軽々しく立ち入っていい場所ではない。速やかに立ち去るがいい」

「かもしだ?」

「いいから、さっさと出るんだ」

せつつくように鎧の騎士は盾を突き出し、私を来た道へと引き返すよう促してくる。渋々ここは言うことを聞いておくことにした私は背中を向け歩き出した。…が、次の瞬間剥き出しの敵意が背中に伝わってきて瞬時に身を翻す。

するとさつきまで自分が立っていた場所に、重い風切り音と共に騎士がもっていた巨大な盾が振るわれ、地面に擦れて火花を散らす。

「ちっ…すばしっ…いガキだ」

「だが女だ。カモシダ様の目に留まれば、褒美をもらえるかもな」

やっぱり敵だった。こんなことなら最初から先制攻撃をしかけていればよかった。必殺技は出合頭にうつのが最も効果的だ。

そんな後悔を抱く間もなく、二体の騎士は私を取り押さえようと走り寄ってくる。丸腰の高校生、しかも女が相手とみて甘く見ているのか。その騎士のどこを見ても隙だらけだった。

間合いのギリギリに入ると同時に姿勢を低くし、手前にいた騎士のみぞおちに蹴りをお見舞いする。想像以上にクリーンヒットし後ろに吹き飛んだ騎士は、もう一体の騎士にぶつかり共に倒れ込んだ。

その隙に私は駆け出し、ここへ来る前に見つけた排気口から城の内部へと逃げ込んだ。このまま外に逃げ帰るといふ選択は、頭には浮かばなかった。

城の内部をさまよっているうちに、大勢の騎士が移動していくのが見えた。危険は承知で私はその後を追ってみることにした。

そして、その先で私の目に飛び込んできた光景は、突如現れた城やおかしな空なんかとは比べ物にならないほど、現実離れた光景だった。

「やめろっ!」

「押さえておけ。そいつも後で殺す」

騎士を追った先、城の地下には牢獄があった。定番といえば定番だが、その中には何故か現代の学生服を着た男子二人が収容されていて、それを複数の騎士と一人の男がいたぶっていた。

…これは一体どういう状況だ?

目を白黒させながら物陰から様子を伺う。地べたに這いつくばる金髪のいかにも不良そうな少年は、なおもマントを身に着けた高身長の人に蹴られている。とても手加減している様子には見えない。あのままだと本当に命の危険もある。

もう一人、眼鏡をかけた黒髪の少年は騎士によつて壁に押さえつけられて動けずいながら、目の前で倒れる金髪の少年の身を案じている。

「大人に逆らうからこうなるんだよ」

「それ以上彼に手を出すなっ!!」

「あ?」

「俺が相手だ…!」

「ほう…」

眼鏡の挑発に反応し、マントの男は金髪をいたぶる手を止めてぐつと顔を寄せた。

「…腹立たしい目をしておつて！」

毒づきながら一発腹に殴りを入れ、

「いいだろう。そんなに死にたいのなら殺してやる。やれ」

騎士に、号令をかけた。

そして、動けないままの少年に騎士の剣が振り下ろされ…。

私は咄嗟に走り出し剣を振りかざす騎士を突き飛ばそうとした。でもその時、牢屋の中から身動きを取るのも困難な程の突風が巻き起こり、私ともども、近くにいた騎士やマントの男も動きを止める。

風が止み、なにか起こったのか飲み込めず時が止まったかのように立ち尽くす。その間、その場の視線は全て突風の発生地である黒髪の少年へと向けられていた。

俯いたままの少年はおもむろに、自らの顔…目元のあたりをまさぐる。そして少し顔を上げたその時、妙な仮面が張り付いているのに気付く。

その仮面は皮膚に直接縫い付けられているかのごとくぴつたりと顔に張り付いているようで、剥がそうともがく姿は痛々しいの一言だった。

「…ぐ…ああああああつ!!」

絶叫が響く。

少年は仮面を取りはらった。しかしその際に、仮面と顔との接着面から大量の血が噴

き出していた。思わず顔をしかめつつも、うなだれる少年からなおも目が離せない。それは、この場に居る全員が同じだった。

数瞬、静寂が訪れ…、

次に顔を上げた少年は、笑っていた。

みるみるうちに少年の身体は青い炎のようなもので覆いつくされ、やがて炎が消えた箇所からは元の制服とは違う服が見えてくる。

そうして全身の炎が消え姿が完全に変わった頃、少年の背後には巨大な影が聳えていた。

一対の黒い悪魔のような翼。真つ赤なタキシードのようなものに身を包み、シルクハットをかぶった影。おおよそ人とは思えない出で立ちに目を奪われていると、少年が腕を振り上げ、強烈な衝撃波が放たれた。

一番遠くに居た私は少し後ずさるだけで済んだものの、至近距離にいた騎士やマントの男は吹き飛び背後の壁に激突していた。大袈裟な音を立て鎧は崩れ去っていき、また黒い飛沫のようなものが大量に湧き上がる。

「ホーツー！」

飛沫の後、残ったのは小さなランタンを携えた謎の化け物。

鎧の中身があれだったということか？

「アルサーヌ！」

困惑しているうちに、少年と現れた謎の巨大な悪魔は一心同体の連携でもって次々と鎧の中身を消滅させていく。まるでゲームのチュートリアル戦だ。

華麗な身のこなしで最後の一体を仕留めると、悪魔は霧散したように消え、少年の姿は元の制服姿に戻って片膝を突いた。

腰を抜かしていたマント男は脱兎のごとく牢屋から出て外から扉を閉めようとする。しまった、という色が牢屋の中の二人の顔に浮かぶ。

「お、お、お前ら……っ！ただじゃおかないぞ!?これ以上ないぐらい惨つたらしい刑で殺してやるツ!!そこで大人しく」

牢屋の中へと意識が向いている間に後ろから忍び寄り、まったく守るもののない男の急所へと足を振り上げる――。

「んう!?!」

身がかがめこちらを振り向かんとするモジャモジャ頭をわし掴み、牢の柵へと思いつき叩きつける。

鉄に向かつて頭を打ち付けた男は上下に伝わる痛みによって地に這いつくばりプルプルと震えている。その周囲を見やると、一撃目の時に落とした牢の鍵が無造作に転がっているのを発見した。

「早く出て」

「あ、ああ。ありがとう。：坂本、立てるか？」

「おう：すまねえ」

私はすぐにそれを拾い上げて開錠し、黒髪が金髪に肩を貸して牢から出たのを見計らって、入れ替わりに牢の中に入る。

そして中にかけてあった、おそらく拷問用に使うであろう頑丈そうなロープでマント男の首を括って無理やりに牢の中へ引きずり込んだ。

「これでよし」

「えぐ…」

金髪の方が何やら漏らしたが気にしている場合ではない。私は牢を施錠し、鍵は水路に投げ捨てた。

「とりあえず、逃げる？」

「そうだな。そうしたほうがいい」

「OK。出口は分かっている。ついてきて」

・
・
・

事は一刻を争う。二人ともかなり体力を消耗してるみたいだし、さつさとこの城を出たほうが良さそうだ。

私は自分を通ってきた道を戻り城を出ようと考えた。しかし、さつきの騒ぎから城内では騎士たちが慌ただしく巡回していて、さつき通りの道は通れなさそうだった。

仕方なく迂回して別の道を探そうとやってきた道では、運悪く跳ね橋が上がっていて行き止まりになっていた。

「跳ぶか？」

「まあ私は行けるけど……そっちの彼は」

「……ちと、怪しいかもしんねえ」

「無理はできない」

「じゃあ引き返そう」

向こう側までとはかなりの距離がある上に、橋の下の水路もかなりの深さがあるように見える。既に満身創痍な金髪のほうを連れてはいけないと判断し、引き返そうとしたその時――。

「オイ、そのオマエラ」

少年のような声がある場に響いた。三人で顔を見合わせるも、誰も声を発した風ではない。

「そのキンパツと癖ツ毛と茶髪の嬢ちゃん！こつちだ！助けてくれ！」

やはり聞き間違いでは無かった。今度はよりはつきりと、橋の前に並ぶ牢の中から声がした。そちらを振り向くと、何とも言えない二頭身のマスコツト然としたタヌキがいた。

「タヌキじゃねーよ！」

「猫…?」

「猫でもねーよ!!ワガハイはモルガナだ!!」

「しーっ！でけえ声出すなって！」

「む…んんっ。これは失敬…」

モルガナと名乗った謎の生き物は咳ばらいをした後柵の隙間から辺りを見渡して、こう言った。

「オマエラ、ここを出たいんだろ？出口を知りたくないか？」

「出口なら知ってる」

「いやでもその橋が渡れなくて困ってんだろ？」

「別の道を探す」

「∴。わ、ワガハイならその橋の下ろし方を知ってるかもしれないねえな〜?」

「急に白々しくなったね」

「とにかく、ワガハイをここから出してくれさえすれば、その橋を下ろしてやれる。どうだ? ほら、そこに鍵ぶら下がってるだろ?」

うさん臭さを感じつつも、なんだか私はこの奇妙な生物に興味を惹かれてもいた。デフォルメされたネコのようなシルエットは抱き心地良さそうだし、ピンク色の立派な肉球も見えた。こいつを外に出すメリツトは多い。

「どうする…?」

金髪の方は迷っているらしかったが、黒髪の方は迷いなく壁の鍵を手にとって牢を開けた。こんなところに鍵を放置しておくあたり、ここの警備は相当頭が弱いらしい。

「開けんのかよっ!?!」

「悪い奴には見えない」

ネコなのかタヌキなのか分からない生物はテクテクと二足歩行で牢から出ると、大きく背伸びをして分かりやすく顔をほころばせた。どうやらかなり長い間捕らえられていたようだ。それなりに拷問もされたであろう跡も見取れる。どうせ、またあのマント男の仕業だろう。

そしてここはおそらく、そんなクソ野郎の居城。どう言う訳かは知らないが、実際にここに迷い込んでしまっている以上は目の前の現実を受け入れるしかない。

そう思ったところでふと不安になり、モルガナと名乗ったネコの耳を引っ張ってみる。

「いてててっ！」

「夢じゃないか」

「なんでワガハイで試すんだよ自分でやれよ！」

「いいから早く。この橋下ろして」

憤慨したように毛を逆立てフーツと威嚇する様はまるつきりネコだ。化け猫の類だろうか。

そんなモルガナの姿を観察していると、徐に橋の傍らに設置されていた石像をひっぱたき、出てきたレバーを操作して橋を下ろしてくれた。

「おお……」

「ほらいくぞ。出口はこっちだ！」

先陣を切って走り出すモルガナ。やっぱり二足歩行だった。

完全に信じていいものか迷ったが、とりあえずはその後を追ってみることにした私たち。しかしすぐに前方から鎧が揺れる音が近づいてくる。

隠れる隙も無く、曲がり角で三体の騎士と出くわしてしまった。

「チツ…見つかつたか…！おいくせつ毛！オマエは戦えるんだろ？やるぞー！」

モルガナは先頭に立ち騎士たちを迎え撃たんと構える。その横に黒髪が並び立ち、再び青い炎に包まれたかと思うと、さっきの牢屋で戦った時と同じ格好へと変身した。でも、これで2対3。金髪は負傷しているし黒髪だつてそれなりに消耗している。正面からやるにしても、戦況は明らかに不利だ。一匹はネコだし。

「素人は下がつてろ！来い、ゾロ!!」

ネコの雄たけびが上がると、黒髪のと同じように青い炎に包まれた巨大な影がモルガナの背後に出現した。金髪は驚愕し思わず後ずさつていた。

「お前もソレでんのかよっ!？」

「速やかに黙らせてやる」

「ずるい。私も出したいソレ」

「いいから下がつてろ！ゾロ、威を示せ！」

「ゾロ」と呼ぶその影が手に持ったレイピアのようなものを振ると、突然騎士たちが宙に浮きあがりきりもみ回転しながら地面に激突した。

それに続く形で黒髪のほうの影が指を鳴らし、赤黒いオーラが騎士たちを襲う。

「見たか？こうやって弱点を突いて敵をダウンさせ…」

あつという間に決着がつきなんだか呆気にと取られていると、講義を垂れていたモルガナが私の方を見て言葉を切る。

それとほぼ同時に私は背後に忍び寄る殺気を感じとり、着ていたパーカーの内ポケットから「アレ」を抜き、振り向きざまに兜と鎧の隙間目掛けて「ソレ」を突き出す。

「馬鹿っそいつらに普通の人間の攻撃は……！」

モルガナで後ろで何か言いかけていたが、深々と突き刺さったナイフを勢いよくひき抜くと、騎士は力なく前のめりに倒れ込み、黒い霧とともに霧散した。

目の前でナイフを見せたことはまずかつたかもしれないが、今はそれどころじゃないだろう。他の連中もそれには同意見らしく、

「い、色々と聞きたいことはあるが、とにかく脱出が優先だ。さっさと行くぞ」

私たちはモルガナの先導でこの城からの脱出を最優先事項とすることに、無言で同意した。

巡回する騎士たちに気付かれないように、物陰から物陰へと移りながら静かに素早く駆け抜けていく。西洋チックな雰囲気も相まって、なんだか怪盗みたいだな。実際はどういう状況なのかと言われると……よく分かっていないが。

「おい！行き止まりじゃねーか！」

「早まんнатての。こつちだ」

無事に一つの小部屋までたどり着いた私たちは、お互いにどこか気まずい空気を残しながら通気口へと視線をやっていた。

「外に繋がってるはずだ。早く出たほうがいいぜ」

「モルガナは？」

「ワガハイはまだここでやることがあるからな」

「どうやらそうらしい。ここは大人しく脱出するべきだろう。」

私はモルガナに礼を言い、通気口のふたを外して一番に城の外へと這い出る。さつきまでの地下牢のじめじめとした空気から解放され（空はお世辞にも綺麗じゃないけど）、なんだか晴れやかな気持ちになる。ちょうどいいスリルも味わえたし、中々楽しかったな。

私の後に続いて二人も通気口から出てきた。金髪の方は相変わらず苦し気な表情で背後の城を振り返り見上げていた。

「マジで…なんだったんだ…」

その意見には心底同意しつつ、私たちは足早に城の跳ね橋を渡り入ってきた場所へと戻ってきた。その瞬間、目の前の景色がぐにやりと歪み、気が付けば元の校門前の道路に戻ってきていた。

しばらくぼーっとしていると、

「あーっ!？」

金髪の方が急に奇声を上げた。

「もう昼過ぎじゃねえか!!」

スマホを起動し時刻を確認してみると、確かに午後12時を回ったところだった。そういえばこの二人は制服だったし、通学中にあの城に迷い込んで捕まってしまったつてところかも知れない。

「坂本!」

「げっ…鴨志田…!」

「お前、また遊んでたのか。…そつちの二人は…確か転校生だったか? 可哀そうに…初日からこんな不良に絡まれてたのか」

「ちが…」

「言い訳は良い。さっさと来い!…その君も、とりあえず先生と一緒に来なさい」

何故か黒髪の方には視線を向けず、城の中で見たマント男と全く同じ容姿をした教員は私に向けてそう言った。渋々といった風に、坂本と呼ばれていた金髪は鴨志田とやらの後をついて行くのを見て、私は黒髪と顔を見合わせる。

「…どうする?」

「とりあえず、入ろう」

「…うん」

…制服じゃないんだけど、まあしようがないか。

というかなぜ、あの鴨志田は私が制服を着ていないのに、ここの転校生だと把握していたんだ？教師なら普通なのかもしれないけれど、教頭でも校長でもなさそうな一教員が、わざわざ顔を覚えているものだろうか…？

「初日から半日遅刻って…どーなの…」

「すいません」

「ごめんなさい」

誘導されるがままやってきた職員室にて、担任らしき女教師は私と黒髪の少年二人を前に大きくため息をつく。ぶつちやけ、城やら何やらでもう学校なんてどうでもよくなってきた矢先の出来事なので全く説教も頭に入ってこない。こんな時間まで何してたのかなんて聞かれても、曖昧な返事しかできないし。

「まあいいわ…。えっと、*「雨宮蓮」*君と*「妻木綺羅」*さんね。これから午後の授業だけど、ちょうど私の担当だから一緒に来て。軽く自己紹介してもらって、後は適当に授

業聞いてて。分かった？」

けだるげな女教師は、けだるそうに立ち上がり、けだるそうに教室へと私たちを案内してくれた。

「えっと、雨宮君。頼むから余計なことは言わないですよ？」

「…はい」

「じゃ、入って」

雨宮だけ何故か釘を刺され教室に招き入れられる。制服じゃないせいもあって好奇の視線が一斉に突き刺さる。

「今日から転入することになった二人です。…えー家の事情で、今日は午後からの参加になります。はい、自己紹介して」

「雨宮蓮です」

「…妻木綺羅です」

「妻木さんの制服は…、…あーまだ用意出来てなかったの、今日だけ私服です。あまり気にしないで。で席は…空いてるところ。窓際の二つね」

微妙なフオーローありがとう、先生。

言われるがままに、窓際の最後尾とその前の空いている席に向かう。すれ違いざまに派手な金髪の女生徒と目が合ったものの、すぐにその視線は後ろの雨宮に吸い寄せら

れ、

「うそつき」

と小さくつぶやいたのが聞こえた。

他にも、ざわつく教室内からは色々と囁き声が聞こえてくる。しかし、そのどれもがおそらくは、私のことをさしたものでないことがすぐに分かった。

やれ、*「前科」*だの *「犯罪」*だのと、物騒な単語が飛び交っていた。

「静かに！授業始めます。二人は隣の人に教科書見せてもらって」

などと考えている暇もなく、席に着くや否や授業が始められた。私は窓際の一番後ろという中々好条件な席を獲得し、そのひとつ前には雨宮が座る。隣の席と言われそちらをみやると、ザ・モブって感じの男子が嬉々として机を寄せてきた。その一つ前、雨宮の隣の女子はというと、あからさまに「最悪」と悪態をついたのち、最低限だけ机を寄せていた。

。。。

チャイムが聞こえる…。

なんだか肩を揺さぶられている気がする…。

「はっ」

「授業、終わったぞ」

気が付けば机に突っ伏して堂々と居眠りしてしまっていた。どうやらもう午後授業は終わったようで、皆一様に下校の準備を進めている。

雨宮は私を起こしたことで満足することは無く、席に座ってこちらをみつめたまま何かを待っていた。

「？」

「坂本に呼ばれてる。例の件で」

例の件と言われてすぐにあの城での出来事が頭に浮かんだ。その中には私がナイフを持ち出したシーンの事も含まれていたが、もう二人とも忘れてるだろうと思い、少し悩んだがそれに了承した。どうやら坂本は屋上で待っているらしい。

ほぼ何も入っていないカバンを持って、雨宮と二人で屋上への階段を上りドアを開ける。そこに何故か乱雑に捨て置かれていた机といすの山の中の一つに、坂本は腰かけていた。

「わりいな。呼び出しちまって」

「かまわない」

「…なあ、やつばあれつて、夢じゃなかったよな…？俺もぶん殴られたとこいてえし」
私と雨宮は無言でうなづく。到底、夢とは思えない。それに、鴨志田の存在も気がかりだ。

「それなんだよ。実は、あいつには昔から体罰の噂があんだ」

「体罰？」

その言葉を聞いたとき、少し雨宮から発せられる空気がピリツとした。その表情は妙に真剣で、大きな眼鏡の奥に隠れた瞳は密かに揺れていた。

「そこにあの城だ。絶対、なんか関係ある気がすんだよ。もし野郎の体罰が本当なら、あの城に何か証拠が…」

身を乗り出して語る坂本はいたって真剣な様子だ。どうやら、もう一度あの城を調べたいらしい。とはいえ、あそこは冗談抜きで命の危険と隣り合わせの場所だ。坂本もそこは分かっているからこそ、こうやって相談してきているんだろう。

「なあ、どう思う？」

「私は良いと思う。実際あの場所の事は気になるしね。でも、」

雨宮の方を向き続ける。

「あの力を持つてるのは雨宮だけだし、一人に頼ることになるけど」

「…」

雨宮は少し考え込み、やがて何かを決意したように頷いた。

「放つてはおけない。一緒に行こう」

「お前ならそう言ってくれると思つてたぜ……サンキュな！」

放つてはおけない、というのは体罰のことではなさそうな気がした。おそらくここで雨宮が断つても、坂本は一人でまたあの城に行こうとするだろう。きっと、それを見放す気にならなかつたんだと思う。

目を見ればなんとなくわかる。こいつはとんでもないお人よしだ。

「そうと決まれば、明日からよろしくな！俺は坂本竜司……えっと、雨宮と妻木だつたよな？」

「雨宮蓮」

「妻木綺羅」

そして、フレンドリーに手を差し伸べてくるこの坂本という少年も、よほどお人よしに見える。見た目こそ不良感満載だが、今のところ、そんなに問題を起こすような奴には、少なくとも私には見えなかつた。

「ところで、坂本は問題児なのか？」

お互いに握手を交わした後、雨宮がそう聞いた。唐突になんて切り出し方をするんだと驚いていると、意外にも坂本は冷静な様子で苦笑して、「お互い様だろ」と返した。

「お互い様なの？」

「雨宮、前科持ちなんだって？学校中でウワサさんなってるぞ」

「…まあ、一応」

「へえ」

「どうりで肝が据わってるってワケだ」

「坂本はなんの前科持ち？」

「や、俺にマエはねーよ！」

前科持ち。その言葉を聞いてもここまで動じない私と坂本の様子に驚いたのか、その大きな目を丸く見開いて雨宮はやがて苦笑した。なんのマエがあるかなんてどうでもいい。私たちが知っているのは、勇気を振り絞って得体の知れない化け物と渡り合った雨宮の姿だけだからだ。

「はあ…とにかく、明日また集合な」

・
・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・
あの後。

今日のところは解散ということになり、校門前で別れた。

日は暮れたにも関わらず、この都会の街はいやに明るい。

あてどなく歩くのも疲れるので、適当な道端に腰を下ろして、ぼーつと虚空を見つめている。闇を眺めているうちにだんだん視界の真ん中がぐるぐると渦を巻き始める。

時間の流れが遅すぎる。

ゲームでも持つて来ればよかったか。

∴。

嫌だ。何もかもが一瞬にして失われてしまった。目を瞑るとあの光景がよみがえってきて吐き気がする。素肌に触れる、邪な感情のこもった大人の手の感覚が這うように思いつかれる。∴結局、悪態しか出てこない。

これから、どうしようか。

いつそのこと死んでしまおうかと、一瞬は考えた。でも、そんな矢先に今日の出来事だ。

あいつなら、私の事も見捨てないだろうか。

。。。

寝る場所を、探さないで。

学校も、どうしよう。

おもむろに、私はポケットの中にある「アレ」を撫でる。冷たさが心地いい。「コレ」だけは、忘れずに持ってきた。これがないと私の心は落ち着かない。どうしてかは、なんとなくわかつてる。

それは…私が、

「ん？妻木じゃないか」

不意に、頭上から気色の悪い優しさにまみれた声がかかった。思わず身を震わせながら見上げると、そこには最悪なことに鴨志田が立っていた。人の良い笑みを張り付けた、まるで私のような顔をした。

鴨志田は私の様子を見て怪訝そうな表情を浮かべた後、一瞬この上なく邪悪な笑みを浮かべたように見えた。しかしそれは、夜の闇に溶けてすぐにかき消えてしまう。

真意を汲みかねた私はどうするべきか迷った。このままこいつと居ていいのか、どう

なのか。

しかし、誰かに泣きつくにしてもこいつだけはないだろうという思考が大半であることに変わりはない。私はさっさとこの場を離れることにした。

鴨志田の声が遠くなるのに構わず、気配を消してそそくさとその場を離れる。単純に走り去るより自然だし、なにより相手が私の存在がそこにないことに気づくのが遅れる。いつもやっていることだ。

…さて、今夜はどう越えようか。

．．．．．
ようやく見つけた。

翌日 4月12日 火曜日

目が覚めた。体の節々が痛む。

ゆつくりと公園のベンチから身を起こし、大きく伸びをする。体質的にどこでも寝れるとはいえ、できればお風呂に入りたいものだ。公園の中央にそびえたつ時計を見ると、まだ朝の5時。4月とはいえ、野宿は流石に身体も冷えるし、なにより気分も落ち着かない。変な輩に寝込みを襲われなかっただけマシとも言えるけど。

意識がぼーっとしているうちは感じなかったが、腹も減っている。少し財布を軽くする時がきたようだ。

適当に歩いてコンビニで食料を調達しようと立ち上がった時、少しめまいを感じた。

「…くそ」

でも、帰る訳にはいかない。帰っちゃだめなんだ。

やつぱりあの時に死んでおくべきだったかも知れない。

…ああいや。

そうだな…。

良い死に方を思いついたかも。

もう面倒だ。

流石にこの状態で学校に、しかも連日私服で登校する気にはなれず、できるだけ顔を隠せるようにパーカーのフードを深くかぶり、授業が終わるまで校門近くであの二人を待った。

しばらくして、スマホを構えた坂本と雨宮が校門から出てきた。なるべく目立たないように、近くの路地裏から小さく手を振ってみると、二人ともそれに気付いてこちらへやってきた。

「おう。…なんでそんな怪しい格好なんだよ」

「気にしないで。それで、行き方は分かった？」

「多分な。雨宮、使ってみろよ」

「ああ」

雨宮はスマホを操作し、何かのアプリを起動した。すると、昨日と同じ感覚のまま目の前の景色が歪み、気付けばまたあの城の前に私たちは立っていた。

「ビンゴだな」

「悪いな、雨宮。こっからはお前に頼りつきりになっちまうけど」
「任せろ」

内ポケットの重みを再確認して頭を振る。今回はこれを使うことは無い。見つからなければいいことなのだから。

鴨志田の体罰の真偽を確かめるもの。そのような何かが無いか調査を始める。そのためにはまず、城の内部に侵入しなければならぬ。

「オイ」

「ん？」

昨日と同じ場所が使えるかどうか城壁を辿っていると、向かいから見覚えのある二頭身シルエットが近づいてきた。

「オマエラ、また来たのか？」

「お前は！……モナモナ！」

「モ・ル・ガ・ナだ！」

「ちようどいいところに来たな」

と、雨宮は城内の調査の協力を申し出た。モルガナも何か目的があるようで、お互いに協力し合うのならと承諾した。そこで、坂本が鴨志田の体罰についての噂と、ここにいたあのマント男が鴨志田にそっくりである経緯を話す。

「ふむふむ。なるほどな」

「お前ならなんかわかんねえか？」

「分かることは分かる。だが、今のオマエラに説明して理解できるかといわれたら…」

「いいからさっさと教えろよ！」

「相変わらずせっかちな奴だな…」

せっつく坂本に怪訝そうに顔をしかめたモルガナは、腕を組み偉そうにふんぞり返りながらこの謎の空間について説明しだした。といつても、モルガナ自身まだ分かっていないことも多いようだが…。

「ここは、誰かの歪んだ欲望が具現化した世界。いわば、認知世界ともいえる場所だ。ワガハイはここを、パレスと呼んでいる」

「欲望が具現化…?」

「話を聞く限り、ここはおそらく、オマエラの言うカモシダってやつ認知世界だろうな」

「認知って…思い込んだだけで学校がこんな城に成っちゃうってのかよ!」

「現実ではここは学校だったんだな? だったら、カモシダはその学校を、“自分の城”だと思っ込んでることになる」

「ちよ、ちよつと待てよ…! んでそんなもんが…」

「それはワガハイにも分からん。だから調べてるのさ」

「…なるほど。大体は理解した」

「お、そっちの癖ツ毛は理解が早そうだな」

「マジ？」

「で、協力するのはいいがオマエラまさか丸腰か？ペルソナ使えんのはこいつだけだろ？」

「戦う力がなくても俺はここに来る理由があんだよ」

「…なんか訳アリか。そっちの嬢ちゃんは？危ないから、遊びのつもりなら帰った方がいいぜ」

「遊びじゃ、無い。危険なものも分かっているけど、二人を放っておけないし」

「ならワガハイとこいつの二人で先導するから、どうしても来るって言うなら絶対に離れるんじゃあないぞー！」

「うお…また服変わった…どうなってんだそれ」

「それは反逆の心の現れだ。この場所に敵視されていると勝手に起こる」

城の中に入る頃には、いつの間にか雨宮の服装が全身黒装束に変わっていて、珍妙な仮面が目元を覆っていた。認知世界：かなり興味深いものには違いないけど、どうしてこんなものがあるのか。何故スマホのアプリで出入りできるのか。分からないことが多すぎて、かえって不気味さが増す。

でも、どうでもいいか。

どうせそろそろ死ぬし。

「む…：シャドウがいるな」

「シャドウ？」

「敵のことだ。今なら先制を取れる。行くぞ」

敵の目をかいくぐりながら進んだ先、騎士の背後にある扉から忍び寄り雨宮が先制攻撃を仕掛ける。すると鎧は崩れ去り、黒い霧と共に中から小さな妖精のような敵が出てきた。背後を取られ慌てたのか隙だらけである。

「ペルソナ！」

掛け声とともに雨宮の仮面が青い炎と共に消えていき、代わりに昨日見た赤い悪魔が現れた。悪魔が指を鳴らすと、目の前の妖精の足元から赤黒い焰が巻き上がり虫のような羽を燃やした。

ぼとりと地に落ちた妖精は力なくうなだれていたが、すぐに顔を上げて命乞いを始め

た。

「お願い、勘弁してっ！」

「カンベンしてほしいなら、金なり物なりだしてもらおうか」

手慣れた様子でモルガナが交渉を持ち掛ける。しかし、あいにく妖精は何も手持ちがなかったようで慌てふためいている。モルガナもこれは予想外だったようで若干の動揺を見せたものの、すぐに立ち直りならばトドメをと構える。

その時、急に雨宮の方に妖精が向き直り何言かつぶやくと、急に妖精は雨宮の仮面と同じ姿に変身して、雨宮のつけている仮面と一体化して消えてしまった。

「よし」

「よ、よしって…。オマエ今何を…」

場が騒然とした瞬間、騒ぎを聞きつけた別の騎士が扉を開けて部屋に入ってきた。

一番近くにいた私は咄嗟にその場を飛び退くと、すぐに騎士に向かって電撃が放たれた。電撃に弱かったのか、その騎士は一撃で消滅した。

電撃が飛んできたほうを見ると、雨宮の隣に、今度は赤い悪魔ではなくさつききの妖精と同じ姿をした奴が浮かんでいた。

「まさか、取り込んだのか!？」

「そうらしい」

「普通心は一人に一つ…複数の仮面を使い分けれるなんて聞いたことがないぞ…!」

モルガナはやけに興奮したようにまくしたて、まるで自分の手柄かのように喜んでい
る。これで探索を有利に進められるようになったと飛び跳ねている姿は無駄に愛らし
い。坂本も同様、雨宮の思わぬ力に興奮を隠しきれない様子だ。

その一方で。

私は自らの計画に暗雲が立ち込めてきたことを感じていた。昨日来たときはもつと、
危機的な状況で、戦うのは危険すぎるような、今回だつてこの探索は無謀なものになる
のだと思っていた。なのに、なんだか追い風のようなものが吹きはじめて色々上手くい
きそうな雰囲気が出てきてしまっている。

ということはやっぱり、そういうことなのかも。

この世界の中心は今、ここなのかもしれない。

・
・
・

雨宮の活躍もあり、城内の侵攻は比較的順調に進んだ。坂本はシャドウとの対決には
参加できないことに歯がゆさを覚えていたようだが、私にとってはそれはどうでもよ

かった。それよりも、順調すぎることに気持ちは落ち込んでいくばかりだ。

一旦休憩をとるために入り込んだ小部屋で、各々気持ちを落ち着けている中、私だけはこれから死ぬるような場面が訪れるのかどうか、そのことばかり考えていた。

「エアガンだけどな」

「おもちゃじゃねーか!」

「しかたねーだろ!?!でも、結構見た目だけはリアルだし、脅しぐらいには使えんじやね?」

なにやら坂本とモルガナがまた言い合っているが、その話の内容までは頭に入っていない。もつと…今の力じゃ歯が立たないような強力な敵が現れてくれればいいかな。

できれば、彼らを助けて代わりに犠牲になるような、そういう死に方が良い。贅沢かもしれないけれど。

私には昔からこの手の死亡願望がある。理由もなんとなく分かっている。おそらく私は…前世のようなもので、とても悪い人間だったと直感している。だからか、幸福や充実感を素直に受け取れない。

これまでもずっとそうだった。

そして今、唯一の生きる目的を失った私は、何もかもが面倒に感じていた。

死に時は今だ。

「…よし、全員覚えた！」

「さっさと行くぞ！長居しすぎた…！」

城を調べていくうちに、私達は秀尽高校の制服やジャージを着た奴隷達が収監されている場所にたどり着いた。そしてその全ての奴隷が牢の中で拷問まがいの特訓を課せられていた。

これこそ鴨志田の体罰の証拠になるかもしれないと、スマホで写真を撮ろうと試みたけど、この世界では何故かカメラが使えない。坂本が自力で全員の顔を覚え、現実でその生徒に問い詰めようということになった。

「集まってきてる…！」

「脇を通り抜けるぞ。見つかるな」

坂本が全ての奴隷の顔を覚えたと言うので、急いで城から脱出するため来た道に戻り、出入口付近のホールまでたどり着いた私たちを、マント男と大量の騎士が待ち構えていた。

背後からも騎士たちが追いつがってきた。完全な挟撃。逃げる隙はどこにもない。私と坂本は戦う力を持たない以上、雨宮とモルガナ2人で10数体のシャドウを相手取ることになる。

さすがに、無理がある。

すぐに2人は応戦したが、多勢に無勢。みるみるうちに追い込まれていき、しまいは組み敷かれてしまった。

私はポケットに手をやり柄を握る。

「どうせお前の思いつきでこうなっちまったんだろう？え？」

「やめろ……！」

「すぐ感情的になるクズ。あれほど分かせてやったというのに、まだ懲りていないようだな！」

鴨志田と思しき男は坂本に対してだらだらと御託を並べている。どうやら過去に何かしらの因縁があったらしい。その間もずっと雨宮たちは騎士によって押さえつけられていて、坂本は力なくその場で膝をついている。

私と言うと、傍らに騎士が立ち庄を掛けているものの、比較的マークは薄いし自由に動いてしまう状況だ。背中を向けて立つ騎士はなんとも間抜けに見えた。

「臨時とはいえ、陸上部の面倒を見てやった恩を忘れたか……？」

「あんなもん練習じゃねえ……！体罰だ！」

「目障りなんだよ。実績をあげるのは俺様だけでいい。……あの監督も救えない馬鹿だ。大人しくしていれば、エースの足を潰すだけにしてやったものを」

「……な、に……？」

「もう一本の足もいつとくか？どうせ学校が『正当防衛』にしてくれるしな」

この二人の間にあつたことは、私たちの中では誰も知らない。

知らないが……。

「こんな……クソのせいで走れなくなつて……！陸上部も……なくなつて……！」

「リ्यूジ……」

「こいつらを始末したら、次はお前だぞ」

鴨志田が、モルガナを踏みつける足に力を籠める。

もう限界だ。そう判断しポケットのナイフを抜こうとした時、

「言われっぱなしか？」

雨宮の声が、静かなホールに響いた。

「……そうだよ」

「フン……そこで黙って見ているがいい。クズを庇つて犬死する、救えない馬鹿共をな！」

「お前の方だよ……鴨志田……！」

ついさつきまで。

絶望したように項垂れていた坂本が、力強く立ち上がった。

「他人を食いもんにするお前の方こそクスだ！ 鴨志田あ！」

「なにしてる！ 押さえろ！」

坂本は頭を押さえて、あの時の雨宮のようにもがき出す。それを取り囲むように騎士たちが寄り、私という存在が完全に置き去りとなった。なんでこんなにノーマークなんだろうか。

坂本はすぐには動けそうにない。私がやることは残っているようだ。

まず、1番手前に居た騎士に後ろから飛びかかり引き倒す。そしてそいつの腕にナイフを突き立て、巨大な西洋剣を奪い取って雨宮を押さええている騎士の首元に向けて投げ
る！

「な、なにをしている!? その女も押さえろ！」

一体は行動不能、雨宮を押えていた騎士は消滅。

異変に慌てまったく統率の取れていない動きで私の方に騎士たちが向かってきた瞬間、坂本が叫び声を上げて周囲の騎士が吹き飛んだ。

「行くぜ！ キャプテンキッドオ!!」

号令とともに現れた坂本の：「ペルソナ」。キャプテンキッドと呼ばれたそれは腕

の大砲から電撃を放ち、目の前のシャドウを一掃した。鴨志田はその様子に狼狽しそそくさとその場を逃げ去っていった。

「待ちやがれっ 鴨志田!!」

追おうとした坂本の肩を雨宮が掴み、

「ここは退こう」

「なんでだよっ」

「万全じゃないだろう。それに、すぐ応援が来る」

ふらついて、その場に崩れ落ちそうになった坂本を支える。あの力の覚醒には結構な反動を伴うらしい。この状態で追っても返り討ちに合う可能性が高い。雨宮はそう判断したのだろう。モルガナもそれに同意しホールから踵を返そうとしたその時…。

バチン、という強烈な音が、鴨志田の去っていった方からして驚いて振り向く。

認識するより先に体が動いていた。次の瞬間には、太もものあたりにしびれるような痛みが突き抜けた。

「な、妻木っ!」

おそらく背を向けた坂本の足を狙ったであろう一撃は、間に割り入った私によって阻まれた。ゴロゴロと地面を転がっていくバレーボールのようなものが目の端に映る。おそらくあれを飛ばしたんだろうけど、それだけでこうはならないだろう。

私の腿にはいくつも赤い点模様ができていて、そこからは赤い血が線となって流れていた。針のようなものでも巻き付けていたのかも知れない。そう思い至り鴨志田の手を見やると、案の定防護グローブみたいなものを装着している。

「おっと……殊勝なことだな。だが、その馬鹿を庇ってそんな目に遭うなんて、よほどの馬鹿じゃないとしないことだぞ？ ハハハ！」

「やだあくセンセイかつこいい〜！」

唐突に、場にそぐわない猫なで声とその場に響いた。

「ニヤ!？」

「た、高巻!? なんてお前がここに……！」

気色悪いネコナデ声を上げているのは、鴨志田の腕に抱き着きこちらを見下ろすビキニ姿の超絶美人だった。輝くようなブロンドの髪に長い足と細いくびれ、そして大きな胸とよくばりセットだ。

などと冷静に観察していると、その美人が昨日教室に居た女生徒にそっくりなことに気が付く。雨宮と坂本が驚いているのはそのせいか。

「言っただろう。学校は俺様の城だとな。俺以外の人間は全て、俺にひれ伏し崇拜するべきなんだ」

「リ्यूージ、あれは本物じゃない。鴨志田の認知だ！」

「……くっそ、相変わらずよくわかんねー!」

「フン、逃げるならそのまま逃げるがいい。ただし、次に来たときは、命の保証はできないがな!」

ブチツ、となにかが切れる音が私の頭の中でした気がする。

このまま言われた通り逃げ帰ったのでは、腹の虫がおさまりきらない。雨宮に抱えられ片足を引きずりながら城を後にする中、こつそり雨宮から「エアガン」を頂戴して後ろ手に引き金を引く。

男の短い呻き声を聞いて少し溜飲を下げた私は、坂本に向かって親指を立てて見せた。

「つて!こつちに来てても傷治んねーのかよ!」

「そうみたい」

「なんでそんな冷静なんだよ!と、とりあえず病院……いや、保健室か?」

割と疲弊しきっていた一行はなんとか現実へと帰還を果たしたものの、私の流血が止まらずどんどん地面に溜まって広がっていく。まあまあ痛いけど、別に騒ぐほどのもの

じゃない。訳あっていつも持ち歩いている包帯を自分で巻き付けて応急処置。とりあえず血が止まるまでどこかで座ってれば大丈夫だろう。

「んなわけあるか！」

「病院つて言つても経緯を説明できないし…」

「そうか。なら」

私の意見に、何故か肩に黒猫を乗せた雨宮が納得する。そしておもむろにスマホを取り出すとどこかに連絡し始めた。そして通話を終えると、

「迎えに来てくれるって」

「誰が？」

「今の保護者」

と云うことで、私は今雨宮の保護者である男性の車に乗せられている。この人の家の近くに診療所があるとかで、そこで治療してもらえとのことだ。ちなみに、雨宮達は歩いて帰れと言われてとぼとぼと駅の方へと向かっていったので、今この場には私と保護者の男性の二人きりである。

いかにも頑固で偏屈そうなおじさまだが、わざわざ知らない人間のために迎えに来てくれるあたり、根はすごく優しい人、なのかもしれない。

「わりいな、こんな狭い車だよ」

「わざわざありがとうございます」

「とりあえずちやんと医者に手当してもらつときな」

時折氣遣つた言葉もかけてくれる。怪我の原因も詳しくは訊かれなかつたし、案外話の分かる御仁と見た。

少し安心してシートに背を預けたまま、助手席から見える景色がだんだんと覚えのものへと変わっていく。場所は四軒茶屋の駅からすぐ近く。路地裏に入り、〃武見診療所〃の看板の前で車は止まった。

「ちよつと待つてな」

言われた通り待つていると、小さな入り口から白衣を着たけだるげな女医と一緒に保護者さんが出てきた。車のドアを開、女医が車内に座る私の足を見て眉を顰める。足に巻いた包帯はもう白い部分はほとんどなくなっているし、まだみずみずしいままだ。

「とりあえず、掴まって」

女医に言われるがまま、抱かれるようにして車いすへと乗せられる。スロープを上がり建物の中へ入り、数分もしないうちに診療所へとたどり着いた。

「んじや、後よろしく頼みます」

「はい、どうも」

中へ入る前に、私と女医の二人きりになる。白衣の下は随分パンクな服装をしていることがぱつと見でも分かる。まさかとんでもないヤブなんじやないかと疑いを持ち始めたが、手際は慣れていたし処置も的確。痛みはすぐには引かないものの、さつきよりは格段にマシになった。

真つ白になつた包帯を撫でながら、適当に質問に答えていく。名前、年齢、通つている学校等。嘘を言う理由はないので単純に返答していると、ついに怪我の経緯を聞かれた。こつちは、まさかまともに答えられるわけも無く、

「転んだら、なんか色々落ちてました」

「…」

反応に困る曖昧な返事ではぐらかした。

「正直に答えなさい」

…なんだ。全然ヤブじゃないじやないか。かえつて厄介だ。面倒になつた私は黙秘権を行使した。

「…」

「…」

診察室でにらみ合う私と女医。無言の時間が続く中、時計の針の音だけがやけに大きく響く。あんな世界でのこと、話せるわけもない。かといって適当な誰かにやられたと罪を擦るわけにもいかない。

「どうせあなたの保護者には言わなきゃいけないのよ」

「ならないので」

「あのねえお嬢さん。こつちも、学校や保護者の方に色々説明しなきゃなんない義務があんの。分かる？」

学校や保護者…今の私には全く関係のない単語だ。

これ以上言ってもこの人を困らせてしまうだけだ。とはいえ黙っていてもらちが明かないのも事実。一か八か、この医者に、真実をかいつまんで話してみることにした。

「…あの」

「はいはい」

「実は私、家出中で」

「ふうん」

「学校にも行ける状態じゃ無いし、家にも帰りたくないしで。そんな時に、こんな怪我で」

「まあ、そんなことだろうとは思ったよ。私に話せるようなことなら、ちゃんと事情を話

してみなさい。少しは楽になるかも」

と、さつきまでのさばさばとしたクールな雰囲気を取り払い、本当にお医者様かのような柔らかな物腰で、「武見」先生は組んでいた足をもとに戻し、覗き込むように視線を低くしてきた。なんだか思っていた対応とは違ったものの、長年の勤でこの人には話してしまっても大丈夫なような気がした。

きつとこの人は、冷たそうな見た目に反して親身になって話を聞いてくれるだろう。そして同情もするかもしれない。

だからこそ私は、これ以上詳しく話すことを止めた。

再び場を沈黙が支配する。やがて話す意思が無いと伝わったのか、武見は小さく息をつき立ち上がった。そして再び車椅子に私を乗せると、行くあてはあるのか聞いてきた。首を横に振ると、「そう」と短くこぼした。

来た道を戻り診療所を出てすぐ右に曲がる。がたがたした道をそのまま真っ直ぐ進むと、すぐ近くに小さな喫茶店があった。おしゃやかなフォントで描かれた看板には、「ルブラン」とある。何故喫茶店なのか問う前に扉は開かれ、中から雨宮の保護者が出てきた。さつきとは違い、上着を脱いでエプロン姿になっている。

「佐倉さん、悪いんですけど少し時間を貰えますか？」

「ああ…構いませんが」

“佐倉”。どうやら兩宮の保護者は佐倉という苗字らしい。

車いすのまま何故か喫茶店の中に押し入れられ、二人は店の外で何やら話している。勝手に動くと思われそうなので、座ったまま店内を見回して暇をつぶす。

レトロな隠れ家的外装そのまま、中身も古風で落ち着いた店だ。入つてすぐ右手側にカウンターがあり、左にはテーブル席が三つ。決して広くはないが、こういう雰囲気が好き人間も多くいることだろう。少なくとも今は、一人も客はいなかったが。

カウンターの後ろに鎮座する棚の方に目をやると、色々な種類のコーヒー豆がずらりと並んでいた。壁一面に置かれた瓶の数々は、中身の減り具合もまちまちで、中には私も知っている名前のものもあった。コーヒーは嫌いじゃない。特段詳しいわけではないけど、甘いものと一緒に飲むのが好きでよく家でも飲んでた。

…。

コーヒーの香りは好きだ。

でも、失った日々を思い出させる匂いでもある。苦い思い出では決してない。なのに、胸が苦しい。

私は、取り返しのつかないことをしてしまった。もう戻れなくなつた。この世界はゲームじゃない。データをロードして時間を巻き戻せたら、なんて。できたとしてもする気は無いが。

「つ…」

不意に刺すような痛みが脳に走る。同時に誰かの声が聞こえた気がしたものの、それは背後で開いた扉の音でかき消される。

「待たせて悪かったな嬢ちゃん。怪我のほうはどんな感じだ」

入ってきた佐倉さんがそう聞いてきた。いつの間にか、武見先生はいなくなっていた。

「おかげさまで今は、あまり痛くもないです」

「そうか」

「…先生は？」

「あ…診療所開けっ放しっつてわけにもいかねえからっつてんで、一旦戻ったよ。なにかあればいつでも来ていいってよ」

「そうですか」

ふむ。面倒だから置いてけぼりにされたところは少なからずありそうだけど、それでも私の事を気にかけてはくれているらしい。なんだか、申し訳ないな。

「あーそんでな、聞かせてもらったんだが…家出してんだっつてな？」

「…」

「詳しい事情を聴く気はねえから安心しな。ただ、学校もあるしずっとこのままっつてわ

けにはいかなないことぐらい、分かってるよな」

もうそろそろ死ぬ気の私には眉唾な言葉だ。

「帰りたくねえってんなら、少しの間俺んところで寝泊まりしてもらっても構わねえ。どうだ？」

「…」

きつと良い人なのだろう。でも、こうして正論をぶつけられても、私の気持ちは誰にも理解できないししてほしいとも思わない。誰にも迷惑をかけずにそつと消えていくから、どうかそつとしておいて……………つて、

「え？」

「遠慮はすんな。腹も減ってるし風呂にも入りたいたら？」

「…いや、え？…なんで？」

「こんな状態で外放り出すなんてできないだろ。とりあえず、家はすぐそこだからシャワーだけでも浴びろ」

・
・
・

おかしい。

私はシャワーヘッドから噴射される水が床に落ちる音を延々と聞きながらずっと考えていた。

こんな見ず知らずの人間を面倒見るなんて、なにか裏があるのしか思えない。もしかしたらあの優しい面は演技で、なにかとんでもないことを隠しているのかもしれない。現に、今お邪魔している佐倉家には立ち入り厳禁と言われた部屋があり、そこからはなにかとんでもない負のオーラを感じた。

このままここにいてもいいのだろうか。あの変な世界で殺されるよりもずっと悲惨な最期を迎えることになるかもしれない。いや、そもそも最期を迎えさせてもくれないかもしれない。

「…はあ」

やれやれ。

何を考えてるんだか。

佐倉さんを見れば一目でわかった。あの人は何も嘘を言ってなかった。全て、本心だった。だからこそ戸惑った。純粋な善意でかけられた言葉だと分かったから、余計に。

包帯を巻いた右足を濡らさないように、他の部分だけは念入りに洗う。

お湯が傷口に染みる。

もう慣れた。

武見先生にこつちの傷まで見られなかったのは良かった。

「死のうと思つてたのにな」

どうして今更こんなことに。これじゃあ、懇意にしてくれた人に無駄な罪悪感を生ませてしまう。死ぬに死ねなくなってきたしまった…。

それに、よく考えればあつちの世界で死んだとしても、坂本や雨宮にトラウマを植え付けてしまうことになるかもしれない。

それは、本当に善人のすることか？

…。

私は、どうしたいのだろう。

家に帰りたい？…違う。もう二度と帰りたくはない。

元通りの生活に戻りたい？…それは、そうかもしれない。全部なかったことにしてやりなおしたい気持ちは、ある。でもそれだけだ。そんなことできないことは分かり切つてる。

理由を失くしてしまった。自分から手放してしまった。唯一の拠り所を、愚かにも。

煮え切らない思いを抱えつつ、浴室を出てタオルを使う。首から下、胴から下腹部にかけての変色しきつた数々の傷跡はもう決して消えることはないだろう。洗面台の鏡

に映った自分をみていつも思う。

現実から目を逸らすように、リュックから新品の包帯を取り出して無造作に巻き付ける。普段からこうして、胴には包帯を巻いたまま生活している。いつでも替えられるように持ち歩いているものと、さつき診療所で足のケガ用にもらったものがあつたおかげで残量にも余裕がある。

着替えを済ませ髪も適当に乾かすと洗面所を出る。

「身体は洗いたかったしいいけど」

体調を整える必要も無いはずだったのに。

次は言われた通りにさつきの喫茶店へ向かう。すぐそこなので、今の私でも歩いて迎える距離だ。

すると店の前にさつきまで漂っていたコーヒーとは別の香りが漂っていた。スパイシーでいてなおかつ懐かしさも感じさせる匂い……これはカレーだ。

本来アンバランスそうに感じるこの二つの香りが不思議と調和しているように感じられた。試したことが無いから分からないけれど、意外といい組み合わせなのかもしれない。

戸を開き中に入ると、カウンターには佐倉さんが立っていて、鍋の中のカレーをかき混ぜていた。

「よお。さっぱりしたか？」

「まあ…ありがとうございます」

「座りな。腹減ってるだろ」

悔しいが、今の圧倒的空腹の前にカレーは卑怯である。渋々ではあるが、ご馳走になることにした。

カウンターに座ると皿に盛られたカレーライスと水が差しだされる。

「うちの名物だ」

「…いただきます」

さつきから腹の虫が早く食わせろと叫んで煩い。鎮めるためにも、とりあえず腹に詰め込まなくては。そう思い一口、スプーンで口に運んでみる。

…。

……。

……………。

・

・

・

それから先のことは、正直あまり覚えていない。分かるのは、気が付けば目の前の皿

が空になっていったことと、次の瞬間にはまた新しいカレーが目の前に置かれていたこと。そしてその皿も瞬く間に空になったこと。

とにかくおいしかった。専門家じゃないから何がどうとは言えないけど、今まで食べたカレーの中では一番だったかもしれない。

腹が膨れ満足したところで水を手にした時、コトンとカップが手元に置かれた。

「これも名物だ。カレーに合うようブレンドしたコーヒード」

「…」

「苦手か？」

「…いや」

カレーに合うコーヒードと聞いてピンとくる奴なんていないだろう。だが実際、このコーヒードはカレーの味で一杯になった口の中に自然に溶け込み調和してきた。豆の香りは心を落ち着けるし、なんだかすぐくリツちな夕食をした気分になる。

…あ。

今だ。

こういう時だ。

死にたい。

私なんかこんな思いを、していいいわげがない。

手が、口が、震える。

誰かの声が聞こえる気がする…。

もうすぐだ。

誰？

もうすぐ、最悪な現実から目を覚ますことができる

…？

取引がしたい。…もう一人のわたし。

意識が深い闇に沈みかけたその時、肩を揺さぶられ現実へと引き戻された。見ると、佐倉さんが心配そうにこちらを覗き込んでいた。

「大分参ってるだろうに平気な顔してんじゃねえ。とりあえず学校には俺が話つけとくから、向こう帰って寝てきな」

「いや、さすがにそこまでは」

「子どもが遠慮すんな」

そう言ったとき、佐倉さんは皿を洗い始めて目を合わせなくなつた。大人しく従っている義理もないはずなのだけど…。

どうしてか私は、その言葉に甘えてしまった。ぎこちない足取りで佐倉家へ帰ると、空いているからここを使えと言われた和室へ入り、敷かれた布団に身を預ける。

思っていたよりも疲れが溜まっていたのか、私は布団もかけずにうつぶせに倒れ込んだまま簡単に意識を手放した。

翌日 4月13日 水曜日

夢を見ていた気がする。柔らかい布団の感触が肌に触れまどろんでいると、その感触が不自然なことであると気付き急に意識がはつきりしてきた。ここに倒れ込むようにして寝込んだとき、私はろくに着替えもせずに上着もそのままではずだった。なの

に今、かけられている布団が触れる感触は、腕の大半に感じている。

上半身を起こし布団を除けると、案の定上着は脱がされていて、下に着ていたTシャツはそのままだった。

壁を見やると、取ってつけたようなハンガーラックに着ていたパーカーが掛けられていた。のろのろと立ち上がり内ポケットを確認する。

…見られたらどうか？

一抹の不安を抱えて部屋を出る。リビングが目の前だが、そこには誰もいない。時計を確認すると朝の5時。もう佐倉さんはここにいないようで、机に書置きが残されていた。

《学校には適当に話を通しておいた。事情は何も話していないから安心しろ。それと、今日は学校は休め。足のケガが完全に治るまでとは言わないが、少しの間じっとしたほうがいい。飯は置いとくから食べておくように》。

まるで保護者のような物言いに苦笑しながら、書置きの下にあるラップのかかった皿を見る。

…カレーだ。

「朝からカレーか」

なんて言いつつ、昨日食べたあの味には少なからず感動したし、またこれが食べられ

るといふのは正直嬉しい。昨日と違ふのは、食後のコーヒーを出してくれるマスターがいないことだけか。

少し物足りなさを感じながらレンジにカレーを放り込んで温める。

皿にスプーンを置き完食。余韻を口の中で感じつつ、使った食器を洗って水切りラックへ立てかける。

「ヤッ」

これからどうしようか。じつとしていたほうがいいとは言われたが、いかんせんこのままここに居るままでは暇を持て余してしまう。私がこの世で嫌いなものの一つに暇がある。無駄な時間は過ごしたくない。こういうと誤解されがちだが、何もせずぼーっとしてゐる時間も好きではある。違いは私自身にしか分らない。

ともかく暇をつぶすため、私は家を出て佐倉さんがいるであろう喫茶店へ。家は例の開かずの間に誰かいるみたいだし、鍵は大丈夫だろう。

「おはようございます」

「おはようさん。具合はどうだ？」

「特に問題ないです」

ドアを開けると、軽やかなベルの音とともに佐倉さんの柔らかい声が私にかけられた。

そして、まだ開店前だというのに、カウンター席には既に先客がいた。そいつはふわふわした癖毛を揺らしながらこちらを振り向いて、軽く手を振った。私もそれに応じ、隣の席に腰かけた。

「足は？」

「全然大丈夫」

「そうか」

「ねえ、この後話せるかな。学校はまだ大丈夫でしょ」

「話って？」

「もちろん、あの城の話」

だろぅなという色が雨宮の顔に浮かぶ。

やってきた喫茶店の二階だったが、実際見てみれば中々に広い屋根裏部屋だった。ど

うやら雨宮は事情があつて、ここで寝泊まりしているらしい。

「これからどうするの?」

「ワガハイが説明してやろう!」

急に、ここにはいない奴の聞き覚えのある声が出て振り返る。

すると一匹の黒猫が階段を駆け上がってくるどころだった。

「黒猫? 飼つてるの?」

「ネコじゃねー! こつちに来たら何故かこうなつたんだ!」

「モルガナ? なるほど」

「納得してんな!」

そういえば、昨日城から逃げてきたとき雨宮の肩にこんな黒猫が乗つかつていたような気がする。偶然一緒にこつちの世界についてきてしまつて、何故かこの姿になつたらしい。私としては元のマスコット姿も好きだつたけど。

「ゴホン。まあなんだ、ワガハイの声は他の人間にはただのネコの鳴き声に聞こえるらしい。おそらく、オマエラは認知世界でワガハイの言葉を聞いているから、普通に聞こえるんだらうな」

「ふうん」

「でだ。ワガハイとコイツとリユージは、あの城の主である鴨志田を改心させることに

決めた」

「改心？」

思わず聞き返すと、モルガナはびよこんとテーブルに飛び乗り、ソファに腰かける私に向かつて解説を始めた。

曰く、認知世界には「オタカラ」というものがあり、それを現実に持ち出すことでその人間の歪んだ認知そのものを抜き取れるのだとか。

「鴨志田は、あの学校を自分の城だと思いついで好き勝手している。竜司から聞いたことだが、バレー部の顧問だった鴨志田は一時期、竜司もいた陸上部の顧問を臨時で努めたことがあったらしい」

「うん。それは、なんとなく」

「それで、鴨志田は陸上部に行き過ぎた指導を徹底して行つたらしい。何時間も水を飲ませずに走り続けさせたり、少しでも粗相をしたらすぐに殴られたり」

雨宮は話してくれた。鴨志田の過去を。

胸糞悪い話だけど、聞いておいたほうがいいだろう。

「竜司はある日耐え兼ねて鴨志田に手を上げてしまったみたいで、それが逆鱗に触れた。陸上部は廃止。竜司はこっぴどく鴨志田に足をやられて、走る場所も力も、奪われたつて」

「なんで、一教師にそこまでの力が？」

「鴨志田には実績があるからだ。秀尽学園のバレー部は毎年大会で好成績を上げているし、鴨志田自身は元オリンピック選手って肩書もある。それに、普段の鴨志田は猫をかぶって過ごしてる。無駄に校内での評判はいいって竜司は言ってた」

「校長は？」

「俺も見ただけど、校長も鴨志田に平身低頭って感じだった。あの学校の面目を保ってるのは、あの鴨志田だから」

「なるほど」

「あの城は鴨志田の歪んだ認知そのもの……その原因となった欲望の核であるオタカラを奪い取ってやろうってワケさ」

「雨宮達はなんだかおもしろそうなことをしようとしているらしい。もしそんな話が本当だとしたら、鴨志田のような人間をこの世からなくすことだって、理論上は可能ということになる。」

「なんだかそれって、すごくゲーム的。」

「ただしリスクもある。それを加味したうえで、リ्यूジには昨日一晩考えておくよう言ってる」

「シャドウってやつと戦わなきゃいけないから？」

「それももちろんある。だが問題はそこ以外にも一つ……オタカラを奪うってことは、そいつの歪んだ欲望の核を取り除くってことだ。もし歪み以外の欲望まで失われてしまったら、どうなるかはワガハイにも分からない」

確かに、欲自体は生きる上で必要不可欠なものだ。もしも歪んだ欲望だけでなくすべての欲求が失われてしまえば、それはもう廃人と同じ。あの世界の知識をある程度有しているモルガナでも、そこはどうなるかは分からないらしい。

でも例えそうなったとしても、それをやったのが雨宮達だとは誰にも知れないだろう。そもそも、鴨志田はあんな奴なんだからそれぐらいの報いがあつてもいいとさえ思う人間だっているだろう。

雨宮はいいとして、坂本もそこは流石に悩んで一晩考える時間が欲しいということらしい。バレなければいいという精神では、鴨志田と同じになつてしまふし、一度踏みとどまるのは賢明な判断だと思つた。が、しかし動かなければ現状は変わらないのも事実。

でもそのこと以上に、私にはさつきからずつと気になつていたことがある。真剣な表情の雨宮の目を覗き、私は率直に聞いてみた。

どうして、そんなことをしようと思えるのか。

「どつどつ……どつどつ……」

「自分の学校生活のため？それとも、坂本のため？」

そう言うと、雨宮はふっと俯き何かを思い出すように自らの手のひらを見つめて握る。

何か地雷を踏んだかも知れない。

普通に考えて、雨宮も相当普通じやない経験をしてくているのは確かだ。この街の外から転入してきて、喫茶店の屋根裏に居候している前科持ち…それが私の持つ雨宮のステータス知識だ。たったこれだけでも訳ありな人物なのは明らかである。

「ただ…鴨志田みたいなズルい人間が嫌いなんだ。自分よりも弱いものを虐げるような、汚い大人が」

「そう」

「俺も、同じような苦しさは経験したことがあるから…今、鴨志田のことで困ってる人が大勢いるっていうなら、それは救ってあげたいんだ」

「鴨志田の噂は全部本当なの？」

「今日、それを確かめに行く。昨日城で見た生徒に聞き込みをするつもり。それでより確かな証言が取れば、迷う理由もなくなる」

「なるほどね」

聞きながら、私はあつちの世界で見た雨宮の姿を思い出していた。

普段は大人しそうな風を装っているが、その実かなりの行動派であることがここ数日の出来事で分かった。自分よりも他人を優先できるその精神を生まれながらに持つ人間は、本当に稀だ。人は損得勘定で動くもの。大した見返りもないのに危険に飛び込むなんて、普通はしない。

「ところでさ」

「うん？」

「あの…あつちの世界で雨宮達が出してたアレ…なんなの？ペルソナって言ってたわけ」

「ああ…あれは…」

ふと気になったことを口にしてみると、雨宮はモルガナに視線をやった。それにならってモルガナの方をみやると、

「ペルソナってのは、あつちの世界でだけ現れる“人格”そのものだ。内に秘めた反逆の意志が高まった時、仮面となって顕現する。…まあ、分かりやすく言えば、あつちの世界での自分って感じだな」

どこかで聞いたような、そんなはずはない解説をしてくれた。聞いても実際に自分がペルソナとやらに目覚めていないから、イマイチピンとこなかったけど。

「と、そろそろ行かないと」

「今日も行くの？あっちには」

「そのつもりだ」

「そう。気を付けて」

「ありがとう。…それと、巻き込んでごめん」

「別にいい」

・
・
・

…だ…せつ…が…ふ…んてい…こえ…てない…？…ツイ…た…てな
…は…せ…も…

・
・
・

二日後 4月15日 金曜日

あれから二日。今日も私は、もう見慣れた佐倉家で目を覚ます。佐倉さんはとても親切にしてくれる。いつまでもいいってわけじゃないだろうけど、私の気持ちが落ち

着くまでは待つてくれる気でのだろう。

でも、私にはもう元の場所へ帰る気は微塵も残っていない。それどころか、戻ることには許されないから。

家族のことが嫌いなわけじゃない。むしろ、この世で最も愛してやまない存在だったのに、自分から手放してしまった。たったあれだけのこと、どうして我慢できなかったんだろう。痛みには、ずっと耐えてこれたのに。

…悔やんでも仕方ない。

いつまでもここに居るわけにはいかない以上、これからのことを考える必要はある。懇意にしてくれた人がいるから、その人たちに迷惑や心配をかけたくもない。勝手に行方をくらませるだけでも、彼らは物凄く心配してくれるんだろう。見ず知らずの他人である私を。

安易に死にたいなんて言えなくなってしまった。

ここ最近、雨宮達は鴨志田の身边を調べているらしいけど、皆口をつぐんでしまっていて手詰まりな様子だった。現実で一人の人間ができることなんてたかがしれている。当然の結果と言えそう。

顔を洗って、いつものように用意された朝食をとる。今日は簡素なトーストだったが、好きなメーカーの食パンだったので満足。

そしてまたいつものように、ルブランへと足を運ぶ。もはや常連の貫禄である。

佐倉さんに挨拶をすませ、今日はまだ雨宮が降りてきていないのに気付くと、私は自然と自分の口角が上がるのを自覚する。まだ寝ているのだとしたら、これは絶好の悪戯チャンスだ。人の隙を見ると思わず手を出したくなるのは、昔からの癖。

無軽快な寝顔を想像し階段をスキップして駆け上がる。そして質素な簡易ベッドの上には雨宮の姿が…なかった。

「おはよう。妻木さん」

「…おはよう」

「どうしたツマキ？…なんだか機嫌良さそうじゃねーか！」

「…別に」

「あれ？…なんか急に不機嫌になった？ワガハイなんか言ったか？」

あーあーあーなんだよ。せつかく盛大にドッキリしかけてやろうかと思つてたのに。

雨宮は寝てるわけではなく、部屋の隅に置かれた机で何やら作業をしているところだった。それを尻目に、私は無人のベッドにどすんと腰かけこれみよがしにため息をつく。

「それなにしてるの？」

「向こうで使う道具を作ってる」

「ワガハイとの取引だ。ここに世話になる代わりに、作り方を教えてやってるんだ」

あまり大きな声では言えないものらしく、二人とも少し声を抑えたのが分かった。気になって後ろから覗き込んでみると、作っているのは鍵開けに使う道具なことがすぐに分かった。

「なんの鍵に使うの？」

「…分かるのか」

「なんとなく」

「用途は主に宝箱。ちなみに、昨日持ち帰ったものがそこに入ってる」

そう言われ雨宮が顎で指したほうを見ると、ベッドの脇にリュックがぶら下がっていた。中身を開けて見ると、こっちは流石の私も使い道にさっぱり閃かない謎の石が入っていた。どうやら多少の傷はこの石を当てることで癒せるらしい。

「ま、認知世界でしか使えんがな」

「そういえば、足の具合はどう？」

「元々大した怪我じゃなかったし、別にもうなんともないよ」

「なんともなくはないだろうけど…本人が大丈夫そうなら、いいか」

「それより、それ私にも手伝わせてよ。事情はもう知ってるんだしさ」

「いいだろう。トクベツにワガハイが伝授してやる！」

雨宮達を見送つてまた暇を持って余していると、佐倉さんからスマホに連絡が届いた。暇なら店の手伝いでもしろとのことだ。

世話になっていている身としては断れず、どうせ時間を無為にしていたので私は佐倉家へすぐに出た。

早すぎたのか何故か呆れられつつ店に入り、とりあえずたまった洗い物をさせられる。私がこの店にいる時に客が来ているところを一度も見えていないのにどうしてこんなに皿だけ溜まるのか謎である。

洗い物は手慣れているのでさほど手間もかからずに終わらせた。すると、カウンターの隣で私の手つきを観察していた佐倉さんはニヤリと笑い、テーブルのしたから何かを取り出した。

「淹れてみるか？」

聞いたとき、正直少しワクワクした。

二つ返事でうなずき手渡されたエプロンをつける。まず佐倉さんが実際にやってみせ、見よう見まねで私もやってみる。その間、お湯の温度がくとか、豆の煎り具合がく

とか、色々とおべんちやらを語っていたが全て聞き流し、己の勘を信じて感覚で淹れてみることにした。

使っている豆は店で出すようなものだし、きつと素人が淹れてもそこそこのコーヒーぐらいにはなるだろう。そんな楽観的な心持で臨んだが、思ったより佐倉さんが本気な表情をしているのを見て、持病の負けず嫌いが顔を持ち上げてきた。

ここで適当なコーヒーを作って舐められても癪。

聞き流していた話の内容は半分以上覚えていないけど、重要なもう半分の部分はしっかりと聞いていた。

この豆は雑味が少なく、甘みや酸味はしっかり味を出してやるくらいがちょうどいい、らしい。だから時間をかけて、じっくりと…。

「ほう」

隣で感嘆を漏らす佐倉さんに少し目をやる。顎に手を当てて私の手元に集中している。面接でもしてるのか私は。

「どれ…味見といこうか」

カップにそれぞれコーヒーを注ぎ、お互いに一口飲む。

「…悪くねえな」

「どうも」

興味なさげにそう呟いてみる。実際は頑固そうな佐倉さんに一応納得の声を出させたことに達成感を感じてはいたけど、わざわざそれを表に出すほど私は子どもじゃない。

そんな無意味な意地を張ってしまふほどには、私は子どもだ。

いつまでたつても、変なところが天邪鬼で、素直に気持ちを伝えることも苦手。意地も張るけど、結果今までのすべては上手くこなしてきたから周りからは嫌われていただろう。いけすかない、でも文句の言いようがない、厄介なやつだ。そう自覚はしている。

それにしてもこのコーヒー、我ながら悪くない出来だ。

『…速報です。本日午後、都内の進学校秀尽学園高校にて、生徒が屋上から飛び降りて意識不明の重体です。学校側は…』

「ん？秀尽って、お前らのとこじゃねえか」

「そうですね」

「そうですねって…もつと関心持て。自分とこの学校だろ」

コーヒーによる落ち着きもさすがに吹き飛ばような、背筋の冷えるニュース。テレビの中のキャスターは淡々と事件の内容を語っているものの、その実詳しいことはまだ分からないということを長つたらしく説明しているだけだ。

というか、飛び降り自殺って本当にあるんだなあ。打ち所がよかったのか意識不明で

済んだのは不幸中の幸いか、それとも悪かったのか。

飛び降りたのは一人の女子生徒だったらしく、バレー部員とのこと。あの城での先入観がある私から言わせれば、鴨志田が関係していない訳はない。きっとひどくつらい思いをさせられていたんだらう。

死を選びたくなるほどには。

でも、自ら死を選ぶことほど罰当たりなことには無い。ともかく、死ななくてよかった。

死んだらおしまいだ。死は最後の切り札にとっておけ。これは過去の自分から得た教訓だ。

.....

翌日 4月16日 土曜日

「いらつしやい」

「おはようマスター。あれ、その子は？」

「バイトだよ」

「…いらつしやいませ」

「へえ。バイト雇える余裕あんの？」

「余計な心配だよ。注文は？」

「いつもの」

「あいよ」

私は一体何をしているのだろうか。

何もかもを捨てて生きる意味も見失ったところを偶然拾われて、しかもそのまま喫茶店のバイトとして無駄に馴染んでしまっている。現状無暗に行動できる状況でも立場でもない以上仕方のないことなのかもしれないけど、ふとこのままでいいのだろうかという不安に駆られる。

佐倉さんの計らいで制服も届いたし、もうここから登校させる気満々だ。

私としてはこの先楽しみも何も無いわけで、ただ漠然とした日々を過ごし続けるのなんてまっぴらごめんだ。

なにか、理由が欲しい。

思い当たるのは一つだけある。

やはりあの謎の異世界のこと、気がかりだ。あんなもの、普通に存在していいわけがない。間違いなく知っているのは私たちだけじゃない。必ず何か裏がある。

その事を考えると、もう少しの間ここにお世話になっっているのが正解な気がした。この世界はきつと、雨宮を中心にして回っている。ここに居れば、私もその輪の中に入れる。

どうしてそんなことを望むのかは、なんとなくわかる。

幼いころ…私に訪れた「気付き」が原因だ。

世界とは、無数に存在している。

「お待たせしました」

「ありがとう。お嬢ちゃん、なんでこの店で働いてるんだい？」

「なりゆきです」

佐倉さんの淹れたコーヒーを、一番奥のテーブル席に座る中年の男性客へ届ける。この人は初見だが、既に常連何人かには顔と名前は憶えられている。我ながら本当に馴染んでしまっているものだ。それもなりゆきによるものだが。

しばらくここにいるつもりならば、環境に適応するのは必要不可欠。そう自分に言い聞かせて、過去のことを水に流してしまいそうな自分から目を逸らす。

赦されないぞ。そんなこと。

分かつてるよ。そんなことぐらい。

だからこの命はせめて善い行いに。

「…」

ふと時計を見る。まだ一日は前半戦、テレビからは変わらず昨日の飛び降り事件のことや、最近話題の「精神暴走事件」のことばかり聞こえてくる。この二つの事件に関わりはあるのが今議論されているが、直接関連はしていないと私は思う。

精神暴走事件はすでに都内のいたるところで発生していて、そのどれもに共通する点は、事件が起きる直前までは変わった様子は無いということだ。ある日ある時突如として人が変わったかのようなになる精神暴走のような兆候は、今回の飛び降りた生徒には見られなかったらしい。

まあなんでも、以前から随分とキツイ指導を受けていて精神的に病んでいたようで。

その生徒はバレー部員。鴨志田が顧問を務める、あの部活だ。原因は全てあの男に在るのだろう。学校で一度見たときはいかにも清廉な印象を振りまいていたけど、本性を知る私や雨宮が見れば寒気しか感じなかった。あんな人間が平気な顔して有利なポジションでふんぞり返っている世の中なのは知っていたけど、實際目の当たりにしてみると思ったよりもムカつく。

次に学校へ行くときは、もうあいつの顔を見なくて済むようになってほしいものだ。

そんなことを思いながら忙しいふりをするためにクロスワードパズルを解いていた時、来客を知らせる鐘が鳴った。

今日もまた、平穏な時間が流れる。

決意を抱き続けろ。

.....

二日後　4月18日　月曜日

日曜日を挟み新たな週を迎えた今日、雨宮達はいよいよ本格的にあの世界への潜入を始めるらしい。昨日の休みを使って、必要なものを一通り買い揃えてきていた。私も屋根裏で見せてもらったが、各種傷薬と鎮痛剤、そして精巧につくられた武器…の、レプリカ。

さすがに私の様に本物の武器を持ち歩くわけにはいかず、やむを得ずという訳かと思っただけ、そういうわけではなかった。

モルガナが言うに、あの世界は認知の世界であるが故、色々な事象に認知が関わってくる。だから見た目さえ本物に近ければ、相手がそれを本物だと思い込みさえすれば、あの世界の中では本物と同じ効果を発揮するとか。

あの時エアガンだと思って撃った銃もそうだったのだろうか。当たり所が悪ければ今ごろ死んでたのかな。

掌を握りあの時の感触を思い返してみる。

引き金を引いたとき、銃口が思っていたよりも跳ねあがり、手に軽いしびれが走るあの感覚。

もう一度、撃つてみたいな。

なんて。

私があの世界でできることなんて無いに等しい。そもそも一人ではあの世界に入る

ことすらできないのだから。

資格がないということなのだろう。でも、私は唯一生身である怪物に対抗できた。

理由は、よく分かっていない。

ただ、できると確信はしていた。

このナイフは敵の急所に突き刺さり息の根を止めることができる、と。ナイフを振つてから敵に当たるまでの数瞬の間、手の内に乾いた冷たさを感じていた。死んだ動物に触れているかのような、妙な重みと生々しさ。

あれが蘇るのは、いつもお気に入りナイフを握った時。

どうしてか手放せない、幼少の頃からの宝もの。親からは触るなど念を押され続けたが、あまりにも私が頑固なのでついには折れた。人に向けて振るったり外で無暗に持ち出さないことを条件に、家での鑑賞だけは許されたんだ。今は、守るべき約束はない。外でやたらに見せびらかさなければ、持ち歩くだけならばと、いつも肌身離さず忍ばせている。

もうひとつ、向こうに置き忘れてしまった宝ものがある。でもそれは、もういないものだ。

「おい」

底の方から響くような低音が意識を引っ張る。

「そんな暗い顔すんな。客が寄り付かなくなっちまうだろ」

「…ちよつと考え事を」

「家の事か？」

「いろいろです」

「あつそ」

佐倉さんは興味なさげにつぶやいた後、盛大にため息をついた。

「あのな、お前の親がどんな人間なのか知らないが、子どもの事を心配しない親なんていねえんだ。面倒だとも思つかもしれない。それでも帰ってやった方がお互いのためにもなる。…上手くは言えないが、とにかくそういうことなんだよ」

「そうですね」

「もうちよつと人の話に興味を示しやがれ」

「そうですね」

「こつちは真剣な話をしてやってんのによ。帰りたいと思つたらいつでも帰れよ。多分、向こうは今頃気が気じやないだろうからな」

「もう帰るなんて無理なんです」

「無理？」

他人に話していいような内容じやない。これをすれば、きつとママやパパが悪人のよ

うに聞こえてしまうだろう。そうなれば、二人に迷惑が掛かってしまう。

「話す気はねえってか」

「…お世話になつてゐるのに、ごめんさい」

「別に気にするこたねえよ。ただ、知っておけるなら、世話する身としてはそつちのほうがいいやすすいでだけだ」

あまり深くは詮索してこないタイプの人で助かった。しばらくはここを拠点にさせてもらいたいから、佐倉さんとは上手くやらないと。

物言いはぶつきらぼうだけど、私をかくまってくれているだけでも優しさは充分計れるし、言葉の内容もこちらを気遣つたものばかりだ。雨宮には何故か、少し言葉のチョイスも厳しめなものが多いけど。案外、単純にたらしなだけかもしれない。

「ああそれと、明日の朝先生のところいってきて診てもらえよ。様子見た限りじゃ、もう問題なさそうだが」

「おかげさまで」

「なあ、あの医者、どうなんだ？」

「どうって」

「なんか暗いうわさが絶えねえんだよな、あの武見って先生は」

「見た目のせいじゃなくて？」

「それもあるだろうがな」

「別に、普通でした。というか、普通に優秀な人だと思います。手当も的確だったし、カウセンリング力もありそうでした」

「ふうん」

「足も綺麗でしたね」

「聞いてねえよ」

佐倉さんはもう一度、今度は別の何かも色々と混ぜついでいそうな大きなため息をついて新聞を開いた。

ちなみに客はいないけど、いてもいなくても佐倉さんの態度はそこまで変わらない。堂々と本を読みだしたりするわけじゃないけど、そこはやはり壮年の余裕か。

「何見てんだ？」

と、佐倉さんが新聞越しに私の視線に気付き怪訝そうに目を細めた。

「コーヒー淹れて良いですか」

「構わねえが」

調子に乗っているわけではない。この平穩にのぼせているわけでもない。ただ、今はこうしているしかないだけ。自分にそう言い聞かせて、可能な限りこの場所に馴染めるように画策する。

正直言って、コーヒーを淹れている間だけが、今の私にとって唯一、一つの事に集中できる時間だ。だから、これは少し楽しいと感じている。

「次は甘口評価無しだからな」

「え」

「まあ正直、筋は悪くねえよ。店で出せるほどのもんじゃないがな」

多分この人は、素直に褒めるってことが苦手だ。たつた今、それも知った。

・
・
・
・
・

三日後く4月21日 木曜日

「忘れもんねえな？じゃ行つてこい」

「いってきます」

というわけで、武見から通学の許可が下りてしまったがために今日から私も学校にいかなければならなくなった。退屈な時間が多いことには、確かに愚痴をこぼしたことはあつたけど、正直学校ほど退屈なものはないと思っている。

それは、学校にいく大きな理由のうちの一つである。『勉強』の部分が、私には全く無意味なことだからだ。

「ここからの道は分らないから」

「ああ、大丈夫」

ルブランを出てからは雨宮に先導してもらい、私はイヤホンを装着して完全に脳死でついて行く態勢へ。

おかげで道中喋る話題に困ることもなく、お互い満員電車の中でひたすら揺られていただけだった。別にすし詰めになることに対しては何の嫌悪感もない。時折雨宮の力バンの中から息継ぎをするように出てくるモルガナが滑稽で、むしろ暇には思えなかった。

乗り換えを済ませ、再び満員の車内へと突撃する。しかもさっきの車両より密度が高い。物理的にも精神的にも息苦しい。隣り合っているのが雨宮で助かった。これで超絶不潔な奴と密着する羽目になったとしたらその日一日分のやる気が削がれるだろう。雨宮に密着していても、鼻をつくのはルブランの匂いだけだ。

「すまない」

「なにが？」

「今日はいつもより混んでる」

気まずそうに視線を逸らす雨宮を見上げながら、ふと状況に気付く。でも今はこういう場所なんだし仕方ない。

「オイオマエラっ。ワガハイが間にいるの忘れてないか…」

拷問のような列車から逃げるように出てきた私たちは足早に学校へと向かい、早めの時間に教室へとたどり着いていた。モルガナはカバンの中からするりと抜け出し、今は雨宮の机の中に納まっている。真後ろの席が私で良かったな本当に。

机に頬杖をつきながらぼんやりと教室を眺めながらそんなことを思う。生徒はまばらに席についていて、廊下からは教師のものと思われるあいさつの声と、生徒たちの談笑する声が聞こえてくる。

「雨宮」

「ん？」

「飛び降り事件って、やっぱり関係してたの？あいつは」

大声で話すことでは無いにしろ、人もまばらで特に気にも留められていないこの状況ならば大丈夫。そう判断し、私は雨宮の背中に問いかけた。

雨宮は椅子を反転させこちらに向き直ると、神妙な表情で頷いた。

「飛び降りたのは高巻さんの友だちで：バレー部員。話じゃ、以前から鴨志田にはしょっちゅう呼び出されてたらしい。俺もほんの少し話したことあるけど、傍目にも分かるぐらい参ってたし傷だらけだった」

「高巻さんっていうのは？」

「まだ言ってなかったか。今はもう一人、例のことについて協力してもらってる人が居て、その人が高巻さん。飛び降りた鈴木さんの友だち」

「なるほど」

聞く限りじゃ、もう学校中で鴨志田に対する糾弾が行われていてもおかしくないのに。

周りを見渡しても、そんな雰囲気は無い。

「向こうの世界は、どんな感じ？」

「あれが本当に鴨志田の心を映し出した光景なら、とんでもなく醜いとか。本当に、この学校の王は自分で、それ以外は塵同然って感じだ」

「どれぐらいかかりそうなの？」

「…実は、今すぐにでもできるところまでは来てる。今は念入りに準備中。…あまり時間はないから、できるだけ早く終わらせたいけど」

そう言うのと雨宮は少し、その大きな眼鏡の奥に感情を隠した。

「期限があるの」

「この前、飛び降りがあった時、俺と竜司で鴨志田の所に乗り込んだんだ。その時に怒りを買って、次の理事会で退学にするって」

「殴っちゃった？」

「いや、すんでのところまで止めたけど。でも、鴨志田にとつては俺たちは目障りでしかない。自分の思い通りにならない奴は、自分の城にはいらないうってことだろ」

「それはまた」

随分と傲慢なやつだ。

「結構、背水の陣って感じなんだね。大丈夫？」

「上手くやる」

顔を突き合わせ静かな決意を聞き届けたその時、教室に一人の女子生徒が入ってきた。雨宮の前の席に座っていた、あの派手な金髪の生徒だ。

「おはよう」

一度だけ私がここに来た時、彼女は雨宮に対して「うそつき」とこぼしていたのを覚えていた。今の二人を見るに、険悪そうな雰囲気はまるでないし、それどころか多少打ち解けているようにも見える。

「あ、初めまして……じゃなかったか」

「どうも」

「妻木さんだよね？話は聞いてるよ！」

話つて、なんの話だ？そう疑問に思った私は雨宮に視線をやるも、何故か逸らされてしまう。一体何を吹き込んだんだお前は。

「前はあんまりちゃんと見れてなかったけど、確かに綺麗な目……」

「目？」

首をかしげている私の目を覗き込むようにして、その女生徒は顔をぐっと近づけてきた。私はそのまま微動だにせず、ただ近づいてきた碧眼を見返す。同時にきめ細かな真っ白い肌も目に入る。目鼻立ちも整っているし、モデルにでもなれるんじゃないかと思えるぐらいキレイな顔。

「あ、ごめん！自己紹介まだだったね」

「はあ」

「高巻たかまき杏あんつていいいます。よろしくね！」

人のよさそうな明るい笑顔を浮かべて、高巻杏は右手を差し伸べてきた。その仮面はニセモノでもなければ本物でもない。少し無理をしていそうには見えだが、本来この人は明るい性格の持ち主なのだと思感した。

私も手を差し出し軽く握り返した。

早々に転校デビューで躓いた私だけど、元より他人との交流を広めようとは思っていなかった。特に危機感を感じていなかった。何の益にもならないことは分かり切っている。ただ、やはりあの異世界について関わる羽目になったみんなとは、関係性を持つておきたい。あの時、たまたま迷い込んでよかった。

今日は例の件繋がり全員で、放課後に軽食を取るようになった。復帰初日に寄り道とは良い度胸だと言われそうだが、本題はなにも遊ぶことでは無い。

ビックバンバーガーのテーブルを囲み、坂本と雨宮が向かいの席。反対側に私と高巻さんが座る。

「にしても、周りの奴らマジで無責任だよな。蓮のことなんにも知らねえくせにやれ犯罪者だのなんだの好き勝手言いやがって」

「学校のどこ歩いてても聞こえてくるよね…。あ、ごめん！こんな風に言ったら余計に落ち込むよね」

「いや、気にしてない」

「そうだぞ。そんな奴らには言わせておけばいい。そのうちワガハイらで鼻明かしてやろうぜ？」

氣にしていな、か。

雨宮とは、この中ではもちろん一番話す。ルブランの手伝いをしていれば帰る時間にはまだ私もいるわけで、たまにコーヒーを振舞ったりもする。

その中で交わす会話の端々には、やはり雨宮が抱える「何か」の片鱗が見え隠れする。その度に覗こうとしてみるも、いつも巧妙に感情を隠されてしまう。自分の意思を消すことに慣れてしまっている証拠だ。そんな雨宮の氣にしていな、は全く信用できない。

「オタカラを盗めば。鴨志田は改心するはずだ。そうなれば今までの罪を告白して、オマエラの汚名もちつとは返上される」

「んで、そのオタカラを盗むにはどうすりゃいいんだよ」

「オマエラも見ただろ？オタカラは、はじめのうちは実体化してない。欲望そのものだから当たり前だ。だからそれを盗むためには、実体化させる必要がある」

子ども用いすの上に置かれた雨宮のカバンから、モルガナが頭一つをだして解説し始める。実際向こうに行った経験の少ない私にとっては実感の薄い話だけど、何となく要領は掴める。

「欲望を、奪われるものだって認知させるんだよ」

「どうやって?」

「『予告状』さ」

高巻さんの問いに、モルガナはドヤ顔で言い放った。

「予告状か! なんか怪盗っぽいなそれ!」

「ほいほい!」

「ただ、予告状を使うにしてもチャンスは一度きりだ。予告された時のインパクトは二度は起こせないし長続きもしない。実体化している時間はもって一日だろうな」

「マジか。結構シビアだな」

「なにいつてんの。一日あれば充分でしょ」

「ああ。俺たちならやれる」

意気揚々と語りだすみんなを見てみると、なんだか得体の知れない不安に駆られる。

…これは、なんだろう。

「ねえ」

向こうに潜む脅威がどのようなものなのか、私は多少知っているつもりだ。みんなだって、あの化け物を目の当たりにしてきているはずなのに、今の表情は自信に満ち溢れている。

自信というべきか、それとも慢心か。

「私も何か手伝えないかな。事情はある程度知っているわけだし、黙ってみてるだけっていうのも気にかかるっていうか」

慣れてきた頃合いが、一番足元を掬われるものだ。心配なものもあって、私は協力を申し出てみた。みんなはきつとすぐ断ろうとはしないだろうから、粘ればなんとかかなりそうな気はする。

「つつても、向こうに行くのは止めた方がいいんじゃない？ またあんなことになったら大変だろ」

坂本は視線を落として、申し訳なさそうにそう告げた。制服のスカートから出る私の足には、まだ念のため包帯だけは軽く巻いてある。治ったとはいえ、まだ痕は残ってるし。

「だが、事情を知っている仲間がいるんだ。協力してもらえるなら、それに越したことは無いと思うぞ」

「なら、こつちで手伝ってもらおう？」

「妻木さんが、それでいいなら」

もちろん、こちらとしては願ったり叶ったりだ。少しでも彼らとかわりを持つておくべき…そんな気がするから。

二つ返事で了承し、私はこっちの世界で手伝えることには積極的に協力することを約束した。そして、一大作戦の決行は明日。予告状を鴨志田に突きつけ、実体化したオタカラを奪う。

「そのためには予告状用意しないといけないよね」

「ツマキの言う通りだ。誰が作る？」

「俺にやらせてくれ！」

「却下」

「なんでだよ！」

必須なものは予告状。それを誰が用意するかという話になった時、坂本が名乗りを上げた。瞬間高巻さんからブーイングが上がったものの、結局は坂本がやることになった。本人いわく、「ぶちかましてやりたい」とのこと。因縁があるらしいし、ここは好きにやらせてやろうじゃないか。

「絶対身バレするようなのは駄目だかね！」

「分かってるって！」

次に装備。目的は物を奪い逃走するのみだが、予告状を出すことによつて認知世界に大きな影響があることは間違いないらしい。何が起きてもいいように、準備は万端にしておくべきだろう。

薬や装備の調達は兩宮が担当するようだ。一応この場の指揮権は彼にあるんだし、それで構わないだろう。店で買えないものは自作するしかないが。

「あ、じゃあそれ作っとくよ」

「本当か？」

「明日決行なら夜更かしはできないでしょう？」

幸い、以前モルガナにいくつか道具のつくり方を教わっている。逃走に役立つものや戦闘で使えるものを用意しておいてやろう。

そこまで話したとき、カウンターから店員の声が出た。

坂本は注文の品を受け取りに席を立ち、すぐにトレイを持って戻ってきた。そこには4人分のハンバーガーとドリンク、各種サイドメニューたちがずらりと並んでいる。本当だったらもう少し大きいのを選びたかったが、今は財布事情が芳しくないため、ぜいたくは出来ない。

それぞれの品を手に取りおもむろに食べだす私たちを尻目に、何故かモルガナがぼやく。

「一大作戦の前に食う飯がハンバーガーかよ」

「別にいいだろ。最後の晚餐じゃあるまいし」

「そうそう。こういう時こそ自然体でつてよく言うじゃん」

「で、ワガハイの分は？」

「あるわけではない」

「そもそも猫じゃ食えねーだろ」

「猫じゃねーし！ポテトぐらいなら食えるし」

じやれているだけだった。

私は一本、短めのポテトをつまみモルガナの顔の前に差し出してみた。匂いを嗅ぎブツを確認する姿はまんまただのネコである。

「あちっ」

猫舌なんだな。

「猫舌なだけで猫じゃねーんだって」

「はいはい。あんまり騒ぐとバレちゃうよ」

「あ、アン殿：ワガハイのためにふーふーしてくれ…」

「はあ？」

「俺でいいなら」

「レンじゃなくて！」

「ん？俺はやんねーぞ？」

「リユージはもつといらねー！」

…だんだんとくだらない話が盛り上がっていき、モルガナの声も大きくなっていったが、幸い店内はBGMが流れていて周りの客もこつちに気を留めている様子は無い。普通に考えて、飲食店にネコもちこむのはバレたらまずいと思うんだけど…。

「もうツマキでもいい！ワガハイにもくれ！」

「残しとくから、後であげるよ」

「おお！太っ腹だな！」

なんて思いつつ、しばしこの談笑の場に流れるぬるい空気を私も堪能していた。こんな風に、同年代の人間とくだらないやりとりをするのは随分久しぶりな気がする。

私の嫌いな無駄な時間のはずなのに、どうしてか今は純粹に楽しいと思えていた。

やっぱり、ここにいるみんなは「特別」なんだろうか…？

翌日 4月22日 金曜日予告日

「色欲」のクソ野郎

鴨志田卓殿。

抵抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつける、

お前のクソさ加減はわかっている。

だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って、

お前に罪を告白させることにした。

明日やってやるから覚悟してなさい。心の怪盗団より

.

「…」

「…」

「…」

「…」

「びみよー」

眠目をこすりながら今日も今日とて登校してみると、玄関からすぐ近くの掲示板にでかでかと張り出された予告状の数々が目に飛び込んできた。

雨宮、モルガナと、たまたま一緒になった高巻さんと私たち一行はそれに目が釘付けになりながらも、目立たないよう少し離れたところに集まり、掲示板に群がる人々を観察していたところに、坂本が合流してきた。

「ケツコーイケてる気がしてんだけどな…」

「伝えたいことは分かるけど、なんか頭悪い子が背伸びしてるみたい」

「ぼろくそかよ…」

夜なべして考えたであろう文面は確かに、高巻さんの言う通りの印象を受ける。

まあ、私たちは書いたのが誰か分かってるから、余計にそう見えるんだろうけど。

坂本が肩を落としている間にも、次々と掲示板に興味を示した生徒たちが集まってきている。いかにも悪戯然とした所業だし、心を盗むだなんて話、誰も本気で気に留めはしないだろう。

心当たりのある本人以外は。

「誰の仕業だ!？」

突然、蜘蛛の子を散らすように生徒たちが一斉に教室へと逃げ帰っていく。怒鳴り散

らしているのは件の鴨志田せんせーだ。

乱暴に予告状を剥がしながら、それを眺めていた私たちの存在に気が付いた鴨志田は大股でこちらに歩いてくる。

「お前らか！」

「さあな」

四角い顔を真つ赤にたぎらせた鴨志田に、雨宮は毅然と吐き捨てた。鴨志田は顔をし
かめ、捨て台詞を吐きながら職員室の方へと帰っていった。

「…今日ならいけんだよね？モルガナ」

「今日ならじゃねえ。今日しかだ」

「じゃあ放課後…いつもの場所で」

・ ・ ・ ・ ・

私は見送った。

彼らの決意を確認して、送り出した。

いや…。

正確には取り残された。みんなと同じ力を持たない私は、向こうに行っても危険が増すだけ。そう自分にも言い聞かせた。だけど、やっぱり待つだけなのは性に合わない。それに、私だってあの世界の敵に対抗する力はあった。

ブレザーの内ポケットに手を滑り込ませる。

もし、彼らの身に何かあれば私は一生後悔するだろう。何かできたかも知れないのに、何もせず立ち止まっていたからこうなったのだと。

何かできるはずだ。足手まといには決してならない自信が私にはある。

何故なら。

「っ…」

校門の前、ただ何もせず立ち尽くす私の脳裏に、どこかの光景がよぎった。

広くて、明るくて、たくさん、花が咲いている場所。金色のその花は、上から差し込む太陽の光に照らされて、黄金色の輝きを放っている。

なつかしさを感じた。

同時に、恐れも。

握る刃の鋭さを感じながら、あの城に初めて迷い込んでからずとつつかかっていた胸のもやを探り当てようと、神経を研ぎ澄ます。

あの日から、あるいはそれより少し前から、私はなにかおかしかった。たまに、自分の事を遠くにいる知らない人間かのように思えることがある。

しかしそれはすぐに違うと分かって、意識がはつきりして終わる。

これは自分だ。

ピリツとした痛みが頭に走り俯いていると、今度は別の光景が脳裏によぎる。

“自分”が、“何か”を、“殺している”ところだった。

殺した何かは、“ナイフ”が触れた場所から塵になっけいき、やがてなにも残らなくなる。まるでRPGに出てくる雑魚キャラのように、はじめから何事も無かったの様に。

目の前が、自分の手が赤く染まっていく。体の内側に、タマシイに、力が宿っていくのを感じる。殺すたび、わたしはつよく、はつきりとした存在になっていく。

…なんだ？

記憶…なのか、それとも別の…。

殺す？

違う。

違ったはずだ。

今の自分は、そうじゃない。世界にとつての悪ではない。私は私の意志で動き、誰かのために自分を犠牲にすることだってできるはずだ。それも、前とは違う形で。

そう決意し、やはり雨宮達をなんとかして追おうとした時、頭の中に声が響いた。

『それでいい』

だれだ？

『わたしはChara。お前自身』

頭の中に直接響くようなその声は、若干違って聞こえるものの、確かに自分自身の声だと脳は認知した。今よりも少し幼かったころの、声。

ほんとうに、Chara？

私が？

『知っていたはずだ』

確かにそうだ。

知っていた。

気付いていた。

わたしはChararaであり、そして世界とは無数に存在するものなのだ。

『昔、お前とつながった時思った』

そう。昔Charaとつながった時……。Under taleというゲームをプレイしたその時、思ったんだった。

これは自分だと。

Under taleの中で、私とChara……たったふたりだけが残ったことがある。その時Charaは“EXP”を最大まで吸収し第四の壁を越えることができた。だから、ゲームをプレイしていた私自身に、語り掛けることすら可能としていた。

それはゲームの演出に過ぎない。用意された演出だったとしても、あの瞬間にふたりは正しくつながっていたし対話もしていた。

そして言葉を交わすうちに、確信した。

やはりこれは自分だと。

鏡を見たときと同じ感覚。写真に写った自分を見たときと同じ感覚。

それが、ゲームの中のCharaを見た時、どうしようもなく心の中に溢れてきていた。だから私は気づいたんだ。

もしかしたら、自分の住んでいるこの世界が、“現実”ではないかもしれないことに。自分の世界もまた同じように、外に居る誰かによって見られているんじゃないか？ そう

思えた。

それを立証する手立ては当時は無かった。私を取り囲んでいたのはなんのフィクション性もないつまらない世界だったから。

でも今、こうして『世界の中心』に立ち合えている。あの城に迷い込んだとき、ここだと確信した。退かなかったのも、雨宮達に接触を図ったのも、全てはあの時の気付きを確信に変えたかったから。そうすることで、今のつまらない人生を変えることができるかもしれないから。

失った生きる意味も、あわよくば見つかるかもしれないなかったから。

Chara: 君がここにいるってことは、そういうことなんだね。

『ようやく気が付いてくれた。さあ、取引をしよう』

取引って、具体的には。

『やってみれば、全部わかるよ』

．．．．

変わつて見せよう。
・
・
・
・
・
・
・
・

意識がはつきりしてきた。ゆつくりと顔を上げると、まだ私は校門前に立ち尽くしていた。
いた。

長い夢を見ていた気がする。時計を見ても最後にみた時刻から数分しか経っていない。にも拘わらず精神的な負担は大きく、かなり疲弊しているのを感じる。視界はぐらつき吐き気が収まらない。

それも当然なのかもしれない。

今、私の中にはもう一人のわたしがいる。

そして、その双方の記憶や精神がまだ完全に混ざり切っていない。今はまだ、自分の

意識、記憶であると認識していながら、それがまるで他人事のように遠く思える。

取引とは契約。もう一人の自分、ペルソナとの邂逅。

ようやく本当の自分を取り戻せたような気分だ。

Charaは既にこちらの世界のことを知っていた。私がCharaの世界を知っていたのと同じように。

向こうの世界はアンダーテール。こちらの世界は、ペルソナ5。

雨宮たちは心の怪盗として一年間を過ごし、神への反逆や世直しを成し遂げる。その結末も道中も、全ての知識と記憶が脳みそに溶け込んでいく。

そして今、Charaと記憶を共有することになった今、知識だけじゃないその力も全てが私と一つになっていく。

自分を正しく認知できた今、妻木綺羅としての私と、Charaとしてのわたし、二人のキャラの決意が、心に。

タマシイに、結合した。

しばらく気分が落ち着くまで待ち、ふとスマホを見ると、ちやうどよく何かのアプリがインストールされているところだった。

赤と黒のツートンカラーで構成された目のようなアイコンのアプリ。確か、雨宮達は潜入するのにこれを使っていたはず。でも、どうしてこんなタイミグで私の元に？

目を開ければ、そこは何度か見た城門だった。見慣れた光景ではあるものの、やはり以前とは決定的に違う。予告上の効果か、パレス全体に張り詰めた空気が満ちていて、少しでも動けば刺されそうな雰囲気だ。

警戒しながらナイフを取り出し、一步、跳ね橋から城の敷地へ足を踏み入れた。

その瞬間、足元から赤い炎が立ち昇り自分の姿が一瞬にして変わった。雨宮達と同じだ。

同じでないのは、炎の色が青ではなく赤だったこと。この世界への知識はほとんど持ち合わせているわたしにいわせれば、これは敵性を持つものの証拠だ。

世界を渡つても、私という存在が厄介者であることには変わりないらしい。

「別にいいよ。変えて見せる」

私にだって、誰かを助けることぐらいはできる。

おもむろに自分の顔に手を当てると、ひんやりとした感触が真紅の手袋越しに伝わってくる。形状的に、雨宮：ジョーカーのものと同じだろう。

見渡し城の敷地に在ったデカイ噴水の水面を覗き込んでみると、それは確かにジョー

カーのものと同じ形：だけど、地の色は黒で目の周りにある模様は赤に変わっていた。そして服装は、これまたジョーカーのものをイメージしたような印象にまとまっていた。わたしの中にあつた叛逆の意志のイメージが、ジョーカーそのものだったことが影響しているのかもしれない。

灰のシャツに黒のパーカーとショートパンツ。ぴつたりと足全体を覆う黒のタイツと、ショートブーツ。闇に紛れて動くにはもってこいだ。

意外と悪くないなど感傷に浸るのは一瞬。私は記憶を頼りに、オタカラのある場所まで一気に駆け抜けた。

記憶では、そこで鴨志田のシャドウに見つかつて戦闘になる。皆ならなんとかしてくれていると信じたけれど、先ほどからどうしても胸のざわつきが収まらない。直接この目で無事を確かめたい。

「おい待て！貴様、止まれっ！」

敵に見つかるのもお構いなしに、真正面切つて最短ルートで駆け抜ける。こんな鈍重な奴らに捕らえられるわけもないが、ここで少し力を試してみるのも悪くはない。

仮面に軽く触れ、自分の中のもう一人の自分の姿を、強くイメージする。

まだ幼かつたころの自分。

心に澄み切つた憎悪を溜め込んだ子どもだつたころの自分の姿を。

「キャラ」

小さくつぶやき、仮面を取りはらう。

瞬間、目の前を赤い閃光が瞬いた。

金色の鎧を着た隊長格のシャドウは、声も上げずに黒い霧となって霧散していった。

召喚は問題ない。試したいことはまだある。

もう一度、同じように召喚のイメージを強く練る。そしてそれを、今度は自分の体の中に呼び覚ます。

自分の周囲に耳障りな音と共にノイズが走り、何も無い虚空にブレが生じた。ここに在るべきものではないものが、無理やりに存在していることの表れなのかもしれない。

こうしている間は凄く気分がいい。身体の内から煮えたぎるような力が湧いてくるのが分かる。Charaが厳密にはペルソナとは違う存在であることが作用しているのか、今私自身とCharaの肉体を完全に融合させることが出来ている。心は常に同一であり、存在自体も全く同じ。そんな二つの人間のタマシイが一つになって、この妻木綺羅の体の中には二人分のCharaの力が内包されている。

純粋な身体能力も増すこの状態では、特にデメリットもなく素早く動き回れる。あふれ出る殺気は消せそうにないので、隠密行動時は控えるべきなのは明白だが。

試し切りは済ませた。もうここからは一直線に頂上を目指すのみ。

時折上の方から振動と何かが衝突するような音が断続的に聞こえて、その度にパラパラと城壁の一部が零れ落ちてくる。

急いだほうがいいかもしれない。

仮面の内に焦りをにじませ、全速力で頂上へと続く螺旋階段を駆け上がる私の背後から、大勢の騎士が猛烈に追いつがってきている。

止まったペンデュラムのつり橋の上を走り抜け、細い道を通るために一直線に並んだシャドウ達に反転して相対する。

「ペルソナ」

虚空を握るように眼前で拳を固める。そして一度後ろに振りかぶり、背後に顕現した真紅のナイフを敵に向かって投げ飛ばす。

飛ばしたナイフはたった一本。しかし綺麗に一列に並んでしまっていたシャドウ達を屠るにはそれで充分。心臓を貫いたナイフは勢いを落とさず貫通していき、前に立っていたシャドウから順に消滅していった。これで邪魔はいなくなつた。

多重に聞こえる消滅音に若干のカタルシスを感じつつ、再び踵を返し残り僅かな階段を二段飛ばしで駆けていく。そして、謁見の間への巨大な扉、すでに開け放たれているその先に、私はたどり着いた。

この光景の生みの親である鴨志田、そのシャドウが欲望を爆発させて変貌した姿でそ

ここに鎮座していた。

そして、それに対峙するみんなはかろうじて二つの足で立っていた。

「えっ…妻木さん!？」

「パンサー、前!」

真つ赤なラバースーツに身を包んだ高巻さん…いや、パンサーがこちらを振り返った。その隙に動きだそうとしたカモシダの動きを捉えた私は駆け出し、パンサーを守る位置まで行こうとした。

「アルセーヌ!」

それを援護するかのようには、ジョーカーのペルソナであるアルセーヌが翼を翻し呪怨をカモシダのシャドウに浴びせた。若干怯んだ隙に私がパンサーを抱きかかえるようにしてその場から離脱。一瞬のやりとりだったが、さっきまでパンサーが立っていた場所にはカモシダの持つ金色のフォークが突き立てられていた。

「今は集中して」

「う、うんっ」

「フン、虫が一匹増えたか。お前は、もう一人の転校生かあ?」

醜悪な姿へと変貌したカモシダは、値踏みするような視線でじつとりとこちらを眺めまわしてきた。

「だったら何」

「オイオイ、オマエにはまだ何もしてないだろ？なんで俺様に齒向かうんだよ？」

まだ、とはなんだまだとは。大人しくしてれば私にまで何かしようと思つたのか？
なんでもいいけどとりあえず制裁だ。

「いいか？この城は、俺様のものだ！俺様はこの城の、王なんだぞ！」

「いい加減うんざりだぜ…そのふざけたセリフ！」

「学校はアンタなんかの城でもないし、アンタは王でもないっ！自分より弱い人を踏み
にじつて人生すら食い物にするアンタは、サイテーの悪魔よ！」

「どいつもこいつも話の分からない馬鹿ばかりだ。いいか？この学校はなあ、俺様が
いて初めて成立してんだ。そのことを分かってるやつが、自分からモーションかけてきて
んだ！俺様はなにも悪いことしてねーだろ!？」

「話すだけ無駄だ」

「ああ…ジョーカーの言う通りだぜ…！さつきとぶつ倒そうぜ！こんな奴!!」

「私がやる」

一歩、前に出てそう宣言する。

睥睨するカモシダの目は私に向いている。おそらく、この場に居るはずのもう一人の
存在には気付いていない。狙いは注意を十分に引くこと。それだけだ。

「やれるのか?」

やや疲弊した様子のジョーカーが、私に向かってそう問いかける。

「もちろん」

「小娘が…なにを」

「ペルソナ」

カモシダの言葉を聞き終えぬうちに、再び私は自分の中に Ch a r a の存在を呼び覚ました。地の底から響くような鼓動と共に、視界がぐつと広くなつたような錯覚を覚える。それと同時に、底無しの自信と決意が心の内からあふれてくる。

雰囲気が変わつた私を見て目を見開いているカモシダに向かってゆつくりと歩き出す。

一歩。

また一歩。

着実に終わりが近づいてきているのにも関わらず、その場にいた私以外の奴は誰も身動きが取れなかつた。当事者であるカモシダでさえも。

「」

足、腹、そして首から頭へと、ゆつくりカモシダの身体を上っていく。

「
」

私には力がある。全てを始めるための力であり、終わらせる力でもある決意が。

でもこれは、もともと自分の力だったわけでは無い。ここではない世界で生まれたわたしに、どこかの世界のクソ野郎が、伝染してきただけのもの。

そのはずだったのに、いつしかこれはわたし自身の手として独立していった。それも、こんな最悪な形で。

「
」

わたしという存在は本来、Undertaleというゲームにだけ存在することがあり得た人間だ。そしてその世界では、ありとあらゆる選択肢が存在していて、その決定権はほぼすべて、そのゲームのプレイヤーに委ねられる。

どうやったって、わたし達ゲームの中の存在はその選択に抗えない。

そして、プレイヤーの行った、その世界にあるすべての命を消し去るといふ残酷極まりない行為の末に生まれたのが、わたし。

Charaだ。

わたしのタマシイに宿るこのケツイは、思ったことを必ず成し遂げるための力。

人によって、使い道は異なる。

だけどわたしは、その力を暴力の道へと使わざるを得なかった。あの世界で起きたこ

と、自分が成し得たことについてはできるだけ思い出したくない。

友だちも、家族も、みんなわたしの事を悪魔でも見るかのような目で見てくる、あの感覚は。

「」

それが嫌で、こうして世界を渡つたのに。

結局私は、こうすることでしか存在意義を示せないのか。

。。。

そうじゃない。

確かにこの力は、他者を傷つけるためのものだ。

でも、その力だつて使い道を誤らなければ、私は善人で在れるはずだ。この世界で、この力を、誰かを傷つける目的で使うんじゃない。

誰かを護るために、この刃を振るうことだつてできるはずだ。ここにいる仲間だけじゃない、目の前の本物の悪魔から大勢の人間を救い出すためにも。

「」

そのために私は、この力を使う。決して、短絡的な快樂のためなどでは決してなく。でもね。

この、自分への敵対者を完全に見下ろせる感覚や、誰かの生殺与奪の権利を自分が

握っているこの感覚が：好きなことには変わりない。事実、今カモシダの目に映る私はとてつもなく楽しそうな笑みを浮かべている。

それもまた私であると、とつくの昔に認めてはいる。そんなものは誰にだってある感情。他者より優位に立って嬉しいと思う気持ちだが、私はほんの少し強いだけ。

額の上に辿りつき、ゆっくりとナイフを振り上げる。

今、ここには私と、カモシダの、二人しかない。お互いがお互いだけを認識しているこの場でなら、確実に終わらせることができる。

振りかぶったナイフを、振り下ろす。

「やめてっ!!」

切っ先がカモシダに触れるよりも先に、聞き覚えのある声が響いて思わず動きを止めた。

はつとして見ると、私とカモシダの間に認知存在の杏が立ちはだかっていた。

どうして動きを止めたのか、その瞬間は自分でも分からなかった。でも、Charaの記憶によつて杏のことをよく知っていた私は、同じ姿をしたその人型をカモシダもろとも斬り捨てることを直感で躊躇ってしまった。

そんな隙を見逃すわけもなく、カモシダは急いで体勢を立て直し、もう片方の手に持っていた金のナイフを、認知存在の杏ごと斬り捨てる勢いで私に向かって薙ぎ払ってきた。

無論その程度、その場から一步も動かずに避けることは容易かったのだが、わざわざ助けに入った認知存在は真つ二つに両断されて消滅していった。

「ああっ……俺の、俺様の杏……!!」

「誰がアンタのよっ!」

背後から強烈な火球とともにパンサーの怒号が飛び、カモシダの肌を焼いた。炎の当たった箇所が黒く爛れているところを見るに確実にダメージはあるものの、なおもカモシダは私に向かって武器を振るう。

「よくも俺様の杏をおおおっ!」

「キャプテン・キッド!」

がむしやらに暴れるカモシダの腕をスカルのペルソナが放った電撃が貫き、しびれからかその手に持っていたナイフを落とした。カモシダはもう片方の腕でなんとか抵抗しようとするも、その刹那吹き抜けになつていた二階から飛び出してくる影があつた。

カモシダは私に気を取られ、その次には気が動転し目の前のことしか考えられなくなった。

そうして、カモシダの力の源であるオタカラ…その頭にかぶった王冠を狙い潜伏していた、モナが存在に気を配れなかった——！

「チエックメイトだあ!!」

猫顔負けの超速タックルでカモシダの王冠が遙か遠くへ弾き飛ばされる。

「モナナイス！」

パンサーの歓喜の声が響き、急激に力の収縮が起きたカモシダはその場に巨体をへたりこませた。戦闘の最中、その隙はあまりにも致命的。そして、怪盗団の前でその隙をさらしたのはさらに致命的。

全員が一気に駆け寄り距離を詰めて包囲する。この陣形から繰り出される攻撃は一つしかない。

「き、キサマラ…俺様にこんなことしてただで済むと思うなよ…!」

「負け惜しみより命乞いをしたらどうだ」

「っ…!?!」

「…行くぞっ!!」

ジョーカーの号令が轟き、スカル、モナ、パンサーは同時に飛び上がった。そしてカモシダの巨体の周りを飛び跳ねながら、斬り、殴り、撃ち、離脱。その連携を目にもとまらぬ速さで4人同時に繰り出す。一糸乱れぬ総攻撃が、今私の目の前で行われてい

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတတ

တတတတတတတတတတတတတတတတတတ

決るような傷口からどす黒い何かを勢いよく吹き出しながら、カモシダはゆっくりと後ろ向きに倒れていった。至近距離で一瞬見えたカモシダの目には、何かの数字が映っていたような気がした。その答えはおそらく知っているものの、イマイチ正確な答えは思いつけずにいた。

「あつ……」

「止まれ」

そんな私を置いてけぼりに事態は進んでいた。転がった王冠を掴み人間の姿に戻ったカモシダは逃走を図るも、足元にジョーカーが発砲することで足を止める。

「む、昔からそうだ。期待という名の押し付けばかり……」

「言い訳かよ……」

「でもね、アンタみたいなクズでも、廃人になられたら困る」

完全に包囲され八方ふさがりであると認めたカモシダは、オタカラをジョーカーに投げて寄こし、涙を流してうなだれた。過去の鴨志田がどんな人間だったのかは分からない。ただ、オリンピックという世界を相手にする場所で活躍していた事実だけは確か

で、その熱意もかつては本物だったはずだ。

しかし、人は身に余る力や地位を得たとき簡単に凶に乗ってしまう。その典型的な例が、鴨志田卓という男。

どうして人はこうなってしまうのか。もし私たちがいなくて鴨志田がまだのさばっている未来の事を考えると、流石に寒気がする。

「俺は……これからどうすれば……」

「現実に戻って、罪を全て告白しろ。それから先は、自分で考えろ」

「……分かった」

ジョーカーの言葉に頷き、カモシダのシャドウは光となって消えていった。歪んだ欲望の現身であるシャドウは消え、欲望のみなもとだったオタカラは頂戴した。これで、作戦の目的は達成。

ただ、それはつまりこのパレスの源が消え去ったことと同じ。これから始まるのは急速な崩壊だ。ひとつ大きな揺れが起き、それをきっかけに鴨志田の牙城は崩れ落ち始めた。

「走るぞー！」

急いで来た道を引き返す私たちの背後から、ハリウッド映画さながらに城が崩れ、徐々にその波は追いついてきている。私一人逃げるだけなら問題はないけど。

「やばいつやばいつて！死ぬー！」

私はチラリと後ろを走るスカルに目をやる。

…やはり足が思うように動かないようだ。左足の回転がぎこちないし、徐々にスピードも落ちてきている。このままではもつれて転ぶのは時間の問題だ。そう思った次の瞬間には、想像通りというか知識通り、スカルが前のめりに転ぶ。

想定範囲内だった私は急いで反転し手を貸しに向かうと、同じ速度でジョーカーもスカルに走り寄って手を貸していた。

「立て！」

「エースなんでしょ」

「…つたりめーだ!!」

「ちよつ来てる来てる！みんな急いで!!」

「行けっ！振り返るな!!」

「ニャー」

・
・
・
・

「で」

命からがら現実に帰還してきた私たちは、詳しい話はまた後日として早々に解散した。私もわたしで、雨宮と一緒にルブランまで帰ってきて、そして何故か屋根裏で尋問まがいの質問攻めを受けていた。

「どうやって入ってきた？なんで服装が変わってた？あの力はなんだ？」

「口は一つしかない」

「ウニャー！オマエからもなんとか言ってみてくれ！」

「本当に口は一つか？」

「そうじゃねーだろ！」

「まあまあ落ち着いて」

「オマエが言うな！…はあ。もうワガハイ一人じゃツツコミの枠が足りんぞ」

まあ実際モルガナの疑問も真つ当なものなので、適当に真実と嘘を織り交ぜて話していく。

まずはどうやって入ったか。ここはシンプルに、起こったことをそのまま話した。気づいたら入ってました、と。

「…まあコイツもリユージ達も、そのアプリはいつの間にか勝手に入ってたしな」

で、次に力について。こっちは、実は初めて雨宮達と城で会った時から、同じ日に覚醒していたことにした。でもあの時は、まだ力の覚醒直後だったこともあり、変身が維持されなかった、と。

「あの時、シャドウに攻撃が通じたのも」

「そうだね」

「…」

モルガナはまだ疑わし気な空気を漂わせていたものの、雨宮がたしなめてくれたおかげでひとまずはそういうことにしておいてやろうということまで話は終結した。

「俺たちを助けに来てくれたのは事実だし、攻勢に出るきっかけをくれたのも妻木さんだった」

「まあな。それに、アン殿やリユージのことも、身を挺して庇ってくれたし」

「放つてはおけなかったから」

「それに関しては…感謝する」

「ふふ」

「おい、気軽に触るんじや……にやふ」

無駄に手入れされているつやつやの毛並みを堪能しながら、なんとか話題をうやむやにすることに成功した。いずれ襦袢が出そうではあるけど、一時しのぎでもこうしておいた方がいい。今私の素性に関して話しても、混乱させるだけで大した成果は出ないだろう。

それに、私もすこし休みたい。

とはいえ制服のまま寝転がる訳にもいかず。いつも大体こつちで暮らしてるわけだし、わざわざ向こうに着替えを取りに行ったりするのも面倒だ。

「こつちにいたほうが色々楽かな？」

「ん？」

「ちよつと聞いてくる」

階下へ降り、佐倉さんのもとへ。

「なんだ？」

「少し相談が」

「…ちよつと待ってな」

そう言うと佐倉さんはわざわざ店の看板を「close」にして、また戻ってきた。

「これからなんですけど…もう少し、お世話になりたいと思っていて…」

「ここは少ししおらしく下手に出て、同情を誘うべき。」

「かまわねえよ。どうせ色々持て余してるしな…」

「ありがとうございます。それで、もう一つお願いがあつて」

「ん？」

「私の部屋、こここの二階でいいですか？」

「…」

「…」

「…なんで？」

・ ・ ・ ・ ・

十日後く5月2日 月曜日

『秀尽学園教師、元オリンピック選手。鴨志田卓容疑者。生徒への体罰、セクハラ等問題行動を自白』

どこもかしこも、同じ内容の速報であふれかえっている。私たちは屋上で集まり、ス

マホ片手にニュース記事やSNSを漁っていた。

「マジで『改心』だったな」

放課後の夕陽を見上げながら、坂本が感慨深そうにそうこぼし、みんなそれに同意した。さすがにあれほどの変わりようともなると、少しぐらい驚きもする。

鴨志田はあの作戦から今日まで、ずっと自宅謹慎を貫いていた。誰にも事情は話さず、ただ懺悔の言葉をつぶやきながら部屋に引きこもっていたらしい。それを聞いたときは、もしや上手くいっていないのかと心配にもなりかけたが…結果はこの通り。

今日の全校集会の場で、鴨志田は自身の罪を全て告白した。その後警察に自首をし、現在事情聴取中である。

「つか、よかったじゃん。お前の汚名もバンカイできたし」

「私のは別にいいよ。あと汚名は返上ね」

「似たようなモンだろ」

「雨宮君の噂は…まあなくなりはないけど、少しはマシになったんじゃない?」

「かもしれない」

鴨志田が全てを告白したことで、杏が鴨志田に媚びを売っていたみたいなのは誤解と知れてその件は解消したように思える。実際何人かの女生徒が、無責任な噂を流してごめんと謝罪にも来ていた。

一方坂本や雨宮だけど、こっちはあんまり前と居心地は変わらなさそうだ。坂本はそもそも素行が問題ではみ出てるだけだし、雨宮にマエがあるという噂を流させたのは鴨志田だけど、それ自体は事実であることも知れているわけで、未だに学校を歩くだけで異様な視線を浴びている。

そして、最近気づいたがそんな連中と転入早々つるんでいる私のほうにも、何やら飛び火していそうな雰囲気だった。そもそもかわりは無いから、どうだつていいんだけど。

ふと、杏のスマホが鳴り視線が下ろされる。画面をのぞき込んだ杏は一瞬不安そうな表情を浮かべたものの、次の瞬間にはどっと安心したような笑顔に変わった。

「志帆、意識戻ったって!」

「マジか!」

志帆というのは、先月飛び降りたバレー部員のこと。杏の親友だ。あの日からずっと意識不明の重体だったようだが、今日やっと意識を取り戻せたらしい。

「よかった…っ」

泣きそうになりながら笑う杏を見て、私たちは目を見合わせて少し笑う。

坂本は嬉しそうに鼻の下をこすり、机の上に置かれた「金メダル」を手を取った。これは鴨志田のオタカラを現実に持ち帰った時に姿を変えたもの。要するに、これがきつ

かけで歪んだ欲望が産まれてしまったわけだ。

「うし！これで心配事はなくなつたな！打ち上げでもしよーぜ！」

「賛成だ！ワガハイ寿司が良い！」

「…うん。そうしよ！金メダルっていくらで売れるのかな？」

「売るのか？」

「え。だつてこんな物いつまでも置いてたくなくない？」

「…それもそうだな」

雨宮は何故か残念そうに、渋々納得した。思い出の品はずつと取っておくタイプだろうか。

「あ、じゃあ私行きたいところあるんだけど。前から気になつてて、志保といつか行こうかつて言つてた場所」

「アン殿のチョイスなら、ワガハイどこでもいいぜ！」

「杏に任せる」

「OK！絶対満足できるから！綺羅もそれでいいっ？」

「いいよ」

「なんで俺には聞かぬーんだよ」

「竜司は貸しがあるからね」

「貸し？」

「中学んときの修学りよこ…」

「あ、あー！ストツプ!!」

「お？なんだなんだ？リユージュの恥ずかしエピソードか？」

「なんでもねーよ！」

．
．
．
．
．

「で」

つい最近も同じような入りがあつた気がするなど思い出しながら、足を組み無理やり延長コードで充電器につないだスマホを弄り続ける。

「なんでそこにいる」

「なんとなく」

「ソファあるだろう」

仰向けに寝転がる雨宮のベッドに腰かけながら、空返事を返し続ける。元々せまくて

寝返りも満足にうてないようなベッドなんだから、今更私みたいな細い人間が座ったところで大して変わりはない。

そんなことより、と雨宮にスマホの画面を突きつける。

怪ちゃんという、とあるクラスメイトが作った私たちについての非公式ウェブサイトだ。まだ機能は多くないけど、これからどんどん拡張する予定らしい。

「怪ちゃんか」

「うん。掲示板があるんだけどさ」

「…『よくやった』、『怪盗万歳』。意外と肯定的なのか？」

「こんな意見はごくわずかだけどね。ほとんどは懐疑的だよ。鴨志田の心変わりの理由は、世間からしたら完全に不明だから当然だけど」

「ふむ」

当たり前といえば、最近私は佐倉さんの家の空き部屋ではなくルブランの屋根裏で過ごすことが多くなっている。というのも自分から佐倉さんに、「こっちの部屋で過ごしたい」と直談判した結果なんだけど。

それを言った途端何故か雨宮がとぼちちりで叱られていたのは面白かったけど、少し悪いことをした。「最近の若いのはお盛ん」だなんだと見当はずれの偏見を食らったのは、多分私だけじゃなくて雨宮の方もだろうから…。まあ、そうなって困ってるのを

見るのが楽しいのも事実ではある。

とはいえ真の目的は兩宮を困らせることではなく、活動の拠点をこちらに置いていた方が何かと都合がいいからだ。お互いにあの世界での出来事を知っている仲：あまり大声では話せないこともここでなら話せる。

テーブルの上に無造作に置かれた出来の良い金メダル。認知世界産のニセモノとはいえ、材料だけは実際の金メダルに使われているものと同じみたいだ。

「三万ぐらい」

「ふうん。意外と少ない…」

「確かに」

換金額を調べていた兩宮は意外と安かった金メダルの値段に少しテンションを下げていた。まあこのへんはゲームでも知っていたけど、ここであえてそんな反応をする意味はないため知らなかったという風を装っておく。：まだモルガナは私の事について若干疑いの視線を向けてくる。それも、当然のことだとは思う。

だから少しでも正直ではありたいものの、「目的」のためにはまだすべてを明かすわけにはいかない。ただでさえ外の連中には悪目立ちしてるんだ。できるだけリスクは排除すべきであり、仲間の信用は崩したくない。

常備しているお気に入りのナイフも目の前で見せることは極力避けるし、上着を脱ぐ

ようなこともしない。情報は自分以外には、極力流さない。それ自体はそこまで気を張る行為でもないし、別に問題ないだろう。しばらくは、この物語の中心に溶け込んで根回しすることに専念しよう。

まずはなにより、身内の信頼を得なければならぬ。

.....

三日後、5月5日 木曜日

連休最後のこの日。私たちは金メダルを換金して手に入った資金を手には、杏おすすめのホテルビュッフェに足を運んでいた。ここもゲーム通り、周りは風格のありそう

な大人ばかりで、自分たちのような学生の集まりはやや浮いていた。

「なんか、ひよつとしてうちら場違い？」

「気にすんなよ。ちゃんと金は払ってんだ」

怪訝な周囲の目を今更彼らが気にするわけもなく、最初こそ気圧されていた杏もすぐに大皿片手にスイーツメニューを漁りまわっていた。

私と雨宮は席に残り、坂本と杏が自分たちの分も取ってきてくれるのを待つ。これから先に起こることを想像してなんとなく気分が落ち込むわけだが、別に…まずいわけはないだろうし…。

「またあのグロ皿を見る羽目になるのか…」

「モルガナ」

「…やべっ」

しんなりしながら頭を出すモルガナをぴしゃりとカバンの中に押し返す。こんなところで猫が見つかったら速攻締め出されるに決まってるだろうに、不用意に顔を出すんじゃないよまったく。雨宮は雨宮で、マイペースに前菜を楽しんでいる。…メインより楽しそうに食べるな。

「野菜は好きだ」

「私だって嫌いではないけど」

そう言いながら雨宮の前に置かれたレタスやパプリカなどの野菜の横にソースの置かれたサラダを一つまみ頂く。

「美味いだろ」

「確かに」

「お前らどんだけそれ食うんだよ！」

「美味いぞ」

「これは美味しい」

「ここに来てほぼ生野菜しか食ってねえ…。ワガハイオマエラの味覚を疑うぜ…」

なんだか知らんがこのソースがとても美味しくてひたすらに野菜を貪り食っている
と、隣でひたすらステーキばかりを食っていた坂本から場も状況も弁えない清々しい
ツツコミが飛び込んできた。モルガナも何やらごちているが、一つかじらせてやるとす
ぐに黙った。どうだ。

「あんたらもうちよつとバランスよく食べなさいよ。あ、わたしのはいいからね」

「杏も杏で大概だろ。ケーキしか食ってねえじゃん」

「何種類あると思つてんの？このペースでいかないと食べきれないって」
「全部食う気かよ!？」

：やれやれ。せつかくビュツフエに来たというのに、各々一種類ずつしか料理(?)を食べていない。これは流石にセンスがないと言われても仕方がないな。

「行こうぜレン。こいつらのチョイスにはセレブさが足りないからな！」

そうモルガナにせつつかれ、雨宮は席を立てて料理を取りに行つた。私としては割ともう満足だし新しい料理を取りに行く理由が全く見つからなかつたのだが、せつかくブ口の料理がここまでずらりと並んでいるのだから、腹ごなしついでに色々と見て回ることにした。

その間すれ違う人々は風体も綺麗な、いかにも上級階層といった人間だらけ。そんな厳格な雰囲気を漂わせる彼らからも、時折秀尽や怪盗と言つたフレーズが耳に入ってくる。そのどれもが小馬鹿にしたような冗談めいた言葉ではあつたけれど。

「それもとつとけ。その赤いヤツ」

肩のカバンからネコの頭をちらつかせながら、指示通りにひたすら料理を盛り続ける雨宮を発見。どう考えても、今テーブルにある奴とあわせて食べきるにはかなり苦労しそうな量だが、手伝わされても面倒だしそろそろ止めておこうか。

「カルパッチョも頼む！あ、タイのやつな！」

「…」

アンドロイド紛いな雨宮の動きは無駄なくモルガナの指示をなぞっている。本当に自分が食べたいものはよそえているのだろうか。

「雨宮」

「どうした？」

「その辺にしといたほうが」

「レン！ステーキがまだだったな！あっちだ！」

結局、大量によそってきってしまった料理をコース時間内に食べきるための命がけのレースが始まってしまった。

坂本とモルガナは途中脱落。仕方なく残りを私が食べ終わるまで、ついぞ付き添った雨宮と坂本たちはトイレから帰ってくることはなかった。

回転寿司店でならよく見る積み上げられた十数個の皿（大きさは4倍ぐらいある）をテーブルに聳え立たせ勝利の余韻に浸っていると、隣ではまだ杏が高級ホテル珠玉のスーツをゆつくり堪能していた。見たところ柑橘系のソースのかかったパフェみたい

だ。

「あ、綺羅。これ食べる？食後のデザート！」

「いいの？」

「いいのいいの！」

それならありがたくと、杏の前に並び立つケーキの中からチョコフレーバーそうなものを貰って胃を落ち着けることにした。一口食してみると、なるほど確かに市販のものとは味も香りも別物であると分かる。

…ふと、視線を感じて顔を上げる。すると何故か、杏が驚いたように私の目を覗き込んでいた。

「綺羅のそんな顔、初めてみた」

「顔？」

「なんか意外」

「どういう意味？」

「ごめんごめん。なんか、綺羅って雨宮君と似てクールじゃん？あんまり感情を表に出さないっていうか」

「まあそれは自覚してる」

「でしょ？でもさっきの綺羅の顔、すっごい可愛かったよ！もうただのスイーツ女子っ

て感じー！」

かわいい。スイーツ女子。

「あ、今はちよつと怖い顔になってるケド」

「……」

「…あはは」

「……」

「ちよつと、黙らないでよ。え、もしかして怒ってる？」

無言で圧をかけて遊んでいると、次第に杏の表情が真剣に曇り始めたので思わず吹き出してしまった。いたずらだったと分かると杏は本気で安心したように胸をなでおろす。

「もー！」

「ごめん」

ほどほどにはしているが、私はどんな形であれ人をからかうのが好きである。そして、からかわれるのはちよつとムカつく。

一応気を付けてはいるし頻繁にやるわけじゃないから、最近はこの原因でトラブルになつたりは全くない。最近は。

「でもやつぱり意外だよ。ケーキ好きなの？」

「ケーキじゃなくて、チョコが好き。チョコ味でもいいけど」

他愛もない、女子高生みたいな会話を弾ませていると、未だに顔色の悪い二人と一匹がフラフラしながらトイレから戻ってきた。出発から今まで、約二十分の激闘だったらしい。そして何故か、行く前は普通だった雨宮の顔色が何故か今は悪くなっている。後からくるタイプだったか。

「ったく」

「ん？どうかしたの竜司」

「別に、いつも通りクソな大人に出くわして気分悪くなっただけだよ。な、レンレン」

「いちいち腹たてるなって」

「でも、許せねえんだよ！ああいう大人！」

「ちよつと、こんなところで熱くならないですよ。人目あるんだから……」

立ち上がったままだった坂本はばつが悪そうに腰を下ろし、少し声のトーンを落とし続けた。

「でもよ。本当にできるんじゃないやねえか？俺たちならさ」

「できるって？」

「鴨志田みたいなクソ野郎を、みんなまとめて改心させちまうんだよ。そうすりゃ、俺たちみたいな奴にも勇気やれるだろ？ほら、お前らも知ってるだろ。//怪盗お願いちゃん

ネル”」

つまり坂本はこう言いたいらしい。 “力” を使って、自分たちやバレー部員のよう
に、社会の理不尽に苦しむ人々を救うことができるんじゃないか、と。

杏は賛成よりの態度で、モルガナは勿論大肯定だ。もちろん危険も伴う。それを承知
で、人助けをするのか。

「みんなと一緒なら、俺も賛成だ」

「よっしゃやさつすがレンレンー！ そう言ってくれと思うってたぜ！」

「綺羅はどうする？ またあのシャドウと戦うことになるんだし、無理してやらなくても
良いと思うよ？ 実際、わたしもちよつとそこは不安だし…」

みんなの視線が私に集まる。

確かに、今回の事件で一番かかわりが薄かったにも関わらず最後まで付き合ったのが
私だ。みんなからすれば、そこまでこの怪盗行為を続ける理由は無いように見えるだろ
う。でも実際は違う。本当は誰よりも、この力を、繋がりが必要としている。

「一緒にやるよ。私も」

「おっし！ 決まりだな！」

「ホントに、無茶しないでいいからね？」

「してないよ。それに見たでしょ？ 私、戦うのセンスあると思うんだよね」

「確かに凄かった」

「あ、でもリーダーは雨宮に任せるよ。指揮とか向いてないし」

「はいはいさんせー!」

「わたしも、雨宮君なら安心かな!」

「ワガハイを差し置いて……ってのはあるが、まあいいだろう」

どうやら話はまとまったらしい。

これから、ここに居るこのメンバーで怪盗行為を続けていくことになった。まだ手探りの段階ではあるものの、この先の知識はわたしが有している以上大きな事故はまず起きないだろう。

意気揚々とこれからの話について花を咲かせていたみんなだけど、ふとしたタイミングで話題は急転換することになる。

学校の屋上为例の事件によって使用禁止になった今活動の拠点をどこにするか、という話になった時、各家の自室が候補に挙がってしまった。

そうなると私の事情も話題に上がる訳で。

家出している時点でただ事ではないと、みんななら分かっているだろう。ただ、それだけの話である以上軽々しく話すのは憚られる。

だから私は適当にはぐらかして、色々あったと皆には詳しいことを話すのは止めた。

いつかはちゃんと話すつもりだ。そう遠くないうちに。

「あ、じゃあ怪盗団の名前とか決めね？前はなんとなく、心の怪盗団だったけど、予告状に名前入れたらかつこよくね？」

「いいね！ピンクダイモンズとか」

「草野球かよ」

「アマダイのポワレ・シャンピニオンソース…とかどうだ？」

「あま……なんだって？」

「さつき食った奴だ。メモリアルだろ？」

「あほか！」

やや重苦しい空気になりかけたもののすぐに持ちなおし、話題は怪盗団のネーミングへ移る。

「もう、お前決めてくれ…」

メンバーにネーミングセンスが圧倒的に欠けているせいで全てを丸投げされた雨宮は数分悩み、やがて『ザ・ファントム』という名前を提示した。反対意見は特に出ず、これでいよいよ怪盗団の本格的な活動が始まることとなった。

若干の謎と心残りを残して、私たちはこの日初めの一步を踏み出した。

怪盗と学生の二重生活。

全てを欺き、奪い、抗うための一歩だ。

私は自身の計画を胸に思い描きながら、これから起きることへの期待をこめて…
“決意”を抱いた。

E p i s o d e : 1

始動

5月14日 土曜日

眠目をこすりながら今日も今日とて、すし詰めになり電車へと突入しなければならぬ。しかも最近はまだ5月だというのに既に初夏の気配を感じさせるほど気温が高い。

ただ立っているだけでも消耗するのが分かっているから、ホームで電車の到着を待つ間は基本的に憂鬱でしかない。

たまたま一緒になった杏と坂本とも一緒に今日に行くことになったが、二人は別の意味で憂鬱そうな表情を浮かべていた。いやまあ、坂本のほうは大あくびをしているだけだったけど。

「お？珍しくリユージュが眠そうだな。徹夜でもしたのか？」

「俺だって徹夜ぐらいするっつの」

「まさか!?!ホントにリユージュが徹夜したのか!?!」

モルガナは驚いていたが何のことは無い。詳しく聞けば、今日まで続いていた // 中間

試験”に嫌気が差し、久しぶりにゲームを起動したところハマってしまい、気付けば朝になっていたというだけの話であった。もし本当に徹夜で勉強していたとしたらきつとその日は何か良くないことが起きる。だからこれでいい。

ちなみに杏の方は、勉強の合間に部屋の片づけをはじめたら止まらなくなってしまう、とのこと。

「どつちも典型的な現実逃避の形だな…」

「うっせ。俺より脳みそちいせえくせにっ」

「大きいだけで中身スカスカなりユーヅに言われてもなー」

「てめこのクソ猫!」

「もう、朝から大きい声ださないでよ…」

普段どおりのじゃれ合いを横目に、私は周囲の人ごみに意識を向けていた。知識通りであれば、このへんに喜多川祐介がいてもおかしくはない。異様な目つきで杏のことを見つめているはずなので、意外とすぐ見つかりそうなもの…だけど…。

「…」

「どうかしたか?」

ぐるりと一周見回していると、遠目から見ても明らかにぎらぎらした目つきの男と目が合った。人ごみで紛れてよく見えないけど、あれは多分喜多川で間違いないだろう。

なんで私を見てるんだあいつ。

引つ張り出してもよかったがここは人の多い駅のホーム。周囲の迷惑になるのは避けたいので、ひとまずは泳がせておくことにした。

「ねえ綺羅」

「なに」

「あの人、なんかずつとこつち見てない？」

「見てるね」

「なんでそんな冷静なのよ！」

実は杏も気付いていたらしく、電車が到着し場が混沌としだしたタイミングで私にそう聞いてきた。適当にたしなめつつ、降りた先の駅でまだいるようならひつ捕らえて問い詰めようという事で納得した。

降車が済み、前に並んでいた私たちは入り口から奥の方へと乗り込む。相変わらず座席は一つも空いておらず、外よりも人口密度が高いせいで蒸す。端的に言つて最悪な環境だけど、毎日繰り返し返していればこれにもいつか慣れるんだろうか。

前に持つてきたリュックを抱きかかえながら窓際にもたれかかり、外の景色を眺めていると、前に立つ杏がこちらをじつと見つめてきているのに気付いた。

別にいくら見てくれようが一向にかまわないのだけど、それはそれとしてやはり気に

なってしまう。私よりほんの少し高い位置に頭のある杏は見返した私の視線にたじろぎ、照れ臭そうに苦笑した。

「なに？」

「いやあ綺羅の目を見るのに理由なんていらぬよー」

もしその行為がクセになつてゐるんだとしたら即刻治した方がいいと思う。人の顔面を無意識のうちにガン見する癖なんて絶対ろくなことにならない。

「なんか不思議な感じがするんだよねえ」

そう言つて、また杏は私の目を覗き込んでくる。

私の瞳は、父親譲りの「赤色」だ。それもかなり、鮮やかな赤。赤色の混じつた……とかではなく、純粹な赤。見事なまでに父親の色を受け継いだ証だ。私としてはそれも誇りには思つていただけ、今はもう家族だった人たちの話をする気にはなれなかつた。今度は目を閉じて、目的地に着くまでの間完全にその思考を頭から締め出した。

駅から地上に出て約数歩、相変わらずついてきた件の男にいきなり向き直り、杏は文句を言つてやろうと息を吸つた。

が、そこに立っていたのが想像とは全く違う人物だったのに対し言葉を失ってしまった。対する男も何か言われるのかと身構えた結果何も言われなかったのを見て、困ったように首をかしげていた。

この男は喜多川祐介。ゲームなら、次に仲間になるキャラクターだ。高身長かつ細身で、ありていにいってしまえば顔も美形。黙っていけばモデル級とよく揶揄されている。

「そこのお二方、ぜひ俺の絵のモデルになってくれ！」

「……え？」

黙っていればと枕詞がつくのは、東京の街のど真ん中で、人目も気にせずこんなことを叫べる男だからである。私はミュージカル俳優のようなポーズを決めた喜多川に近寄り、一言「いいよ」とだけ答えた。

「えー！？」

「恩に着る！ではさっそくアトリエまで案内しよう。なに、電車賃に関しては心配いらない。ちょうどすぐそこまで先生の車が」

「ちよ、ちよつと待ってっ！」

パツと顔を明るくした喜多川とぼーつと突っ立つ私の間に、大袈裟な身振りで坂本が間に割り入ってきた。

「こんな怪しい奴の勧誘にあつきり乗りすぎだろ！あと、お前そもそも誰よ？ 駅からずつとつけてきてたよな」

問い詰められた喜多川は特に悪びれる素振りも見せず、ただ淡々と、さつきまでの喜の表情がウソかのような無表情で坂本に向き直った。

「つけていたつもりはない。ただ、彼女の持つ魅力に惹かれ、気付いたらここまで来てしまっていただけだ」

「つけてんじゃねーかつ！」

「俺はストーカーではないっ！」

「誰もそうは言ってるねーよっ！」

「む。そうか。すまない、早とちりだったようだ」

「や、つけてたのはホントなんだよな……」

「結果的にはそう言えるかもな」

「…オイ、こんなやつだぞ？ いいのか？」

呆れ顔の坂本がこつちを振り向いて私に聞いてきた。無論、こうでなくてはむしろ困る。

「確かに、少し礼節を欠いていたな。許してほしい。俺は喜多川祐介。斑目一流斎の弟子だ」

「斑目って、あのマダラメ？」

喜多川から出た名前に、杏が聞き覚えのあるような反応をして兩宮が聞く。

「知ってるのか？」

「うん。この前情熱帝国で見たよ。『稀代の天才画家、斑目一流斎』って」

「マダラメ……」

モルガナが復唱するように名前をつぶやくのと同時に、私たちが立ち止まっていた歩道の脇に一台の車が止まって、開いた窓から一人の老人が朗らかに笑いながら顔を出した。この爺が喜多川の師匠であり、次のターゲットになる男でもある。

.....

一週間前く5月7日 土曜日

この日、モルガナの提案によって、怪盗団は渋谷の駅前に集合していた。

目的は「大衆のパレス」：通称メメントスの探索のためだ。

パレスに入るために使う謎のアプリ、イセカイナビを使用して渋谷の駅前から入ることが出来る。メメントスは東京の地下鉄内部に存在しているからだ。

詳しい説明はここでは省くけど、とにかく小さな歪みが集まって形成された総合的な認知世界であるということだけ知っていれば問題はない。

もちろんここにはシャドウもいる。時には、他の人間より少し強い歪みを持つ人間のシャドウなんかもある。そういう奴を説得して現実へと返すことで、その人間の改心も可能だ。

そして当たり前だが、認知世界内でまともな列車が運行している訳はない。でも内部はかなり広く平坦だから、移動には「車」を使う。

「ニャータリーエンジンを、全開だ！」

「飛ばすぞ」

「いや、安全運転でおねがい」

モナが変身して車になるので移動は楽ちんだ。ネコは変身して車になるという認知

が、何故かこの世には広く浸透しているのが原因らしい。

運転席に座るジョーカーは後部席のパンサーの制止をもとせずエンジン全開でぶっ飛ばし始めた。当然いきなりだったので後ろに座ってた二人は豪快に背中から叩きつけられていたが、幸いこの車のシートはネコ産なのでかなりふかふかで安全だ。

とにかく、車によつて機動力を得た私たちは、ここへ来る前に怪盗お願ひチャンネルの掲示板で見つけたとある悩みの種を解決するため、歪みの強い場所を探し始めた。

「あ、そういえば綺羅のコードネームってまだ決めてなかったよね？」

ゴロゴロと揺れる車内で、ふとパンサーがそんなことを言い出した。そういえばそんな話もあったな。

「この格好のモチーフって……」

「ああ。どう考えてもジョーカーだな」

二人は後部座席から身を乗り出して、助手席に座る私の格好を覗き込んでくる。

まあ誰が見ても分かる通り、確かに私の怪盗服のモチーフはジョーカーその人である。ただ私はそれをすぐには肯定せず、たまたま似ているだけということにした。

今は誰も気が付いていないようだったけど、私は一応ジョーカー達と会う前に力を覚醒したことになる。なのに反逆のイメージがジョーカーのものというのも、少しおかしい話になってしまう。

「ジョーカー…切り札でしょー？それに似た言葉ってなんだろう」

「そういや、綺羅の力ってかなりえぐかったよな？カモシダンときしか見てねえけど、すげえ迫力だったのは覚えてるわ」

「切り札…必殺…？奥の手…」

そんなこんなと悩んでいるうちに、モルガナが強い歪みの発生源を嗅ぎ当てて目的地にたどり着いた。この話はあとですることにして、今はひとまず目の前のシャドウに集中する。

そのシャドウの見てくれは一見どこにでもいるような成人男性だけど、目はシャドウ特有の金色に光っていて、なおかつ漏れ出る負のオーラは誰の目にも明らかだった。

彼の名は「ナカノマツ シンジ」。

掲示板にわざわざ名前まで書きこまれてしまっているストーカー男だ。すでに別れたパートナーにしつこく粘着しているらしく、職場にまでおしかけたりしているようだ。パンサーは女の敵ということで即改心に賛同していた。

私としては男女うんぬんの関係よりも、そもそも社会人として人の迷惑になる行為を働く輩というだけで止める理由としては十分な気がする。

ジョーカーが彼の前に立つと、ナカノマツのシャドウはゆっくりと顔を上げ、私たちを視認した。

「なんだ、おまえら」

「ストーリーカーしてるっていうのはあんたね？」

「ストーリーカー？僕が？」

「タレコミがあったんだよ。ご丁寧にも名前までさらされてあつたぜ？ナカノマツさんよ」

「あの、女…!!余計なことしやがってっ!!」

大人しそうな外見とは裏腹に、急に思い出したかのように顔を醜く歪ませ声も荒げ始めるナカノマツ。どうやらこいつで間違いはないようだ。

「あの女は俺の物だ！俺がなにしたってお前らに関係ないだろ!」

「そもそもあんたの物なんかじゃないし、人に迷惑かけてるんだから止められて当然でしよー!」

「うるさいうるさいうるさいっ！俺だつて散々物扱いされてきたんだ!」

「自分がやられたからつて、人にしていい理由にはなんねえだろ!」

「俺より悪い奴はたくさんいるだろ!?!そうだ、あの男…俺を散々物扱いした、マダラメはいいのかよっ!?!」

口論の中で、ナカノマツのシャドウはそんな言葉を口走った。一瞬みんなは顔を見合わせるが、その隙についてシャドウは人の形を捨てて異形へと変化した。

「来るぞオマエラ！構えろ！」

変異したと同時に、アルセーヌの扱うような赤黒いエネルギーを纏いながら正面に立つジョーカーに殴りかかってきた。が、それはあっさり躲かれて代わりにアルセーヌの蹴りをカウンターで喰らうことになる。

後ろ向きにゴロゴロと転がりながら壁に激突し、追撃の呪怨を浴びる。

「…む」

「物理には強いらしいな。魔法で攻めるぞー！」

派手な音がしたが、どうやらそこまでのダメージでは無かったらしい。

それならばと立ち上がる前に各々のペルソナの持つ属性攻撃で一斉に攻め立てる。その中で、スカルのキッドが放った電撃が一番効果が出た。派手に転び、感電して上手く立ち上がれずにいる。

その後の顛末は察しの通り。倒れた相手への総攻撃で、ナカノマツを黙らせることに成功した。その間、私はのんびり見てるだけだったけど。

パンサーは倒れ込むナカノマツに対してぐっと押しより、力強く説教を垂れている。ナカノマツも反省したようで、さつきまでの威勢は消え失せ、すっかりしよんぼりしてしまっている。

「す、すまなかつた…。僕は一体なんてことを…」

「分かればいい」

「もう彼女には関わらない。約束するよ……。ただ、もう一つ……君たちが本当に正義の怪盗だというのなら、改心させてほしい奴がいる……」

「聞いておこう」

「マダラメだ……。あの男は、僕なんかの比じゃない！人を家畜同然に見下している外道だ。僕も散々コケにされてきたんだ……きつと……今でもまだ……」

「分かった。覚えておく」

その言葉を最後に、ジョーカー達に見送られながらシャドウは消えていった。後には何かを残していったようだが、それはジョーカーが報酬として頂いておくらしい。

そして静寂だけが残った場所で、三人と一匹はナカノマツの残した言葉について議論を重ねていた。マダラメなんて苗字はそう多くないし、聞いたことや見たことがあれば間違いなく記憶には残るだろう。しかしここにいるメンバーの誰一人として、その名前に心当たりはなかったようだ。

無論私は知っているが、別にここで教えなくたって後々明らかになること。余計な口出しはしないことにした。

「その話はあとだ。今は先に進もう」

と、話を切り上げたのはモナで、手慣れたように車の姿へ変身するとクラクションを

連打して乗車を催促してきた。もちろん、ただのクラクションではなくネコっぽい音だった。

言われた通りに、さつきと同じ席順で車へ乗ったところで、ジョーカーが疑問を呈した。

「どこにいけばいい」

「下に向かつてくれ。理由は後で話す」

モナの指示通り、ジョーカーは車を走らせる。一応アクセルなりブレーキなり操縦できる装置は一通りあるけど、どうやらモナ自身の意思で勝手に走ることも可能らしい。

ただ、その場合それなりに体力を使うらしく、本人曰く全力疾走し続けているのとはぼ変わらないらしい。だからといってアクセルを踏まれることにより体力を消耗しないというのも原理は謎のままな気はする。

そんなことを考えながら座席の横を撫でさすっていると、スカルトとパンサーはまた私のコードネームについて考えだした。しかし、どれもピンとこずああでもないこうでもない、頭を悩ませていた。

他のメンバーは割と個性的な格好だったのもあって割とすぐ決まったり、予め自分で用意してたりしたおかげで、ここまでは悩むようなことにはならなかったんだけどなあ。

「なんか、あんまり私服とスタイル変わらないよね」

後部座席から顔をのぞかせて、パンサーがそんなことを言う。

「楽だしいいよ」

楽だという意見にスカルは激しく同意した。このスタイルが主なのは昔からそうで、出かけるのに着ていく服をいちいち悩むのが面倒だったからというのと、個人的にスカートは似合わないと分かっているからでもある。学校の制服は致し方ないが。

「綺麗って線細いしパンツが似合うのは分かる。でも、スカートが似合わないことは無いと思うよ?」

「制服ですら似合っていないでしょ」

「んなことねえと思うけどなあ…って、なんの話だっけ?」

「…あれ?なんだったっけ?」

「ついたぞオマエラー」

話が脱線し始めた頃、そう時間もかからないうちに車は目的地へと到着した。そこは地下鉄のホームのような場所ではあるものの、メンテナンス特有の禍々しさが歪に混入しているせいで見慣れたような感覚には全くならなかった。

そして、そのホームからはさらに下に続くエスカレーターが伸びていた。動いてはいないけれど。

「やっぱり開いてるか」

「どういふことだ？」

「ワガハイは前にもここに来たことがある。だが、その時にはこの場所に道なんて無かった」

「じゃあどうして…」

「ここは大衆みんなの認知世界。おそろくだが、ワガハイ達がカモシダを改心させたことで、大衆へ怪盗団の存在が少し認知されたから、奥へ進めるようになってるん…だと思っ」

「相変わらず肝心なところふわつとしてんなあ。でも、なるほどな。大物を改心させてけば、世直しもできるしモナの記憶を探すことにも繋がるってわけだな」

「そういうことだ」

モナは偉そうにふんぞり返り、スカルは納得したように頷く。

そもそも、モナは認知世界で目が覚めてからそれより以前の記憶を失っている。ただ、漠然と認知世界を調べれば自分のルーツを知ることには繋がると直感しているため、メモントスやパレスを単独で調査していたらしい。

私たちはそれに協力しながら、悪人を改心させていくことで世直しも図ろう…というのが、当面の目的になる。

「まあ今日はここまで引き返そう。付き合わせて悪かったな」

「先へは行かないのか？」

「行つてもいいが、別に急ぐ必要はない。それに、なんだかさつきから嫌な気配がする」
「嫌な気配？」

「言い忘れてたが、メメントスには一体、とんでもなく強いシャドウがいる。そいつに出くわしたら終わりだと思つた方がいいレベルだな」

「ちよつそれ一番大事なやつじゃん！」

「というわけで、さつきと帰るぞ！オマエラー！」

ボン、というふざけた効果音とともに煙が巻き起こり、謎の原理でモナ車が現れる。みんなそそくさとそれに乗り込み、来た道を引き返し始めた。

事情は完全には呑み込めずともひとまずは同意して乗車したパンサーやスカルも、時間が経つにつれて嫌な気配を感じ始めたようで、少し顔色を悪くしていた。

私はというと、その嫌な気配に違和感を感じていた。モナが危惧しているのは、メメントスに長時間滞在し続けると現れる『刈り取るもの』のことだろう。確かにあいつはゲームでも屈指の強さを誇る強敵だ。

そんな刈り取るものの特徴として、ボロボロで薄汚れたコートに鎖を巻き付けた姿がある。そのため、奴が近づけば鎖の擦れる音で気付くことができる。

今はまだ、そんな音はしない。なのに、じつとりと湿った嫌な気配だけが近づいてくるのが伝わってくる。

いつ何が起こつてもいいように、身体の上に置いたナイフの柄を強く握りしめる。もしその時が来たら、皆を守るのは私の役目であり、義務でもある。

ゲームではこの段階でこんなハプニングは起きなかつた。この変化は私がいることによつてもたらされたものである可能性が高い。

「ねえジョーカー、なんか後ろから」

「わかつてる」

パンサーの声よりも先にその存在に気が付いていたジョーカーは、即座にアクセルを全開にして背後から猛烈に追いつがつてくるそれから距離を離そうとする。

「駄目、止まって」

「なに？」

「前にもいる」

私が言うが早いか、速度を落とさないまま直角のコーナーを曲がった先で、私たちの眼前に巨大な銃口が突きつけられた。

ガラスの割れるような音と共に銃口から光が溢れ、ジョーカーは寸でのところまでハンドルを切つてなんとか回避しようと試みた。

結果直撃は免れたものの、常識はずれな威力の衝撃波によってモナ車ごと私たちは一斉に広い線路上に投げ出される羽目になった。

「モナっ!？」

「ワガハイなら大丈夫だ!だが、これはまずいぞ……!」

「どうする!?!逃げんのか!?!」

各々ふらふらと立ち上がり、正面に立つそれを見据えたままじりじりと後退していく。今からモナに変身してもらって全力で逃げるのもいいが、背を向けた瞬間に取り返しつかないことになりそうだ。

だがここでにらみ合っているだけでもどうしようもなく、さらには背後からもう一体近づいてきている。さっきまではしなかった、鎖の音を響かせて。

一歩間違えれば即ゲームオーバーになりかねない危険な状態だ。ゆらゆらと宙に浮かびながらこちらに近寄ってくるそれは、両手に長い銃身を湛えた銃を持ち、薄汚れた装束に鎖を身に着けている。頭は安っぽいホラー映画にでも出てきそうな、片目だけ空いた……もしくは破れた仮面をつけていて、その向こうから血走った狂気を感じさせる眼球が覗いていた。

紛れもなく、こいつは刈り取るもの。今のジョーカー達で、太刀打ちできる相手ではない。

睨み合いながら仕掛けるタイミングを見計らっていると、刈り取るものは意思を感じさせない緩慢な動きで、その銃口を真上に向け引き金を引こうとした。

「Charra！」

何をしようとしているのかは理解できなかったが、黙ってみていてもろくなことにはならなそうだった。

私はCharraを刈り取るものの頭上に召喚し、そのナイフを頭部目掛けて振り下ろした。

人間の何倍もある体躯を持つ刈り取るものに対して、私が召喚したもう一人の自分の姿はあまりにも小さく幼い。

それでも、わたしが突き刺したナイフは深々と頭部に突き刺さり、刈り取るものは動きを止めた。

Charraは別の世界の私そのものであり、ペルソナでは無い。魔法なんてものは扱えないし、これといって特別な能力も無い。

あるのは、魂に宿る決意の力だけ。

決意とは、意志の力。この世界では、その影響がより色濃く反映される。そしてわたしの決意は、並のそれとは比較にならない。その力を得ることになった経緯は、決して誇れるものじゃない。むしろ、血と泥に塗れた忌避すべき過去だ。

それでも、今はこの力を振るう。自分のためだけじゃなく、人のために使うのだと、言い訳して。

真つ赤に染まったナイフをCharaが引き抜き、刈り取るものは一撃で消滅した。この程度の敵でも、まだ一撃以上は耐えないか。

心底、忌々しい力だ。

「来、い」

そうは思いつつも、こうやって外敵をねじ伏せる感覚だけは嫌いになれない。

Charaを自分の中へ呼び戻し、限界まで『決意』を高める。

薄暗い線路の奥、まだ比較的遠くにもう一体の刈り取るものがある。恨みはないが、少し今の力でどこまでやれるかを試させてもらおう。

ジョーカーに比べれば、私のできることのバリエーションは非常に少ない。武器は自分のナイフ一本だし、それはペルソナとして呼び出すCharaの姿でも同じこと。

後は、こちらの世界へきて無意識のうちに習得した、『決意を形に変える』術。

認知世界の仕組みが作用しているのか、鴨志田のパレスでもそうしたように、「相手を傷つける」というイメージを練り決意を混ぜて刃とする。

全身の血が沸き立ち視界の隅まで朱く染まった頃、指を一度鳴らす。

すると、私の周囲に顕現した赤いナイフの形をしたそれらが一斉に狙った方向へと飛

んでいく。

その一本一本が、致死の一撃だ。

風切り音とともに高速で飛来するナイフに対し、刈り取るものは今までの緩慢な動きがウソのような機敏さで銃口を向けて引き金を引いた。遠くからまたガラスの割れるような音が響き、刈り取るものの正面に半円状のバリアのようなものが張られた。このタイミングでそれを行ったということは、反射魔法の類だろう。

しかしその壁に触れたナイフは速度を落とすことなく、本体に向けて直進し続け、その体にくっつもの風穴を開けた。直後、破裂したように刈り取るものの身体は霧散し、後にはメモントスに吹く生ぬるい風の音だけが残った。

「すい…」

「なんとかなった…のか?」

「とつくにね」

呆然とするみんなの頬を叩き、今度こそ車へと変身したモナ車へと乗り込む。

発進してからしばらくは無言の時間が続いたが、時間が経つにつれて安心してきたのか徐々に口数は回復していった。確かにまだ覚醒して日も浅い内に刈り取るものを間近で見れば驚きもするだろう。

「にしても、ツマキの力もスゲーなあ! ジョーカーと言いいいこいつといい、ワガハイやつば

持つてるよなあ〜！」

「怪盗団のリーサルウエポンだな」

「あ、いいじゃんそれ！戦略のジョーカーと、実力行使のリーサル。これでどう？」

「それ褒めてる？」

「もちろん！スカルもいいと思わない？」

「リー猿…つてなんだ？」

「リーサルは致死、致命的な〜とかつて意味。でも映画とかの影響で、必殺の〜とか、とどめの〜とかつて意味でも使われたりはするね」

「お〜」

「…なにその気の抜けた相槌」

「まあいいんじゃない？意味とかはよく分かんねえケド、なんかびつたりな感じはするし〜」

「殺傷武器の異名がびつたりなのは、どう反応すればいいの？」

「賞賛として受け取っておけ」

「運転しながら、くつくつと笑いジョーカーがそんなことを言う。そんなに嬉しくないぞ、その賞賛。」

5月14日 土曜日 放課後：

暇でしかなかった一週間の疲れを逃がすようにひとつ伸びをして、うなだれる杏とスマホを覗いている雨宮をなんとなく後ろから眺めている。

とてもテスト終わりの高校生らしい、色々な感情が入り乱れたオーラが出ていた。雨宮からはそこそこ自信に溢れたオーラ。そして杏からは。

「アン殿、少しくらい勉強ができなくなっちゃってワガハイ…」

「うっさい！別に勉強できないわけじゃないから！」

机に突っ伏していた杏はバツと頭を上げ、後ろにむかって鋭く指摘した。しかし周りから見れば、何も言っていない雨宮に対して急に杏がキレたみたいになって一瞬いやに目立っておいでだった。だから学校では喋るなどモルガナにはあれほど言っておいたのに。

呆れつつ、私も一応杏にフォローは入れてみる。

「まあ、赤点じゃなきゃみんな一緒でしょ」

「そ、そうだよね！」

「いや、一緒ではないと思うぞ…」

たわいもない会話を交わしていると、全員のスマホが一斉に震えた。見ると、怪盗団のグループチャットに坂本からの着信が入ってきていた。

R y u j i : 終わったわ

R e n : 終わったな

A n : いきなりなに

R y u j i : 例のモデルの件、どうすんだ

A n : うーん…

∨ とりあえず行ってみる

R y u j i : マジ？あいつ結構ヤバイぞ

R e n : 悪い奴には見えなかった

A n : うん。それに、もしかしたらマダラメのことを探るチャンスかも知れないしね

∨ そういうこと

A n : 綺羅が行くならもちろんわたしも行くよ。一人で行かせるのは心配だしね

R e n : みんなで行けばいい

R y u j i : 賛成

A n : せっかくチケット貰ったし、明後日の個展見に行ってみない？そこで喜多川君

と話できるだろうし

R e n : 了解

R y u j i : OK!

R y u j i : ところで

R y u j i : テストどうだった？

A n : 竜司は？

R y u j i : 聞くなよ

R e n : そこそこ自信あり

∨ 適當

R y u j i : うわ。絶対しれつと高得点とってるやつ of 反応

A n : 現実逃避してないで今からでも勉強したら？

R e n : 杏は？

A n : え？

R y u j i : テスト、どうだったんだよ

・ ・ ・

・ ・

翌日：5月15日 日曜日

世間にとつては華の日曜日。多くの人々が学校や仕事を休んでいるはずのこの日に、何故か仮暮らしさせてもらっているこの喫茶は閑古鳥が鳴いている。

「うるせえよ。そう思うなら客引きでもして来い」

そう言って、佐倉さんは煙草をふかしながら新聞を開く。そういうところが原因だとは思っているのだが、無駄に繁盛してしまってもそれはそれで困るから、実際はこのままが正しいというのが本音。

たまに佐倉さんをはらかいながら、休日は基本私もルブランのカウンターに立って仕事をしている。給料は無いが、その代わりにここに住まわせてもらっているんだから文句など言えるわけがない。そんな私を尻目に、雨宮は今日もせつせとどこかへ出かけて

いった。まったくもって良い身分である。

カウンターの下でスマホを弄りながらテレビの音声に耳を傾けていると、ドアの前にすらりとした影が伸びた。開かれた扉の先には、いかにも高級そうなスーツを着込んだ美人な女性が立っていた。見覚えありまくりなその顔に思わず見つめてしまったが、相手も同じように少しの間私の顔を見て固まっていた。

「…いらつしやい」

「え、ええ。どうも…」

ぎこちなく挨拶をかわす二人を視界から外して、とりあえず水を出す用意をしようとコップを取り出す。

「…バイト、二人もいるんですね」

「まあな」

「…」

「ご注文は？」

「…ブレンドで」

「あいよ」

適当な量を注ぎ水を出す。なんだか急にピリピリとした店内にコップとテーブルが触れる音がする。

「どうぞ」

「…あなた、どこかで会わなかったかしら？」

そう言つて、目の前の美人は私のほうをまじまじと眺めだした。

そう言われて私がピンと来るはずはない。なぜなら私にとつて、彼女もゲームの中で登場した人物という認識でしかないからだ。もしかして本当に過去に会つていたとしても、そんな思い出は私には思い当たらない。

彼女の名は、新島にいしま 冴さえ。若くして検事として活躍している敏腕のキャリアウーマン

だ。佐倉さんとも前から面識はあつたようで、ゲームではそれなりに重要な立ち位置にある。

「あなたもしかして、妻木さんじゃないかしら？」

佐倉さんがコーヒーを淹れている間ずつと考えていた冴が、急にそんなことを言う。正解なんだけど、なんで知つているのかこつちは分かつていないだけにただただ不気味だ。ここで素直に「はいそうです」と答えて良いモノかも見当がつかない。

私は一瞬答えを保留し、冴の顔を見て思い出すふりをしながら考える。私はこの人と、出会つたことがあつただろうか？

新島冴はそう長くはないが検事として働いている。仕事関係の場で会つたとするならば…心当たりは一つある。だが、そうか…あの時向こうにいたのは、冴さんだったの

かな…。

あの時はまだペルソナなんて言葉も知らない時期だ。顔を見ただけじゃ印象には残らないだろうし、そもそもあの時の私はずっと俯いていた気がするし。

「いえ、多分人違いです」

「あら？ そうかしら…」

「名前については個人情報なので、すいません」

もし私の心当たりが的を射ていたのなら、これ以上この話を掘り下げたくない。私がある人であると知られても、ここに住み込んでいることがバレたりなんかしたら間違はなく面倒なことになる。私にとつても今はもういない両親にとつても。

冴は申し訳なさそうにして引き下がったが、その怪訝そうな目は相変わらず私のほうへと向けられていた。

そしてとても接客をするものとは思えないしかめっ面で間に割り入った佐倉さんがコーヒーを出して、ようやくその視線は逸らされる。

やはりこの人の出すこの厳格な雰囲気はそこに居るだけで疲れるな。

『…ですが相変わらず、警察は事件の足取りを詳細には追えていないというのが現状ですよね？』

ぼつぼつと交わした会話が途切れてもともと重い空気はさらに重くなる。少しでも

気を紛らわそうとテレビの音量を上げて視線をそっちへやる。

「ここは大丈夫なんですか？」

「何のことだ？」

「最近色々物騒じゃないですか。そのせいで余計に客足も遠のいてるんじゃないですか？」

「余計なお世話だよ」

ぶつきらぼうに答える佐倉さんと、落ち着いた様子でうつすら笑みを浮かべる冴。当たり前だが二人の会話をよそにテレビの中では議論が進んでいく。

議題はもちろん、精神暴走事件と鴨志田の事件の関連性についてだ。コメンテーター数人とアナウンサー、そしてその中には、『二代目探偵王子』として名高い明智あけち 吾郎ごろうもいた。

『僕は、今回の秀尽学園での事件と精神暴走事件には、何かしらの関連があるとみています。どちらも、人の急な心変わりが原因で起きた騒動ですし、その豹変ぶりもよく似ている』

多少容姿が優れていることと、高校生という若さで現役探偵ということが話題を呼んでいる明智だが、実のところ今こいつが解説もどきを行っている精神暴走事件はこいつが引き起こしているものである。

そして、表に出ていないだけで既に多くの人間が「廃人化」させられてきているはずだ。全ては明智の計画と、その上に立つ真の黒幕の思惑のせいだ。

こいつも早めに止めておくべきなのかもしれない。しかし現時点では、こいつに接触するための術を持たない。何か考えないと。

「あなた、彼についてどう思う？」

「私？」

「そう。あなた」

ふと、冴が私にそんなことを聞いてきた。探りを入れるような視線と心の中に踏み入ってくるような声色は、少なくともまだ犯罪は犯していないのに尋問でもされているかのような気分させられる。見た目はキレイだけど、なんでもないとこで仕事の癖が出ちゃうのが玉に瑕なのかもしれない。もしくは、本当に何か探られているのかな。

「別に何も」

「そう？興味深そうに彼を見ていたから」

「しいて言えば、話し方がムカつきます」

「ほう。珍しく意見が合ったな」

適当に言っただけなんだから乗っからないでほしい。

「ご馳走様でした。また来ます。元気そうでしたわ」

「どうも」

最後に意味ありげな言葉をつぶやいて冴はお代を置いてルブランを後にした。

一気に張り詰めていた空気が緩んだような気になって思わずため息をつく。横をみれば、佐倉さんも同じように深く息を吐いていた。お互い思うところは同じだったようだ。

気疲れた反動で忘れただけか、それとも気遣ってあえて言及しなかったのかは分からないけど、冴が私のことを知っているかもしれないことに関しては何も言われなかった。おそらく後者であることは察しつつ、その心遣いに甘えて私はさつき起きたことを記憶の隅に追いやった。

.....

翌日：5月16日 月曜日 放課後：

テスト終わりの余韻も抜けぬまま迎えた月曜日の放課後。もうすでに試験にはどんな問題が出たかも忘れ去ってしまった私の脳みそは、次に改心させることになる斑目のことだけを考えていた。斑目の事を改心させることになるのは確定事項だが、その前に一つ私には気になることがあった。

私の記憶では、斑目は改心する直前に『黒い仮面』について言及していた。

だからもしかしたら、その黒い仮面の正体である男も斑目のパレスに来ていたのかも知れない。斑目を廃人化させる必要は黒幕側に無い以上、何か別の目的があったのか。

とにかく、斑目のパレスに張っていればもしかすると明智と鉢合えるかもということだ。

「そしてこれが、先生が二月もかけて作り上げた作品だ」

「なんか、不思議な感じ。個展って言うのと、その人の特徴とか癖がある程度わかるイメージだったんだけど、斑目さんの絵はどれも全然違って見えるっていうか」

問題は会えたところで何をどうするかということだ。明智は既に心を壊しているだろうから、生半な説得なんて耳を貸さないだろう。力づくで言うことを聞かせるのも

やぶさかではないが、もつといい方法がある気がする。できない限り暴力は避けて…。

「そうなんだ！そこが先生の凄いとところで…」

「ねえ、綺羅は今まで見てきた中だとどれが好き？」

「丘の上の花畑とか、良いんじゃないかな」

「ああ。あれも良い絵だ。妻木さんも物を見る目がある」

となると少しリスキーではあるが、二重スパイをやってみるのも良いかもしれない。私自身の危険性を引き合いに出せば、そう難しいことではない気がする。

時が来るまで、私も明智に協力する形で動き奴を引き留めるチャンスがあれば良い。

それはそうと、さつきから現実と脳内で意識が完全に断裂していて、ちゃんと会話になつていたのか不安なところだ。無意識下でヘンなことを言っていなかっただろうか。

「ふう。とりあえずこれで一周したね」

「二人とも、今日は来てくれてありがとう。もしよければ、今度先生のアトリエまで来てくれないか？ここがその住所だ」

どうやら私の知らないうちに個展会場を全て見て回れたらしい。ぼーつとしていただけだから何も記憶には残らなかったが、斑目が盗作を行っている事実に変わりはない

ことが確認できただけでも良かったか。

ここに在る絵は全て、斑目本人ではなくその弟子たちが描いた絵。それをさも自分が描いたかのように公言し、あまつさえその弟子たちにはなんの取り分も渡さない。立派な盗作爺のままでむしろ安心さえした。

ここに来た時実際に斑目と話したが、杏はその様子から見て本当にメモントスで聞いたマダラメが、あの斑目なのか判断しかねていた。鴨志田の時もそうだったが、どうしてこうも悪人は外面だけは取り繕えるんだろう。

「綺羅はどう思う？ わたしはそんな悪い人には見えなかったけど」

「黒だろうね。あの中に斑目が描いた絵は一つもないんじゃない」

「確かに、画風はこれでもかかってぐらいバラバラだったね」

「手っ取り早く確かめるならパレスがあるかを確かめてみよう。今度、アトリエに行つたときにでもさ」

「そうだね…。って、竜司と蓮は!? なんで先にどっか行ってんのよ…!」

知らないうちに兩宮のことも下の名前呼びになっている杏。兩宮、しよつちゆう出かけてると思つたら、杏とどっか行つてたのかな？

翌日：5月17日 火曜日 放課後：

雨宮達は怪チャンの管理人であるクラスメイト「三島」のツテを頼り、マダラメについて書き込みを行ったであろう本人に、直接コンタクトをとることにしたらしい。改心は人そのものを変えるような行為である以上、実行に踏み入るのに慎重になるのは当然の事である。

私はそっちの役目は三人と一匹に任せ、一人で斑目のアトリエまでやってきていた。用があるのはこつちじゃなく認知世界の方なので、さっさとアプリを起動して「美術館」へと移動する。

空間が歪み、次に周囲の景色がはつきりした時にはもう、目の前には豪華絢爛な美術館へと姿を変えた斑目のアトリエが立っていた。

認知存在の人間たちが列に並び、会場に入れるのを今か今かと待ちわびている脇を通り抜け、人目につかない場所から塀を乗り越えて敷地の中に忍び込んだ。

もし明智がここに来るならどうい道を通るか。そのことを考えながら道筋を導き出していく。

ゲームでは、ジョーカー達が初めてここに来た時に天窓からロープを下ろして内部へと忍び込んだけど、あれと同じルートを明智が取るはずもない。そもそも本当に明智がここへ来ていたのならば、何が目的でここに来たのかを考える必要がある。

明智は黒幕の手先として、邪魔者を廃人化させて闇へ葬ることが任務のはず。しかし、斑目が黒幕の目的に直接関与はしていない以上、廃人化が目的ではないのは明らか。もしかすると、斑目のシャドウは明智の事を知っていたが、直接目で見たわけではないのかも知れない。

もう一人、明智の事を知っていたパレスの主がいる。そいつは裏社会にズブズブだったとはいえ、やはり黒幕との直接的なかかわりは薄いように思える。

広すぎる日本庭園を思わせる敷地の壁によりかかり、もう少しこの静かな場所を考えてみる。

そもそも明智はどうやって、これまで廃人化を起こしてきたのか。力を得ることになったのは今から約2年前のはず。

それを使ってパレスかメモントスに侵入し、廃人化させたい人間のシャドウを殺害すれば事件は起こせる。

多くの人間がもつ歪みはたかが知れている。強く心を歪ませても、基本的にはメモントス内でシャドウが生まれる程度。

しかしそんな中で、ごくまれに人よりも大きく認知を歪ませ、心を壊してしまったものが現れ、それらは集合的無意識そのものであるメモントスという枠組みから外れ、自分だけの宮殿^{パレス}を生み出してしまふ。

要するにパレス自体が結構珍しいものということ。だったら、明智は普段メモントスで活動していることの方が多いいんじゃないだろうか。こんな野望に関係ない爺のパレスに、用もないのにわざわざ足を運ぶ可能性は低い。

だったら何故斑目はあの時、黒い仮面について聞いてきたのか。

それはさっきの話に繋がるのかもしれない。明智は基本メモントスでシャドウを殺して回っている。現実の人間に直接影響が及ぶシャドウに対しても見境なく。

そんな明智の所業は現実にはもちろん知られることは無い。

だけど、認知世界の中でなら広く知られていてもおかしくはない。ましてメモントスは全ての人間の集合的無意識。そこでお構いなしに殺戮を繰り返す明智のことが知れば、認知世界内のシャドウには共通認識として黒い仮面イコール危険という認知が共有されるといふ可能性。

無くはない気はする。シャドウの知り得たことは現実の本人には知り得ない以上、明智にとつて認知世界の中で自分の存在が広まることにデメリットはないと考えるかもしれない。例えば、私たちの様にメモントスの上層で足止めを食らうこともないし、余

計な雑魚は近寄っても来ないだろう。

ということとは、ここでこうして待っているのには全くもって意味がないということになるな。

そう思い至りさつさとこの場を後にしようとした。けど、静かで近くにシャドウもないこの場所はやけに心を落ち着かせた。もう少しここで空を眺めるのも良いかもしれない。

パレスは基本的に歪みの生じている場所以外は現実とほぼ変わらない景色が続くものだ。斑目の場合は、自らの弟子を奴隷のようにこき使っていたアトリエを自分の作品だけで飾られた美術館であると認知しているせいで、閑静な住宅街に突然超巨大で金びかな建物が出っ立っている構成になっている。

しかも自分以外はいつでもいいということの表れか、輝かしくライトアップされた美術館の周囲は一切の明かりがなく、永遠の夜が続いている。

そんな夜特有の独特な静けさも相まって、意外とこの場所は頭を空っぽにするのに適している。近いうち崩壊させるのがもつたいたいないくらいだ。

しばらく張りぼての夜空を眺めてぼーっとした後、満足した私は敷地から抜け出し、れつとパレスから現実へと帰還した。

成果は何も得られなかったけど無駄では無かった。今度はメモントスで張ってみよ

う。

「妻木さん？」

スマホ片手に斑目のアトリエ前を通り過ぎようとした時、自分を呼び止める声がかかった。そちらを振り向くと、凜としたたたずまいで不思議そうに首をかしげる喜多川がいた。

「どうしてここに？」

「暇だったから、来てみた」

「そうか。なら、少し時間をくれないだろうか」

「いいけど……」

「一目見たときからずっと、ゆっくり話したいと思っていた。立ち話もなんだ。アトリエの中に入らないか？」

招かれるまま、斑目のアトリエである質素なあばら家の中にお邪魔させてもらった。パレスの絢爛な様相とは内装も外装もまったくの真逆である。

その中の喜多川が普段使っているらしい部屋に案内され、適当な椅子に腰かける。部

「屋の中はどこをみても画材だらけで、ところどころ絵の具がついたりしている。

「話したいことって？」

「単刀直入に言う。あなたは、何者なんだ？」

「…何者って言われても、ただの一般人なだけだ」

「妻木さんを初めて見たとき、目を惹かれて仕方がなかった。人ごみの中で、唯一妻木さんだけが浮かんで見えたんだ。この世のものでは無いとすら思った」

「そこまで…？」

「現世に生きる人には見えなかった。そこに確かに存在しているのに、妻木さんだけは額縁の中の絵画の様に映ったんだ」

「それで、モデルをお願いしてきた」

「そうだ。だが描くに当たって、そのオーラの正体を少しでも掴んでおきたい」

まだ知り合って間もない仲の相手に「この世のものじゃない」なんて言われたのはさすがに初めての体験だった。そんなことを言えるのは喜多川ぐらいのものだろうし、案外その言葉は的を射ているのかもしれないのだから恐ろしい。真贋を見抜くというのはこういうことか。

確かにわたしはこの世のものではないものを心に宿している。でもそれを説明しろというのも難しい話だ。

「妻木さんの過去を語ってみてくれるか。そこから何か掴めるかもしれない」

「それはもつと難しい。話したくない」

「そうか。それは…悪いことを聞いた」

その後、何言かぶつぶつと呟いた後、顎に手を当て完全に自分思考の中に入り込んでしまった喜多川をまじまじと観察していると、こちらの視線に気づいてはつと顔を上げた。

「すまない。考え耽っていた」

「ううん。こつちこそ、あまり有益なことは話は出来なかったし」

「いや、そうでもない。むしろ、この感覚を絵に表すことができるのか…いい目標が出来た」

自分の中で結論は出たのか、喜多川は満足げな表情をしていた。

相変わらずマイペースなやつだと思いつながら足を組み、今度はこつちが訊きたかったことを口にしてみた。

「そういえば、モデルって具体的にはどういうもの？」

「どういうもの、とは」

「脱いだりするの？」

「ああ」

「いいいど〜」

「そうなるな」

こいつ、自分でこう言ってる間はその言葉の意味を全く理解してないんだろうなと呆れながら、やはりそうなるのかとやや諦め気味に頬を搔く。

恥じらいがある訳じゃなく、身体の傷は他人には決して見せないようにしてきたことに対する諦めだ。喜多川はこれで義理堅い奴だし、口止めしておけば易々と他人に口外したりはしないだろう。

「分かったよ」

「いいのか!？」

「駄目だと思ってたの?」

「いや、自分で言っておいてなんだが、無理して脱がなくても」

そんなことを気にする素振りをさっきのやり取りで全く見せてこなかったくせに、今更何を怖気づいているんだこの男は。感情が表に出ないなんてレベルじゃないぞ。

「何かするわけじゃなければ、別にどうでも」

「随分、豪気だな」

「ただまあ、覚悟はしておいてね」

「覚悟?」

「多少刺激の強いものを見せることになるからさ」

.....

翌日：5月18日 水曜日

テレビでは相も変わらず連日同じニュースを取り上げ、同じような顔ぶれが同じようなことをしやべり続けている。現役高校生であるはずの明智吾郎もその例外ではない。毎朝毎朝、ルブランのコーヒーを飲みながら鼻につくあの声を聞かなくてはならないわけだ。

怪盗団については次の動きを待つ姿勢でいるらしいけど……そのうちこつちから会い

に行つてやろう。

「最近学校はどうなんだ？」

「なんとかやってます」

「そうか。まあその調子で大人しくしてろよ」

「噂は減らないけどな」

「ん？相変わらずよくしゃべる猫だな。飯ならもう食つただろ。おやつか？」

「ゴシユジン！ワガハイはただのネコじゃないぞ！」

「違うのか？んー」

「ワガハイはネコではない」って言ってます」

「はあ？」

素っ頓狂な顔で答える惣治郎いつものポーカーフェイスで平然とモルガナ語を翻訳して伝える雨宮に挟まれながら、バターを塗ったトーストを頬張る。

さつくりとした感触を楽しみつつ、今度は自分で淹れたコーヒーを一口含む。悪くはないが、やはり本家にはまだまだ届かない。いつかは完全にこの技術をマスターして、いつでもどこでもルブランテイストのコーヒーを飲めるようになりたいものだ。

「綺羅の方はどうなんだ？」

「どうって」

「学校だよ、学校。楽しく過ごさせてるのか？」

「それなりに」

「つたく、愛想ないな二人とも。そんなんじや人間関係蹟くぞ」

「もう蹟いてる」

「右に同じ」

私も雨宮も今更そんなところを突つつかれたところで痛くもかゆくもない。我が強いののは自覚しているし愛想がないのもよく言われる。だがこれが自分だと認めてからはそれを変えてまで作りたい友好関係なんかは今のところないわけで。

まあ、雨宮に関してはもとからこうだったのかは知らないけど。

「最近の若えのはこんなもんなのかね：俺なんかお前らぐらいの頃は」

「づ」馳走様」

「づ」馳走様でした」

朝食を食べ終えた私たちは惣治郎の武勇伝を遠くに聞きながらそそくさと階段を上がったって通学の用意を始める。

「妻木さん」

「ん？」

カバンに必要なものを詰めながら、雨宮が振り返らずに言ってきた。

「今日の放課後、少しだけ時間ある？」

「うん。喜多川の話？」

「それもある。でもみんなが集まる前に、ちょっとお願いがある」

「なんかろくでもない話な気がする」

「メメントスで、俺に稽古をつけてほしい」

「ワガハイが提案してやったのさ」

どや顔の雨宮に私があからさまに嫌な顔をする、窓際で毛づくろいをしていたモルガナが話に割入ってきた。

「前にメメントスでみたオマエの力は凄かったが、ワガハイに言わせればそれより以前に基礎の身体能力が優れている。リーダーのコイツがオマエに遅れをとるわけにはいかないっていうから、だったら本人に特訓してもらえってな」

「ダメか？」

大体通学カバンはいつも同じものが同じ状態で入ってる私には特に入れるものは無く、さっさと背負って雨宮の準備を待つ。

「貸しにしてもいいなら」

「ありがとう、と言っているのか分からないけど。それ、どのぐらい大きな借りになるんだ？」

「さあね」

「これは後々恐ろしい要求が飛んでくるぞ…。なにが来てもいいように、ちゃんと鍛えてもらえよ?」

モルガナが雨宮のカバンに入り準備は万端。私たちは二人そろって屋根裏部屋から階段を下り、惣治郎とあいさつを交わしてルブランを後にした。

もうすっかり慣れた道のりを、いつもと同じ音楽をかけて往く。四茶の駅までは徒歩一分でたどり着くし、その後は乗り換えを除けばほとんど電車で揺られているだけだ。問題はその電車が毎回人がすし詰めになっている満員電車などところだけだ。

慣れてきたとはいえ、また今日もあの中に突撃するのかと思うとやや気が落ちこむ。隣を歩く雨宮はというと、それでもなさそうな顔をしているが。

「ん?どうしたツマキ。コイツの顔になんかついてるか?」

「もうあの満員電車にも慣れたのになって思ってる」

「全然慣れない。本当はバスとかゆっくりに行きたいぐらいだ」
「ワガハイも多分一生慣れないと思う」

そうは言う割に、雨宮はいつも大して表情も変えずおしくらまんじゅう状態の車内で涼しい顔してるとって印象しかない。私と似てあまり表情には出ないタイプなのは知っていたけど、そこはあまり気にしていないものだと思っていた。

「妻木さんはどう?」

「別に何とも」

「だと思っただ」

言いながら改札を通り、予定調和的に絶妙なタイミングでホームに到着した列車にそのまま流れ込む。

最後尾から入ったので、入り口から最も近いドア側に張り付く形となる。ここは全面に囲われる心配はないけれど、乗降の際のごたごたに巻き込まれやすい面倒な位置でもある。

ドアの側面にある縦の手すり側に私が立ち、雨宮はドアの真正面辺りに立つ。これは駅に着くたび毎回一度降りる羽目になるやつだ。

ふと顔を見上げると、車両の天井にぶら下がっている広告の中に件の斑目の個展も載っているのを発見する。

「人気みたいだね。マダラメ」

「そうだな。俺たちが行った日、テレビの取材も来てたし」

「すごい人ごみだったよな。おかげでワガハイ、誰かも知らん肘やら膝で揉まれまくってたぞ」

「書き込みの投稿主に会ったんだよね?」

「ああ。まあその話は、放課後みんなが集まってからしよう」

なんて話しているうちに列車は多くの人が並び待つ駅へと到着しドアが開く。

降りたい人は我先にと車両の奥から出てくる。その邪魔にならないよう、一度列車から降りて全員が降りるのを待つ。かなり多くの人が降りたように感じたのに、見た目では全く変わったようには見えない。それなのに次に乗車しようとする人数はさつきよりも多い。

とりあえず先頭に立つ私たちは出来るだけ奥へ進む。そんなことをせずとも後続から物凄い力で押しやられるけども。

そんなこんなでようやく全員が乗りこめた時、人の隙間を縫って私たちはさつきとは真逆の、入り口から反対側のドア側まで押しやられていた。我ながらこの一瞬だけ液状化でもしたのかと思いたくなる。

と、私と雨宮のすぐそばに座っていたスーツ姿の若そうな男が、ぱつと顔を上げて何やら叫びながら急いでドアから出ていった。当然ドアは開いたり閉まつたり忙しない動きをしていたし、奥に座っていたもんだから色んな人が嫌そうな顔をしながら体をよじらせていた。

「空いたよ。座ったら？」

「いや、妻木さんが座ってくれ」

運よく目の前で席を立ててくれたおかげで一人分誰かが座るスペースが出来た。別に私は立っていることに疲れたりはいらないから雨宮に席を譲ろうとしたら、雨宮の方もとりあえず遠慮してきた。

お前が座れお前が座れと日本人的なやり取りをしているうちに、目を閉じて腕を組んだままの大柄な中年サラリーマンがどこからともなく現れて、やつこらせえと空いた席に座ってしまった。そのまま俯き狸寝入りを決め込んでしまったので、私と雨宮含め周囲の人たちからは苦笑される羽目になった。

「早く座らないから」

「それは妻木さんのほうだろ」

「私はいいよ。これからは雨宮が座って」

「そうはいかない。レディーファーストだ」

「立ったまんまじゃその本も読みづらいでしょ」

「別にこのままでも読める。だから妻木さんが座ってくれ」

「…」

「…」

「え、オマエラもしかして怒ってる？」

放課後…メメントス

「いや、それはおかしい。私は別に満員電車に対して何も思っていないって朝言ったよ」
「そもそもあまり本音は言わないタイプだろ。いい加減建前はいい」

「アノさあオマエラ。ワガハイそろそろその議論止めてもいいんじゃないかって思うんだけど」

「ちよつと待ってて」

もうここまで来たら互いに引き下がれない。

今日一日授業をほっぽり出して話し合った、『通学中電車の席が一つだけ空いた場合どっちが座るか議論』について決着がつくまで、私はこの言葉を止めることは無い。

それは雨宮も同じであり、ああいえばこういう合戦がついには放課後までもつれ込んでしまっている。

約束通り今日はみんなで話し合う前にメメントスへ来たわけだが、この勝負が収束するまでは特訓もお預け。

…と言いたいところだったが、良いことを思いついた。

「じゃあ分かった。特訓がてら、今からちよつと戦おうよ」

「戦う？俺と妻木さんでか？」

「そう。で、負けた方がこれから座るってことで」

「負けたほうなのか。でもその勝負じゃ、正直ツマキが有利すぎないか？」

「もちろん」

私は数歩雨宮から離れてから、振り返って言う。

「雨宮はいつもの武器を使って、私に一回でも当てられたら勝ち。ペルソナでもなんでも使って構わないよ」

「…そつちは？」

「あきらめるまで逃げ切れれば勝ち」

雨宮…いや、ジョーカーは懐から短剣を取り出し、手袋を深くはめ直して不敵に笑う。まるで勝利を確信したかのような余裕の笑み。それを見て私も、自前の無骨なナイフをポケットから取り出してふつと笑う。

「その条件なら俺の勝ちは決まっていそうなものだが」

「どうか」

「…スタートの合図は」

「モナ、適当によろしく」

「いや、やるのはいいけど、怪我しないようにほどほどにしとけよ？いくらペルソナで回復できるからつてあんまり無茶は……」

「はーやーくー」

「じゃあ、ハイ。よーいスタート」

気の抜けた合図とともにコンクリートを蹴る音が一つ響く。

ジョーカーは数メートルの距離を一気に詰めて私の眼前まで肉薄してきた。いきなり身内同士で戦いあうつて話なのに、よくもまあそんなに本気でかかってこれるものだ。よほど私を電車の席に座らせたらしい。

「座るのはそつちだ！」

「いや、ジョーカーだよ」

「あほみたいな理由でなんでここまで出来るんだ、コイツラ……」

あつちはレプリカとはいえここは認知世界。通常のものよりも本物に近い見た目であるせいで、その刃は本物である。つまり当たればただでは済まない凶器なわけだが、ジョーカーは一切の容赦なく全力で振るってくる。私はそれを最低限の動きだけで躲し続け、時折打撃を交えて反撃も差し込む。

流石にこの動機だけでこのやる気が生まれているわけではないだろうが、それにして

も中々一撃一撃が鋭い。まだそんなに戦闘経験もないだろうに。

模擬戦で殺傷能力のある武器を使っている時点で今更とも思うが、ジョーカーは手加減なく顔や首に目掛けてもダガーを振るう。本気でかからないとこの勝負には勝てないという理解しているからこそなんだらう。

目元目掛けて横に薙いできたダガーをナイフで受け、その腕を掴み懐に飛び込む。するとジョーカーがもう片方の手でピストルを抜くのが見えた。

咄嗟に腕を蹴り銃を飛ばしながら、掴んだ腕をそのまま引いて背負い投げのような形で投げ飛ばして距離を取る。床に転がったピストルは、もう手に届く位置にはない。

「ペルソナは使わないの？」

「いいや。使うさ」

そう言いながらもジョーカーは生身で突っ込んでくる。

シャドウに対する攻撃とは違い、相手が人なのを意識してか体の動きは最小限に抑えて細かく連撃を放ってくる。それらすべてを受け流すついでに腕や胴体に対して打撃を当てていく。多少なりともダメージは蓄積しているはずだけど、動きに全く鈍りが見えないしそれどころか精度が上がってきている気すらする。

胸に飛んできた刺突を避けたところに足払いの追撃が来る。あえて避けずに体幹をぐっと固めることで足を止め、下がってきた顔にローキック。クリーンヒットしたよう

に思ったけど、ジョーカーはさほど怯まずにダガーを振り上げてそのまま連撃へとつなげてくる。

「アルセーヌ！」

薙ぎ払ってきたダガーに連なるように、アルセーヌの鋭い鉤爪が襲ってくる。少し打点をずらして、片方を避けようとすればもう片方が当たるような仕掛け方だ。さつきまでのように最低限の動きだけで対処できるようなレベルではなくなってきた。少しでも気を抜けば皮どころか肉ごとごとそりと持っていかれそうだ。

下段、上段を織り交ぜたペルソナとの連携を活かした華麗な連撃を跳ねるように躲し、一見して隙の無いように見える中に僅かなチャンスを見出す。これは元の世界でもやってきたことだから、無意識的に体が動く。

アルセーヌのかかと落としを横に避け、その隙をついたジョーカーの突きを左手で受け流す。

少し前のめりに体制を崩したジョーカーの足に自分の足をひっかけて奥に押しやる。ただでさえ前傾姿勢になっていた所に余計な動きが加わり、ジョーカーの体はゆつくりと前に倒れていく。

地に足を付けていない状態では、防御も攻撃も出来はしない。

背中側に回り込み腕を拘束する形でそのまま地面へと押し倒す。関節のどこに力を

かけてやれば動けなくなるかは身をもって知っているので、いくらジョーカーほどの体格の男だろうと、上に乗った私を振り払うことはできない。実戦ならばここでチエツクメイト。

「っ…すごいな。全然動かないぞ」

「そういう風に固めてるからね」

「どこで知るんだそんな技術。空手でも習ってたのか？」

「空手でこんな風にはならないよ」

後ろ手に拘束されながら、ジョーカーは関心したように感想を漏らしていた。その間もずっと抵抗は止めてないけど、こっちには全く力が伝わってこない。

「じゃあどうやって？」

「自然に、かな」

「…日本育ちだよな？」

「もちろん」

「…学校か？」

「どんな学校だそれ。」

「私の強さはね、生まれ持ったもの。はじめから、こうなるように生まれたから、力を持つてる。こんなものに意味なんて無いようなものだけ」

「…どういう意味だ？」

「分らないだろうね。でも事実なんだよ。私は自分以外を傷つけるために生れた存在だった」

腕に込めた力を弱めてジョーカーを解放してからも、私たちはしばらくそのままの体勢で居た。私から戦うことのなにかを教えるのであれば、そのルーツはある程度知っておいてもらった方がいいと思つた。だから、私は自分のことについて、理解されなくてもいいからだ吐き出した。

「同時に私は、他人が傷つくのを見て面白いつて思えるどうしようもないやつで、喜んでこの力を振るつてた。ジョーカーも、モナも、見たでしょ？あの力」

この世界でも最強格の強さを誇る「刈り取るもの」を、たった一撃で消し去れるあの力。

「でも今の私は、この力が好きじゃない。ジョーカーに、あんな風にまで強くなつてほしいとも思わない。だから、私から教えられるのは基本的な体の動かし方と、戦闘中の意識とか…そんなのだけ。それでもいいなら、この特訓も続けてあげないこともない」

「充分だ。さつきだつて、その『基本的な身のこなし』だけで全部捌かれたんだしな」

「…嬉しそうだね」

思つていた反応と違い不思議に思つた私に対して、ジョーカーはこう答えた。

「そう言ってくれるって思ってたけど、やっぱりうれしいものだ」

「ふうん？」

いつまでもうつ伏せに覆いかぶさったままの体勢でへらへらとしている私たちに呆れたのか、モナが私の背中に飛び乗ってきた。

「いつまでそうやってるつもりだオマエラ！待たされるワガハイの身にもなれっての」

「なら、今日はここまでにして引き上げようか。そろそろ集合の時間だし」

「まったく…今日の本題は特訓じゃない。マダラメの調査に行くんだからな！」

ジョーカーの背中から離れて、頭の上まで登ってきたモナを投げ渡す。

「はいはい。じゃ行こうか。今日は私の勝ちってことで」

「生き物投げんって!?!おいジョーカー、オマエもいつまでもにやけてないで行くぞ!?!」

「…ああ。今はまだ、それでいい」

・
・
・
・
・

『日本画の大家が弟子の作品を盗作している。テレビは表の顔しか報じていない』

『住み込みさせている弟子への扱いは酷く、絵など教えて貰えない』

『虐待など日常茶飯事で、その様子はまるで飼い犬をしつけるかのよう』

『耐えきれず、自ら命を絶つた者もいる』

インターホンを鳴らしてすぐ、喜多川の声が聞こえてくる。

「何か御用でしょうか。先生なら今は不在で…」

「妻木です」

「すぐ行くよ!」

斑目のアトリエということになっているあばら家の中からバタバタと足音が近寄ってきて、勢いよく扉が開け放たれる。

すぐに喜多川と目が合うが、その視線はすぐ私の後ろに控える雨宮や坂本たちに吸い寄せられた。

「お前たちもか」

「わりいけど、今日はモデルの話で来たんじやねえんだ」

喜多川が疑問を呈すると、坂本がスマホの画面を突きつける。そこには、掲示板に書き込まれた斑目のことと予想できるタレコミがでかどかと表示されている。

「こんなウワサ、あんだけど」

「盗作…虐待?」

「ねえ、喜多川君はその、大丈夫なの？」

「……くだらない。そんな事実は存在しない」

「でも、実際個展で現物を見た私は違和感しか感じなかったよ」

喜多川はいちに、斑目への疑惑について真つ向から否定してきた。ここまでは知識通り、問題はここからだ。

ここにいるの中では一番喜多川との接点がある私が、深く踏み込んで揺さぶりをかけて見ることにした。

「斑目一人で描いたものじゃないでしょ？」

「いや、そんなことはない。先生にあらぬ疑いをかけないでもらいたい」

「じゃあ、虐待は？」

「そんなこと、先生がするわけがない！今、住み込みの弟子は俺一人……その俺が言うんだから疑う余地はないだろう？」

「本当に？」

「身寄りのない俺を、ここまで育ててくれたのは先生だ……！恩人を、これ以上愚弄しないでもらえるか……？」

心を見透かすように、雨宮よりも更に高い位置にある喜多川の目を真つ直ぐ見据えて動揺を誘う。答えを知っている私だからこそ、ここまで強気に出れるわけだけど。

喜多川はあくまで、斑目は潔白であるという主張を曲げないつもりらしい。その声は震え、必死に怒りを抑えているようだった。

雨宮はそんな私たちの横から、喜多川に自分の連絡先を提示した。

「俺たちは、もし喜多川が虐げられていたり苦しい思いをしているのなら力になりたいと思っっている」

雨宮の提案を受けてなお食い下がろうとする喜多川の背後から、斑目本人がゆらりと現れた。

「祐介、もうよい」

「で、ですが…」

「悪い噂を聞いて、友人が心配になってきたんだろう。彼らが悪いわけでは無い」

「…」

「まあ、この偏屈な爺が万人に好かれているとは思っておらんよ。じゃが、ご近所の手前もある。ほどほどに、頼めるかね？」

それだけ言つて、斑目はまたあばら家の奥へと消えていった。

喜多川はバツが悪そうに俯いた後、私たちに向けて丁寧に頭を下げた。

「非礼だった。…済まなかった」

「いやまあ、俺らも」

「…そうだ！『あの絵』を見れば、先生を信じてもらえるかもしれない。これが、先生の処女作であり、俺が絵の道を志したきっかけにもなった作品だ」

ポケットからスマホを取り出し、喜多川は1つの絵画の写真を見せてきた。各々それを覗き込み、杏や坂本は感嘆を漏らした。

「キレイ…」

「芸術分かんねえけど、これすげえのは、分かる…」

「『サユリ』だ。高巻さんや妻木さんを見た時、この絵を見た時と同じような衝撃があった。…妻木さんのは、少し種類が違ったが。とにかく、俺はこんな美を追求したい。モデルの件、どうかよろしく頼む」

・
・
・
喜多川本人の言質は取れなかった。だけど、

「あいつが本当のこと隠してんのは間違いないはずなんだよ。現に俺ら、斑目の元弟子から直接聞いてきたんだからな」

「その話、詳しく聞かせて」

「うん。メモントスで改心させた…ナカノマツって人。その人、斑目の元弟子だったの」

「そんでそいつが言うには、盗作も虐待も事実で喜多川の奴も同じ目に遭ってるらしい。斑目は身寄りのない喜多川を利用してやがんだよ。絶対」

「しかも、キタガワの本音も、言伝だがそいつから聴けた。『逃げ出せるものなら逃げ出したい』って言うてたらしいぜ」

「ッらしいッ ばっかりだね。ところで」

私は雨宮のスマホを指さし、

「イセカイナビは？」

みんなの視線をそちらへ誘導した。

音声入力で自動で開かれたナビの画面。そこには、斑目の名前で検索候補が見つかったと表示されている。

「やっぱ、あんのかよ…あの爺さんにも」

「どうする？ レン」

「…行ってみよう。中に入れば、もつとなにか分かるかもしれない。改心させるかどうか決めるのは、それからでも遅くない」

異論は出ず、キーワードを探して斑目のパレスを調査することになった。

元の知識とは若干展開が異なるものの、大まかな流れは大して変わらないはず。この先で、私達は斑目の本性を知ることとなる。

キーワードは、あばら家と美術館。

議論の最中に偶然ヒットした結果、自動でパレスへのナビゲートが開始される。当然みんなは初めて入るから、そびえ立つ巨大な美術館に目を奪われている。

「パレス入るなら言えつて！ワガハイが気付かずに歩いてつてまた敵に捕まったらどうする気だ！」

「や、二本足で歩いた時点で気づけよ……」

「とりあえず、少し中を見てみよう」

先行するジョーカーに続き、美術館の外周を進む。

天窓付きの展示室を発見しそこから侵入。モルガナが用意したロープを括りつけてたらしめてあるから、退路も問題ない。

美術館の中は知識通り、暗めの照明に広い廊下、そして壁一面を覆うような大きさの絵画たち。描かれているのは全て、斑目の元弟子たちの姿だ。それが判明するのは、書き込みを行った元弟子や喜多川の絵もあることに、モナが気づいた時だ。

「なるほどな。弟子は自分の作品ってことか」

もう少し進むとロビーにたどり着き、その部屋の中央に鎮座する像を発見する。

平伏す人間の上に斑目を模した像が立っているデザインだ。もちろん、全身金ピカだ。作品名は、『無限の泉』。タイトルの彫つてある石版の前にパンサーが立ち、その横

に書かれている説明文を読み上げる。

「〃彼らは、斑目館長様が私費を費やして作り上げた作品群である。彼らは、自身のあらゆる着想やアイデアを斑目様に提供しなければならぬ。それが出来ぬ者に、生きる価値無し〃…!?!」

「マジかよ。自殺した弟子も居るって、確かナカノハラも言つてたよな? そういうことだろ、これ!」

「ジョーカー、どうする?」

「リーサルの見聞が聞きたい」

「いいと思うよ。決定で」

「当たり前だろ! 斑目をこんまま放置してたら俺らと、同じになっちまう!」

異論は出ない。心の怪盗団の掟の中に、改心させる相手は全員が賛成できる相手に限る全会一致の決まりがある。ジョーカーは全員の意思を確認した上で、斑目の改心を決定した。

パンサーとスカルは、言い返せない立場を利用して弱者を虐げる大人を許せない気持ちの人が一倍大きい。鴨志田に生徒と教師という上下関係を利用されてきたのがこの二人。

過去の自分と同じように、黙って耐える道を選ぶようとしている喜多川を救いたいとい

う気持ちも大きいんだろう。

ジョーカーも同じだ。モナだって。

「行こうみんな。祐介を助けよう」

「おうよ！リーダー！」

一致団結し、1人の人間を救うために狼煙を上げた怪盗団。そんな輪の中に私という存在が平然と溶け込んでいる。

救いようのないクズでも、努力さえすれば。

“良い奴”になれると、今はまだ思えない。近くに彼らの存在があることによつて、私はより一層自分の存在自体に懐疑的になる。

私はやりとげられるだろうか？

怪盗として活動を続けていくうちに、今までとは違う自分に。

「リーサル」

少し呆然としていた私に、ジョーカーが何かを手渡してきた。その手を見ると、そこにはジョーカーの使うピストルの色違いが握られていた。黒い銃身は照明を反射して、鈍く艶めいている。

「これを託す」

「え？」

「その力のことは、今は深く聞かないでおく。それがリーサルにとって好ましいものじゃないと言ふのなら、無理に振るわないでもいい。手段はひとつじゃないはずだ」

私には、ジョーカーが何を伝えようとしているのか理解しかねた。

…手段はひとつじゃない？

「急に何？」

「スタンドプレイは控えろってこつたよ」

左肩に置かれたスカルの手。スタンドプレイをしているつもりもないんだけど。

「ワガハイ達は怪盗“団”だ。オマエ一人で戦つてるわけじゃない」

もちろん、そんなことは分かっている。

「あの力、リーサルは使わずに済めばいいと思つてるんだろ？」

「そうだね」

確かに、さつきメモメントスでそんなことを言ったかもしれない。でも、確かにこの力は邪悪なものだけど、それを振るう理由は前とは違う。実利を考えれば、使わない手はない。

それが一番効率的。

でも、使わずに済むならそれに越したことはない。それも確かだ。

これは私の力である以前に、憎むべき外の人間の心そのものだ。消しされるものなら

消し去りたいぐらいだ。

「…」

「…来るぞオマエラ！構えろ！」

「ちっ…話の途中で邪魔しやがって…！」

立ち止まっている間に、警備員の格好をしたシャドウが美術館の奥からぞろぞろと現れてきた。ジョーカーは私の手の中にピストルを無理やり押しやり、戦闘態勢をとつた。

襲撃してきたシャドウは多く、ざつと見て6体。小柄な羽の生えた天狗のようなシャドウだ。

手段は1つじゃない。

そう考えた途端に、体が動かなくなつた。

目の前にシャドウの手が迫る。

このまま何もしなければ確実にその手は私の体を貫くだろう。そう理解しながら、私の体は動いてくれない。まるで他人事のように、それをただ眺めていた。

シャドウが私に触れるまであと、二秒…一秒…。

痛みを覚悟した瞬間、私の視界は斜めに傾いた。ジョーカーが私を突き飛ばしたんだ。

「ジャックフロスト！」

召喚したペルソナが強烈な吹雪を起こし、シャドウの羽を凍てつかせる。二、三体は地に落ちたが、動きが素早く残りは空中へと逃げ延びている。

それに向けてスカルがショットガンで、モナがパチンコで一体ずつ撃ち落とす。残ったシャドウは2体…。

「ジョーカー伏せてっ！」

うち一体は、床に倒れたまま動かない私に向けて突撃してきた。それに合わせてパンサーが鞭を薙ぎ、風切り音とともにシャドウを地面へとたたき落とす。

残りの一体は…。

誰よりも早くその存在に気づいた私は、左手に握るピストルを構えてパンサーに向けて引き金を引く。

驚いて目を瞑ったパンサーの背後で、頭を撃ち抜かれたシャドウが消滅していく。

「済まない、立てるか」

「…もちろん」

差し出されたジョーカーの手を取り立ち上がる。

そうか。別にこの力を使わなかったって、私“達”は大丈夫なんだ。仲間が居れば、戦えるんだ…怪盗団は。

誰かを傷つけるためじゃなく、救うために戦えば。

私にだって、出来るはずだ。

「…ペルソナ」

仮面を外してもう一人の私を呼び出す。隣に立つCharaは相変わらずだが…意志は私と共有している。

あの力を使わずに、どこまでやれるか、なんて心配は無用だろう。仲間がいるなら。「行くぞっ!」

残りのシャドウを一斉攻撃で仕留める。最後の一撃まで、私のナイフは赤色に染まることはなかった。仮面から立ちのぼる炎も。

静けさを取り戻したロビーで、私は自分の手に視線を落とす。相変わらず、汚れに満ちている。

「リーサル、ありがとね」

「何が?」

「助けてくれたでしょ」

「それは当然なの」

一生この汚れは取れないだろうし、決意の力も消し去ることはきつと出来ない。

「リーサルはワガハイ達をもっと信頼しろ!ワガハイ達も、オマエを信じる」

「そういうことだ。その銃は信頼の証として、持っていてくれ」

「ただ、在り方を変えることはできる。これからの私を作るのは、紛れもなく私自身の意志のはずだ。」

「手段は1つじゃない。」

「心に宿る暴力は封印して、私だけの力で、これから訪れる障害を乗り越えてみせる。」

「怪盗団の仲間として。悪ではなく、正義として。」

「それが私という存在を作った誰かへの、反逆になるなら。」

「うん。分かったよ」

「それでも、もしこの力を使うことで誰かを救うことが出来るのなら、迷いなく私は使うだろう。」

「私の決意を。」

Codename : Fox

5月19日 木曜日 マダラメパレス

あの日から開始した怪盗団としての初仕事。放課後にみんなで集まって、隠されたオタカラを奪うためにパレスの攻略を行う。その途中には案の定、ゲームと同じ赤外線センサーで守られた中庭があった。

先へ進むにはここを通らねばならない。

「突っ切ってみようか」

「ダメに決まってるだろ!」

ちよつとしたお茶目で口にした冗談を真に受けられ、モナ渾身のハリセンが後頭部に命中した。清々しい音ががらんとした中庭に響き渡る。

「冗談だよ…」

「お前が言うのと冗談に聞こえないんだよ」

「スカルにそう言われるとは」

全くもって心外である。

「だけど実際どうすんのこれ?ここに来るまでに、セキュリティを解除できそうなところ

なんてあったっけ？」

「いや…セキュリティを操作できる場所は、守られている側に無いとおかしい」

「ジョーカーの言う通りだろうな」

「んじやどうすんだよ？」

「やっぱり突っ切るしか」

再び、静寂で満ちた中庭に乾いた音が響く。二回。

「コイツはほっといて…。ここで、認知世界の応用知識をオマエラに教えてやる」

追撃の構えをとるスカルとパンサーを手で制止しつつ、近くの台座の上に乗ったモルガナ大先生の講義に耳を傾ける。

「認知世界の作りや見た目は、元となった人間の思考が影響していることは鴨志田の件で学んだだろう？」

「学校が城になったり、体育館が聖堂になったりってことだよな」

「その通り。それが今回の場合、有り得ないぐらい嚴重に守られた場所がパレスに出てきた。これはつまりどういうことだと思う？」

「…現実で斑目が見せたくないと思っっている場所とかか？」

「うむ。スカルも大分理解してきたな。だがもう一步踏み込むと…」

「現実のあばら家に見せたくない場所があつて、そこは嚴重に閉じられている」

「正解だ！さすがはジョーカー」

「なるほどね。じゃあ、現実のあばら家の方でここと連動してる場所があるってこと？」
「おそらくは。だがただ開けるだけじゃ意味が無い。開いたところを、斑日本人が見る必要がある。『絶対に開かない』という認知を、変えてやるのさ」

「それ結構むずくね？閉じてんだとしたら、本人に鍵でも持つてきてもらわねえと…盗むわけにもいかねえし」

「鍵は必要ない。ワガハイのテクがあれば、針金一本で余裕だ…：まあ、多少は時間かかるが」

「それじゃ、私がモデルの件であばら家に取り込んで、その際にモナが開ける？」

「今まさにそれを言おうとしていた所だ！頼めるか？」

「いいよ。上手くやる」

ゲームではパンサーが引き受けた役回りを、私が担うことになった。大きな違いは生まれないうからこれでいい。というかむしろ、元の通り喜多川をこつちへ引き連れてこれるか不確かだし、私がやった方がいいだろう。

決行は明日。何も問題なく進めばいいが。

翌日：5月20日 金曜日 放課後：

『作戦の概要はこうだ』

放課後：マダラメパレスのセキュリティを突破する作戦を開始するため、私は喜多川の住むあばら家まで足を運んでいた。

インターホンを押して喜多川が出てくるまでの間、作戦の流れを思い出す。

『まず、ツマキがモデルの件を使ってあばら家に入り込む。その時、バッグに忍び込んでいたワガハイも、一緒に中に入る』

急な話だったのにも関わらず、今日ならモデルを受けられるとメッセージを送れば秒で承諾してくれた。そんな喜多川が古びたドアから顔を出し、私を中に招き入れる。

『中に入ったら、気付かれないようにいいタイミングでワガハイが抜け出す』

『今日は来てくれてありがとう。今日は先生が戻られる日だから、あまり長くは出来ないが』

むしろ、そっちの方が都合がいい。内心ほっとしつつ、喜多川の後ろを歩きながら通学カバンのチャックをそっと開ける。

カバンが軽くなったのを確認してそう長く経たないうちに、作業部屋まで辿り着く。

『あのパレスで見つけたセキュリティと連動してそうな場所をワガハイが見つけて開ける用意ができるまで、ツマキには普通にモデルを引き受けてもらう』

部屋に入り喜多川が画材の用意を始める。適当に用意された椅子に腰掛ける前に、とりあえずブレザーだけは脱いでおく。

「寒くないか？ヒーターなら出せるが」

「大丈夫」

「そうか。なら早速」

「その前に、一つだけ」

脱いだブレザーを床に置いたカバンの上に被せて、椅子に腰をおろす。

「今から見るものに何も言わず、誰にも口外しないと約束してほしい」

「…分かった。約束しよう」

喜多川は真剣な眼差しで頷いた。

まあ、この男なら大丈夫だろう。そう思い、私は制服を脱いでいった。その間、喜多川の視線は泳ぎつつも絶えず自分に突き刺さっている。

サスペンダーを外してスカートを脱ぎ、次にハイネックを脱ぐ。

その結果晒されるのは、きつと常人が想像するようなものじゃない。それまで少し遠

慮がちだった喜多川の目線が次第に真っ直ぐ向けられるようになっていく。

次に脱ぐべきは下着よりも先に、上半身に粗雑に巻き付けてある包帯だ。杏ほど露出の多い格好は滅多に、とうか全くしなから気づく人間も居ない。

包帯の裏には、無数の変色しきった疵痕。原因はほぼ打撲によるものだが、中には切傷のようになっていているものもあって、未だに化膿が治らない箇所もある。

その後下着も脱ぎ捨てて完全に裸となつてみたものの、流石にかなり気恥しい。

さつさと終われと念じつつ、「合図」が来るまでじつと耐える。

『用意が出来たら部屋の入口で鈴を鳴らす。少し間を置いてから、キタガワを誘導してくれ。床に目印を置いておくから』

『それでいいけど、絶対に扉は開けないでね』

『お、おう。当たり前だろ！ワガハイを誰だと思ってる！』

喜多川はしばらく私の身体を観察した後、やがて筆を取りキャンバスに何かを描き始めた。作業に入ると喜多川は外界の一切を遮断したようなオーラをまとうて指先に全ての神経を集中させる。

しかめっ面で私とキャンバスを交互に見合わせて筆を走らせる喜多川を見ると、なんとなく気恥しさも紛れる。こうなつてしまえば別に見られている感覚もそこまではない。

とはいえ、暇だ。動けないし。

…。

数十分後：

暇な時間を有効に使う手段はあいにく持ち合わせていなかった。何か物事を考えようとする途端に今の自分の格好が気になって集中できないし、少しでも身動きを取ろうとすると喜多川に動くなど制される。

そんな窮屈な時間を過ごしているうちに、閉じた扉の向こうから微かに鈴の音が聞こえた気がした。モルガナの合図だろう。

話しかけても意味は無いと知っている以上、最も効果的なのはここから立ち去ること。立ち上がり迅速に着替えだすと、さしもの喜多川も一旦筆を置いた。

「妻木さん？」

「来て」

下手な演技などは必要ない。愚直に喜多川を手招きして目的の場所へと誘導する。

廊下の端には分かりやすくビーズのようなものが点々と設置されていた。それを追つていくと、パレスで見た赤外線セキュリティエリアと同じ柄のふすまが開け放たれていて、その傍には大袈裟な南京錠が開錠された状態で、壁に垂れ下がっている。やはりモルガナはデキる奴。

「えっ…!?!」

おそらく喜多川も開いているところを見たのは初めてだったんだろう。目を見開き信じられないと言った表情で、開いた扉の奥を見つめている。

私が黙って部屋に入り照明を点けると、その部屋には何十、何百もの数がある。同じ絵が保管されている。

「『サユリ』…?」

そう喜多川がつぶやいたところで、玄関の戸が開く音がした。

「祐介?」

「まずい…ここは先生の部屋なんだよ!早く出よう」

喜多川は斑目が帰ってきたのだと知り我を取り戻したのか、私の腕を掴んで急いで部屋から出ようとするも、時すでに遅し。部屋から出たところで斑目とばったり鉢合わせってしまった。

「せ、先生。これは…」

「そこで何をしていた!」

「その、鍵が開いてまして。それで、彼女がほんの興味本位で立ち入ってしまった…止めようとしていたところで」

「お邪魔してます。斑目先生」

「…鍵が開いておったのか?」

「は、はい。そうだろ、妻木さん?」

「はい。開いてましたよ。もしかして、入っちゃいけないところでしたか?」

「ということは、見たのだな?あの沢山の『サユリ』を」

「…はい。あれは、一体…?」

恐る恐る、といった感じで喜多川が訊くと、斑目は急に苦虫を噛み潰したような顔をして目を伏せた。さも、やむを得ない事情があったかのように。

「…実は、借金を抱えている」

「…え?」

「本物の『サユリ』が盗難に遭ってしまった…。昔の弟子が、厳しくすぎたことを恨んだのかもしれない…。そのことがひどくショックで、俺はスランプに陥ってしまった」

「…」

「画集用の精巧な写真をもとに何度も再現を試みたが……出来上がるのは所詮、模写。だがそんなとき、その模写でいいから買いたいと言ってくれた者がおつてな。こうして、模写を作り続けては、特別なルートで買ってもらっているのだ」

暗く、重い雰囲気になって二人の意識から私の存在が希薄になったタイミングで、もう一度部屋に入り直し、一番奥に風呂敷で隠されている「本物」のサユリをあらわにしておく。

「お前を育ててやるためにも、金がいる……。不甲斐ない師を、どうか許してくれ……」

「そんな……」

「わーすごい。こんな絵初めて見たよー」

……くそつ、我ながらとんでもない棒読みだった。

が、そんな声に釣られてバタバタと足音を立てて斑目が部屋へと押し入ってきた。その後、続く形で喜多川も部屋を覗き込み息を呑んだ。

「サユリ？」

「い、いや……それは、模写だ」

「違う……これは本物だ！」

まるで吸い寄せられるように、本物のサユリに走り寄り細部までその目で確認した後、喜多川はぱつと振り返り斑目問い詰めだした。

「どういうことですか!? さっき、盗まれたって!」

「そ、それは」

「この絵に支えられて、ここまでやってきたんです!! 見間違えるはずがないっ!」

「あーなんかすいません。もう今の事は忘れておくんで」

無理やりに話の腰を折り喜多川の腕を掴んで部屋の外へ引つ張っていく。

「待ってくれ妻木さん! まだ話は終わって:!:」

「いいから。失礼しましたっ」

無駄に強い力で抵抗してくる喜多川の腹に腕を回し斑目の目が届かないところまで引きずっていく。

「オイ、なんか妙に騒いでたが、大丈夫か?」

「問題ないよモルガナ。それより今からパレス行くから」

「は? コイツ連れてか?」

口早に説明を済ませナビを起動。密着していた喜多川もろとも、合流してきたモルガナとともにナビゲートが開始され周囲の空間が歪んでいく。

前はあばら家の前でナビを起動した影響でパレスでも美術館の前に出たが、今回は中途半端な場所でナビを起動した結果、向こう側でも中途半端な場所に降って湧くことになった。

突然のことに身構える暇もなく、認知世界に拉致された喜多川をお姫様抱つこの形で抱えながら着地し、遅れて降ってきたモノも喜多川の腹を受け皿にしてキャッチ成功。今回は負傷者が出ずに済んだ。

「なんだ……ここは……!?!」

「なんだと思う?」

辺りを見渡す喜多川に、そう囁く。

私たちの出た場所は中庭よりも少し手前。だがそこまで遠くない位置に例の赤外線センサーのエリアがある。手筈通り、そのセキュリテイは今は解除されていて、周囲には誰もいない。ここで待機していたジョーカー達が今、奥の制御室でセキュリテイが作動しないように画策してくれているはずだ。

「その声、妻木さんか? そっちの着ぐるみは見覚えがないが」

「誰が着ぐるみだ! ワガハイはモルガナだ!」

「ここは、斑目の思考が具現化した世界だよ。頭の中とも、心の中ともいえる場所」

そう言うとき喜多川はこれでもかと怪訝そうな色を浮かべ、「気は確かか」と聞き返してきた。まあ基本的に誰でもそう言う反応になる。

「どう捉えるかは喜多川次第だよ。これまで見てきたものと今の光景を見比べれば、すぐに答えは分かると思うけどね」

「…」

「センサーの解除は成功してるみたいだな。後はアイツラが上手くやってってくれるのを祈るしかないか」

呆然と立ち尽くす喜多川をよそに、セキュリティの奥からジョーカーとスカル、そしてパンサーが走ってくるのが見えた。

軽く手を振ってやると、みんなそれに応えてくれた。

中庭を抜け私たちの居る場所へと合流してきたジョーカー達は比較的余裕がありそうだった。元々そんなに心配もしてなかったけど、やはり余計なお世話だったらしい。

「センサーは解除してきた。…とここで」

「もしかして、高巻さんたちか？」

「うん、そうだよ。というか、なんで喜多川君までこつちに？」

「実際にここを見てもらえれば、目を覚ましてくれるかも知れないでしょ」

私の言葉に納得した様子のパンサー。その横からスカルが歩み出て、喜多川にこの光景が斑目の心を映し出したものだと言明する。

「コイツの言う通りだ。なあ、目覚ませって！盗作も虐待も真実なんだろう？だからこんな見た目に成つちまうんだよ！」

「…だが、それでも十年置いてもらった恩義だけは、消えない」

「だからって、許すつてのokay!このままじゃお前が…」

だんだんと、呼吸が荒くなってきた喜多川はその場にしゃがみ込み頭を抱えた。心の中では、私たち他人には計り知れない葛藤が渦巻いているのだろう。

「頭の理解に、気持ちがついて行かない…」

「だ、大丈夫喜多川君？」

「悪いがのんびりしてる暇はないぜ？同じ場所に留まり続けるのは危険だ」

「セーフルームが近くにあったはずだ。そこまで肩を貸そう」

「…いや、結構だ」

ふらつきながらも自分で立ち上がり、喜多川はジョーカーの提案を断った。

セキュリティの無効化には成功したものの、これ以上の活動はパレス全体の警戒度を無駄に上げてしまいかねない。なるべく早急に、今日のところは退避するべきだ。

「こんな、おぞましい光景が先生の心の中？それにこの絵は…」

「ただの絵じゃない。それが、マダラメにとつての弟子そのものなんだよ。ちなみに、お前のもあるぜ」

「…」

退路に行く最中、喜多川はマダラメパレスの有様をこれでもかと目にする事になる。もちろん、喜多川は斑目の一番近くに、最も長く居た存在だ。これらを見て初めて

斑目の本性に気付いたわけでは無く、何かを得られたとしたら、それは今まで見ないふりをしてきた自分自身への気付きのはず。

身よりの無い喜多川にとっては親同然だった斑目。わざわざ自分を引き取ってここまで育ててくれたということもまた、紛れもない事実である以上、目を向けることを恐れてしまっていたのかもしれない。

なんとなく、喜多川は今の自分とも重なる部分がある気がした。

違うのは、私の親は決して悪党ではないということだけだ。

そんなことを考えながら出口の目前までたどり着いた時、案の定待ち伏せしていた警備のシャドウが退路を塞いできた。そして私たちを挟み込む形で、背後からしわがれた笑い声が響いた。

「先生？その姿は……」

そこには、現実のあばら家で見た質素な出で立ちではなく、美術館そのものと同じ、黄金に輝く派手な着物を羽織った斑目のシャドウがいた。

「嘘、ですよね？」

「もちろん、嘘だとも。あんなみすばらしい生活はな。有名になってもあばら家暮らし？別宅があるのだよ。女名義のだから」

斑目の両脇からさらにシャドウが現れて警棒を振りかざすも、喜多川は退かず、それ

どころか斑目に歩み寄って懇願するように問い詰める。嘘でもいいから、自分の信じた恩師の姿を見せてくれと言わんばかりに。

「何故盗まれたはずのサユリがあそこに？何故本物があるのにたくさんさんの横写を？」

声を震わせながら、喜多川は最後の望みをかけて叫ぶ。

「答えてくれ…あなたが先生だというのならっ！」

「まだ分からんのか。青二才め。盗まれたなど、嘘に決まっておるだろう」

「どうして、そんな嘘を…？」

「例えば、こんなのはどうか。盗難に遭った絵が見つかったが、公にできない事情がある。特別価格で譲りたい”。どうだこの、特別感！俗人どもは大枚はたいて食いついてくるー！」

シヨックのあまりめまいを覚えたのか、喜多川が額をおさえながらぐらりとふらつく。咄嗟にパンサーが身を案じながら、斑目を睨みつける。

「盗作だけじゃなくて、詐欺までしてたなんて最低ね。恥ずかしくないの？」

「芸術など道具に過ぎんわ。金と名声のためのな！優秀な若い着想をいただき儂の名で公表すれば、目障りな新芽も摘み取れる。これが一番効率的だろう」

「なんて、ことを…！」

「祐介、お前にも稼がせてもらったぞ？着想をいただくなら、大人よりも言い返せんぞ」

もの方が楽だからな」

「なら、あなたの才能を信じた…天才画家と信じてきた人々は…!」

「ひとつだけ言っておいてやる。祐介」

これ以上ないくらいに顔を邪悪な感情で染め上げた斑目は、着物の袖を翻しながら吐き捨てる。

「この世界でやっていきたいのなら、儂に齒向かわんことだ。儂に異を挟まれて出世できると思うか？」

愉快そうに高笑いを上げる斑目の前で、ついに喜多川は膝を突いて肩を震わせていた。その震えの原因は、ずっと隠されてきた事実を目の当たりにして気持ちの整理がつかないからなのか、それとも…。

「こんな…こんな奴の、世話になつていたとは…」

「やれやれ、喋り疲れたわい。そろそろ」

「…許せん」

「ん？」

さつきまでとは違う、力強い声色。

再び立ち上がろうとするその足も、握りしめたその拳も、怒りによって染め上げられていた。

「許すものか…お前が、誰だろうと!!」

「駄目、下がってて!」

啖呵を切った喜多川と斑目の間にシャドウが割り入り、パンサーがフォローに入ろうとしたその時、*“覚醒”*が始まった。

強い反逆の意志が生まれた時、ペルソナは覚醒する。喜多川の場合、それは親同然だった存在への初めての叛逆であり、今まで目をそらし続けてきた弱い自分に対する決別の意志の表れでもある。

「あ、あああああああつ!!」

顕現した狐の面を引き剥がし、青い炎が喜多川の足元から噴き上がる。

そして、その傍らにはペルソナが。

「絶景かな」

並ぶシャドウと斑目たちを見据え、役者さながら喜多川は手をかざす。

「まがいものとして、こうも並べば壯観至極。悪の華は栄えども、醜悪、俗悪は滅びる定め」
かざした手のひらを翻すと、背後のペルソナが腕を振るい全方位に強烈な冷気を放つ。少しづつ包囲網を狭めてきていたシャドウは大きく退き、コンクリの床に氷が張る。

「貴様を親と慕った子どもたち、将来を預けた弟子たち…。一体何人踏みにじってきた

「?…いくつの夢を金で売ったっ!」

場に緊迫した空気が張り詰める。私はジョーカーの傍に駆け寄り、「前は任せた」とだけ口にして、出口側に立ちはだかるシャドウ達に向き直った。

「俺は貴様を、絶対に許さない!」

「やれそうか?」

「ああ! 蹴散らせ、ゴエモン!」

私の後ろで派手な戦闘音が鳴り始めたと同時に、向き合っていた4体のシャドウも一斉に本性を現し距離を詰めてきた。一本足で鎚を持ったシャドウが一体。他の三体はこの前戦った天狗と同じ奴だ。

その場から横に飛び退き、振りかざされたハンマーを避ける。甲高い衝突音と共に火花が散り、さっきの一撃がなかなかの破壊力であったことを悟る。ま、この程度であれば力を使うまでもない。というか、この程度でなくとも、なるべく力は使わずにいこう。「ペルソナ」

Charaをハンマー持ちの背後に召喚し首元に飛びつかせる。その間に高速で突っ込んできた三体の天狗をすれ違いざまに一体ずつ斬りつけ、最後の一体にはナイフを突き刺し突進を受け止める。…今回も、ロクな戦闘にはならないな。

捕らえた天狗を床にたたきつけてから頭に向けて発砲。続けて残りの天狗にも銃撃

を浴びせ終わるころには、ハンマー持ちも Chara が仕留め終わっている。

振り返ると既にジョーカー達もシャドウを殲滅している。喜多川だけは覚醒の反動で動けずにいるが、やはりこつちも圧勝だったらしい。それなりの大所帯だった警備軍が一瞬で返り討ちに遭い、斑目はさつきまでの威勢がウソかの様に狼狽し情けない声を上げながら走り去っていつてしまった。

…どうせなら今ここで締め上げてしまってもいい気がする。喜多川はみんながついててくれてればなんとかなるだろうし。

そう考えた私は走り出そうとして一歩踏み出したところで思いとどまった。一応、我らがリーダーに一言だけ聞いておこう。

「駄目だ」

「…まだ何も言っていないけど」

何故か口にする前に却下されてしまった。

腑に落ちないまま、ここは言われた通り大人しくしておくことにした。ふらつく喜多川を連れて、全員でゆっくりパレスの出口を目指していると、パンサーが不意に口を開いた。

「ねえ、喜多川君。本当は気づいてたんでしょ？斑目の本性」

問われた喜多川は少し間を置いてから頷いた。覚醒と同時に顕れた狐の面から覗く

目は、悲しみや怒りがぐちゃぐちゃに混ざり合ったような、何とも言えない色を映していた。

「俺は、そんなに朴念仁じゃないさ。少し前から妙な連中が出入りするようになったし、盗作も日常茶飯事だった。けどそんなの…認めたくないじゃないか。世話になった人が、そんな…」

虚飾にまみれた作品たちを見回しながら歯がゆそうに顔を歪ませている喜多川に対して、スカルもいたたまれない様子で目を伏せる。

「…育ててもらったからか」

「俺には父がない。母も、俺が三つの時に、病気で亡くなったらしい」

「らしい?」

「母のことも、正直あまり覚えていない。そんな俺を引き取って、ここまで育ててくれたのが先生だった。そこでサユリに出会って、絵を教わり始めた。俺も、いつかこんな芸術を生み出せるようにりたいと思って」

聞きながら、私はこれから先知ることになるであろう真実を思い胸が締め付けられる思いだった。喜多川は斑目が許されないことをしていると知っていながら、見て見ぬふりをしてきた。それは全て、親代わりになってくれた人間への恩義を感じていたからやったことだ。盗作も、作品を譲っているだけと自分を誤魔化し、師を助けるためだと、

心を殺してきたんだろう。

斑目は確かに変わった。だけど、それが彼の思うようなタイミングではないことを、私は知っている。だからこそ、気分が悪い。

「なのに先生は変わってしまった。自分の原点であるサユリさえも、あんなふう……」
「斑目が変わっちゃまったもんはしかたねえ。でも、俺らなら、心を変えられんだ」

「うん。喜多川君は聞いたことない？心を盗む怪盗の噂」

「……まさか……？」

「つと、おしゃべりは一旦ここまでだ。とりあえず帰んぞ」

現実へと帰還した私たちは、喜多川を連れて近くのファミレスまでやってきていた。そこで私たち怪盗団のルーツや、やろうとしていることを説明している。

「なるほど。それで、その体育教師は心が入れ替わった、と」

各々が注文した飲み物を持って店員が私たちのテーブルへとやってきた。ちやつかり喜多川も注文していたが、私が無理やり異世界に引っ張ってきたから多分こいつは今無一文のはずである。

「信じらんねーかもだが、全部事実だ」

「いや、信じるさ。それでお前たちは先生…斑目を、改心させるつもりというわけか」
「俺らは斑目やつけど、お前がどうするかは自由だぜ？」

横目で喜多川の方を確認すると、悩む様子も特になく、決意のこもった目で私たちを見返していた。

「いや、俺も入れてくれ。怪盗団に」

「失敗すると廃人になるかもだぜ？防ぐ方法も分かつちやいるが、絶対はない。来がけに話したよな？」

歪ではあったが、斑目と喜多川は十数年共に暮らしてきた仲だ。そんな相手の心を変えてしまおうなどと、生半可な気持ちで決めたりはしないだろう。

みんなもそこは分かっているが、やはりないがしろにはしたくない、というのが総意らしい。しつこく、改心した直後の人間はまるで別人のようになってしまうことや、廃人化のリスクもゼロではないことを説明する。

だが、それらすべてを聞いてなお、喜多川の意志は揺るがなかった。

「例えどんな理由があろうと、斑目は道を違えてしまった。ならば、それを正してやらねばならない。それが、曲がりなりにも親だった者への、せめてもの礼儀だ」

「本人がそこまで言うなら、いいんじゃないかね？どうせ斑目をやんのに変わらねーだろ？」

「どうだ？レン」

「もちろん、歓迎する。これからよろしく」

「ああ。よろしく頼む」

差し出された雨宮の手を、喜多川は少しも拒まずに握り返した。新しい怪盗の誕生だ。

「よろしくね、祐介！」

「ありがとう、高卷さん」

「もう杏でいいよ」

「アン殿、そんな簡単に気を許さない方が…」

「俺のことも竜司でいいぜ？」

「ああ。そうさせてもらう。ところで、その黒猫はなんだ？さつきからずっと気になっていたんだが」

「モルガナだよ。向こうでも会ってたでしょ？」

「喋ってるか？」

「文句あるのか？」

「いや…」

モルガナが抗議の意を唱えたところで、そこまで静かでもない店内に誰かの腹の音が

轟いた。無意識に、全員の視線が喜多川へ。

「腹が減った。何か頼んでもいいか?」

そこまで聞いて、私は内心の笑みを堪えられず、しようがないから教えてやることにした。ここで止めておかないと割り勘と言う流れになった時損するだけだ。

「いいけど、お金もってるの?」

「はっ…!?!」

結局、何故か喜多川が頼んだアイスコーヒーの代金は私が払うことになり、またも腑に落ちない気分のまま現地解散の流れとなった。喜多川はひとまずあばら家に帰るらしいが、正直居心地は最悪だろう。

なるべく早く、オタカラを盗んでやらないと。

「妻木さんっ」

ファミレスで喜多川と解散したあと、みんなで渋谷駅までの道のりを歩いているところで、喜多川の声があった。夕暮れも沈みつつある薄暗い空の下で、何故か喜多川は息を切らしている。

「よかった…間に合ってた」

どうかしたのかと聞くと、数回深呼吸をして息を整えてから喜多川は深々と頭を下げた。

「感謝している。俺に、真実と向き合うきっかけをくれて…ありがとう」

突然の謝辞に驚いた私たち一行は、閑散とした住宅街の道の真ん中でしばらく立ち尽くしたあと互いに顔を見合わせた。

そして、1番先に杏が吹き出して、次に坂本が釣られて笑い出した。

至って真面目な顔で姿勢を戻した喜多川に全員で歩み寄り、坂本が背中を軽く叩く。

「真面目すぎんだよ、お前。そんなだから行き詰まっちゃうんだよ」

「そーそー。竜司なんかもつともつとテキトーだよ?」

まさかそれを伝えにわざわざ走ってきたのかと呆れつつ、喜多川のこういう一面は見習うべき誠実さでもあると感じた。自分の思いのだけは言葉にして初めて意味が生まれるものだと、私も分かつてはいるんだけど。

．．．

翌日：5月21日 土曜日 昼：

昼休みもあと数分で終了というところで、廊下に張り出された中間試験の結果を見てきた雨宮が教室に戻ってきた。

「どうだった？」

「学年トップだった」

やっぱり、と内心で少し安心しつつも、どこに行っても変わらない結果にやはりつまらなさを感じずにはいられない。

さかのぼれば、幼稚園時代から宿題は全部満点だったし、小学校でも中学校でもそれは変わらなかった。そして、その末に手に入れることができたのは尊敬のまなざしじゃなく、むしろその逆と言えるものばかり。

ここでもきつとそうなるだろう。今更気になんてならないけど。

「雨宮は？」

「平均よりは上」

「なんとなく察した」

「うるさいぞ」

どうせあと数か月もすれば、この男もトップ争いに食い込んでくるだろうから馬鹿にできる時にしておこう。今から三学期が楽しみだ。

「妻木さんって勉強もできるんだな。授業中ほとんど寝てるのに」

「ひとりで勉強はしてるんだよ。おかげで昔から気味悪がられてたけどね」

次の授業で使う（というていの）ノートと教科書を机の上に広げ、思い出しかけた過去を振り払う。あの頃の学校は何も楽しいことなんてなかった。生徒も教師もみんな、私の話を理解しようとしめない馬鹿ばかり。今もそれは変わらないけど、話し相手がいるだけでも多少はマシというもの。

「あ、いるいるー！」

頬杖を突きながらあくびをしていると、教室のドアからきやぴきやぴした馬鹿っぽい声が出た。

視線だけをそちらへやると杏と一緒に、知らない女子生徒が教室へ入りながら、何故か私を見て目を輝かせている。

なんとなく、嫌な予感。

「ねえねえ妻木さん！」

「…」

「シカトするな」

伝家の宝刀机に突っ伏したまま寝てますアピールを雨宮に封殺された以上、聞かなかつたフリはできなくなつた。目が合つたのは気のせいでもなんでもないらしい。

「試験結果見たよ！満点とかあたしリアルで初めて見たよー！」

「満点だつたんだ」

「え、見てないの妻木さん？学年トップだつたのに！」

「ふっふーん。どうだ！うちのキラちゃんは凄いなだよ！」

「…なんで杏が威張つてるの」

「友達なんだから当たり前でしょ？」

「杏はどうだつたの。試験」

「…」

言うや否やストーンと自分の席につきすっかり大人しくなつたかと思うと、やがて机に突っ伏してしまつた。

「…いいもん。別に赤点では無いし」

不貞腐れる杏をよそに、名も知らぬ女子生徒Aは「今度勉強を教えて」などと聞いたこともないセリフを拒否する暇もなく叩きつけてくる。いつもなら面倒くさがつて無視するか「無理」と一言切り捨てるかのどっちかだつたけど、雨宮の手前なんとなくそれは憚られるような気がしてしまい、

「暇なときだけなら」

「やった！約束ね！」

なんとなく、本当にただなんとなく、流れで承諾してしまったのだった。

なんだかとも面倒な約束を取りつけられてしまった気がしてすぐに後悔するも、名も知らぬこのモブ女子生徒の勢いは止まらず、断るタイミングも有耶無耶に。

彼女が歓喜しながら自分の教室へと戻っていくのを見届けて、深くため息をつく。すると、雨宮が納得したように声を漏らす。

理由を聞いても、その時は答えてくれなかった。

放課後…

放課後、雨宮の招集により渋谷駅連絡通路で集合となった。全員が集まるまでの間に私は、コンビニで購入したキノコの村をつまみながら、連絡通路から見下ろせる渋谷の

道路をぼーっと見下ろしていた。この時間にはやはり学生が多いな。

「お、当たり前だ」

「縁起がいいな！今日の潜入ではいいことあるかもだぜ？」

ふと横を見ると、雨宮はチョコボウルの箱を開けているところで、どうやら当たりを引いたらしい。箱の開け口の部分の色が銀色だと2等、金色なら1等。

雨宮の持つ箱を覗いてみると、開け口は金色だった。自分もたまに買うが当たりが出たことは1度もないから、その当たりをどうすればいいかはよく知らない。

「どうした？」

私の視線に気づいた雨宮が首を傾げる。別に大した理由はなかったけど、自分の持つてるきのこの村の袋を差し出し、1つやるからチョコボウルを1つくれと取引を持ちかけてみた。

応じた雨宮が袋に手を入れて1つきのこを取り出した時、坂本が改札の方から歩いてきた。

「うーす。杏と祐介はまだか」

「なあなあ、ワガハイにもそのお菓子1つくれ！」

「お、何食ってんの？」

「きのこの村」

「チョコボウルのキャラメル味」

「何2人してカワイイもん食ってんだよ。ていうかきのこ派かよ。絶対たけのこほうが美味しいのに」

坂本にしては中々不敵な行動に出てきた。この2人を前に正面切つて宣戦布告してくるとは。

別に私はたけのこだろうがきのこだろうが、いちごだろうがキャラメルだろうが、チョコと名が付いていればなんでも美味しいので、世間でしばしば起きるお菓子論争は私にとっては心底どうだっていいのだけど。

「いちご味は邪道だろ」

「キャラメル派のほうが珍しくね」

「なあ、どっちでもいいからワガハイにも1つくれ」

と思つたら以外に雨宮はいちごチョコに対して反対派であつた。

雨宮の肩から顔をのぞかせるモルガナにひとつ、きのこを渡してみた。これ食べてお腹壊しても、私は知らない。

「つかそれより、妻木がそれ食ってる方が意外だわ」

「なんで？」

「菓子食つてるとこ自体初めて見たし」

「ツマキは意外と甘党だからな。ルブランじゃチョコばっかり食ってるぞ」

甘党ってほどでもないが、好物の一つとしてチョコレートがある。ただ甘いだけの菓子では無く、種類によっては苦みがあったり酸味があったりするのが面白い。今食べてるこれについては、深みも何もないただの甘ったるいミルクチョコだけだね。

まあそれでも、チョコと名のつくものであればなんでも美味しい。カカオをこんな風に使おうと最初に思った奴は天才に違いない。

ちなみにコーヒーはブラツクのほうが好き。そっちのほうが一緒に食べるチョコに合うから。

「リ्यूージはあんまチョコとか食わなさそうだな」

「俺はやっぱ、甘い系よか塩気のあるやつのがいいな。ポテチとか」

坂本のその言葉に、雨宮の目が（というか眼鏡が）光る。

きのこorたけのこ論争に並ぶ永遠の議題として、ポテチの味は何が一番至高かという戦いの種もある。前者については割とどうでもいい中立派な私だが、こつちに関しては譲れないものがある。

一瞬、ピリツとした空気が流れた後、口火を切ったのは坂本だった。

「コンソメ」

続く雨宮。

「のりしお」

最後に私。

「うすしお」

「マジかオマエラ。見事にバラバラだな」

あわや戦争へと勃発しそうになったその時、私たちが来た方とは逆の改札から喜多川がやってきた。前髪をかきあげつつ、相変わらずのポーカーフェイスで妙な空気の流れる私たちを不思議そうに見つめている。

「おつ祐介ーいいところに来た！お前はどう思うよう？」

「一体なんの話だ」

「ポテチは一体何味が一番おいしいかって話！」

喜多川は少し考えたあと、

「やはりじゃがりこだな」

誰も期待も予想もしていなかった答えを出した。

「ポテチの味つつつてんだろ」

「だが、じゃがりこは値段と腹持ちのバランスに優れ、ポテチと違って手に油が付きづらく、さらに美味しい」

「そうか……」

「ごめんお待ちせー！」

一気に燃え広がるかと思われた戦争の火種は、喜多川の慈悲のない天然ボケによって鎮火されることになり、ちよūdいタイミグで杏も集合場所にやってきたことで完全に迷宮入りした。

杏は落ち込む坂本を見て一瞬首をかしげたものの、すぐにどうでもいいと思いなおしたのか雨宮に向き直る。

「それじゃ、行こっか」

「ああ。仕事の時間だ」

喜多川祐介、コードネーム「フォックス」の加入により、パレスの攻略はすこぶる順調に進んだ。モナ、パンサー、スカル、フォックス、ジョーカー、そして私：計六人の集まりともなると、同時に固まって動くのはかえって非効率的になりかねないが、その分広い範囲をカバーしあって安全に動くこともできるようになった。

パレスの道のりは相変わらずギミックだらけでややこしい構造になっていたが、攻略の糸口を見出すのにさほど時間はかからない。もちろん私は全部知っているけどあえ

て黙っていた。それでも、全くと言っていいほど問題は起きなかった。

ちなみにシヤドウトとの戦闘はほとんど発生しなかった。数がいるおかげで、気づかれていない状態からの奇襲で一気に制圧できる可能性が増したおかげだろう。

セキュリティを解除した中庭から奥へ進むと、また赤外線センサーの壁が私たちの行く手を阻んだが、中庭と違ってそこまで嚴重ではなかった。ジョーカーの提案で排気口に潜り込みセキュリティを掻い潜った後、さらに奥へ進むために「絵画の中」に入っていく。

「すげえ……マジで絵の中なのか……」

「だが、所詮この絵も虚ろだ。中身は何もない。こんなものは、芸術ではない」

認知の歪みの影響で中に入れるようになった絵画を進んでいき、さらに美術館の奥へと潜入していく。するとさっきまでの雰囲気とは打って変わって非現実的な構造のフロアへとたどり着く。道は途切れ途切れになっていて宙に浮いている。下は黄金の光に包まれていて、落ちたらどうなるかは想像もつかない。

「歪みが大きくなってる証拠だ。気を引き締めろよ」

「鴨志田の時もあつたよね。城が滅茶苦茶に崩れてたりしたとこ」

「それと同じってことはつまり、オタカラが近いってことだ」

「このフロアにはいくつか『門』がある。その門をくぐると、繋がっている別の門の場

所へと移動させられる。どういう仕組みかはさっぱり分からないけど、とにかく門同士のつながりを考えて進まなければならぬ。

そして、それとは別の仕掛けがもう一つある。それは、門の前に設置されたいくつもの「サユリ」だ。

それを見て、スカルやパンサーはなぜこんなところに？と疑問を抱くも、ジョーカーはその意図にいち早く気付き、飾られた数枚のサユリの中から一つを選び手に取った。

「おっ、なんか色変わったぜ？」

近くにあった門の色が変わり、私たちはそれをくぐった。

結果は特に何も起きず、繋がっていた別の門から出てきただけだった。何が変わったのかみんなは分からなかったようだけど、私は元々知っている。手前にあった「本物」のサユリを選ぶことで、この門は正常に機能する。もし本物を見抜けていないまま通れば、手前の門まで引き戻されるという仕組みだ。

結局その調子で一度も罠にかからずに進めたおかげで、何が変わったのかスカルとパンサーは最後まで分かることの無いままこのフロアは突破することとなる。

最後の門をくぐり長い廊下を駆け抜けると、歪だった空間は元に戻り、まともな美術館の内装が私たちを出迎える。

そのフロアの中央、巨大なホールに設置された台座にはオタカラらしき光が浮いてい

た。

「だが、警備が嚴重だぞ。あれで奪いだせるのか？」

フォックスの疑問は最もだ。ただつぴろい展示ホールのだ真ん中に、オタカラは鎮座している。でも、その周りには相変わらず赤外線センサーが張られていて、しかもその周囲に大量のシャドウが待機している。このままでルート確保とは言えないだろう。

奪い出す手段を考えるためにも、一旦中央ホールを無視して外周を探索することにした私たちが見つけたのは、大きく分けて三つ。

一つは、このフロアの電源関係を操作できる制御室。試しにジョーカーが操作してみたところ、照明を落とすことには成功したが、すぐさま予備電源で復旧されてしまった。暗闇になったのはせいぜい十数秒といったところだ。

「あの赤外線センサーは切れねえの？」

「…駄目だ。権限がないとそこは操作できなくなってる」

「そう簡単にはいかねえか…」

もう一つは、フォックスが発見した中央ホールの天井にぶら下がっている展示用のクレーン。電源制御室とは別に操作できる部屋を発見した。こつちもジョーカーが試しに少しだけ動かしてみると、オタカラの真上でクレーンが少し降下した。このまま下ろしければ、オタカラの場所まで届きはするだろう。

最後は…。

これは、私だけが気づいたことだけど、此処には何か居る。

明らかに、今までパレスを歩いてきて感じるこのなかつた異様な気配が、このフロアに入ってきてからずっと感じられる。

目に見えていないだけで、確実にここには何か居る。それも、とてつもなく強大な何かだ。このフロアに存在する空気ごと全てを埋め尽くすような存在感。間違いなく尋常な存在ではない。

「リーサル？」

「…ん？」

「どうかしたか？」

「別に何も。眠くなってきただけだよ」

「この状況でよく眠くなれるなお前」

分かりやすく肩を落とすスカルをよそに、みんなはオタカラを奪う作戦を考えるため一度現実へと帰還することにした。

「…」

警備に見つからないよう、こっそりフロアから抜け出してから後ろを振り返る。

もし私のこの感覚が気のせいでは無かったとしたら、間違いなくここで何かが起こる。そうなったら、私があんとかしれないといけない。私の存在が起こした変化だということなら、それが義務というものだ。

．．．．．
夜…メメントス

日も沈み街に夜の帳がおりた後、私は一人でメメントスにやってきていた。一人で少し考えたかったのと、運が良ければ仕事中の明智吾郎と遭遇出来るかもしれないと考え、ここで待つことにした。

人目のつかない場所へ来て少し安心した私は、無意識にナイフを取り出し、鈍く光る刃を見つめる。

これはいつも私とともにあった。

ハッキリと覚えている。これと出会ったのは中学一年の春、正確には入学式の前日。

かねてから私は、親にナイフを買ってほしいとねだっていた。もちろん子供の私にそんなものが買ひ与えられるはずもなく断られ続けていた。

でも、ある日突然、母親が「ナイフを買ってあげる」と言い出した。

あの日のママはいつになく優しくかった。そんな優しさに甘えて、私は嬉々としてプレゼントを受け取った。

その時に言われた条件は、『絶対に人前では出さないこと』と、『自分には使うな』という二つだけだった。

他にもつとやつちやいけないことはあるでしょ、とその時私は言った気がする。

そしたらママはこう言った。

『もし誰かが綺麗を傷つけるような真似をしてきたら、これを使ってもいい』

『なによりもあなたが一番大切だから』

当時12歳の子どもに言っている言葉ではないと今でも思う。もし真に受けて事件でも起こせば、それこそ私の身は破滅するだろうに。

それでもママはそう言った。

それから私は常にこのナイフを肌身離さず持ち歩いた。他人に見られないようにするのは徹底したし、そもそも持っているだけで使うことなど一度もなかった。大切だからこそ、汚してしまうのが勿体なくて、指紋だつてなるべくつかないように気を付けた。

なのに今、必要となればすぐにこいつは手に馴染んだ。敵意をむけられた時自然とこいつに手が伸びた。

私かわたしである所以だろうか。

抜き身の刃が私自身。触れ合えば無意識に相手を傷つける。

でも、今の私は変わろうとしている。刃は鞘に納められ、憎しみや殺意は鎖でつなぎとめている。この封じ込めた力が一体何なのかは、私以外は一生知る由も無いだろう。

それでいい。知られたくもない過去だ。

この力は私の力じゃ無い。

「ペルソナ……」

意識を送ればすぐにナイフは赤に染まる。何の負担もなく、この致死の刃を量産できしてしまう、本当に無駄な力だ。

こんなものがあるせいで、私は……

心とは裏腹に、艶やかな赤に見とれそうになつていた自分にムカついた私はナイフをそのまま壁に突き刺す。固いコンクリの壁に、いともたやすくナイフの根元まで突き刺さり、代わりにナイフはこれっぽっちも傷ついていない。

深くため息をつき、メメントスの入り口付近の改札前階段に腰を下ろす。

それより、なんだか思いもよらない事態になった。

このままいけば怪盗団は間違いなく予告状を出し、オタカラを盗みに再びあの場所へ行くことになるだろう。しかしあの場所には、間違いなくなにかが居た。

居たというよりは、在った。

気配の大きさはどう考えても普通じゃなかった。今まで感じた中では二番目か三番目ぐらいに、強大な力の持ち主であることが分かった。

もしそれが敵なのであれば……いや、パレスに黙って居座ってる時点で間違いなく味方ではないか。

とにかく、そんな面倒が起きればなんとかするべきは私である。だけど、あれほど得体の知れない相手を、純粹な接近戦だけで制せる保証はない。もし無理そうなら早急に撤退する手も考えておかないといけない。

予めみんなに伝えておくべきか否か、それが問題だ。

予告状を出してしまえば、もう後戻りはできない。一度の失敗も許されない以上、作戦は慎重に組み立てるべきであり、そのためには仲間とこの情報を共有しておいた方がいいのはもちろんただけ……。

「……」

しばらく考え耽った後私は立ち上がり、壁に突き刺さったままのナイフを引き抜く。待てども目当ての人物が現れるような気は一切しなかった。やはり明智がいつもの時

間帯に活動しているかも知れず、異世界で待ち伏せて偶然遭遇できる可能性はかなり低い。

であれば仕方ない。現実の方で一度明智に接触してみるとしよう。有名人である明智の通っている学校など、調べればすぐに出てくるだろう。

改札を出て階段を上がり、現実へと帰還する。

空はすっかり暗くなっていて、眩しいぐらいの電灯がきらきらと目に刺激を与えてくる。都会の明かりは相変わらずうつつとしい。

ただ、五月の夜の空気は嫌いじゃない。熱すぎず寒すぎず、適当に外をふらつくにはこれ以上ないぐらい快適な気温だ。せっかくここまで出てきたんだし、どこか寄って帰ろう。惣治郎に今日は外で食べる旨のメッセージを送り、前から気になっていたとある店に行ってみることにした。

たまには音楽をかけずに都会の喧騒をBGMにしてみよう。なんとなくこの場を一人で歩いているだけでそれっぽい気分になるのは、東京の持つ独特な空気が影響しているんだろう。正直私はこんな灰色だらけの街並みよりも、緑豊かで静かな場所の方が好んで、人ごみもそこまで得意じゃない。

それも最近の通学環境のおかげで随分耐性がついてきたように思う。こうして一人で知らない店に行ってみようと思えるぐらいには。

実際は：こんな時間つぶしもただの現実逃避に過ぎないことも頭では分かっている。それでも、何かに集中していないとすぐに死にたくなるから。

二人を放り出して私だけがのうのうと生きているなんて、そんなのは他の誰かに言われなくたって許されないことだと十分すぎるほどに分かっているんだ。

でも、過去をいつまでも引きずっていても前には進めない。いつか捨て去る日が来る。だったらそれは早い方がいい。

「いらつしやいませ！お好きな席どうぞー」

憂鬱がまた顔を持ち上げてきだしたのと同時に、渋谷の駅地下にあるカフェに入店。ルブランと違っておしゃれで洗練された内装だが、私は別に写真映えを欲してここに来たわけでは無いので、ただ己の食欲を満たすためだけの行動に専念する。

適当に空いているカウンター席に座り、予め決めていた注文の品をウェイトレスに伝えて待機。

どうやらここはカラフルでデコレーションもりもりなパフエやらシエイクやらが有名ならしい。まったくそつちに興味が無いわけじゃないけど、今日は晩御飯をここに求めてやってきたんだ。目当てはデザートではない。

その後十分も待たぬうちに注文した商品が私の元へと届けられ、想像以上の大きさに少し驚く。

私が注文したのはこの店の名物である「ハンバーガー」なわけだが……その大きさを
るや。多分私の顔より大きい。両手で持っても少しバランスを崩せば全部具が滑り落
ちそうだ。

「……ふむ」

まあデカいのを注文したのは私なので、大きいことは別に問題ではない。

写真も撮らずにまずは一口。デカすぎて殆どかじれない気がするが、その分中の具
も溢れんばかりに存在しているので味わうことに支障はなかった。

巨大なハンバーガーを黙々と食べ進めている間、周囲から謎の視線を感じることも
あったが、今は食事に集中する時。夜8時過ぎに女子高生が一人で巨大ハンバーガーに
かぶりついていて何が悪い。

「あの一……」

「……」

「すいません！」

「……」

「妻木さんっ！」

「……ん？」

美味しい晚餐を邪魔する声を無視してひたすらに食べ進めていたら何故か名前を呼

ばれたので、振り返って確認してみる。

「奇遇だね！こんなところでたまたま会うなんて！」

「…」

「…あれ、妻木さんだよ？人違いじゃないよね？」

「まあ」

「だったらなんでそんな反応薄いのか!？」

「食事中だから」

「ああ…それはそうか」

納得するのか。

心の中でだけツツコミつつ、残り半分ほどもあるハンバーガーに向き直る。

声をかけてきたのは、昼間教室で私に勉強を教えてほしいなどと言ってきた女子生徒。こんな場所で会う偶然もだけど、わざわざ声をかけるその勇気もなかなかだと思
う。

「つていうかですか…。よく食べれるね？」

「美味しいから、大丈夫」

「余裕なんだ…。妻木さん結構食べるタイプなんだね。細いから意外だなあ」

「杏にも言われた」

「え、なんか太らない秘訣みたいなの？」

「無い」

「体質なのかなあ…ずるいなあ…」

高巻さんも同じようなこと言ってたし、とお腹を抱えてへこむ彼女。別に彼女自身太つてもないし痩せても無い標準的な体型なわけだが、一体何をそんなに気にする必要があるんだろう。

「さつきから黙々と食べ進めてるね。しかもそんなに具沢山なのに指も皿も汚れてないし…どうなってるの？」

「良くしゃべるね」

「あ、もしかして邪魔だった？じゃああんまし喋りかけないほうがいいよね」

ようやく気付いたかと安心したのも束の間、いつの間にか手元のハンバーガーが残り一口サイズというところまでしか残っていないことに気付く。

「え、あれ？さつきまで半分ぐらい残ってたよね？」

「そうだね」

「は…一体その体のどこにさつきの巨大物質が…」

惜しみつつも最後の一口を放り込み、水で口の中をリセットしてから口元を拭く。そうして一息ついたところで、私は初めて彼女に対して真っ直ぐ身体を向けた。

正直もう一つ同じのを食べれそうだったけど、腹八分目というしここでとどめておくことにした。

「ところで、今日学校で言ってたアレって本気なの？」

「もちろん！だって成績一位なんて憧れるし、試験で満点なんてマンガでしかみたことないしー！」

「それでもよく私みたいな赤の他人にそんなこと頼めるね」

「確かに面識は無かったけど、でも妻木さんって結構校内じゃプチ有名人みたいなのところあるよ？」

「悪い意味で、でしょ」

「…あー、そういう話も無くはないケド。よくあの坂本とか雨宮とかといっしょにいるから、それで変な尾ひれついちゃってるだけだけどね」

やれやれ…どこで聞く話でもあの二人は厄介者扱いだな。

「とにかく、私は妻木さんに勉強が教わりたいの！だから、お願いします！」

「すごく暇な時だけね」

「すごくく！?!ただ暇なときは？」

「考えなくはない」

「えー？」

こいつは一度言葉を発する度に表情がコロコロと変わるな。顔がうるさいと言われるタイプっていうのはこういう人間のことを言うんだろう。モブのくせにやたらと自己主張が激しい。

正直いつて、この世界に直接影響を及ぼさない存在にかまっている時間はあまり無い。私の「計画」を達成するのに、残されている時間はあと一年もないんだから。

「なんか、妻木さんっていつつも考え事してる気がする」

「そう?」

「うん。今だって何か別のことを考えてたでしょ」

「まあ」

「むー…掴みどころのないなあ。ミステリアスっていうのかもしれないけど」

「…君はなにしにここに? なにも頼んでないけど」

「別にこの店に用があつた訳じゃなくて、妻木さんが見えたから入ってきただけだよ」

店側からしたらはた迷惑な話だ。責任もって私になにか頼ませるか。

店員を呼び彼女の分の飲み物を適当に注文してやるついでに、私も食後のコーヒーを頼んでおいた。またこいつと過ごす時間が伸びることにはなってしまうものの、不思議と悪い気はしていない。

「え、おごってくれるの?」

「そんなわけない」

「勝手に頼んだのに!？」

「飲食店入っておいでなにも注文しない気？」

私とは様々な面で正反対。普通なら私みたいな人間には近寄ってこようとしない人種だと思うのに、何故かこいつは警戒心ゼロで接してくる。

「しょうがないなあ。じゃここは妻木さんに乗せられてあげるから、今度絶対テスト勉強付き合っつてよ？」

「本当に暇だったらね」

「怪しいなあ…」

外見は平々凡々としたどこにでいる特徴のない姿で、セミロングの黒い髪と茶色い瞳というスタイルもまたそんな印象に拍車をかける。

勉強を教えてほしいと言ってきているが、果たして頭の方はどれぐらいなのか気になり中間試験の結果を聞いてみると、こつちもまあ見事に平均ラインだった。別に悪くもないけど特段良くも無い…という感じだろう。

本人はその現状に満足しておらず、もつと成績を伸ばしたいのだそうだ。

「あたしどうしても行きたい大学あって…でも正直いまのままじゃきついかもで」「分かったよもう。でも、本当に暇な時だけだからね」

「うん…お願いします!!」

のんきなイメージの拭えない間抜け面ではあるものの、お願い自体は至って真剣なものようだ。そのことがわかったからあまり雑にあしらうのも可哀想だと思つてしまった。

面倒だけど、たまにはこいつの相手をしてやることにしよう。私の教えをちゃんと理解できるかは疑問だけど。

「ところでこれって本当におごりじゃないの?」

注文した飲み物が届いたとき、彼女はそんなことを聞いてきた。

「もちろん。授業料と思つて」

当然私が奢る道理も無し。勝手に頼んだものとはいえせいぜい数百円程度自分で払つてもらう。

ひとしきりたわいもない話をした後、私たちは連絡先を交換してお互いの帰路について。その頃には、本来の目的であったハンバーガーの味はほとんど忘れてしまつていたし、なにより重大なことも話しそびれてしまつていたと、スマホを見て思い出す。

画面に表示された連絡先の登録名は、秋山^{あきやま}玲央^{れお}。

私は今の今まで彼女の名前を気にすらしていなかったことに頭を抱え、少し意識を改める必要があるかと反省しながらルブランへと帰った。

翌日：5月22日 日曜日

・ ・ ・ ・ ・

Yusuke：あのオタカラを盗み出すためにはどうすればいい

Ren：一瞬照明を落とした隙を狙うしかない

An：それ怖くない？試してみた時も、割とすぐ電気復旧してたよね？

Ren：一瞬だけだとしても、あの大量の警備の目を一斉に無力化できる唯一の手段だ

Yusuke：確かに、それは使わない手は無い、か

Ryuji：けど、電気落とした後はどうすんだ？まさか正面突破なわけではないよな

Ren：そんなどこかの誰かさんみたいなのは言わない

>あれは冗談だって

Ryuji：や、割と本気ぽかったぞ

Ren：照明を落とした後はアレを使う

An：アレ？

Yusuke：天井に吊るされていたフックか

Ren：そうだ

An：あれをどうすんの？

Ren：作戦は手分けして行う。具体的にはまず、三手に分かれる

Ren：照明を落とす係。フックを操作する係。そして、想定外のこと起きた時の退路確保の係

Ren：竜司には重要な役割を頼みたい

Ryuji：マジ？

Ren：予告状を出してパレスに潜入すれば、電源制御室にもおそらくシャドウが配備される。そいつらを引き付けてもらいたい

An：引き付けるって：どうやって？

Ryuji：んなもん、俺が本気で走ってやればいいだけだろ？上等じゃねえか！

Ren：頼む。だが無理はしないでくれ

Ryuji：任せとけて！

Ren：次は杏だ、竜司が敵を引き付ける間に制御室に忍び込む。

Ren : 祐介とモナでオタカラの真上にあるフックの場所で待機してもらおう。

Ren : 停電の合図は祐介に任せる。そうしたら杏が照明を落として、俺がぶら下がったモナごとフックを操作して下へおろす

> 退路は私が確保しておく。あのフロアは建物全体の行き止まりだから、誰かが居ないと包囲されるかもしれない

Ren : 大まかな流れはこんな感じだ。これから集まって、再確認しよう

.

翌日 : 5月23日 月曜日 予告日

才能が枯渇した虚飾の大罪人、

班目一流斎殿。

権威を傘に門下生から着想を盗み、

盗作すらいとわぬ、芸術家。

我々は全ての罪を、お前の口から告白させることにした。
その歪んだ欲望を、頂戴する。

心の怪盗団『ザ・フアントム』より

・ ・ ・ ・ ・

ある日突然、自分が開いている個展にこんな文面の予告状が大量に張り出されていれば誰だって動揺する。しかも、そこに書かれている罪状に心当たりがあるならばなおさらだ。

閉館時間内に忍び込んだモルガナによって会場内にばらまかれた予告状のせいで、場は騒然としている。斑目本人も、質の悪いいたずらだと判断してずいぶんとご立腹な様子だ。

「……これでいいんだな？」

斑目の様子を確認しに行つた喜多川が会場から出てきたが、表情はいたつて冷静だ。これから育ての親に免罪符を叩きつけに行くというのに、どこか吹っ切れたような雰囲気を感じる。

「散つていった多くの門下生のためにも、俺の手で終わらせなければ」

「行くぞ」

「うん！絶対成功させよ！」

「おうよ！」

「オマエラ、作戦の流れは頭に叩き込んだな？」

皆、一様にうなづく。

雨宮がナギを起動しパレスへと潜入。

「ショータイムだ」

・
・
・
・
・

作戦は全員が持ち場につくところから始まる。

ジョーカーがフックの操作盤、モナとフォックスがフック、スカルが制御室前、パンサーがその付近で潜伏、そして私が中庭から出口にかけての退路を維持。つまり、前回来たフロアには入らないから同じような気配がまだあるかどうかは分からない。

だから、なにが起きてもいいように私がこの作戦の土台の部分を担うんだ。

中庭にまで中からの警報音が轟いてくる。

ゲームなら、手筈通りにオタカラを盗んできた怪盗団が外伝いに逃げてきて中庭へ出てくる。そこで罠にかかる羽目になるわけだけど、私がいればそれは回避出来る。

「賊を発見！始末しろ！」

入口側から、大勢のシャドウがなだれ込んでくる。意外と数は多い。

十や二十なんてもんじやない。大々的に現実で予告状を叩き付けた影響で、警戒が強まるのは分かるが、にしたってこれは妙に多い。

みんなのペルソナのように魔法を使えない私の力じゃ、こうまで多いと少々骨が折れるかもしれない。まさか一体ずつナイフで仕留めていくなんて、

「思うわけが無い」

だからこそ、裏をつくのが勝負の理。

この世界に住む雑念の権化であるシャドウ相手になら、私はほんの少し……“自分”を思い出せる。

ナイフを握りゆつくりと歩き出す。

走り寄ってくるシャドウの群れと接触するまでにかかる時間は数秒。間合いの内に踏み込む必要はなく、全ての敵は待つているだけで私の元へやってきてくれる。

ナイフの射程は僅かなもの。リーチを犠牲に得るものは近距離での狙いのつけ安さと振りの速さ。

すれ違うように、まずは一体の首を裂いて敵陣の内側へと踏み入る。

乾いた笑いが自然と口から漏れる。

いくら個の力が強かろうが、たとえ弱者でも数でまとまっていた方が有利なのは誰の目にも明白で、その上私はこの身一つで全てを斬り捨てていかなければならない。そんな頭の悪い行為そのものに、自分で呆れてしまったただけだ。

決して他意は無い。

急所をつき一撃で確実に息の根を止める。それを連続して、組手の様に向かってくる雑魚シャドウを次々に滅していく。

案外この数でも、なんとかなるものだ。まだベルソナも使わずにいても余裕がある。ただひたすら斬って、斬って、斬り続けていくうちに、シャドウの肉体が裂ける音と

感触だけで頭の中がいつぱいになっていく。自分でも何をしているのか分からなくなってきた。

明瞭とは言い難い意識の中で、最後の一体に向けてナイフを突き出しチエツクメイト。気が付けば、あれだけ居たシャドウの大群は思いのほか一瞬で片付いてしまっていた。

拍子抜けしつつナイフの先端を弄りながら他のメンバーの到着を待つ。

が、までももみんなが来る様子は一向に無い。

「…」

心配なのはあるが、持ち場を離れて行き違いになるのだけは避けたい。ここはもう少し待っているのが正解だろう。

そう頭では理解しつつも…どうしても、この前感じた異様な気配のことが気になってしまう。やっぱりみんなだけであっちに行かせたのは間違いだっただか？でも、私がここに居なかつたら今頃出入り口が完全に包囲されていただろうし。

腕を組みどうするべきか思案している最中、待ちわびた声が中庭に響いた。

「お？（こ）（こ）…中庭か！」

「思った通り外に通じてたか！」

「あつりーサル！なんか外騒がしかつたけど、大丈夫だった？」

ジョーカー達が全員、美術館の奥から走って合流してきた。モルガナの背には大きな四角いものが入った風呂敷が背負われている。

「無事だよ。みんなも、オタカラも盗めたみたいだね？」

しばしの別行動から解放されて再会を喜び合う傍ら、モナが身体を震わせてうずうずしだしたのにスカルが気付く。

「ウニヤ……うううう……！」

「オイ……またなんかネコのテンションが……」

「んもう我慢できん！オタカラ、拜ませてもらおうぞー！」

予定調和的にモナがオタカラに魅入られて、その場で風呂敷を広げる。そこにあつたのはやはり、絵画とも呼べぬただの落書きが描かれた偽のオタカラだった。

そのことに気付いた皆からは少し離れ、この後何が起きるかを知っていた私は「大体このへん」と当たりをつけていた場所に立ち、起動して地上に出てきた電流トラップを思い切り蹴飛ばしてショートさせた。

正直此処まで派手にぶっ壊れるとは思っていなかった私は少し驚いたが、それ以上に、背後から現れたマダラメのシャドウのほうが驚いていたのは傑作だったのでよしとする。

「や、ニセモノだったとか色々言いたいことはあるけど今の蹴りで全部台無しだわ」

「いめん」

が、シリアスな空気を壊してしまったことにはとりあえず詫びておく。

「…フン。こざかしい鼠め」

憎らし気にそう吐き捨てたマダラメに向かつて、刀を携えたフォックスが一步踏み出る。

「思えば、お前を世話してやったのも、お前の母親を世話してやった縁だったな。あの女は体が弱かったが、その技術と才覚には目を見張るものがあった。だから、世話をしてやった。お前も、お前の母親も、全てこの私の『作品』だ！」

「何故、変わってしまった!? 有名になったからか!? 育ての親に罪を問わなくちやならぬ気持ちだが、お前に分かるか?!」

マダラメは口の端をクツと吊り上げ、警護のシャドウに何かを命じた。シャドウはさっきの偽のオタカラと同じような額を取り出して両手で掲げた。それは、フォックスが絵の道を志すきっかけになった『サユリ』によく似た絵だった。

「これは、本物のサユリだ」

世間一般に公開されている『サユリ』は、一人の女性を描いた作品だ。その女性は、自分の手元に目線を落とし、愛おしそうに、どこか寂しそうに…そんな表情をしている。そしてその手元は灰色で塗りつぶされていて、女性が一体なにを見ているのか、なぜそ

んな表情をしているのか、分からないようになっていく。

だが今斑目の傍にいるシャドウが掲げるそれには、手元に描かれたものがはつきりと写っている。

女性は己が手に赤子を抱いて、慈愛のこもった目でそれを見つめていた。

「母さん……？」

「そりゃあそうだ。なぜならこの絵は、お前の母親が描いた自画像なのだからな！」

サユリは今、斑目の描いた絵として世間には認知されているが、実際はコレだ。結局この男は何一つとして、自分の力で成功させては来なかった。

「死期を悟った母親が、去り行く我が子への思いを描いたもの……それがサユリのたたえ、表情の神秘の正体なのだ！」

ここでフォックスはようやく思い知ることになる。自分を育ててくれた男は、芸術家からペテン師へと墮落したのではなく……初めから腐り切った悪鬼外道であったことを。

ペルソナに覚醒した時にはそこまで気づいてはいなかっただろう。だからあの時私には、ここでフォックスが真実を知ることになるのを知っていたからこそ複雑な気持ちでいた。彼の心の内は誰にも真に理解されることは無いと思う。

「何故絵の中の赤ん坊を塗りつぶした？」

「演出だよ。赤子を塗りつぶせば、女の表情の理由が謎になる。そこに、俗人どもは惹き

つけられるのだ。芸術の価値など、全て思い込みに過ぎんのだよ」

「外道が芸術の世界を語るなっ……！」

「……あくまでも、楯突くか！ならば、私の作品となった祐介は、私の輝かしい未来のため刈り取らせてもらうぞ！」

その一言に、フォックスの手がピクリと震える。

「……フォックス？」

それに気が付いたモナが小さく問いかけると、フォックスはゆっくりと確かめるように言葉を口に出した。

「作品は……一つの例外もなく潰したと……？」

真実を知っている身からすれば、これほど胸糞悪い話も無い。静かに事の成り行きを見守ることにした。

「母さんもなのか？」

「……たまたま私の目の前で、発作を起こした。すぐに思った。ここで助けを呼ばず見過ごせば、絵をしながらみなく手に入れられるとな」

「そうか……貴様が……母さんを……」

十数年越しに告げられた真実。自分の親代わりだと思っていた人間が、実は親を殺したも同然の悪党であったと知ったフォックスの激情はもう誰にも止められない。

「礼を言う、斑目。たった今、お前を許してやる理由が全て露と消えた」

感情に身を任せているのには違いない。だけど、それはただの怒りに身を任せた行為とは程遠いものだ。フォックスは斑目を改心させることを、自分の義務だと感じている。自分以外の、将来を奪われた多くの弟子や、才能を信じてきた人々のために、自分がやらなくてはならないのだと。

「…手を貸してくれ、みんな」

「任せろ」

「当然…！みんなで改心させよう！」

「一人で突っ走りすぎんなよフォックス！」

「…来るぞオマエラ！構えろ!!」

わたしなんかよりずっと崇高で硬い決意の持ち主だ。少しみんなが羨ましい。

「この世界の頂点は私だ！まさに至高…芸術の、神なのだあ!!」

マダラメの中の歪んだ欲望が肥大化し、ついにはカモシダの時と同じように人の姿を捨てた異形へと変貌する。

…が、その姿は私の知っているものよりも遥かにおぞましく、どこか既視感を感じざるを得ないものだった。

「さあ…塗りつぶしてやるぞ!!!」

「避けろっ！」

ジョーカーの声に弾かれた様に、皆一斉に身をかがめ水平に薙ぎ払われた巨大な刀の間一髪のところまで回避する。

おかしい…ゲームではこんな見た目じゃなかったし、そもそも武器なんて使ってたはず。

今のマダラメの姿は、球体関節のついたマネキンが四肢共にバラバラになって宙を浮いているようなものに変わってしまっている。それも、カモシダの時ようになり巨大だ。攻撃範囲は馬鹿にならない。

「斑目…他者を利用し自分の利だけを考える貴様は、貴様が描いた絵ほどの価値もない！！」

「とりあえずあの刀は厄介だな…注意して立ち回れ！」

両腕は胴体から離れてふわふわと浮遊しながら自立して動いているように見える。そのうちの一本…右腕は十数メートルもありそうな刀身の長い刀を持っていて、もう片方の腕は何も持っていない。

胴体と足も別々に分離して動いているが、特に変わったところは見受けられないし、顔に至っては爺の顔面が醜く歪んでいるというだけで戦う力を持っているようには思えない。となれば、主力はやはりあの刀か。

「ゴエモンー！」

「キャプテン・キッドー！」

まずは手始めとばかりに、各々のペルソナがもつ属性魔法を刀を持った右腕目掛けて放つ。

ゴエモンの猛吹雪が一瞬敵の動きを鈍らせ、そこにキッドの電撃が直撃する。が、そこまでダメージを与えられている気はしない。

「さあ行くぞ…ゴミ虫どもめ!!」

今度は何も持っていない左腕が動きを見せ、掌の上に真つ赤に燃え盛る炎を生み出した。

なるほど、と合点がいった私とジョーカーは同時に駆け出し左腕にフォーカスを合わせて互いに攻撃を放つ。

「ネコマター！」

ジョーカーの召喚したペルソナが生み出した疾風が私の足元に起こり、浮いているマダラメの左手に手が届く位置まで迫る。その後を追って、ネコマタも自身の脚力のみで跳躍し同じく左腕に肉薄。

なんとか届いた腕でしがみつき、そのまま腕の上によじ登ってペルソナを心の中に呼び起こす。

仮面が燃えるような赤色と共に消え、身体の周りにノイズが走る。ペルソナとしての力と自分自身の肉体の力を合わせ、肘の関節部分に向けて全力でナイフを振り下ろす。

プラスチックのような見た目とは裏腹にかなりの硬度を有していたことが、手から伝わる感触で分かる。けどそんなのはお構いなしに振り切り、肘とそこから先に腕を両断することに成功した。

落ちた左腕をネコマタが押さえつけて地面に激突すると同時に、掌の中にあふれ出ていた炎が爆発する。

「大丈夫か？」

「問題ないよ」

一番近くに生身で居た私は爆風で少し吹っ飛ばされたが、ダメージは無い。ジョーカーに無事を伝え、次のターゲットへと目を移す。

一見戦闘能力を持たなそうな部位でも、さっきの左腕のように魔法を使ってくる可能性はある。

「その程度でいい気になるなよ小僧ども……!」

「じいさんの負け惜しみほど見てて気色わりーもんはねーな!ぶっ放せキッドオ!!」

再び放たれたキッドの電撃は胴体に向けて放たれ、それは直撃したかに見えた。

しかしその直前、電撃が触れる手前で急に軌道が直角に変わりモナの方へと返ってき

た。

「うわっ…!? あぶねーだろスカル!」

「わりい!けど、今体の部分から跳ね返って来たよな…!」

「…来るぞ!」

モナとスカルがじゃれあう隙も無く、続けて右腕が刀を縦に振り下ろして追撃を狙ってくる。

やはり、見た目は違ってもゲーム通り、各部位ごとに役割が分かれていると見た。さっきの右腕はおそらく魔法担当で、左腕は物理攻撃担当。胴体は守りの硬い部位で、そうくると足はどういう役割が考えられる? 腕も体も自立していそうだし、移動のためってわけではない。

そう思い足の動きをつぶさに観察していると、くるぶしや膝の関節部分から少し、黒い液体のようなものが漏れ出ていることに気付いた。その正体に心当たりはすぐについた。ゲームなら、浴びると全身の力が抜けて無防備になるやつだ。あれは危ない。

「みんな、足の動きに注意してて」

「足? 足がどうかしたのか?」

「分からないけど、多分気を付けたほうがいい」

「…分かった。リーサルが言うなら信じるよ」

「じゃあ先に足からぶつ壊しちまうか？」

「それも有りだね」

「了解した！ゴエモン！」

仕掛けられる前に押し切ってしまえ。方針が決定した瞬間、そう言わんばかりの猛攻が始まった。

ゴエモンの仕込み刀が足の関節を狙うも、それは右腕の刀によつて弾かれる。そんなのはお構いなしに、こっちは数を利用した波状攻撃で防御を掻い潜り右足を破壊。

浮いているくせに片足が落ちたことで態勢を崩し始めた隙に、ゴエモンの斬撃が今度こそ左足の膝裏に命中。バランスを崩しながら胴体も地面に倒れ、広い中庭に轟音と土煙が舞う。

「くっそ…なんも見えねえ！」

「警戒しろ！まだ腕は生きてる！」

視界が煙で遮られ仲間の位置も確認できないが、ジョーカーの声は不思議と通る。

直前に見えた光景から油断しかけていたみんなの心はこれで引き締めなおされ、これは追い詰めたというよりもむしろピンチである可能性の方が高いということに気付く。

敵の動きが見えない中、微かに岩を擦るような重い音がした。

「伏せてっ！」

咄嗟にそう叫び自分も限界まで姿勢を低くする。

次の瞬間、頭上を重い風切り音とともに銀色に光る刃が通り抜けていった。一拍遅れて巻き起こった旋風で土煙は払われて、腕と頭と胴体だけになったマダラメの姿があらわになる。

「儂は神…：そう…：わしはかみなのだ…！」

「まだそんな自惚れを口にできるとはな」

「ええい…：黙れガキどもっ!!この私に歯向かったことを、地獄の底で後悔するがいい!!」
倒れたままの体勢でマダラメは、刀を地面に突き刺した。その周囲からどす黒い液体が沸々と湧き出し始める。

一旦距離をとって様子を見てみると、さつき破壊したばかりの左腕がその液体の中から復活してきた。やはりその復元能力もそのままだったかと呆れていると、モナがサーベルを振り上げながら納得したようにこう言った。

「なるほどな。複製や贋作はお手の物ってわけか」

「ホンっと笑える」

再起した左腕の掌に再び燃え滾る炎があふれ出してすぐ、右腕の刀がフォックス目掛けて振るわれる。

奇跡的な反応を發揮しなんとかそれは回避できたが、その隙を狙うように溜め込まれ

た炎が投げられる。体勢を整える時間は無く、フォックスのペルソナとの相性的に炎攻撃が直撃するのはまずい。

そう思いフォックスを庇おうと私が動き出す前に、パンサーのペルソナがフォックスとの間に立ちはだかりマダラメの炎を自らの炎で相殺する。

「倍返しでいくよっ！カルメン！」

カルメンの手に、喰らった分の炎よりも一回り大きい焰の玉が出現しマダラメの右腕に高速で放たれた。見る間に関節部は黒く焼け焦げ、刀を持った腕も地面へと墜ちた。パンサーも中々にいいセンスをしている。

「キヤー！ステキだぞパンサー！」

「さあ、残りも一気にやっちゃおう！」

「あっちの腕は魔法の通りが悪そうだ。スカル、頼んだ！」

「おうよ！！ぶっこむぞオラあ！！」

ジョーカーの指示が飛び、スカルが雄たけびを上げながらキャプテン・キッドを走らせる。それに慌てて魔法をうつ体勢を取り出した左腕の行動は、キッドの前では圧倒的に遅すぎた。

結果、弱点を見抜きはしたものの放たれることのなかった疾風魔法は空中で霧散し、船ごと突っ込んできたキッドの体当たりによつて左腕は美術館の壁まで吹き飛ばされ

て粉々に砕け散った。

「はっ！どんなもんよ！」

「畳みかけるぞ！次は胴体だ！」

己の力が全く及ばないことに委縮し始めたマダラメに、かけてやる容赦などどこにもない。

ジョーカーの号令に合わせて全員で一斉に胴体に向けて攻撃を放つ。けれど、そのどれもが傷をつけるには届かない。

「ふ、ははは……ど、どうだこの、鉄壁の守り！何物もこの守りを崩せない以上、無限に復元を続けて貴様らを……！」

「Chara」

どくりと、鼓動の音が頭に響く。

私はCharaを胴体部の真上に召喚し、振り上げたナイフを突き刺す。

今まで、一切の攻撃を受け付けなかった鋼の肉体にひびが入る。

そうして開いた穴にポケットから取り出した小型の爆弾を放り投げる。これは昨夜、雨宮と一緒に道具作りをしている最中にふと思いついてレシピをアレンジしたものである。

ボン、という安っぽい効果音とは裏腹に内部からの攻撃は思いのほか効果的だったよ

うで、ついには胴体部も消滅し残ったのは泣きそうな顔をした斑目の歪んだ頭部のみ。

トドメを差すのもなんだか気持ちが悪いなと思いつながら佇んでいると、ジョーカーが隣に立って聞いてきた。

「なんで今の攻撃は通ったんだ？」

「ナイフの刺し方にもコツがあつてね」

「今度教えてくれ」

「そのうちね」

さて、そろそろ悪あがきも幕引きとなるだろう。

全員でゆつくりと、動けなくなつて震えるマダラメの頭を包囲する。恐怖で震えているマダラメは、わざとらしく声を震わせて命乞いをしてくる。

「た、頼む！いいい命だけはあああ…!!」

「…」

でも、残念。

嘘つきに嘘はきかない。

ジョーカーにだけこつそりと教えておいて、包囲網を狭める。

一歩ずつ。

そして、ついで目の前にまで迫つた瞬間マダラメは急に大口を開けた。

その口の中に薄暗い光が集っていき、限界まで溜まったそれが私たちに向けて放出される。しかしその光線の軌道はマダラメの思い描いていたものとは正反対のものとなる。

「残念だったな」

「あああああああああああああああああああ!!!」

アルセーヌの呪怨の力によって光線は反射され、斑日本人の顔を焼く結果となった。今まで多くの人間を騙し通してきたマダラメだったが、私たち怪盗団はもうそんなペテンには引つかからない。光線の通った後は派手に道が抉り取られていて、しよぼくれた爺の姿に戻ったマダラメがそこに倒れていた。

ここからはもう私の出る幕などない。後はフォックスの役目だ。

「芸術は所詮カネの世界。金がなければ何もできない。なあ祐介、お前なら分かるだろう?金のない画家は惨めだぞ?もう、戻りたくなかっただけなんだよお!」

フォックスは、仮面の奥に失望と怒りの入り混じったぐちゃぐちゃな感情を隠し、倒れ込むマダラメの胸倉を思い切り掴んで立ち上がらせる。

「ひいっ」

「お前はもう終わりだ。このおぞましい世界と共にな」

「い、殺さんでくれ!頼む!」

「現実に戻って、今までの罪を告白しろ。全てだ！」

「はじめに命乞いを続けるマダラメから苛立たし気に手を離し、フォックスはそう吐き捨てた。

今、彼がどんな気持ちでその言葉を口に出しているのかは、私には分からない。でも、あれだけ親や師と慕ってきた存在に対して引導を渡す役割を担うことに、少なくとも責任感を感じているんだろう。

もちろんその行為は自分のためでもあるけど、きつとそれ以上に喜多川祐介という男の中には、自分が終わらせなければならぬという使命感のほうが強かったはずだ。

フォックスは強い。自分の意思で親との決別を決意し、そして成し遂げた。ただ逃げているだけの私とは大違いだ。

「こ、殺さんのか……？」

「約束しろっ！」

「ひっ！わ、わかったから……！」

そうフォックスが凄むと、マダラメはようやくその手の中に掴んでいた本物のサユリを手渡した。と同時に、パレス全体が大きく揺れはじめ崩壊が始まった。

「始まったな。脱出するぞフォックス！」

「……ああ」

「まっつてくれ祐介……わしあこれからどうすれば……なあ!? 祐介……!!」

車に変身したモナに全員が乗り込み、最後にフォックスが乗車するのを確認してからジョーカーがアクセルを踏む。

すがるように最後の弟子の名を叫び続けるマダラメに、フォックスはついに振り返ることはなかった。

・ ・ ・ ・ ・

パレスから帰還した私たちはそそくさとアトリエから離れ、一先ず仮の拠点としている渋谷駅の連絡通路まで戻ってきた。

戻ってきてからずっと、喜多川は魅入られたようにサユリを眺めていた。今や現実にある本物は斑目によって塗りつぶされてしまっているわけだから、本当のサユリは、こっちの絵だけということになる。認知世界にあった偽物のはずだったのに、とんだ皮肉だ。

「これが、母さん」

「すつごく綺麗な絵だね」

「ああ」

横から杏が覗き込み、同じように食い入るようにサユリを見つめている。確かに、知識のない者が見ても大半の人間はこの絵を「綺麗」だと表現するだろう。単純な見た目だけの話ではなく、まるでそこにいるかのような女性の心を描いた絵だから、そう感じさせるのかもしれない。

「顔なんてろくに憶えていないはずなのにな」

「母さん……とかつて、こんな場所で泣き出すんじゃないぞ？」

「……感謝している。みんなが俺を引き込んでくれなければ、この絵を見ることは一生叶わなかっただろう。今更こっちのサユリが本物として認められはしないだろうが、それでも俺は満足している」

「うん。祐介に届いただけで、きつとお母さんも満足してるよ」

「確かに、母のこの表情、名声など欲していたはずもないか」

「“サユリ”は母親の名前か？」

「いや……斑目がつけた、適当な名前だろう。本名なら盗作がすぐにはれるからな」
「そうか。祐介は、これからどうするつもりだ？」

「……ここに来るまでの道のりで買った缶コーヒーを飲み、雨宮がそう問いかける。」

「そういうみんなは？」

「俺たちはこれから先も、*“これ”*を続けていくつもりだ」

「なぜ、そんなことを？」

「鴨志田の話はしただろ？みんな、卑怯な大人に喰われる側だったけど、逆転できた。だから、同じような境遇の人を、勇気づけてやりたいと思う」

「勇気か。与えてどうする？勇気があれば、幸せになれるのか？」

「それはやってみないと分からない」

「己次第、ということか」

心の怪盗団は悪人の歪んだ心だけを盗む。それは虐げられてきた人々にとつての救いにもなるし、周囲の人々への意思表示にもなる。自分だけでは到底解決できないなにかに遭遇しても、立ち向かう勇気があればなんとかなるかもしれない。そう思い心を入れ替える人だって、今はまだ少ないかもしれないけど、きつといると思う。

喜多川は少し考え込み、やがて答えを出した。

「俺も続けよう…怪盗を。確かに弱っている人々を助けることにも繋がるし、なにより異世界を探索できれば着想の幅も広がるだろうしな」

「絵、続けんのか」

「当然だ。まだ妻木さんの絵も途中だしな」

「え、あれって結局脱いだのか?」

何故かモルガナが興味津々に聞いてきたので素直にそうだと答えると、尻尾と耳がピョンと伸び坂本が飲んでいた炭酸飲料を吹き出した。

「汚いぞリユージ!」

「オマエがいきなり変な話すつからだろ!」

「この程度で動揺すんなこつちが恥ずかしくなるだろ!」

「完成したら見せてやる」

「別に頼んでねーよ!」

「もううっさいっての!人挟んでわめくな!」

喜多川と杏を挟んでいつものじゃれあいが始まり、私と雨宮は苦笑いしながら周囲の目線から逃げるように通路の端に寄った。

「なあ、妻木さん」

「分かってる。後で」

「…ああ」

そして、パレスの中に居た時からずっと何か言いたげにしていた雨宮が口を開き、なんのことも察した私は咄嗟にそれを遮った。今、ここで話すことじゃない。

私が感じていた気配の正体は判らなかつた。でも、間違いなく意志を持って私の邪魔

をしようとしていることだけは確かだ。マダラメのシャドウの姿も大きく変わっていき、予定していたよりもはるかに強かったことに、きつと関係がある。

ジョーカー達だけで先にオタカラの元に行かせたのには、あの気配は怪盗団ではなく私のことを見ているという、ある種の確信めいたものがあつたからでもある。もし中庭に気配の正体が現れたのなら、私一人でなんとかするつもりだった。

だが実際はそうはならず、ジョーカー側でも特に異変はなさそうだった。

『気を付けろって?』

『気を付けてるのは雨宮だけでいい。あの時、何かが待ち伏せてた気がした』

『みんなには言わなくていいのか?』

『余計な不安は与えたくない。そもそも、ただの気のせいかもしれないし』

『分かった。じゃあ後で…ところで、本当に脱いだのか』

『…気になるの?』

『それなりに』

『脱いだけど、そういうこと真顔で言わないでほしい』

『お互い様だろ』

社会科学見学

「それで、どうだったの?」

斑目のパレスからお宝を奪ってきたその日の夜、私と雨宮はコインランドリーで自分たちの分の洗濯が終わるのを待っていた。

震える洗濯機を眺めながら、ポツポツと言葉を交わす。

「特に、妻木さんの言ってたみたいなの脅威は感じなかった。オタカラを奪う作戦も邪魔はほとんど入らなかったし」

「そう。じゃ気のせいだったかな」

「いや…」

私の言葉を否定して、「雨宮は続ける。

「確かに作戦当日は起きなかった。けど、言われてみれば確かに、初めてあの場所に入った時妙な気配を感じた気がする」

「…」

作戦の前日にみんなで会議をした後、私は雨宮にだけ自分の感じた気配の話を伝えていた。あまり警戒しすぎて逆効果になることは避けたかったし、なにより真に理解でき

そうなのは雨宮だけだと思ったから。

気配を感じたことは間違いない。そのことを裏付ける根拠は私の中だけにあるものだけど、あの斑目の姿。

記憶の中にあるものとは随分違った。私の知らない何か干渉していることはまず間違いない。

それに、斑目の口から「黒い仮面」の話が出なかったことも、もしかしたら関係があるかもしれない。なるべく記憶通りの流れからは出たくない訳だけど、この時点で少しづつ歪みが出てきてしまっている。

「何か知ってるのか」

「別に何も。私だって分からないよ」

当然、この世界に生きる人間の殆どと比べれば、何も知らないわけじゃない。でも所詮は私もみんなと同類。世界の内側から知れることには限界がある。実際、妙な気配のことにはなんの心当たりもないのだから。

雨宮は、やはりというか勘が鋭い。

そもそも、なぜ私が出して惣治郎に拾われてるのかも、雨宮はよく知らないのだから勘ぐることも当然だとは思う。怪盗団としても、坂本や杏のように純粹に信頼されるとは、自分でも思っていない。

少し気まずい空気のまま、ランドリーには洗濯機の稼働音だけが響く。
「雨宮」

ランプが点滅し、私の分の洗濯が終わったことを知らせるアラームが鳴った。下着の類もあるが特に気にせず取り出し、去り際に告げる。

「明日、メメントスに行こう。2人で」

「どうして？」

「力をつけるのに越したことはないでしょ？斑目の改心が済んで次のターゲットが見つかるまでに、出来ることはしておきたい」

「それは願ったり叶ったりだが、貸しになるのか」

「話が分かるね。じつは、私と取引してほしいんだよね」

「取引？」

事態は思っているよりも急速に進行している可能性がある。のんびりしていたら、必要な時にみんなを守れなくなるかもしれない。今この世界に起きている異変は、間違いなく私の存在によるものだし、その責任は果たさないといけない。

もう二度と、私のせいにはさせない。

翌日：5月24日 火曜日 メメントス

放課後、私と雨宮は下校しそのままメメントスへと直行した。

改札を下りシャドウが跋扈する上層へと足をつけて振り返ると、いつも通りのポーカーフェイスで佇むジョーカーは、

黙って武器を構えた。躊躇のないその様子が少し嬉しく感じる。

私はナイフを逆手に持ち、雨宮に見せつけるように掲げる。

「マダラメのシャドウと戦った時、聞いたよね」

当然なのだが、ジョーカー含め怪盗団の面々の武器の振り方は全て我流である。己の中のイメージ通りに動けるのはいいが、より実践的な戦い方も、知っておいて役には立つはずだ。

それに、ジョーカーと私の得物は特徴が似ているから、この知識は活かせると思った。「ナイフの振り方、口で教えようと思ったんだけど、やっぱり体で覚えてもらう」「どうして感覚でナイフの使い方が分かるんだ？」

真つ当なツツコミは無視してまずは握り方から。

ジョーカーの手を取って指の置く場所や力の入れ方を教えて、多分コンクリで出来るメントスの壁に短剣を突き立てるよう言った。するとまあ、予想はしていたが一発で成功させてしまった。

砂に木の棒でも突き刺すかのように、真っ直ぐジョーカーの短剣は壁に突き刺さり、今度は全く抜き出せなくなっていた。しようがないので私が引っこ抜いてやると、信じられないと言った顔で私のことを睨んできた。

ジョーカーのポーカーフェイスを崩せたのに満足した私は、引き抜く時のコツもジョーカーに教えておいた。

「これも感覚で？」

「そうだね」

私ともう一度壁に突き刺したナイフを抜き取るところを見せると、それだけで力の入れ方を理解してジョーカーは簡単に再現して見せた。人間、大抵のことは知識が有ればそれなりに出来るものだが、こいつの場合は才能も作用しているだろう。

短い刀身の得物での巨大な敵の相手取り方を学んだところで、後はそれを実戦の中でスムーズに行えるようにしなければならぬ。

ここまで私は特に具体的なレクチャーなどはしておらず、ただいつもの様にナイフを使ってコンクリの壁を弄んでいただけ。

つまりジョーカーの我流とさほどは変わらないということだけど、私はそれでいいと思っている。下手に他人のやり方を自分の体に馴染ませるよりも、よっぽど効率的だ。知識を得た上で、それを自分なりにモノにする。

「適当にそのあたりのシャドウで試してみて」

ここはメモメントスの入り口に最も近い場所だ。ジョーカー一人でも問題ないだろうと、壁にもたれかかり持ち込んだ板チョコをかじる。

遠目で見た限りでも、明らかに一撃一撃の威力が向上しているのが分かる。単純なレベルアップとは別に、こういった基礎知識のようなものがあれば様々な状況で応用がきいて何かと便利だし、今後ジョーカーなら有効活用してくれることだろう。

身体全体を使った大きな動きの中に、さつき身に着けた手先の動かし方も加わってよりテクニカルにシャドウを切り倒していくジョーカー。あらかた殲滅しおえた後こちらを振り返って聞いてきた。

「こんな感じか？」

「いいんじゃない。後は咄嗟の時に使えるようになるまで、しばらく実戦で意識してればいい」

「なるほど」

ジョーカーは手のひらの上で感覚を確かめるように短剣を弄びながら、私の元へ戻っ

てくる。

「今はこれだけに集中してるから出来てるが、実戦の中で使えるようになるにはもつと習熟しないとな」

「それが分かかってるなら十分。ところで、昨日言ったこと覚えてるかな」

「取引か？」

私は無言でうなずき、仮面を取る。

「私はこれからジョーカーに教えてほしいと言われたことにはできるだけ応える。その代わりに、私にも教えてほしいことがあって……」

私は『力』を使わずにこの先もやっていきたいけど、そのままじゃいざという時に仲間を守れない。私もなにかしら、こっちの世界で努力して力を得る必要がある。

隣に立つわたしを見て、ジョーカーに取引を持ち掛ける。

「わたしも魔法が使えるようになりたいんだよ」

「魔法か。アルセーヌの“エイハ”とか？」

「そう」

「……と、言ってもな」

そう、私のペルソナとして存在しているCharacterは、厳密にはペルソナでは無いことが最も大きな理由なのだろうけど、みんなが使うような魔法は使えない。

スカルのキットが放つ電撃も、パンサーのカルメンが生み出す火炎も使えない。そこで、特訓の対価としてジョーカーにこの事を提案してみたわけだけど、反応は思った通りというか、自分自身でも使い方はよく分かっていないそうなのだ。

ペルソナを心に宿したその瞬間から、まるで昔から扱っていたかのようにペルソナに魔法を使わせることができるようになっていたらしい。

「その答えは大体予想できたけど、なんとかならないかな」

「とりあえず、使えないって認知を消すところからじゃないか？」

言われてみれば確かに、その理論は筋が通っている気がした。

さつそく力を込めた方向へ炎が発するイメージを抱き精神を集中する。すると、炎とは言い難い原色まんまの赤色が地面で爆ぜて派手なクレーターを作った。

お互いに言葉が出ず、ただ目を見合わせる。

“ だ。 ”
こういう状況のことを上手く言い表す言葉があったはず。確か、 “ 思ってたんと違う ”

軽く悪態をつきながら再度チャレンジしてみると、今度はさつきよりもはるかに大きい爆発が起き、周囲のシャドウがクモの子を散らすように私たちから離れていった。

「違うよね、これ」

「ああ。違うな」

イメージしたのはカルメンの操るような火球。実際に出たのは炎とは似ても似つかぬ謎エネルギーの爆発。色は、私の力を使って生み出すナイフと全く同じで、残り香のように地面に留まり続ける赤い糸状の光はやがて宙に散っていく。

どうしても、私にこの力を忘れることは許されたいらしい。

「リーサルは、どうしてもこの力を使いたくないのか？」

「まあ……」

ナイフを縦に持ち力を籠める。

みるみるうちに刃は真っ赤に染まっていき、私と雨宮の仮面を照らす。

なにも知らぬ常人が見ても、底知れぬ不安を煽るこの赤色のルーツは、私ではない。

人の持つ狂気を表したかのようなこの力は、まさしく外の世界からもたらされた狂った心の力そのものだ。きつとジョーカーが見ても、この赤色には得体の知れない気味悪さを感じているはずだ。

そう思いジョーカーの顔を覗き見るも、その不安げな視線は赤く光るナイフではなく私自身へと向けられているのに気付く。

その理由にはたと気づき口元を押さえる。

「別に隠さなくてもいいと思うが」

「……」

「それも個性だろう」

もしかしたらこの力こそが、生まれ持った私の本質なのかも知れない。でも私はそうじゃないと信じている。この力は所詮、与えられた力で、本当の自分はどこかに置いてきてしまっただけなんだと、思うことにしている。

「妻木さん」

「…ん？」

ふと、沈みかけていた意識がジョーカーの声で引き戻される。

「考えすぎも良くない。まずはひたすら反復練習だ」

「そうだね。もう少し付き合ってくれる？」

「もちろん」

それから私とジョーカーは、集中力の続く限り練習に打ち込んだ。ジョーカーにはアルセーヌを召喚してもらい、ひたすら呪怨属性の魔法を目の前で打ってもらう。そしてそれを、Charaを使って見よう見まねで再現しようと試みる。初めは何度繰り返しても全く変化が見受けられなかったが、ある時から急にそれっぽい奴は出せるようになってきた。

アルセーヌの顔に浮かぶ燃え上がる炎を見つめているうちに、なんとなくなのだが呪怨というものの概念を理解できた気がした。

一括りに呪怨と言っても、その種類は種々あるはず。アルセーヌのそれは、ジョーカーの最初の怒りから生まれた存在だから、理不尽に抗う意志こそが呪怨という形をとって攻撃に転用できているのだろう。

そう思つて、私もこのままならない状況への怒りを呪怨に変えて放つイメージを練つてから力を籠めた。すると、さつきまでの真つ赤なエネルギーではなく、アルセーヌの使うような赤黒いエネルギーが目の前で爆ぜた。

思わずジョーカーの方を振り向くと、同じように目を見開いてこちらを見つめていた。

一拍置いて、ふつと柔らかな笑みが漏れた。

ジョーカーが文句の一つも言わずに先の見えない練習に付き合ってくれたおかげで、この世界での魔法の仕組みを、多分だけど理解できたように思う。

当然だが発動するのはペルソナとして召喚するCharacterのほう。しかし例外はあつて、自分自身の中にCharacterを呼び出した状態では、私の体で魔法を放つことも出来た。

イメージを練ればより様々な形で呪怨を発することが出来るし、戦略の幅は広がったことだろう。

「なんだか新鮮なものも見れたし、今日は収穫あつたな」

「なんのここと?」

同じく今日ここに来た意味はあったと満足していると、不意にジョーカーがそんなことを言いだした。新鮮なものとはなんのこことを言っているのか分からず聞いてみると少し考え、「秘密だ」とだけ返ってきた。

普段から私が他人にしているような態度だが、いざ自分がされると怠いものである。

「まだまだここからだろう? 続けよう」

ペルソナの召喚には精神的な負荷がかかるものだが、集中力にはまだ余裕がある。もう少し、浅瀬のシャドウぐらいなら二人だけでやっても問題ないだろう。

楽観的に考えた私たちは、それぞれの特訓を兼ねてメモントスで疲れ果てるまでシャドウと闘い続けたわけだが、現実に戻ってきたのはそれから数時間も後のことになってしまい、惣治郎からお小言をもらってしまふのだった。

・ ・ ・

夜：ルブラン

「こんばんは妻木さん。足はもう大丈夫？」

メモントスでの特訓から帰ってきてから、私と雨宮は二人でルブランのカウンター業務を手伝っていた。そうしろと言われたわけでは無いが、帰るのが遅れた反省のつもりだ。

すると、少しの間顔を見ていなかった武見が来店し、入り口から二番目のカウンター席に腰かけた。注文は何も口にしていないが、惣治郎は慣れた様子でコーヒーを淹れ始めている。いつも同じものしか頼まないだろう。

「おかげさまで」

「今日は雨宮君も一緒なのね？勤勉でいいわね、マスター」

「まあそれなりに助かってますよ」

「ニヤフ。だつてよ二人とも」

ソファに置いたままのカバンから顔をのぞかせたモルガナの鳴き声に惣治郎が気づき、雨宮の上に持つていけと命じる。

やれやれと肩をすくめつつ、惣治郎は再び手先に集中し始め、武見は階段を上がっていく雨宮の背中を見ながら静かに微笑んでいた。

「ねえ。もし間違つてたら申し訳ないのだけど」

そんな武見がカウンターに立つ私に向き直り、テーブルに肘をついて質問してきた。

「あなたのお父さんって、もしかして医療関係者だったりする？」

「お父さん」という単語を耳にした瞬間、ピクリと指先が跳ねた。

武見の視点からは見えなかっただろうから、凶星を知られずには済んだ。あまり言葉を濁しても疑われるだろうと判断し、私は一瞬の沈黙の後すぐにそれを否定した。

武見の目は別に探ったり疑ったりしているようなものではなかったが、静かに、確信を持ったような雰囲気からは少しだけ圧力を感じた。

この人にも世話にはなつたけど、それよりもあの二人に迷惑をかけるわけにはいかない。繋がりはできるだけ絶つておかないと。

「そう。昔の知り合いと苗字が同じだったから、もしかしたらつて思つてね」

「部門も一緒だったんですか？」

「いいや？ 私は内科だけど、あつちは外科だったね。脳のやつ」

…。

「つたく、開店中は店の中うろつかせるなよ」

「すいません」

脳外科医で私と同じ苗字なんてほとんどいないだろうし、武見は間違いなく私の父親のことを知っているとも見て間違いないだろう。確かに、私の父は医療関係者だし、外科医で、脳のやつ、だ。

けど、それを肯定してしまえば、子どもが家を出ているという事実が他人に知れることになる。それはとてもリスクを伴うことだ。私が家出していることがいろいろな人間にまで知れたら、それに付随して余計な真実まで暴かれてしまうかもしれない。

「でもそつか。人違いか」

「はい。残念ながら」

「まあ、あなたが元氣そうで安心したわ」

惣治郎から受け取ったコーヒーカップを差し出すと、武見は短く礼を言いゆつくりと吟味を始めるまでもなく、水同様にぐびぐびと一気に飲み干してしまい、惣治郎がもともと渋い顔を更に渋くする。

味や香りなんかよりもカフェイン摂取の意味合いがほとんどを占めていそうだ。少しかだけその気持ちは分からないでもない。

あつという間に一杯を飲み干した武見は早々に立ち上がり、会計を済ませて店を出ようとした。しかしその直前、何かを思い出したかのように雨宮のほうに振り向いて何かを放り投げた。

雨宮が、受け取った何かと武見の顔を交互に見合わせて疑問符を頭に浮かべていると、武見はさも当たり前かのような口調で続けた。

「ソレ、疲労が溜まったときに飲んでみて。次に来るときにはその時の感想を聞かせる

「と」

「はあ……」

「それじゃ。ごちそうさま」

パタリと扉は閉められ、店内はしんと静まり返った。雨宮の手元を見ると、一つの茶色い小瓶が握られていた。

「なにそれ」

「さあ」

「さあ……つて大丈夫なのかよ」

「多分。これまでも何度かあったから」

「お前普段あの先生のとこでなにやらされてんだ」

「新薬の治験の手伝いを」

「モルモットじゃねえか」

「今度ふたりも飲んでみる？強烈だぞ」

「いらねえよ」「いらぬい」

・
・
・

一週間後：5月31日 火曜日 放課後

朝、いつもの様に雨宮と通学していると、ホームで杏と遭遇し一緒に同じ電車に乗ることになった。その途中、杏が天井にぶら下がっている雑誌の広告を見て、
「社会科見学」の話を持ち出した。

「二人ともどっちにする？わたしはテレビ局にしようと思うんだけど」

そして、私はこのイベントの事をすっかり忘れてしまっていた。杏の口から聞くまで完全に興味の外に放り投げてしまっていたせいで、意外と重要なイベントがあることに今更気が付いた。

社会科見学でテレビ局に行く日、番組の収録に立ち合えるのだが：その時、明智吾郎もその場にいるはずなのだ。直接コンタクトを取るにはうってつけの機会だ。

「私もテレビ局にする」

「うん！一緒に行くこ！蓮はどうする？」

「杏殿が行くって言うてんだから、ワガハイ達もテレビ局確定だろ！」

「元々そうしようと思っていた」

ただのつまらない学校行事とばかり思っていたせいでとんでもない不意打ちを食

らった気分になったが、これは嬉しい誤算。となれば、今からでも明智に会った時の文句を考えておかないといけない。

「じゃあ決まりね。ついでに、二人とも今日の放課後空いてたりしない？」

「何かあるのか？」

「うん。実はさ」

．
．
．
と云う訳で私と雨宮は、杏の誘いにより渋谷のショッピングモールへと連れ出された。
いた。

杏は私の普段着に不満があるらしいが、無頓着と言われるほどひどい格好をしているわけでは無い。確かにバリエーションは少ないかもしれないけれど。

「綺麗なのは少ないなんて次元じゃないから！はい、今日はまずスカート標準装備でいくから覚悟するように」

「もう、お好きにどうぞ」

「蓮、ちゃんと写真撮つといてね。後で見るから」

「いつでもいい」

、楽しそうだなこいつら。

私は店員に見つかったら面倒だからという理由で外に放り出された哀れな黒猫の姿を思いながら、杏にされるがまま呆然と試着室でマネキンと化していた。

これでもなんて言ったら失礼かもしれないけど、杏は学生業と怪盗活動のほかに、その抜群のプロポーションを活かして、空いた時間でモデルの仕事もしているわけで、完全にお任せでも悪い方にはならないだろう。

そんなこんなで色々を試着スペースに持ち込んできた杏に、コレとコレ着ろと命じられ言われるがままに着用してカーテンを開ける。こういう服装、なんて言うんだっけな。

「おお…おおおお」

「うむ」

言葉にならないうめき声を上げながら壊れたおもちゃの様に首を縦に振り続ける杏と、その背後に立ちスマホを構えながらサムズアップする雨宮。

よだれでも垂らしそうな勢いの杏は急にテンションを上げ、次のコーディネートを指定してきた。もしかしなくても想定以上に長く続きそうだ。山のようにカートに積まれた衣服たちを遠い目で眺める。これを全部着終わるまでに、間違いなく日は暮れる。そうなったらまず店員に追い出されるか。

ひたすら着せ替え人形に徹して、その度に杏がおののき雨宮が写真を撮るループを繰り返していくうちに、だんだんとチヨイスに露出の多いものが増えてきた。別に恥ずかしいわけではなく着れない理由があるのでこれは断っておくことにした。

「お願いします一回だけでいいから！それかわたしにだけ見せてっ」

カーテン越しに話しかけてきていた半ば暴走気味の杏が、無理やり試着室に押し入ってきて、まだ服を着ている途中の私と目が合った。

というより、杏の視線は私の体に釘付けになっていた。

「…あ、」

一瞬硬直してすぐ出ていこうとする杏の腕を掴んで引き留める。

「誰にも言わないで」

「う、うん」

杏は小さく頷き、再びカーテンの向こう側へと消えていった。

聞こえないように深くため息をつき、私は制服に着替えなおして外に出た。若干気まずい空気が私と杏との間だけに流れ、雨宮が不思議そうに首をかしげる。

黙っていてももちが明かなそうだったから、せっかく試着した何着かは購入して帰ることにして努めて平静を装った。

けれど結局、その日の最後まで杏の表情は晴れることは無かった。

『速報です。たった今、日本画の大家として知られる斑目一流齋氏が会見を開いた模様です』

『会見によりますと、斑目氏は自らの弟子の作品を自分の作品と偽って世に公表していたと供述しており…』

『また、盗難に遭ったと嘘をつき複製した作品を不正な取引に使用していたことも自白しています。警察は詐欺の疑いでも引き続き捜査を続行する方針を示しています』

『なお、斑目容疑者の個展会場内には“心の怪盗団”を名乗る謎の集団からの予告状が出されていたこともわかっており…』

二日後…6月2日 木曜日

朝起きてまず目についたのは、改心した斑目が緊急記者会見を開き全てを告白したというニュースだ。

私と雨宮はすぐに喜多川に連絡をとったが、本人は案外平然としていているようだった。それよりも動揺が大きかったのは、民衆の方。通学路でも耳に入ってくる世間話の内容は、今朝のニュースと心の怪盗団についてで持ち切りだった。

教室の中でも、黒板に斑目の顔の落書きがされていたり、喜多川が発案した怪盗団のシンボルマークも描かれていた。

「随分話題になってるな」

「それが目的だったからね」

鴨志田の時よりも有名な相手だったのもあって、反響もそれなりに多くなったということだ。雨宮は少し複雑そうにしていたが、ともあれこれで怪盗団の存在は今まで以上に人々に知れることとなった。このことで、少しでも勇気をもらえる人間が増えればいいけど。

少なくとも、今の段階では怪盗団に賞賛の声が上がるわけでは無く、斑目の急な心変わりによって開かれた“号泣記者会見”を面白がる声ばかり。

斑目は自身の罪を会見で暴露していくうちに、最後には感情を爆発させて大泣きしながら会見を終えた。これは一生ネットのおもちゃにされるんだろうと思うと少し気の

毒な気もするが、それ相応の罪を重ねてきたんだ。罰は受けて然るべき。

教室のざわつきも収まらぬ頃、杏が教室のドアを開けて入ってきた。一瞬気まずそうな目をしたように見えたけど、普通のトーンで「おはよう」とあいさつを交わしてきた。

「…すごいことになってるね。鴨志田のときもそうだったけど、ちよつと驚いちゃう」

「だがこれで、ワガハイたちの存在が世間に広まった。つまり、メメントスにもなにか影響が出てるはずだ」

「そっか。でも、しばらくは様子見？」

「ああ。次のターゲットが見つかるまでは、普通通りに」

雨宮の声に頷くと同時に、チャイムが鳴る。

次のターゲットはこちらから動かさずとも向こうから来てくれるはず。その前に、一週間後に控えた社会科見学で成果を得ることが、次の私の目標だ。

.....

一週間後：6月9日 木曜日 社会科学見学1日目

学校の違う喜多川以外の怪盗団メンバーは、そろって見学先であるテレビ局に来ていた。

もちろんそこには自分も含まれてるわけだけど、今私の周りには誰もいない。分かりやすく言えばサボって抜け出してきた。

今頃みんなはテレビのスタジオで色々な作業の手伝いをやらされている頃。私がここに来たのは明智に会うためであって、そもそも見学自体の内容には興味は微塵もなかったのだから脱出してきたのである。

人気がない廊下の壁に背を預け、目的の人物が通りかかるのを待つ。

もし今日ここで遭遇できなかつたとしても、明日の収録には必ず明智は出演し、そのスタジオに私たちは集められる。明日になれば確実に明智と会えるわけだけど、その後にはゆっくり話す時間があるとは限らない。今日出くわすことが出来れば、それが一番。

スマホで怪チャンの掲示板を覗きながら暇をつぶしているうちに、いつの間にか時間は過ぎ昼前に。

いい加減不審者扱いされても仕方ないレベルで佇んでいるので、そろそろ移動しようとして壁から背を離れた時、スマホが震えた。

画面を見ると、グループチャットに杏からのメッセージが届いていた。いつの間にか私が抜け出ていたことに気付いてご立腹な様子だ。

しょうがないので来た道を引き返し、収録現場の方に向かって歩いてみると、秀尽の制服を着た生徒たちと何人もすれ違い、その会話の節々が耳に入る。

「明日の収録明智君来るって知ってた？あたしちよー楽しみなんだけどー」

「知ってるに決まってるじゃん。てか、今日もここ来てるらしいよ。なんか別の番組の撮影とかで」

「マジ!?え、スタジオとか突撃したら駄目かなあ!？」

どうやら、明智がここに居ること自体は間違いないらしい。とはいえこのビル自体はかなり広いし、しらみつぶしに歩き回っても望みは薄そうだ。

「駄目に決まってるでしょ」

「そっかあ。ていうかそれって誰情報?新聞部?」

「ううん。玲央からだよ」

このまま雨宮達と合流して一緒に動いていけば、明智と偶然鉢合わせる可能性は高いことは分かっている。

でもそこから二人きりで話をする流れに持つていくには多少不自然だし、今後私に妙な疑いがかかっても面倒なだけだ。確実に会えるとは言っても、やはり周囲の目が多すぎると動きづらい。

「あ、いた！」

「リ्यूジといいツマキといい……こういう行事ものは真面目にしとけて言つたら」

「杏もサボつてたろうが」

「わたしはトイレ行つてスマホいじつてただけだし」

考え事をしながら廊下を歩いていると、雨宮達と無事合流。かなり早い段階で抜け出した私以外にも、結局あの退屈すぎる社会見学をサボつていたらしい。そろいもそろつて不良集団だ。

「お前もだろ！」

「真面目にやつてたのはレンだけだったな」

「勉強になった」

「そうか……」

自分のペースを全く崩さない雨宮の言動に坂本がガックシと肩を落とす。

「つかもう12時回ってんじゃねえか。どつか飯いかね？」

「さんせー！」

「ワガハイあそこ気になるぞ！来るとき見えた、あのデカイパンケーキみたいな場所！」
「パンケーキ？あー、ドームタウンのことか？」

ピンと来ていない雨宮とモルガナを尻目に、杏はその言葉に乗っかってみんなでドームタウンに行こうとはしやぎだす。飲食店ではなく、ただのデカイテーマパークなわけだが。

「行こう」

「お？珍しく乗り気だな」

私が即答すると坂本が何故か意外そうにこちらを見てきた。

実は私はテーマパークというものが、好きなものランキングの五本の指に入るぐらいには好きだ。

転校してくるまではよく行っていた。ドームタウンは興味はあつたけど今まで一度も行つたことがなかったし、ぜひ行ってみたい。

…と、一瞬ドームタウンのことで頭がいっぱいになりかけたが、その瞬間廊下の角から見知った顔が現れてすぐに頭は切り替わる。

「どっつせ」

「…あー！」

「誰だ？」

「ああ、明智吾郎って言います。有名人…ってほどじゃないけど」

「こやかに登場したのは件の明智吾郎。坂本は興味無さげにしているが、杏は明智の事を知っているようで多少は驚いていた。

「『二代目探偵王子』！」

「その呼び方は少し恥ずかしいけど、知っていてくれて嬉しいよ」

「たんでいいおうじい？」

「馬鹿知らないの？現役高校生探偵ーって、今や時の人だよ？」

「まあ知らなくても無理はないよ。まだまだ成長途中だからね。ところで君たち、秀尽の子だよね？」

「そうだ」

「ということは…」

明智は何かを言いかけて、突然言葉を切った。不自然な言動に疑問を抱いたのも束の間、明智は用があつたのを思い出して慌ただしくこの場を後にしようとした。

「あつと、今のは忘れて！明日の収録は君たちと同じになると思うから、お手柔らかに頼むよ！それじゃー！」

「…はあ」

…ふむ。一瞬私のことを見て固まったのは気になるところだし理由は分からないけど…慌ててくれたのは好都合だった。明智のポケットからメモ書きのような紙切れがひらりと落ち、私の足元に着地した。

好機とみて明智を呼び止め私の方から接近し、拾った紙片を手渡す。そのついでにスマホの画面をさりげなく明智の方に向けて、*“イセカイナビ”*の起動画面を見せつける。

「落としたよ」

「…あ、ああ。ありがとう」

駆け足で去っていく明智を見て、坂本は*“ヘンな奴”*だと毒づきモルガナは勝手にライバル視して尻尾を立てていた。

ちやんと見えただろうか。メッセージ。

・
・
・
・
・

明智と別れた後、私たちは四人と一匹揃ってドームタウンにやってきていた。

元々昼食を摂ろうという話だったような気がしたけど、いぎ中に入ってしまったえば空腹などどうでもよくなった。都会のど真ん中に立つテーマパークだけど周りのビル街の雰囲気など一切感じさせない。来園者の歓声や楽し気な音楽、そしてなにより開放感あふれる道のレイアウトこそがそう感じさせるものだと思っている。

そして、テーマパークに来たらやることは一つ。

私は上を見上げ、おそらくここの名物である巨大ジェットコースターに目をつける。空中で大きく曲がりくねっているレールの上をコースターが通り抜けるたび、気持ちのいい悲鳴が響いてくる。

「みんなで乗らない？」

私がそう言うと、モルガナ以外は二つ返事で応じた。もちろんカバンを持ったまま乗ることはできないので必然的にモルガナは留守番となるわけだが、とても安心しきった様子で残念がっておられた。今度ネコでも乗れるジェットコースターを探しておいてやろう。

そんなこんなで列に並び始めると、平日の昼間なことが嬉しいものの十分程度で乗れることが判明。これは周回チャンスだ。

「そんな何回も乗るもんじゃねーだろこれ…」

「なに竜司。ビビッてんの?」

「そうじゃねえけどよ……。でも確かに、妻木ってこういうのは平気そうだよな」

「分かる。蓮はどう?」

「大好物」

「うん。なんかそんな気がした。：はー、なんかわたしも楽しみになってきた!綺羅、これもいいけど他のも回れるだけ回つときたくない?」

「みんながそう言うなら任せるよ。でも、これは二周するから」

搭乗口付近にある掲示板に表示された残り時間よりもやや早く、私たちの順番がやってきた。ちようど人の切れ目だったかつ後ろに誰も並んでいなかったから、なんと怪盗団貸し切り状態である。いつも休日バスを使つていくところばかりだったから、ここまで人が少ないと逆に心躍る気がする。

四人並びのシートの最前列に乗り込み、さわやかな男性クルーの掛け声と共にゆつくりと始動。いきなり現れた上り坂を、もったいぶつた速度で上昇していく。気が付けば少し遠くに見える観覧車の最高高度をゆうに追い越して、そろそろ急降下が始まるうとしている。

「来るぞお前から——!」

「ヒュー——!」

上向きになっていった機体が平行になり、やがて頭がゆつくりと下に傾いていき、そして、
落ちてゐる。

身体中の内臓が浮くような感覚とともに一気に加速。息つく暇もなく急降下と急上昇を繰り返し、横に縦に回転し放題で心底昼食の前に乗っついておいて正解だったと思ひ知る。

生身じゃまず体験できない速度で風を切る感覚は、やはり何にも代えがたい快感だ。しかし楽しい時間というのはいつでも、あつという間に過ぎ去るもので。

気が付けば元のスタート位置にまで戻ってきていて、コースターは動きを止めてベルトが上がった。みんな少しふらつきながらも、吹っ切れたように笑いながらシートから降りる。

もう一度乗るにしても列に並びなおさなければならぬから一度外に出たところで、ロッカーの上でぐったりしているモルガナを発見した。

「お前は乗ってないのになんでダレてんだよ」

「見てるだけで酔ったぞ：オマエラよくあんなの乗れるな」

「楽しかったよー？二回目はちよつときついけど」

「俺も休憩。二人で行ってこいよ」

坂本と杏は少し休憩すること。遠慮なく雨宮を連れてそう長くない列の最後尾に並びなおしてから、すっかり雨宮が休憩したい可能性を失念していたことに気付く。

「良かったの？」

「もちろん」

まあ、本人がそう言うなら。雨宮ならまだ平気でもおかしくはないだろうし。

「それにしても、妻木さんのあんな表情初めて見た」

杏みたいなきことを言うな。

「いい笑顔だった」

なぜか嬉しさをかみしめるように、雨宮はそう言った。

「私だって笑うぐらいする」

「知らなかった」

コイツ…。

「好きなんだな。ジェットコースター」

「子どもの頃から、よく行ってた」

「家族で？」

「そうだね」

「仲が良かったんだな」

「…雨宮は？こーういうの、どうだったの」

「俺の親はあまりテーマパークとか連れてつてくれなかったな。だからあこがれはずつとあつて、中学の友達とかと、一、二回行ったぐらい」

お互いに、過去のことを思い出しながら前の客が乗り込んでいく度に少しづつ前に進んでいく。雨宮はやはり、私の過去…あるいは家族のことを知りたがっていることは明らかだ。ずつとこの調子なんだとしたら、いつそ話してしまつた方が楽かもしれない。

隠し続けても、この男はそのままであることを決して是とはしないだろう。

それでも、私はこのことに関してだけは未だに踏み込めずにいる。

「早く乗りたいね」

「次だ」

私らしくないなんて、自分が一番分かつてる。言葉を濁らせるのは嫌いで、今まさに迷いが息苦しさを生んでいる。さつさと、向かい風で吹き飛ばしてしまいたい。

言葉少なに次の番が回ってくるのを待っていると、頭上を走るコースターを見上げながら口を開いた。

「せつかくだし、何か賭けよう」

一体何を言いだすんだと抗議を示したくなつたが、少し面白そうだと思つたことも事実。ジェットコースターに乗るだけで一体なにを賭けて予想するのか、少しだけ興味を

抱いた。

「何かって？」

「そうだな……」

顎に手を当て、雨宮は少し考える。

そうこうしているうちに私たちの番が回ってきて、さつきと同じお兄さんが笑いながら出迎えてくれる。雨宮は考え込んだままシートに乗り込み、私もその隣に座った。

二人きりで乗るサイズでは決していないコースターが、再び上り坂をもつたいぶつた速度でのろのろと上っていく。そして機体が上りのレールを半分ほど上がったところで、雨宮はようやく賭けの内容を口にする。

「決めた。この先で撮られる写真でより楽しそうな顔で映ってた方が、相手にひとつなんでも命令できる」

「なにそれ」

「決まりだな」

「なにが？」

躊躇する暇もなく、無情にもコースターは坂を上り切り既にその頭を垂れつつある。もはや却下する暇はない。はじめからこれが狙いだっただか……。

この男の「なんでも」は例えたつた一つだとしても間違はなく、なにならな

いけど、勝った時のリターンは、まあ多分大きい。こういうのは自然体が一番…一度頭を空っぽにして…ただこの瞬間を楽しもう。

「勝つたらなんでも言うこと聞くんだね?」

「もちろん」

「覚えてよ」

再びの浮遊感。口ではこう言いつつも、風が全身を打つ感覚で賭けの事なんてあつと
いう間に思考から吹き飛んだ。

この爽快感が全部、心も頭も空っぽにしてくれる。

この瞬間だけは。

生きている感覚がしなくて楽だ。

翌日…6月10日 金曜日 社会科見学2日目

前日柄にもなく長時間遊び倒したおかげで絶賛寝不足顔の怪盗団一行は、これから行

われるバラエティ番組の収録現場にギャラリーとして待機している。

待ち時間の間、雨宮を挟んだ向かいの席で坂本は豪快に居眠りをかましていたし、雨宮も、ただ座って待っているだけの間は暇そうにあくびを噛み殺していた。

周囲はこれから登場する有名人を今か今かと待ちわびていて、噂話が絶えない。そんな中スタッフの元気な声がスタジオに響き、出演者がセットの裏から姿を現して指定の場所へと座る。本番の開始まで、あと三分程度。

「そろそろか」

「みたいだね」

「…竜司。起きておけ」

雨宮が隣で幸せそうな寝顔を披露していた坂本をゆすると、迷惑そうにうなりながら一応は目を開けた。と同時に、セットの裏から現れた人影がもう一人。

明智吾郎だ。

「ふああああ…」

「だらしなないぞリユージ。もう始まるぞ」

明智の登場によって一気に場がざわついたが、本番が近づくとつれて他の生徒たちの口数も減っていき、場には不思議な緊張感が満ちる。刻一刻とその時は近づき、残り一分となった所で完全に全ての音がシャットダウンされた。

十秒前のカウントダウンが始まり、ゼロになったタイミングで収録開始。MCとアナウンサーが番組を進行していく。

「続きましてはこちらのコーナー『今会いたいヒト』です。今回も、好評につきこの方にゲストとしてお越しいただいています！『現役高校生探偵』、明智吾郎さんです！」

「こんにちは。またお呼びいただけただけで光栄です」

昨日も見た、人前で被る仮面を張り付けた明智の笑顔。

MCとアナウンサーの向かいに座る明智はいかにも好青年といった雰囲気完璧に演出しながら、雑談を交わしていく。坂本はその様子を見ていけ好みなさそうにしていたが、雨宮と杏は割と興味津々に話の内容に聞き入っていた。

議題はもちろん、怪盗団についてだ。

「ところで明智君、今『心の怪盗団』について色々な説が飛び交っているけど、明智君はそもそも実在すると思う？」

「実在はするんじゃないですかね。鴨志田に続いて斑目まで、同じ心の怪盗団というワードを使っていますし、二人が罪を自白した経緯もよく似ている」

「つまり、怪盗が心を盗んだから罪を自白しちゃったってこと？」

「心を盗むという行為が、具体的にはどういうものなのかによって見方は変わりますね。なんであれ、もし怪盗とやらが人の心を変えて罪を自白させているのだとしたら、それ

はただの私刑。到底許される行為じゃありません」

「ハツキリ言うねえ。でも世間には、心の怪盗団がいなかったら今でも罪は隠蔽されたままだったって声もあるけど？」

「確かに斑目や鴨志田がやったことは許されない犯罪です。でも、だからといってそれを一個人が私的に裁いていい理由には決してなりません。第一、人の心を無理やり捻じ曲げるなんて、人として一番やつちやいけないことですよ」

「なるほどねえ」

「もし本当にそんなことができればいいんだとしたら、そんな危険な集団はいち早く、逮捕されるべきだと思っています」

明智は一貫して、怪盗団は悪であるという主張を続けた。正体も手口も不明な以上、こう言われては簡単にマイナスイメージがついてしまうだろう。

それに、明智はカリスマ探偵という肩書のおかげでかなりの発言力を有しているから、世間は悪い方向に大きく影響されてしまう。

横並びに座る当の怪盗本人たちは各々複雑な表情を浮かべたまま、探偵王子様のご講義を聞き続けた。

「それに、最近起きている事件は改心事件だけじゃない。精神暴走や廃人化もだ。もし怪盗団が行っているのが改心だけじゃなかったら？世間には出ていないだけで、もしか

したら人間の急な心変わりには全て彼らが引き起こしているものだとしたら？」

「それは怖いねえ」

「そうなんです。だから僕は、怪盗団のことを認めません。皆さんも、怪盗なんかより僕や警察組織のほうを信用してくださいね」

そう言つて明智がウィンクしながらはにかむだけで黄色い歓声がスタジオに上がる。本性を知っている身としてはただただ寒気しか感じないわけだが。

ひとしきり騒ぎが収まりMCが質問コーナーに移るよう番組を進行し始めた。今回の収録は高校生が観覧していることも告知時点で伝えていて、世間の生の声との討論もきっちりスケジュールに組み込まれている。

スタジオ側を向いていたカメラのうち一台がギャラリ側へ向けられ、アナウンサーが声を上げる。

「それじゃあここで、スタジオの皆さんにアンケートを取ろうと思います。『怪盗団は実在すると思う』？ 『する』と思う方はお手元のボタンを押してください！それではどうぞー！」

「する」に決まっただろっつーの…」

小声で悪態をつきながらぐつと力をこめる坂本を見つつ、自分もボタンを押す。

その時、ステージに居る明智と一瞬目が合った。

「さあ結果は!？」

テレビでよく聞く効果音と共に、設置された小型の電光掲示板に結果が表示される。結果は50%。見事に半分に分かれた形となった。

「という結果になったけど、これを見て明智君どう思う?」

「まあ大方予想通りといったところです。では、実在すると答えた方に伺いたいんですが……」

拳手を求められ渋々あげる。

「じゃあ、その黒髪で眼鏡をかけた男の子」

すると、同じく手を上げていた雨宮が直接明智からの指名を受けた。坂本や杏でないだけマシだったが、せいぜい余計なことを口走らないように祈っておく。

「怪盗団が実在するとして、彼らの行いをどう思う?」

「警察の代わり」

「なるほど、君は肯定派なんだね。じゃあもし、君の友人が怪盗に改心されたら……どう思う?」

「怪盗は悪人しか狙わない」

「随分はつきり言うんだね。でも、そうである確証はどこにもないよね」

「逆に、そうでない確証もない」

「君、なんだかおもしろいね。僕に面と向かってそこまで正反対の意見を言ってくる人は初めてだよ」

「それはどうも」

横から見ていればギスギスしているのかそうでもないのか非常に分かりにくい独特な空気が漂っていて、現にMCなんかはさつきまでのおちやらけた喋り方で行くべきか迷いが出てぎくしゃくした表情になっている。

「じゃあまだ少し時間はあるし……隣の彼女にも聞いてみたいな」

その様を見て笑いを堪えていると、何故か周囲の視線が自分へと集まっていることに気付く。まさか私が当てられるとは。

「君は一体、怪盗団がどんな手段で改心を起こしていると思う？」

私のいる観覧席より少し高いステージから私を見下ろす明智は、一見完璧な仮面を偽れているように見える。

だけど、その目の奥には確実に奴の持つサディスティックな本性が見え隠れしているように、私には見えてならない。きっとこの質問も、昨日の件があつて揺さぶりをかけようとするのと同時に、ただ私の反応を見て面白がつている節もあるだろう。

隣の席から心配げな視線が飛ぶが、お構いなしに堂々と明智との問答に付き合つてやる。

「ただの憶測にすぎないけど」

「かまわないよ」

「多分、怪盗団は悪人の中の歪んだ認知を取り除く手段をとってるんだと思う」

「具体的には？」

「どうやったかは知らないけど、あの変わりようを見たらそんな風に思ったってだけ」

「確かに、改心事件だけに限ってみればそう見えなくはないかもね。ただ、その説が正しいとするなら、怪盗団はわざわざ悪い心だけを選んで盗んでるってことになる。つまり、他の心も奪おうとすれば奪える可能性も……」

「もちろん、ある」

「だったら改心という義賊的行為を隠れ蓑に裏で悪事を働いてもおかしくはないよね」

「それだけはないかな」

「どうして言い切れるんだい？」

「だって私は精神暴走事件の真犯人を知っているから」

私がそう口にした瞬間、場にどよめきが走りこれまで完璧な笑顔を保っていた明智の表情に少し動揺が表れた。それもそのはず、だって真犯人は明智自身なんだから。

「…冗談」

「そうでなきや困っちゃったな。後で事情聴取しないといけないところだったよ」

ハハハ、と乾いた笑いがスタジオに満ちる。

明智の独壇場となるはずだった質問コーナーは、私と雨宮の二人によって終始微妙な空気となっただけで終了したが、明智だけはほんの少し「本当」の表情で私たちを見つめていた。

・ ・ ・ ・ ・

その後の収録は問題なく進み、1時間弱経過したところで終了となり社会科見学自体も現地解散でお開きとなった。直接的では無いにしろ、怪盗団のネガキャンをされたことでご機嫌ナナメな坂本はトイレに向かって大股で歩いていき、同じく杏もトイレに行ったことで、私と雨宮が二人きりになった。

スタジオの端で坂本と杏を待っていると、収録を終えたばかりの明智がこちらへ向かってきた。

「今日はありがとう。貴重な体験だったよ」

人のいい笑みを浮かべたまま感謝を述べ、視線を私へと移す。

「急なんだけど、今から少しだけ二人で話せないかな」

来た。

雨宮の前でそれを言われると余計な勘ぐりを生んでしまいそうだけど、大方これは予想通りの展開だ。ここで誘いを断る理由は、今の私にはない。

「いいよ。別に用も無いし」

「それは良かった。それじゃ、ほんの数分だけ彼女借りるね」

「…ああ」

いぶかし気な視線を送る雨宮に背を見送られながら、足早に立ち去ろうとする明智の後を追っていると、ドアの横に「明智吾郎様」とネームプレートの貼られた部屋まで案内され入るよう促される。

これが楽屋かと思物する間もなく扉は乱暴に閉じられ施錠された。

「単刀直入に聞く。君は『あの世界』を知ってるのか？」

努めて冷静に、感情を押し殺した静かな声でそう聞いてきた。警戒するように一定の距離は保ったまま、それでもなお探偵王子としての仮面は外さずにいる。

「知ってる」

「一体何が目的だ。僕にあのアプリを見せたのはわざとだろ？」

「うん。少し面白い話を思いついて」

「面白い話？」

「うん。実は」

撒いた餌に食いついてきた明智に向かって、言う。

「私、君の正体を知ってるんだ」

烏瓜（挿絵あり）

翌日：6月11日 土曜日

退屈すぎた社会科見学から一夜明け、私たち怪盗団は一度集まって今後について話し合うことにした。

集合場所である渋谷駅前で少し久しぶりに会った喜多川は相変わらずな様子だったが、ただの集会にしてはやけに大きな荷物を提げていた。聞けば、喜多川は斑目のアトリエを出た後学生寮で生活していたらしいが、あまりにも汚らしい環境すぎて出てきてしまったらしい。

「そこで、これから俺は妻木さんの家に」

「駄目に決まってるでしょ」

「なら高巻さんの」

「無理だっつの！」

「馬鹿な……」

「お前がなっ！」

どういふ算段だったのかは知らないが、当てが外れて愕然とする喜多川に全員やれや

れと頭を抱える。

「リ्यूジのところは駄目なのか？」

「無理だつて狭えし。第一絶対おふくろがOK出さねえ」

「しようがない。ここはワガハイが一肌脱いでやるしかないか」

「本当か？」

「そういえば、蓮つて喫茶店に居候してるんだつたつけ？ちよつと見てみたいかも」

「お、じゃあ蓮の部屋で “打ち上げ” もしちまうか！」

「賛成！祐介の歓迎パーティーも兼ねてやっちゃおう！」

当人である私と雨宮を置いてけぼりにしたまま話がひとり歩きしていき、あれよあれよという間に打ち上げ&歓迎パーティーをする流れに。

当初の目的は今後の怪盗活動について話し合うためだつたはずだが、それも兼ねての集まりつてことにしておこう。

「それじゃ、ゴシユジンの説得はよろしく」

「それは良いけど、妻木さんは大丈夫か？」

「別にいいよ」

どうせ一晩だけだからね。

そんな私と雨宮のやりとりに、何故かモルガナ以外の他の面々は目を白黒させてい

る。不思議そうな顔をされているが不思議なのはこっちのほうだ。どうかしたのかと聞くと、喜多川と坂本、杏の三人は言葉を濁らせた。

「いや、なんつーか」

「その…ねえ？」

「つかぬことを聞くが、二人は同じ場所で暮らしているのか？」

私は一瞬、何を聞かれているのか分かりかねた。今更何を当たり前のことを…と聞き返そうとしてはたと気付く。

もしかしてまだ皆に話してなかったっけ。話してなかったか。なかったな。

雨宮と目を見合わせしぼしの沈黙。その謎の間に耐えきれなくなった坂本が急に大声を上げて大袈裟な身振りで強引に話を切り上げようとした。

完全に、何か壮大な勘違いをされていることを理解した雨宮も珍しく早口でそれを遮る。

「いや、違うぞ？ そうじゃない」

「お前らいつの間にそんなことに…：俺に一言教えてくれてもよかったじゃねえか」

「話を聞け。確かに同じ場所で寝泊まりはしてるけど、それには訳があつて」

「ワケつてのがもうそれだろ！」

「確かに二人、毎日一緒に学校来るし仲いいなどは思ってたけど…まさかそうだったと

いた。そしてどこか嬉しそうに鼻を鳴らすと、雨宮のほうに振り返りいたずら気に笑って見せた。

「良かったな。お前みたいな奴に、こんな友だちができるなんてそうないぞ」
「分かつてます」

「いやいや、蓮には本当世話んなってるつすよ。なあ？」

「だね」

「世話かけられてますの間違いじゃねえのか」

言いながら、出されたコーヒーを一度口にする。杏と喜多川はいけるクチのようだが、坂本には少し苦かったらしい。代わりに出されたグレープジュースを一気に飲み干して苦言を漏らす。

「にーげえ！罰ゲームだろ！」

「ま、俺も若いころはコーヒーなんて飲んでなかったしな」

「…酸味が深いな。蓮たちはこれを毎日飲めるのか。羨ましいな」

一方、喜多川はルブランのコーヒーをいたく気に入ったようで、惣治郎に賛辞を贈った。雑食性ではあるものの、物の善し悪しを見極める力はさすが絵描きの審美眼（舌？）といったところだろうか。

坂本の残したコーヒーをさりげなく杏が飲み干していたことに誰も違和感を覚えな

いうちに、惣治郎に追い出されるがまま全員でいざ屋根裏部屋へ。男子高校生と女子高生が住んでいる部屋としては異質すぎるその装いに、一同言葉を失ったように眺めまわす。

部屋に入ったことで自由の身となったモルガナが雨宮のカバンからするりと抜け出し、気持ちよさそうに伸びを繰り返す。

「んんー……ま、適当に座れや」

「いや、どう思うよ……この部屋……」

「意外と片付いてるじゃん」

「別に普通じゃないか？」

「感性歪みすぎだろお前ら」

各々ソファ一なり作業台の椅子なりに腰かけていく中で、私も雨宮の腰かけているベッドの端に座る。

今日集まったのは井戸端会議をするためではなく、怪盗団としての今後の活動を相談して決めるためだ。雨宮が切り出し、話は一度真面目な方向に。

次のターゲットの目星はまだついていない。指標として斑目改心の影響をみてみると、やはり未だ怪盗支持派の意見は少数派だ。

だがその一方で、既に熱烈な支持を送る意見もちらほらと見受けられる。大半が怪盗

の存在そのものを信じていないか無関心。存在すると思っ
ている意見でも、この前の明智のような理論で存在意義を否定する
か、ごく少数の肯定派……といった感じに分か
れている。

「あんだけでけえニュースになったのに、意外とこんなもんなんだな」

「確かに思ってたのとは違うかもしれないけど、今回は名が知れば良かつたんだからこれでもいいんだよ」

「そうか。大事なものはこっからだよな」

私の言葉に坂本は頷き、拳を握る。

そう。重要なのは名を広めた後の展開だ。この先の行動によって、怪盗団の評判は上にも下にも大きく変動する。実際はこの後も上手くはいくわけだけど、所詮はいち学生
の集まりである怪盗団に、世間を相手にしたイメージ戦略などそう簡単に思いつくもの
では無かった。したがって、次のターゲットを見つけることも簡単ではない。

この次も、できるだけ大物を狙いたい。だが斑目以上の大物でかつ悪党……なんて、そ
れも未成年には到底想像の及ばない範囲で。

「寝て待つか」

我らがリーダーもついに匙を投げ始める結果に。

「言うと思ったよ……」

「だが、このまま考えていても埒が明かないのも事実だ。ここはリーダーのいうように、少し立ち止まって見たほうが良いかもしれん」

「…まあ確かに、焦って失敗しちや元も子もねえよな」

「リ्यूージにしては物分かりがいいな。だがその通り、大事な時期だからこそ、慎重になるべきって部分にはワガハイも賛成だ。だがあまり期を空けすぎるのも良くない。ツマキ、オマエはなんかアイデアないか？」

「さあ…」

言えることが全くないわけでは無いけど、この先の流れに手を加えると本来関わるはずだった人物と出会うきっかけも失う可能性が出てくる。ここは白を切っておくことにした。

「じゃあ、その件については一旦保留ってことで、歓迎パーティ、始めちゃう？」

「おまえずっとそれしたそうだったもんな。でも賛成だぜ！」

「わたし見つけちゃったんだけど、あれカセットコンロじゃん？鍋とかできないかな？」
会議にほとんど口を挟んでこなかった杏が急にイキイキとした声で立ち上がり、柵に置いてあるカセットコンロを指さした。

みんなも難しい話題には飽き飽きしていたようで、結局議論は途中でお開きとなり打ち上げをする流れに変わるのはあつという間だった。私としても、今この話題を放つて

おいて問題ないことは分かっているから、さっさと打ち上げに移りたかった。

オタカラは軍資金に成り得なかつた以上、鴨志田の時のようにどこかで外食と言う訳にはいかないが……これはこれで楽しそうだし、周囲の目を気にする心配もない。

「じゃわたしらで買い出し行つてくるから、蓮はおじさんの説得と鍋の用意、よろしく！
あ、後でワリカンね！」

「分かつた」

「まずは銀杏とワンタンの皮だな」

「肉が入つてりやなんでもいいぜ！」

杏と喜多川と坂本が階段を下りていき、部屋には私と雨宮とモルガナが残される。

「ニヤフフ……にぎやかな夕食になりそうだな！」

「妻木さん、後で『アレ』やるからな」

「……はあ」

「観念しておくんだなあツマキ」

「なんで決めつけてるの。まだわからないでしょ」

「で、お前はこんなところで何してんだ」

「手伝い」

「いらねえよ。今日はもう閉めるから、上で一緒に混ざってこい」

買い出しを終え帰ってきた後、私は惣治郎と一緒に店のカウンターに立っていた。少しの間そうしていると、いぶかし気な目を向けられてさっさと上に行けと急かされてしまった。

そうしたい気持ちも山々だけど、自分の置かれた立場からして、好き勝手に遊んではかりいるというのはやや気が引ける。ルブランにいる時はいつも店の手伝いをしていくけど、私がそう言うたびに惣治郎は渋い顔をする。店の手伝いをしろと言ったのはそっちなのにな。

「なあ」

店じまいを始めた惣治郎を尻目に、エプロンを脱ぎ仕方なく階段を上がろうとする私の背中に声がかかり振り向く。

「今は、楽しいか？」

「どういふこと？」

「ここに来る前よりも、今の方が楽しいのか?」

「そうだね」

質問の意図まではくみ取れなかったが、答えはすぐに出せた。

目標もなく怠惰な日常を送っていた日々には比べれば、今のほうが圧倒的に充実しているとと言える。どうしてそんなことを聞いたのか聞いてみたけど、やっぱり教えてはくれなかった。結局そのまま惣治郎は足早に店を閉じ、火と戸締りにだけ気を付けろと言いつつ残してルブランを後にしてしまった。

最後まで惣治郎は何か言いたげだったが、その真意は私には見えなかった。

今度こそ階段を上り屋根裏部屋へたどり着くと、杏がお玉を使って灰汁を取り除いている鍋からはおいしそうな匂いが立ち昇っていた。買い出しの段階では水炊きにしてシンプルにポン酢でいくかとなっていたが、杏の提案により最終的には豆乳鍋となった。

てきぱきと具材を用意していた杏に、男性陣からは「意外と」手際がいいと賛辞が飛ぶ。実際は嬉しいよりも馬鹿にされてる感じが鼻について杏に一蹴されていたけど。

「はい、もう食べてついでいいよー」

「マジかー! いただきますー!」

肉が煮えるなり坂本は箸を振り上げ自分の取り皿に白菜やら豚肉をつまんで入れて

いく。それに続き、喜多川も丁寧に手を合わせてから鍋に手を付け始める。

市販の豆乳鍋の素を使っているからマズくなるわけはないらしく、二人とも文句の一つも言わずに黙々と食べ進めていくのを見ながら、私も杏の座っているソファの隣に腰を下ろした。

すると目の前に座る曇った眼鏡をかけた男と目が合い（目見えないけど）、少し遅れて坂本がそれに気付いき腹を抱えて大笑いし始めた。確かに面白いけどそこまで大笑いすることじゃない。

いくら拭きなおしても即曇り眼鏡になり観念した雨宮は、苦笑いしながら眼鏡を外し脇に置いた。

「あ、こつちで素顔見るのなんか新鮮！」

「オマエのそれって度入ってないんだったか」

「ああ」

「目悪くねえんなら普段から外してりやいいのに。せつかく男前なんだしよ」

「竜司ほどじゃないし、それにもうこれがないと逆に落ち着かないんだ」

「もつたいねえの」

「オイレン！リユージなんかよりワガハイのほうを立てろよ！」

「無理だろ。見た目猫だし。つか“なんか”ってなんだよ“なんか”って！」

喧騒を尻目にひたすら食べ進める喜多川。いつものようにじやれあう坂本とモルガナ。自分が作った鍋の出来に満足げな杏。坂本に言われてもう一度眼鏡をかけた瞬間マンガみたいレンズを曇らせる雨宮。

こんなくだらなく無意味で有意義な時間は、実はあまり多くはない。そんなこと分かり切っているはずなのに、この時はそれも、忘れられていたように思う。

それから五人分の鍋を談笑しながら空になるまで囲み、みんな満腹になるころには外もすっかり暗くなっていた。喜多川だけは締めをやっていないことに不満げだったが、過半数が満腹でもう食べれないので、また今度ということに。

腹が膨れて眠くなってきたのか、杏がソファに横たわり私の膝の上の頭を置いてきた。別に構いはしないけれど、もう少し警戒したほうがいい。

「すー…」

数秒もしないうちに聞こえてきた寝息に一同は苦笑し、日々の疲れもあるのだろうか。そっとしておいてやることに同意した。

名残惜しそうにゆっくりと箸をおいた喜多川は杏のほうをちらりと一瞥し、坂本に問

いかける。

「ときに竜司。杏とは、どういう関係だ？」

「どういうも何も、中学からの知り合いだよ。高校んなってクラス変わってからは、あんま話さなくなっちゃってたけど」

「昔のアン殿は、どんなだったんだ？」

「今とそんな変わらんねえよ。でも、友だちは少なかったな。この見た目だし、派手な奴は勝手に嫌って地味な奴は近づかない」

「…そうか。では、竜司はどうだったんだ？」

「俺？」

目を丸くして驚く坂本に、喜多川は薄く笑いながら続ける。

「互いを知るにはいい機会だ。それに俺の過去はすっかり知られたんだ。そっちも話すべきだ」

「自分は失うもんがねーってか。…いいぜ。つつても、ただの親不孝もんの話だけど」

組んでいた足を戻し、昔のことを思い出すように目を瞑る坂本。いつもの能天気な雰囲気とは少し違った真面目な声色で、ゆっくりと坂本竜司という男の辿ってきた道を語り始めた。

「小さいころ、親父が消えちまって…ずっと母親と二人で暮らしてんだ。陸上は中学ん

ときから続けて、ホントは特待生とかんなくておふくろに楽させてやりたかったんだ
けどよ……」

「まさか……リユージのクセに母親思いのいい子だったのか……!？」

「一言余計なんだよこの猫っ」

「猫じゃねー!」

「……で、高1るとき、鴨志田に手えあげちまって……自分からその道を手放しちまった。水
飲むのも禁止で何千メートルも走らされて、そのくせ鴨志田自身はなにもせずただ見て
るだけ。黙って耐えてた周りの仲間がどんどん壊れそうになってくのが耐えられなく
てよ」

「……」

「でも、それで結局おふくろが学校に呼び出される羽目になって……教師連中から好き放
題言われて……しまいには帰りに謝られちまった。『片親でごめん』ってよ。あんときの
おふくろの顔……今でも忘れらんねえ」

ぼつぼつと、ひとつひとつ思い出すように、噛み締めるように、過去を振り返る坂本
の拳は知らず知らずのうちに固く握りしめられていた。確かに坂本の行為は先の事を
考えない直情的なものだったかもしれない。だがそれには、周囲がそれに理解を示そう
とせず権威のある鴨志田の言うことだけを鵜呑みにして、坂本自身の言葉には何一つ耳

を傾けなかったという背景があるわけだ。

喜多川はやりきれないような表情で大きく息をつき腕を組んだ。

「それで、今も学校では厄介者扱いという訳か」

「まあ、陸上部がなくなつたのもそれが原因だつたしな。恨まれて当然だ」

「だが、鴨志田の行つていた特訓は常軌を逸したものだつたことは事実なんだろう？」

「まあな。でも誰も俺の言うことなんか信じなかつた。お前が悪いの一点張りで、話を聞こうともしやがらねえ。だからもう面倒くさくなつて、自分から他人を遠ざけてたんだけどよ」

「…学校は、皆平等と教えるが、現実はその綺麗なごとばかりじゃない。気持ちには、俺には分かる」

「ま、レットテルつつつたら、蓮のほうこそ大概だけどさ」

「…例の話か」

親指で雨宮を指して坂本が言う。

例の話といえば、雨宮がこころブランに居候する羽目になつた原因となる事件の話である。

「そういうえば、詳しく聞いたことなかつたな」

毛づくろいをしていたモルガナが雨宮の隣にひよいと飛び移り、話を促した。

雨宮は、「あまり詳しくは覚えていない」と釘を刺してから、東京へと越してくる前の話を始めた。

場所は閑静な住宅街で時間帯は深夜。自分以外の人影もない静かな場所を歩いていると、遠くのほうから女性と男性がもめているような会話が耳に入ってきて、雨宮は気になってその声の原因を確かめに行ったらしい。

「そうしたら、酒の匂いが漂ってきて……どうも女の人が酔っぱらった男に絡まれてる感じだったんだ。だから、助けないと思つて声をかけた」

そう。声をかけた。たったそれだけ。

すると酔っ払いは雨宮の方を振り返り、邪魔をするなど喚き散らす。なおも退かない雨宮に腹を立て酔っ払いが拳を振り上げるが、ふらついた男はバランスを崩しその場にあつたガードレールに頭から倒れ込んだ。勢いよくぶつかったせいで額から血を流しながら立ち上がった酔っ払いは逆上しはじめ、雨宮のことを訴えてやると怒鳴った。

もちろんそんな言い分が通るわけがないと雨宮も初めは思っていた。だが後から来た警察は酔っ払いの男の言葉を信じ、一部始終を見届けていたはずの絡まれていた女性までそれに便乗し雨宮が男に殴りかかったことになってしまい、結果雨宮は傷害罪に問われることとなった。

「逮捕されて判決まで出た。いくら俺がやってないって言つても、誰も耳を貸さないし、

貸したところで周りの非難が止むわけじゃない。もう元の学校にはいられないからここに厄介払いされてきた、という訳だ」

「聞いてるだけで腹立ってきやがるぜ……」

坂本はこの話を元々知っていたらしく、震わせた拳を自分の膝に叩きつけて怒りを漏らした。

「たつたそんだけで『傷害』かよ……!? 蓮は何もしてねーのに!」

「女の方も、酷いな。だんまりを決め込んだわけだろ?」

「そういうヤツの心こそ盗むべきだ! どこのどいつだその男!」

荒く鼻を鳴らすモルガナの問いに、雨宮は首を横に振る。

「暗がりだったし、よく覚えていないんだ。そもそも知らない男だったし……」

「そうか……おまけに逮捕なんてシヨックが重なったんじゃ、無理もないか……」

「くそ……ありえねえ……こんな世の中、間違ってるだろ絶対……!」

「だが、俺たちなら正せるんじゃないか? あの力を使って」

「ああ、そうだけ祐介! 俺らでこの腐った世の中変えてやりてえ! 俺らみたいに、身勝手な大人の理不尽に苦しんでるやつらを助けるために……!」

「……なに熱くなってるの?」

坂本がガタリと椅子から立ちあがった音で、私の膝の上で寝ていた杏が目を開けて

ゆっくりと起き上がった。

「あ、悪い…起こしたか」

「別に？途中から起きてたし」

目をこすりながら足を組み、杏は何故か私のほうに振り向いてくる。

「ねえ…綺羅は、わたしたちに言えることって何かない？」

そして、そんなことを言いだした。内心で最も嫌っていた流れがやってきてしまったことに心の中のため息をつき、考えないようにしていたことと向き合わされる。

「何となく、言いたくないことなんだっていうのは分かっているんだけど…綺羅だって、なにか辛いことがあったから、ルブランに住んでるんでしょ？だったら…」

何も言わず、ただ杏の瞳を見つめ返す私を見て、言葉が途切れる。きつと今の自分は分かっているなら追及するなどと訴えかけていそうな目をしていることだろう。でも、杏はそんな無言の圧力にも退くことはせず、しつこく私の過去を知ろうとしてくる。

「みんなが話したからとかじゃなくてさ。純粹に、友だちとして知つときたいんだよね。その身体の傷のことも」

「…杏」

「ごめん。でもやっぱり見て見ぬふりはできないよ…あんなの」

「…」

この間誰にも言うなどは言ったが、杏はついに「それ」を口に出した。喜多川は杏よりも前に知っていてなおかつ同じように口止めしていたから、杏が傷の話を持ち出したことに静かに驚いていた。

雨宮やモルガナはというと、着替えの際は一階と二階に交互に入り行っていたから初耳で、もちろん坂本はもつてのほかである。

「傷つて？」

私が黙っていると、雨宮が少し遠慮がちにそう聞いてきた。

：こうなったら話すしかなさそうだ。だけど決して誤解はされぬよう、慎重に言葉を選ぶ必要がある。それでいて紛れもない真実を、述べなければならぬ。これはみんなが私を信頼しようとしてくれていている証左なことは、さすがの私でも分かっている。だから、中途半端な嘘もつきたくはない。

少しだけシャツをまくり腹部の痣を見せると、雨宮達はぎよつとしたような表情に変わる。これは当然の反応で、普通に生きていてできるようなレベルの傷跡とは到底かけ離れたグロテスクなものだから。

「…杏はたまたま見て、喜多川は絵のモデルをしたときにこの傷を知ってたよね。その理由までは誰にも話してこなかったけど。で、これは私がずっと秘密にしてきたことだから、絶対に誰にも言わないって、約束してくれるなら、話すよ」

みんな固唾を飲み、しつかりと首を縦に振る。

やけに真剣なまなざしを向けてくる彼らに免じて、私は人生で初めてこの秘密を他人に明かすことにした。

私はひとつ深呼吸をし、どこから話すべきか回想を始める。あれは確か……。

わたしが小学4年生の頃。

母親である妻木^{つまき} 璃恵^{りえ}と、父親の妻木^{つまき} 徹^{とほる}との三人で、某市内のマンションの一室に

暮らしていたある日、いつものように台所に立ってママの手伝いをしていた時だ。

自分と同じ鳶色の髪を後ろにまとめて、まな板の上でシチューに使う具材を切っているママに、自分にも包丁を使わせてほしいとねだった。

包丁を使うのは今日が初めてというわけでは無かったけど、少し前から刃物を扱うことを許された程度の経験しかない。当然ぴつたりとママにくつつかれた状態での作業となる。

玉ねぎの切り方はこの前教わったから、ママに言われるまでもなく適切な大きさにカットしていく。経験が浅いとはいえ、ずっとママの料理風景を横で見てきた私にとつ

ては適当な野菜を切るぐらいは造作もないことだった。我ながら手際よく全てを切り終えたわたしをママは褒めてくれて、優しくわたしの頭を撫でた。

「相変わらず上手ね。将来はシェフにでもなったら？」

「シェフはいや」

「どうして？」

「なんかちがう」

「そう。料理は好きでしょう？」

「うん」

「じゃあ、喫茶店のマスターとか」

「それはいいかも」

「お店の名前はとうする？」

「え。……うーん」

鍋に具材を放りながら、たわいもない会話を交わす。

こうして普通にしゃべることができるのは、この時点で既にママとパパの二人だけに限られていた。

学校では必要なこと以外喋らないし、既に4年が過ぎた今の環境でわたしは完全に自分と同世代の相手と喋ることに価値を見出せなくなっていた。

まず言葉の意味を正しく理解しない奴ばかりだし、意味のない無駄な行動も多く見ていてイライラする。我ながらまかせているなど思わなくもないが、そこはぐつと我慢して黙っているだけにとどめているのだから、むしろ褒めてほしいものだ。

そんなスタンスで過ごしてきているから、わたしの心のよりどころは家族と過ごすひとときだけだった。そしてそれは、これからさきも変わることは無いだろうと思つてい
たし、それでいいと思つていた。

わたしにとって一番大事なものは家族。ここももしかしたら親譲りなのかもしれない。事実ママやパパにも似た傾向はあつて、娘の私から見ても呆れるほどに二人は親バカだし、互いに気持ち悪いほど愛し合つている。仕事場では、家とは真逆な印象を抱か
れているのかもしれないけれど。

「綺羅ー。一戦やらないか?」

一方パパはというと、リビングのテレビの前で家庭用ゲーム機のコントローラーを握りしめわたしを呼んでいた。

自分の役目は終えたので手を洗い、誘われるがままパパの隣に座りもう一機のコントローラーの電源を入れる。わたしとパパは家に居る間はよくゲームに勤しんでいる。対戦ゲームもたまにするけど、基本的にはわたしが勝つのがいつもの流れだ。

ちなみに、一番強いのはママだ。

この日も同じようにパパをコテンパンに叩きのめした後、出来上がったシチューとパンを囲み夕食をとった。

毎回わたしに負けているのに何故かなんども嬉しそうに挑んできてくれるパパは一人反省会を行いつつ、口にしたシチューを美味しいと褒めママはまんざらでもなさそうに笑う。

こんな日々がずっと続くものだと、信じて疑っていなかった。

実際、それは思い通りになっていた。

その日の夜、わたしはいつもの音で目が覚めた。

空気の抜けるような短い音や、硬いものがぶつかる鈍い音。

これは時々、いつもは使われていない部屋の方から夜な夜な響いてくる。その正体はとづくにわたしは知っていて、この時点で既に大した違和感を覚えることは無くなっていたはずだった。

でも、この日は違った。いやにその音が耳に響いて眠れなくなってしまうわたしは眠目をこすりながら音のする部屋に向かい扉を開いた。

その先にはいつか見た、パパがママを痛めつけている光景があった。それはこの場の全員が黙認している光景ではあるものの、少し驚いた様子のパパは優しくわたしの肩を抱いて「どうかしたのか」と聞いてきた。

別になにかが変わったわけじゃない。

ただ疑問に思ったから聞きに来ただけだ。

パパはこういう人。

自分を律する必要のないこの場所でだけ、感情を露わにできる。そうしないとパパが辛いのはママもわたしもずっと前から知っていること。パパがママを殴ったりするのは、別になんの他意もないことを知っている。

だからわたしも、そんなパパのことを怖いとも嫌いとも思うことは無かった。

それが普通だと思っていたわけじゃない。だからこそ、ママはパパのすべてを受け入れようと決めたんだろう。この暴力にはなんの混じり気もない愛情があるのだと理解を示して、パパのことを赦したんだ。

そんなママのことを、わたしは尊敬していた。

だから。

「パパ」

わたしも、ママのようにありたかった。

ただ家族を理解して、優しくありたいという気持ちだけで、わたしは軽はずみにとんでもないことを口走った。

「わたしじゃ、だめかな」

後悔は、一瞬だけ。

思考がストツプしたように固まる二人は、やがて我を取り戻したかのようにわたしの言葉を否定して部屋に追い返そうとした。当然の反応。それでも、わたしは頑なに退くことをしなかった。

パパはまだ、わたしに対しては感情を押しえて過ごしている。ママだって、幾夜もこうして自分の体を粉にしてパパのことを案じている。ふたりのためにわたしが家族とすることができることはこれだと思つた。

パパの血みたいに真つ赤な双眸が、窓から差し込む月明かりを反射している。正直、この時だけはほんの少しだけ、怖かつた気がした。

その日から、また少しわたしの家庭は「普通」とは道を違えることとなつた。

たまにはあるが、わたしはママの代わりを買つて出ることが多くなつた。パパは行為に及んでいる最中は夢中で何も感じていないみたいだったけど、終わつた後は我ここにあらざといった風でずつと床に伏して動けないわたしに向かつて謝り続けていた。

でもわたしはそんな望んでなくて。ただわたしはパパのために、パパの心を受け入れようとしただけで。

パパが悪いとも、自分が偉いとも、これっぽちも思つちやいない。

謝つてほしくなんてない。罪悪感を感じる必要なんてない。

それに、パパはそう言いつつもわたしへの暴力を止める素振りは見せなかった。いつもいつもわたしに対しては謝り続けるのに。

そして年を追うごとにそれはどんどんエスカレートしていった。わたしはそれを文字通り肌で感じていたけど、それを良いとも悪いとも思わずにただ受け入れた。むしろ、これはパパがより自分を抑える必要がなくなってきたということになるだろう。だったら、このままでいい。

そんな裏の事情は別として、それ以外の時間はわたしたち家族の時間をこれでもかと満喫していた。

いつものように帰ってきて、いつものようにご飯をつくって、食べて、遊んで、寝て…。

そんな生活に、私は少しも不満を抱いていなかった。はじめはママがわたしのことを心配して気が気ではなさそうだったけど、それもいまや慣れてきてくれている。パパも、私自身も。

そして私が高校生になった時からさらにパパの行為はエスカレートした。

“その日”になれば私はいつ意識を失ったのか覚えていないようになり、服の下に隠せる範囲の傷もどんだんグロテスクさを増していくばかりだった。ただ、その頃の私はもう完全に慣れきっていて、なんとも思わなくなっていた。

それは純粹に、家族への信頼があつたからだと思う。

向こうだって、信じてくれていたはずだった。

なのに、私は。

いつものように、一度闇に溶けた意識が再び浮上した時、いつもは感じない、不快感を自分の胸の部分から感じて思わず跳ね起きようと力をこめるも、激痛が走り身体は言うことを聞かない。

何度止めてと懇願しても、私に覆いかぶさるパパの手は止まらない。

いつもの混じり気のない痛みではなく、妙に優しく粘ついた手つきで私の肌に直接触れてくるその感覚は、これまで行つてきたことのないものなによりも生理的な嫌悪感を抱かせるものだった。本能が初めての拒絶を示し、どこに残っていたのかも分からない力でパパを押しつけてその場から私は逃げ去った。

どうして、なぜ、と疑問だけが頭の中で渦を巻く中で、私は最後に見えたパパの絶望に満ちた表情を振り払うことに必死だった。ただ今すぐこの場から離れたくて、なんの計画も無しに私は家を飛び出した。

後悔は、今でもずっと残っている。

さすがに全てを洗いざらい話せはしなかった。

大雑把なあらずじを語り終えて、思っていたよりも壮絶な内容だったのかその場の全員が大したリアクションもとれていないまましばらく固まっていた。

「言えって言われたから言ったんだけど」

「…あ、えーと」

沈黙に少し腹が立ち意地悪な言葉を舌に吐いてしまった。すぐに後悔してその先の言葉を紡ぐ。

「誤解してほしくないんだけど、私はパパのこともママのことも恨んでない。だから、そんなに気にかけないでほしい」

「佐倉さんには、そのことは…?」

「言つてないよ。聞かれてないし」

「妻木さんに、そんな過去があつたとは…。その古傷を見た時から、尋常な道を歩んできたわけでは無いことは悟つたが…」

「両親の事、恨んでないって本当かよ？ 傍から見りやただの虐待だぜ、それ」

「もちろん本当だよ。私たちにとつてはそれが普通だったんだから。むしろ、私が二人を裏切ったんだよ。だから、もう合わせる顔も無い」

私がそうこぼした瞬間、隣に座っていた杏が肩を掴み震えた声で叫んだ。

「なんでそんなに平気そうにしてられるの」

「平気だからだよ」

肩に置かれた杏の手を取り、そつと膝の上に戻してやる。

事実をありのまま話すと、普通の人から見ればただ私の両親が悪い奴の様に思えてしまふだろうが、そうじゃない。悪いのはぜんぶ私だ。二人は私の事を信じてくれていたのに、私の方からその信頼を手放してしまったんだ。例えあのままその場にとどまった結果がどんなものだったとしても、私は逃げ出しちゃいけなかった。

パパだって自分のどうしようもない衝動のことですつと悩んでいた。だからパートナーなんて、ましてや家庭を持つことなんて、永遠にできないものなのだと思っていたと、よく語っていた。私やママはパパにとって、冗談抜きで、世界で唯一の理解者だと思っていただろう。

私にとつてもそうだった。世界で唯一の理解者は、パパとママだった。私の生きる意味もそこにあつたのに。

「私が怪盗を続けるのはせめてもの罪滅ぼしって気持ちもある。これは嘘じゃないよ」
「…本当に、家族のことが大事だったんだな」

「大事だったよ」

私がそう言うのと、雨宮は沈痛な面持ちで俯いてしまった。眼鏡を外しているせいかもしれない。つもより表情が読みやすい怪盗団のリーダーは、静かに言葉を連ねた。

「だったらなんで、戻ろうとは思わないんだ」

「戻る資格なんて無いよ」

そう思っていたことは事実。でもその上で、もう生きている意味などないと絶望し命を捨てようとしていたことは、流石に皆には伏せた。そして、今の目的を果たした後もその気持ちは消えずに残っているだろうことも。

「もう全部どうでもよくなつてた時に、偶然雨宮達の問題に巻き込まれてさ。目的も出来たし、しばらくはこのままがいいなつて思う」

「本人がそういうなら」

「時間を空けたほうがいいのは、ホントそうだと思うし…。ただ、綺羅。あんまし無理しすぎないようにしてね…」

「わかったよ」

「杏の言うことももつともだ。妻木さんには、もう少し大人しくしておいてもらったほ

うがよさそうだな」

「そうだな」

「何もしくなくたって、向こうで無茶したりはしないよ」

「だそうだぜー？どう思うよ、リーダー」

「信用できない」

「えー…」

「と、言う訳で」

足を組み、懐に手を突っ込んだ雨宮が不敵に笑い、その瞬間私の脳裏を嫌な予感がよぎった。

あの時…雨宮と二回目のジェットコースターに乗りながら交わしたあの賭け…。

却下する時間もなく半ば強引に押し切られたことは事実ではあるが、私はその後受けて立つような素振りを見せてしまったのも事実。今ここでそれを持ち出されては、引き下がる余地はない。

余裕の表情を崩さない雨宮に対し、私の表情は多少強張っていることだろう。なぜなら、あの時自分がどんな顔をしていたかなんてこれっぽっちも覚えていないのだから。そもそもその賭けの内容を思いついたのは雨宮の方だし、写真が撮られる心構えが出来ていて当然のはず。つまり、わたしのほうが圧倒的に不利…。

「ここで審査を開始しよう」

「審査？」

やや陰鬱な空気になっていたのを無理やり振り払うように、懐から取り出した数枚の写真をテーブルに伏せて置き、雨宮がそう宣言する。坂本がそれに疑問符を浮かべ、モルガナが答える。

「ニヤフフ…実はコイツとツマキとはある勝負をしていたのさ。それに勝った方が、負けたほうに何か一つ命令できる…って条件でな」

「勝負って、なにしてたの？」

「社会科見学一日目の午後に、ジェットコースター乗ってたろ？そこで、あの手のアトラクションにはありがちな撮影ポイントがあつたんだ。その写真に、より楽し気に映つてた方の勝ち」

「なにそれ…」

「アン殿、考えたのはレンだからな。ワガハイをそんな目で見ないでくれ」

ちやちな勝負内容に杏が呆れていると、これ見よがしな咳払いが屋根裏部屋に響く。

「とにかく！これからみんなに審査してもらう。いいか？」

そう言つて、雨宮は自信満々に伏せた写真を裏返す。

その結果は…。

メ
メン
ト
ス

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

ばかばかしい日常は過ぎ去り目の前には非現実が立ちはだかっている。

その後、雨宮のおかげといつては癪な気もするが：とにかく私の過去話をしたせいで訪れた重苦しい雰囲気はなくなり、仲間たちと和気あいあいとした時間を過ごしてき

た。
ちなみに賭けの結果は私の圧勝であった。勝負を仕掛けてきた雨宮も認めるほどに、私はあの時普段は見せないような満面の笑みで写真に写っていた。正直ただ恥ずかしいだけだったが、雨宮のなんらかの迷惑を阻止できたのには少し溜飲が下がった。

勝者が敗者に下す命令は一度保留として、雨宮には眠れぬ夜を過ごしてもらおう。
まあ、半分は冗談。

その後皆は銭湯に寄って解散することにしたらしいけど、私は遠慮しておいた。

本当に、くだらない時間だった。これまでは、家族以外の人間と過ごすこういった時間には価値を感じなかったのに、今では違う。

少し名残惜しい気持ちを抑えて、今は目の前のことに集中する。

今ここに立っている「私」は、さっきまで仲間と談笑していた私とは全くの別人であることを忘れてはならない。むしろ、こちらのほうがありのままであると相手に思われるのが理想。

私は邪悪を生まれ持った存在であると、自分に言い聞かせる。そうすることで、どこ

か懐かしい生ぬるい風が身体を包んだような気がした。そんなうすら寒さを纏った私の前には、同じような空気を漂わせる男が一人。

「やあ。来てくれてありがとう……内通者さん」

既に表の顔は脱ぎ捨て真つ黒な本性を露わにしたかのような衣装に身を包む、明智吾郎が壁に寄り掛かりこちらに一瞥をくれた。

「それじゃ、早速だけど始めようか」

「……始める？」

「手を組むうえで、最低限相手の手の内は知っておきたい」

そう言つて、漆黒のマスクの下に隠れた獰猛な牙をむき出しにした明智は、手近なシャドウに自らのペルソナの攻撃を浴びせて「暴走化」させた。私はまるで初めて見たかのようにその力を褒め称えた。これが、この男のしてきたことの一端である。

今この街では怪盗団による改心事件よりも前から、人格が急変したかのように暴れたり、なんの感情も持たない廃人になつてしまう原因不明の事件も起こつていた。要するに、明智はこの暴走させる力を使って引き起こした事件を、自分で解決することによつて今の地位を獲得しているわけだ。

「これぐらいは一人で勝てないと使い物にならないからね」

シャドウを操る明智は私への軽んじた視線を逸らすことは無い。力を試す意味もあ

るだろうが、別にここで死んでも構わないと思っただろう。

その思考は当然のものだ。なぜなら私は、明智がもつとも知られてはいけないことを知っている存在なのだから。

「さあ、君の力を見せてくれ」

「はい、はい」

これ以上話をするのにも、一旦明智の要求を呑んでやるしかなさそうだ。

暴走したシャドウは普段は見せないような攻撃性と執念を露わにする。それがただの雑魚シャドウでも、こうなつた個体はかなり厄介だ。：普通の人間ならば。

私は自分の持てる力のすべてを解放しCharaを召喚する。それと同時に、足元から真つ赤な炎が立ち昇り視界がグツと広くなつたような錯覚を覚える。普段は抑えているこの力を、今だけはフル活用する。明智に私の力を認めさせるんだ。

思考をどす黒い感情に埋め尽くされたシャドウは恐怖など感じず愚直に真つ直ぐ突っ込んでくる。その打たれ強さは厄介だけど：動きが読みやすければ、私の攻撃を耐えることが不可能な以上雑魚なことに変わりはないし、むしろ恐怖を感じないせいで私の危険性にも気が付かない。

突進してくるシャドウに向かって指を鳴らし“エイガ”を放つ。すると元々真つ黒な思念に覆われていたシャドウは呪怨の炎に吞まれてもがきながら地面に倒れ込んだ。

もう、このまま止めを刺してしまえばチエックメイト、だが。

私はCharaと二人で倒れ込んだシャドウを挟み込むように立つ。

今目の前のシャドウの生殺与奪の権は私にある。それを思うと私の心の中に何かが満ちていくのを感じた。

潰せ。

殺せ。

そのための力だ。

決意が満ちた。

手の内のナイフが真っ赤に染まる。

恐怖を感じないはずのシャドウの目が怯えに染まり、私の征服欲を刺激する。

辛抱の限界を迎えた私はシャドウに攻撃を加えた。その一撃で、シャドウのタマシイに直接刃が届いたのを感じたが、その手を止めることはせず消滅することすら許さない連撃をCharaと繰り出す。

長いようで一瞬の出来事。ついに塵となって消滅していったシャドウを見届け、私のナイフは元の姿に戻っていき心を満たしていた不思議な感覚も少しづつ薄れていった。

明智は努めて平静を装っているが、果たして今の私の力を見て何を思っているのやら。

「こんなものかな」

「なるほど。よくわかったよ」

「こんなのでいいの？」

「十分だ。理解したよ」

私の危険性を？

「力はいいいものを持つてゐるみたいだ。これなら僕の仕事を手伝わせてあげることでもできそうだ」

「本当？」

「もちろん、君が取引を破らなければ、だよ」

「それは当然。私は怪盗団の内部情報を定期的にリークする。その代わりに、わたしにも君の獲物を分けてほしい」

「まあ僕自身忙しい身でね。君みたいなのが汚れ仕事を引き受けてくれるのなら、その分別の仕事も楽になる」

そう。社会科学見学のあの日、私はこの男と取引を交わした。

私は明智の正体を知っている。だが世間にばらす気は無いと伝え、狂人を装い明智の味方であるとアピールしたんだ。

「私、君の正体を知ってるんだ」

ひたりと笑う私に対して、明智はきよとんとした顔で首をかしげる。まだごまかす気ではいるようだ。

「何の話かな？」

「隠さなくていいよ。誰にも言わないから。私にも精神暴走と廃人化のやり方を教えてほしいんだ」

「…は？」

「だって楽しそうじゃん。君だけそんな面白いことをしてるなんてずるいよ。同じ力を持ってるのにさ」

「…」

心底うきうきした様子で話す私をこれ以上ないぐらい怪訝そうな目で睨む明智。もととぼける気が無いにしても、同じような反応をされたことだろう。

「だからさ、取引しようよ」

「…取引？」

「うん。それとは別に、もう一つ面白い情報があるんだよ。心の怪盗団について」

「…！」

「君、怪盗団を利用してなにかしようとしてるでしょ？私もさ、本当はあんな義賊的行為じゃなくてもっと派手に暴れたいだけなんだよね。だから私の手で消そうかとも思ってたんだけど、君はまだ怪盗団を消してほしくなさそうだし」

「ごめん…何を言ってるのか意味がよく」

「もう。とぼけなくていいって面倒くさい。君が全ての元凶なのも知ってるし何か目的のために動いてることも知ってる。でもそれは全部なしにして、互いに利益になる話をしようって言ってるんだよ」

明智は間違いなく私のことを信用などしていかない。都合のいいときに排除することしか、考えていないだろう。

でもだからこそ、今の時点では接触を赦されている。こうして私の力を目の当たりにして何を思っているのかは知らないが、穏やかなものでないことは確かだろう

「まあとにかく、君が期待に違わないクズってことは分かった」

「それはどうも。で、次の仕事はいつなの？」

「今日かな」

私が訊き返すと、明智は邪な笑みを浮かべて私に銃を握らせた。

「せいぜい、君のやりたいようにやるといい。だが余計なことをすれば、君という人間の何もかもを抹消したうえで、君自身も世界から消されることになる」

「…」

「ターゲットの名前は青野修一。見ればすぐにわかる、生きている価値を感じない中年の男だ。探し出して殺すなり精神を壊すなり、勝手にしろ。そっちのほうが君にとっても都合だろう」

「いいの？ 実際確認しなくて」

「へまをすればすぐに分かる。そうなったら消すだけだ」

「そう」

なんと意外なことに、明智はここで退散し私にこんな重要そうな任を託すという。

それを聞いてピンときたが、おそらく今名を言い渡された男は獅童からの命令は下っていない全くの無関係者である可能性がよぎった。今日やれと咄嗟に言われてどんな反応をするのか…ただそれを試されただけなのかもしれない。

まあ明智がこようがなんだろうが、私は端から誰も殺す気などない。監視の目がないのは、確かに私にとって都合がいい。

「それじゃ、また連絡する。その時には怪盗団の動きを伝えられるようにしておいてくれよ」

「分かった」

こちらには一瞥もくれずスタスタとこの場を立ち去る明智の背を見届けて、

「はあ……」

私は人生史上最も深いため息を吐いた。

これからは明智と会うたびに、こんな腹の探り合いが続くと思うと少し気は落ち込んでしまうけど……そんなわがままは言つてられない。なんとか彼の信用を得て、
“本当”の依頼を回してもらえないようにしないと……。

そうなれば、これ以上明智が手を汚すことも無くなる。

それに……現実での接触を通して何か影響を与えることが出来れば、命を救えるかもしれない。

これまで何度も命をこの手で潰えさせてきた私が、同じく破滅する運命にある誰かを救済できるかもしれない。

焦りは禁物だ。今はまだ、お互いに怪しみ合う関係でいい。いつか、明智の方から手を取ってくれればいい。

「アオノシユウイチ」

そんなことを考えながら、私はとりあえず教えられた名前のシャドウを探してみることにする。モルガナが居ないおかげでこの広いメモントスを徒歩でしらみつぶしに探

すことにはなつたけど、周囲のシャドウは私に対して一切近寄ろうとしないので、時間がかかるだけでリスクはない。

こんな時に使える便利な移動手段でもあればいいのに……。今度手に入れた素材で何か作れないか試してみようかな。モルガナならきつと、何か面白い案を思いつくかもしれないし。：ローラースケートとか言われたら毛を抜くか。

「あ」

ぼんやりと平和ボケした思考で線路上を練り歩いていると、目の前に景色がぐちゃぐちゃに歪んだ空間が現れた。メモントスという集合的無意識に生成される、いうなれば超小規模のパレスともとれる空間だ。おそらくこの先に、なんらかの歪みを抱えた人間のシャドウがいる。

足を踏み入れた先には、グレーのスーツを着た一見どこにでもいそうな中年の眼鏡をかけた男性のシャドウが立っていた。そいつはこつちを見るなり目を見開き、慌てて数歩後ずさった勢いで尻もちをついてしまっていた。顔を見ただけで随分と失礼な奴だ。

「く、黒い仮面！ なんて、なんで俺のところ……!？」

「え？」

言われて気付いたが、奴は私が黒い仮面を身に着けていることに驚きここまで狼狽していたらしい。

何故『黒い仮面イコール危険』という知識をこのシャドウがもっているのかは謎だけど、とりあえずこちらに攻撃の意思はないことを伝えるために、仮面を上に乗し上げ武器を懐に隠す。

「落ち着いて。私は君の知ってる『黒い仮面』とは別人だからさ」

「…え？そ、そういえばお前、女か。なら人違いか…」

「そう。で、一つ聞きたいんだけどいいかな？」

「なんだ？」

「アオノシユウイチ…だっけ？君、『獅童』となんか関係あるの？」

「…何故そんなことを答えなければならいんだ？」

「もしかしたら獅童はもう君を切り捨てる気かもしれない。そうなったら私が代わりに始末を頼まれることになってる」

「…!？」

「どうなの？」

「…。た、確かに私は、獅童さんとの繋がりはあるが…でも、今までもずっと良好な取引関係を続けていたんだ。今更切り捨てるなんてこと、あるわけがないっ」

「自分の利益にならないと判断されたなら簡単に切り捨てるよ、あの男は」

そこまでいって私は言い捨てた。

「…早く逃げたほうがいい。そして金輪際獅童みたいな悪党に関わらないと約束しろ」
「な、なんでお前がそんなことを…」

「死にたくなければ言う通りにして。私も誰かを殺したくはない」

「…な」

「私が見逃しても、もう一人の黒い仮面が君を探し出して排除しにくる。だからもうここにはいるな。そしてなるべく、遠くに逃げて身を潜めて。さもないと人生が終わるだけ。…それと、もう二度とこんなことに加担しない方がいい。君みたいな半端者は途中で強者に捨てられるだけだよ」

静かにドスを聞かせた声で囁いてやると、男は心底怯えた様子で首を何度も縦に振った。そして、他のシャドウと同じように白い光に包まれながら消えていった。きつとこれであまくいったはずだ。周囲に気を張り巡らせてみても、私以外の人間がいる様には感じられない。明智が隠れていることもなさそうだ。

「…」

これからは二重なんてものじゃなく、学生と怪盗、そして共犯者としての三重生活が始まる。

全ては私自身のエゴのためいえばそうなのだけど…それでも、私の行動によつて他者が救われるのであれば、それでいいと思う。

この邪悪な力を生まれもった、悪である私が、正義としてあるこの世界を、私は必ず奪い取って見せる。

作戦の決行は来年の3月。

するべきことは、怪盗団を正しい道へ導くこと。

怪盗団を護ること。

ただ善くあること。

救えるものは救うこと。

自分の存在価値を外の世界に示すこと。

世界を奪うこと。

そして全てが終われば、消えること。

???

これは、今よりほんの数時間だけ未来の話。

わたしは今、眠りについている。今までにないほど深い眠りだ。

正直、今見てきたものに対する理解が、まだ追いついていない。

眠りについていながら、わたしはようやく永い眠りから目が覚めたような気持ちでいた。

ずっとずっと目を逸らしてきたそれに目を向けて、偽りの呪言を振り払って、本当の自分と：お母さんを、見つけることが出来た。：いや、本当はずっと前から気付いていたはずだった。それなのに、ただわたしが弱いから、色々な人に迷惑をかけてしまった。：惣治郎も、怪盗団だつてそうだ。

：。

：怪盗団、か。一緒に居たのはそんなに長い時間じゃなかったと思うけど、なんだかヘンテコなやつらだったな。思ってたよりも普通の人間っていうか：。

ああでも、驚いたなあ。秘密を教えると聞かれてはいたけど、まさか現実になんかことがありえるなんて！

間違いない。わたしが見た彼女は、"Chara"だった。正真正銘、わたしの知っているあのゲームの！

はじめは半信半疑だった。でも、あの妻木綺羅とかいう奴を見れば見るほどそうにか見えなくなっていくって、しまいにはあのペルソナ……。一体全体どういう風の吹き回しなんだろうか。まさか、散々グルートを遊んだわたしたちへの報復に来たのか?!?なんて邪推もしてみたけど。

根本的にその考えは間違っていることに気付かされた。

妻木綺羅は本気だ。面白半分で怪盗なんてやってない。命を張ってわたしのことを案じてくれた。近くにいたからこそ感じ取れた、彼女のやさしさはきつと本物だった。もしあれがChara本人のものだったとするなら……。

わたしはこれまで、とても大きな勘違いをしてきたことになるのかも……。

かすかにルブランに漂うコーヒーの匂いと同一香りがいま、わたしの頭の周りを包み込んで。

完全に身も心も委ねた状態で、目を瞑り、夢の世界との境界線をいつたりきたり。

そうしているうちにいつの間にか、本当に夢の縁から滑り落ちて……。

……。

お母さん。

わたしは信じてみようと思う。わたしはお母さんのことが大好きだけど、でもきつとその心配は無いと思う。今は大人しそうに見えても、最後の最後で本性を現して…なんてことも、まあ可能性としてはゼロじゃない。それを踏まえた上で、わたしは綺羅を…信じたいと思った。

わたしも怪盗になりたいって、思った。

怪盗になって、お母さんのことを殺した奴らに、絶対ぜったい報いを受けさせてやる。そのためには、わたし一人じゃ力不足だし…どのみち信じるしかないんだよね。

Charaであり、妻木綺羅である、この人間を。

…うん。純粹に、興味があるってだけなのかもしれない。だって、本当にあのCharaなんだったら、今わたしはCharaと同じベッドの上で寝ているってことになるんだぞ!?

普通に会話できて、もしわたしが怪盗になることを赦されたなら、一緒に肩を並べて戦えるんだよ!?

…ねえ。

そうでしょ?

お前だってわたしと同じだ。

この道のさきがどうなるかなんてことは、分からない。

でもきつと、この道は…

未来に、繋がってる気がしてる。

指の先に触れる、冷たい銀色の刃。

そこに写るわたしの顔はぼやけていて、よく見えない。眼鏡が無いから。
でも、こんなマヌケな顔だったっけな。わたしって。

Codename : Navi

熱い雨が身を打ち続ける。いやに夜が長く感じて寝付けなかった私は、ルブランを抜け出して佐倉家のシャワーを借りている。

あの後言われたターゲットのシャドウを送り返し、メモントスを出てからずっと、明智の前で見せた私自身の笑みが瞼の裏にこびりついていた。自分の顔なんて、見ることは無かったはずなのに。

いや、違う。正確には見た。明智の仮面の奥に光る瞳に反射した、自分の姿を。他者を傷つけることしか能がないわたしにぴったりの冷酷な笑みが、自分自身のそれだと認識すればするほど気分が悪くなってくる。明智の前であんな風に振舞っている間にも感じなかったのに。それどころか居心地の良ささえ、感じていたかもしれない。

演技をしているつもりでも、その実本当の自分をさらけ出しているに過ぎなかった。つくづく呪われた運命に嫌気が差す。何が起きようと、なにを変えようと、Chara a という存在のさだめはいつでも破滅の一途を辿るだけだ。そしてその発端は全て自分にある。

自分をこんな風に造った神サマみたいなものがあるのなら、いくら恨んでも恨み切れない。そもそもこんな力、初めから欲してなかったし、私だつてもつと平和な道を歩んでいたかった。

私にはただ人より強い意志が与えられたただけだったはず。

狂いだしたのは、いつからだったか。

「…」

蛇口をひねりお湯を止め、洗面所へと出る。

持ってきたタオルを使って身体を拭いたあと、雑にドライヤーで髪を乾かす。その時、ガタンと廊下の方で物音がしたが、惣治郎もここにはいるのだからと別に気にせず鏡に向き直った。

後始末を終え廊下に出ると、少し離れたところにある二階へと続く階段を誰かが駆け上がっていくのが見えた。惣治郎つぼくはなかったの、おそらくは「彼女」だろう。逃げるようにして姿を消した人影の正体には心当たりがあつて、だからこそ、リビングのテーブルの上に鎮座する起動したままの携帯ゲーム機の扱いに困った。

しかも、よりによって起動してるゲームがこれか。

さつさと出ていけばよかったのだが、なんとなくいたずらに心が顔を持ち上げてきた私はそのゲーム機を手に取り、人影が消えていった階段を上っていく。

すると二階の廊下からすり足で去っていく音が聞こえて急いで階段を上り切ると、部屋に入ろうとドアを開けたままこちらを見つめる、小動物めいた一人の少女と目があつた。

「あ」

素つ頓狂な声を上げてしばらく硬直したのち、少女は顔をこちらへ向けた状態で固定したままドアを開ききり部屋に逃げ込もうとしたので呼び止める。

「双葉」

「え!？」

「逃げなくてもいいでしょ。これ」

ゆつくりと歩み寄り差し出したゲーム機に、おずおずと手を伸ばして受け取る。// 双葉

「あ、ありがとう」

雨宮のつけているものよりも大きな眼鏡の奥から、怯えたような瞳が私を覗く。

低めの身長に手足も全体的に細く華奢な印象の拭いきれない、橙の長髪をたたえたこの少女の名前は「佐倉双葉」。

色々と訳あって、いまは惣治郎に引き取られている。その見た目通りあまり外には出ず引きこもり気味な生活を送っていて、惣治郎以外の人間と面と向かつて会話したこと

も、割と久しぶりなはずだ。

かろうじて絞り出した感謝の言葉も消え入りそうな弱さだったし、そこから何を話すべきなのか分からずあうあうと呻きをもらすばかり。

「好きなの？そのゲーム」

「う、うん」

「どのぐらい？」

「どのぐらい？…うーん、まあトップ5ぐらいには」

「そう」

「ていうか、なんで？」

「私も好きなんだ。アンダーテール」

そう言うと、双葉の目がほんの少しだけ輝いた。こういう手合いには、自分が乗れる話題を提供してやるのが最も有効。

とはいえ、彼女にとって今の私は赤の他人以外の何物でもない。前々からこの家に世話にはなっていたけど、絶対に出会わないように引きこもられていたから、顔を合わせただことも無かったわけ。

でも、私は双葉に関しての知識を持っているし、双葉は双葉で私が雨宮と一緒にルブランの屋根裏で生活していることぐらいは盗聴で知っているはず。

「私、アンダーテールの誰も知らない秘密を知ってるんだけど、聞きたくない？」

「え。…なにそれ」

「どう？」

「…聞きたいのはやまやまだけど、そもそもお前、誰なんだ？」

前々から気になってたのだろう。警戒心丸出しな様子で私の事を睨みながら、双葉はそんなことを聞いてきた。

「誰、といわれても」

「なんでこつちに住んでる。居候とは事情が違うだろ。惣治郎となにか関係があるのか？」

「ないよ。ただ善意で泊めてもらってるだけ」

「なんで帰らない」

「そこは知ってるんじゃない？聴いてたよね、この前の話」

「な、ななんのことだ」

双葉については私は普通であれば知らないようなことまで知っている。ルブランに盗聴器が仕掛けてあることも、もちろん把握済みだ。とはいえここまで分かりやすく動揺してくれるのなら、知識がなくともギリギリ分かりそうなものだが。

ルブランでの会話の内容を盗聴しているのなら、私たちが怪盗である可能性もすでに

考えているに違いない。しかし確信には至らないせいで一步踏み込めないでいるんだろう。本来は双葉の方から怪盗団に接触してくるのを待つほうがいいのかもしれないけど、私はここでおかねてより計画していた作戦の一部を実行に移すことにした。

明智との接触後こんなにすぐ誰かを廃人化させられそうになるとは思っていなかったけど……それならそれで、こちらも行動を早めればいい。

「部屋入るね」

「え……ええ!？」

強引に部屋の中へと押し入り、電気もついていない、ごみ袋だらけの散らかった部屋を歩く。

とはいっても歩く隙間すらないような部屋なうえに、奥には大きなデスクとPC類がでかでかと鎮座しているおかげで余計にこの部屋が狭く見える。

「電気ぐらいつければ?」

「ちよ、なに勝手に入ってる……!」

後ろから抱きしめるようにして双葉が私を止めようとしてくるが、その力は怖いぐらいに弱くて拘束の意味をまったくなさなかつた。私はずんずんと足を進め、しがみついている双葉を引きずっていく。

「ちよ、止まって……」

「何か見られたくないものでも？」

「そうじゃなくって……！勝手に人の部屋に入るほうがおかしいだろ！」

「盗聴は良いんだ」

「とっ」

いきなりそう問い詰めると、双葉は言葉を詰まらせて、そのうちその反応が肯定と変わらないことに自分で気づき、自分の方から謝ってきた。

「別に、元々はそうじろうがちゃんとしてるか、確認するためのものだっただけで……」

「色々聞いた？」

「……聞いた」

「例えば？」

「今日の話も、全部……」

つまり、かいつまんで話した私の生い立ちもある程度は知っているわけだ。だったらなおさら話が早そうで、むしろ助かる。

双葉は急な展開に戸惑いを隠し切れておらず、両の手を行き場なくあたふたさせながら決して私と目を合わせようとはしない。

きつと怪盗云々の話も聞こえているだろうから、慎重に言葉を選んでいく最中なんだ

ろう。私からすれば珍しい、眼鏡を外した顔をまじまじと見つめていると、今度は双葉の方から口を開いた。

「お、お前が辛い思いをしたから今、ここにしていることは知ってる。あ、でも辛くはない：んだっただか？」

「辛くないわけじゃないけど、辛いのは私よりも両親のほうだつて思ってるから、私が被害者面できないなつて思ってるだけ」

「…変な奴だな、お前」

「どうも。ところで、双葉のほうも随分大変な思いをしてきたみたいだね」

「わたし？」

「大体知ってるよ。惣治郎に引き取られるようになった経緯も、今引きこもってる理由も」

すつと息を呑む音が聞こえたが、かまわず続ける。

「母親は研究者である日事故で死亡。親戚の間をたらいまわしにあつている最中に惣治郎に引き取られて今に至る」

「な、なんで」

「なんで知ってるかはどうだつていいんだよ。双葉。私はあなたに重要な話をしに来た」

小さく震える双葉の手を握り、心の奥を覗くようにその大きな瞳を真つすぐに見据える。

「私を信じてみて」

翌日：6月12日 日曜日
.....

「……と、言う訳なんだけど」

翌日の午後、私の願いによりルブランに集合した怪盗団一行に、昨日した話を聞かせ

た。

惣治郎には、事情があつて引き取つていた子どもがいたこと。その子どもは私たちのひとつ年下で、母親を幼い頃に事故で亡くしている。

そして親戚に引き取られることとなつたが、誰も双葉の面倒をまじめに見ようとはせずほつたらかしのような状態で過ごしていた。そして、それをみかねた惣治郎が双葉を引き取つたが、今や他人に心を開こうとせず、ずっと家で一人で引きこもつてしまつている：そんなようなことを掻い摘んで話した。

なぜ親戚にひどい扱いを受けていたのか、母親の死の真相なんかには触れずにおいた。どうせパレス内で判明することだ。

一通り話し終えたら、みんなは神妙な表情で話の内容を飲み込もうとしていた。坂本なんかは考える間もなく、私の提案に乗つてきた。

「いいじゃねえか。本人も望んでんだろ？ だつたら俺らで、改心させてやろうぜ」

そう。私がした提案は、佐倉双葉の改心である。

昨日、私は双葉に自分が怪盗であることを打ち明けた。双葉も、盗聴していた内容からある程度は察していたようで、あまり驚きはしていなかつた。けど、改心の方法なんかを教えた途端に目の色を変えて、話に食いついてきた。

双葉の母親は研究者で、分野は認知訶学。双葉もそれは知つていて、怪盗団の噂を目

にする度にどこか似ているような気がしていたらしい。

それからは私の話を信じてくれるようになって、もし本当に改心ができるというのなら、自分を改心してほしい、と双葉の方から頼んできた。

「肝心の本人は今どこにいる？」

「惣治郎の家。初対面の人間が大勢いるところには行きたくないんだってさ」

「そうか。できれば、俺も本人の口から聞いておきたかったんだが」

喜多川の意見も最もだ。雨宮もそれに頷き、杏も同意した。駄目で元々ではあるが、一応双葉に電話してみようか。

1コール。

2コール。

3コールまで待つてはたと気付く。そもそもここでの会話は双葉には筒抜けなのだから、今の流れも全て聞いていただろう。長らく他人との接触を避けてきた双葉に、ここで自分の意思発表をしろというのは酷かもしれない。

一旦電話を切つて、チャットで双葉に語り掛ける。

▽聞こえてた？

F u t a b a : うむ

▽文字でいいからこつちに送ってきて

そうメツセージを残してから数分後に返信がきた。

『全部、今妻木が言った通りだ。私はお母さんが死んでからずっと心を閉ざしてしまっていた。でも、昨日妻木の話聞いて思った。怪盗団は、本気でこの世の中を変えるつもりで、悪党を改心させてるって。だから、信じてみようと思った。私は変わりたい。いつまでもこのままでいたいとは思っていない。でも自分一人じゃ、どうしようもなくて…。手伝ってくれたら、嬉しい』

長文のチャットが飛んできて全員がそれを読み終えた頃、何故かメツセージが削除された。

「わざわざ消すことないのに」

それを見て杏が苦笑し、皆もそれに肩を落とす。どうやら、みんな反対の意思はなさそうだ。

「よし。じゃあ、知名度を上げるといふ目的とは外れるが…これはやってやるしかないな、レン」

「ああ。困っている人が居るなら見捨てないのが、心の怪盗団だ」

「たりめーだ！俺たちで救ってやろーぜ！」

「見ず知らずの一人の人間のため…か。そういうのも悪くはない」

「マスターには蓮と綺羅もお世話になってるんだし、放っておけるわけないよね！私も賛成！」

「うむ。全会一致だ！ツマキ、パレスは確認してあるんだったよな？」

「うん。キーワードも全部わかってる」

「じゃ、さっそく今から乗り込むか？」

「いや、準備は念入りにした方がいい。作戦の決行は明日からだ」

モルガナの言葉に頷き、一先ず今日は解散となった。雨宮はこれから明日の潜入に使う道具の類を買い足しにいくそうで、私もそれについて行くことにした。時期が時期だし、ゲームで見たような灼熱地獄に放り出される心配は無いだろうけど、砂漠であることに変わりはないだろう。飲み水は必須だな。なるべくかさばらないやつで。

モナ入りカバンを提げた雨宮と共にルブランを出て、まず向かったのは武見診療所。ルブランからは目の前レベルで近いから、買ったものがかさばる心配もない。

雨宮と一緒に入り口のドアを潜ると、相変わらずけだるそうにしていた武見と目が合う。

「珍しいね。二人一緒に来るなんて」

「どうも」

「またヘンなことしてないでしょうね?」

おそらく、また怪我するようなことしてないだろうな、の意味だろう。こくりと頷くと、小さく息をついて「ならない」と吐き捨てた。

「で、二人で来たんだし治療ってことはないでしょ」

「はい。薬を買いに」

「…まったく、二人そろって何に使ってるんだか」

「受験です」

「はいはい。もうそういうことしておいてあげる」

雨宮が武見と取引をしている最中、私は待合室にある自販機で120mlの水だけ購入しておいた。なぜかは知らないが、この水だけ80円という破格の値段で売っているの、利用しない手はない。こいつは冷蔵庫に入れておいて、明日のパレス攻略の時に持っていこう。

薬を買い終えた雨宮が渋い顔で袋片手に近寄ってきて、お釣りの小銭で同じ水を自販機で購入する。

「どうしたの?」

「あまり多くは買えないな、と。この後装備も見に行かないといけないから」

まー、こんな怪しい取引でもちやんと商売はしてるってことだね。足元見られてるだけなのかは知らないけど。

「喉でも乾いてるの？」

「別に。安いから買ったただけだ」

「ふうん」

「…お？」

「どうも」

「お前が連れと一緒に来るのは珍しいな。今日は何の用だ？」

一旦診療所で買ったものをルブランに置いてから、次は装備の購入のためにアンタツチャブルへやってきた。

私は別にミリタリーオタクでは無いけど、こういうものに興味がないわけでは無い。とはいえ店の品ぞろえは、どれほど精巧につくられているのかは素人目には分からないものばかりだし、下手なことは言えないなと思いつつも、銃やナイフのレプリカを見て少しだけ心が躍るのを感じていた。

値札を見るとやはりどれもかなりいい値段をしている。葉も安くはないし、雨宮も大変だな。メモントスやパレスにいるシャドウが時折現金を落としていくけど、それだけじゃ全然やりくりできそうにない額だ。きつと日々のバイト代もここに吸い込まれていつてるんだろう。

そんな雨宮を尻目に、私は店内に設置されたガチャガチャの前に立つ。一回800円という高額なガチャに含まれるのは、戦場で食べられるような保存食や携帯食の類。つまり食べ物である。

試しに一度回してみると、出てきたのは『ミリ飯フルーツ』。カプセルが半透明なせいで中身が確認できないがこれだけは分かる。きつとおいしくはない。

「800円をどぶに捨てるな」

「捨てないでしょ。欲しいならあげる」

「いらない」

「私だつていららないよ」

「捨ててるじゃないか」

「むう」

ならば惣治郎にあげるか…いや、あえての双葉？

「誰かにあげるなら祐介にしてやってくれ」

ああ、それは確かにそうだった。

カプセルをカバンに詰め込み、明日喜多川に渡してやろうと心に決めた。奴は万年空腹状態だし、いいことしたな、私。うん。

「で、何買ったの？」

「結構いろいろ」

店の奥から仰々しい荷物を持って出た店主の岩井は、いつもの強面を崩さないままそれを雨宮に手渡す。長かったり重そうなやつが袋から飛び出ているので半分私が持つてやる。

「今日は偉く奮発しやがったな。バイト代か？」

「はい」

「殊勝なこった。また頼むぜ」

夜：
.
.
.

買い出しを終えてルブランへ帰ると、玄関先に喜多川が持っていたはずの“サユリ”が飾られているのが目に飛び込んできた。

どうやら、結局喜多川は一晩で考えを改め、サユリをルブランに預けて寮に帰ったらしい。たしかにあそこはうるさいし汚いが、人の心を学ぶにはうってつけの場所だと気づいたらしい。なんとも喜多川らしい理由だが、流石にサユリを学生寮で野晒しにする気にはなれなかったようで、マスターに託すことにしたんだろう。

「今時珍しい、律儀な奴だな。にしてもこんな逸品、ホントにうちで預かっていいものかねえ」

「持ち主の希望なんだし、いいんじゃないの？意外と馴染んでるし」
「確かに」

私の言葉に兩宮が同意したその時、肩からひよっこりと顔を出していたモルガナがカバンから抜け出して扉の方にとぼとぼと歩いていった。

「どこ行くの？」

「ちよつと散歩してくる。今日はほぼカバンの中だけだったからな」

確かに、電車移動の間とかはずつと窮屈そうだったし、少し体を動かしたくなる気持ちにはわかる。今までも、モルガナはこうしてふらつと外に出かけることがあったし、特に気に留めず器用にジャンプでドアを開けて出ていくモルガナの背を見送った。

「あの猫本当よくしゃべるよな。で、今のは何て言ってたんだ？」

「カバンの中において疲れたから散歩してくる」って」

顎髭を弄りながら、意地悪そうな笑みを浮かべた惣治郎が兩宮に聞くと、返ってきたいつも通りの返事に苦笑する。私たちがモルガナの言葉が分かるってことはどうにも信じてない風だけど、何を言っただのかは都度聞いてくる。そっけない態度なのは相変わらずだけど、本当は惣治郎もモルガナの事を気に入っている…はず。

「それはそうと」

手洗いを済ませ上に上がった時、惣治郎に引き留められて振り向く。

「お前から中間試験の結果なかなか良かったらしいな」

そう言っただけでカウンターの上にポンと差し出されたのは二枚の一万円札。どうやら中間試験の結果が良かったご褒美らしい。

「…いいの?」

「仮にも『今は』お前らの親代わりだからな」

不愛想に吐き捨ててるように、前なら聞こえたかもしれない。

でも、数週間過ぎた様子を見ればすぐにわかる。これはただの照れ隠し。

「その気持ち悪い顔を今すぐやめろ。じゃないと没収だ」

「ゴメンナサイ」

「俺も、いいんですか?」

「当たり前だろ。その調子で真面目に過ごしてれば、来年にはまた元に戻れる。がんば

れよ」

没取される前にありがたくお小遣いをいただきと、惣治郎はさつさと店じまいを始める。私と雨宮もそのルーティンにはもう慣れたもので、誰が言う訳でもなく三人で片づけを済ませてしまった。

すると自然に、全員の視線が優しく微笑むサユリへと吸い込まれていく。ほう、と息をつきながら、惣治郎はサユリの芸術としての出来栄を褒め称え、ナプキンで軽く額縁を拭いた。

「にしてもいい絵だよな。常連どもが見たら腰抜かすかもな」

「誰も気付かないんじゃない？ 爺さん婆さんはさ」

「…。かもな」

私のこれは、別に老人に対する皮肉だけじゃない、あまりにも、この空間に溶け込みすぎていて、誰も気付かないんじゃないかって、純粹に思った。

これは私が直接聞いたわけじゃなく、ゲームの中の記憶だけ…。

喜多川はこの絵をルブランに預ける時、『何でもない日常をほんの少し彩るだけでいい』とこぼしていた。これが展覧会の会場で、ライトアップされてショーケースに飾られてでもいたのなら、とてつもない存在感を放つに決まっているのに。

今私たちが見ているサユリには、そんな雰囲気はない。ただ静かに、私たちを見守つ

てくれているような。

なんというか、安心感がある。

私はそんなサユリの眼差しを眺めているうちに、いつしか自分の家族のことを思い出してしまっていた。

顔だつて全然違うし、女性であるということしか共通点がなさそうなものなのに、どうしてかこの絵は、人の母親への郷愁を煽るような気がする。

：あまり長くは見れないな。さつと視線を逸らして部屋へ戻ろうとする私を、惣治郎は寂し気な表情で見っていたような気がした。

.....

翌日：6月13日 月曜日

Ren：今日の放課後、いつもの場所で

An：いつもの場所ってどこだっけ：

Ren：ん？

An：なんか、最近は蓮の部屋に集まることもあったから

Yusuke：アジトはあの連絡通路だろう？

Ren：とりあえず今日はルブラン集合で

Ryujii：りよ

Ren：アジトどうしたい？俺も正直連絡通路は周囲の人が気になるし

An：だよな。私はルブランでもいいかなって思うけど

Yusuke：マスターに迷惑が掛からないのなら、俺もその方がいい

～静かにしてれば何も言われなと思うよ

Ren：多分問題ない

Ryujii：この二人が言うなら大丈夫じゃね？

Ren：じゃあ、これからはアジトはルブランの二階で

Ren：集合した後は、すぐ近くの惣治郎さんの家に行く

An:りよーかい!

.....

放課後すぐに集合した私たちは、事前に用意したアイテムたちを持って佐倉家に来ていた。インターホンを鳴らすと、静かにゆっくりと扉が開かれ、その先には双葉が…。

「あれ?」

「開けてすぐ何か走り去っていったな。まるで猫のような俊敏さだった」

「ワガハイほどじゃなかっただろ。…いやネコじゃねーよ!」

「今のは自爆したただけだろ」

まあともあれ、約束通り扉は開けてくれた。明かりのついていない暗い廊下を進み、階段を上って双葉の部屋の前へ。

「双葉—?」

「…い、いるぞう」

「開けて」

「ちよ、ちよつと待つてくれください」

消え入りそうな震え声が部屋の中から聞こえ、しようがないので、双葉の気持ちの準備ができるまで待つてやることにした。

一分。

…二分。

……三分。

……三分といえはカップ焼きそばか。ちよつと双葉の好物だしな…とどうでもいいことを考えているうちに四分。

……五分。

……五分と言えはカップヌードルというよりはうどんの方だろう。私は硬めの方が好きだから三分半ぐらいで開ける…などと誰に向けてでもないことを思い出しているうちに六分。

「双葉—?」

「い、今開けるから」

「あと二分経ったら蹴破るね」

「それは困る！」

閉じた扉の向こうから、気持ちを落ち着かせようと深呼吸しているのが聞こえてくる。まあ、本人にとつてはそれほどまでに重大なことなんだろう。それこそ、自分の人生を一からやり直すような覚悟で、私の手を取ってくれたんだらうから。

数秒後、留め具が軋む音とともに、ゆつくりと扉が押し開かれた。相変わらず電気は点いてないし散らかつてもいる部屋に、ちゃんと双葉の姿があつた。プルプルと小刻みに震えてはいるが、二本足でなんとか立っている。

事前に人見知りであることは伝えていたので、まずは物腰柔らかめに杏が切り出す。

「あなたが、佐倉双葉さん？」

「お、押忍……！」

「そんなにかしこまらないでっ。綺羅から話は聞いてるんだつたよね」

双葉はこくりと頷き、杏が続ける。

「あなたは何もしなくていいよ。わたしたちに任せて」

「……うん。信じる」

「なんか、人見知りつて割には大胆だよな。俺らみたいな得体のしれねえ奴に、こんなこと頼むなんてよ」

「それは……その……」

遠慮がちに指さされた先には私がいた。

「そいつの話を、私も聞いてたから…。そんな奴が言うなら、嘘じゃないかもって思った」

「安心しろフタバ。期待には応えてやる。ワガハイ達怪盗団が、きつちりオシゴトしてきてやるからよ」

「うひゃあっ!?ね、ねこ!?いつの間に!?!」

「猫じゃねー!って、そうか。コイツにはまだワガハイの言葉が分からんのか…」

いつの間にか雨宮のカバンから抜け出て双葉のデスクの上に陣取っていたモルガナに対して双葉がオーバーにのけぞり、正面に立っていた雨宮のつま先を踏み抜いた。

「うわあっ!?!ごごごごめんなさいいっ」

「いや、別に…」

他人の足を思い切り踏んだ驚きで態勢を崩した双葉を、雨宮が咄嗟に支えてやる。双葉の身体が軽いのもあっただろうけど、余裕そうに背中を支えてゆつくりと起き上がりせる動作は、雨宮のとうよりほはジョーカーの振る舞いというように感じられた。双葉も双葉で顔面を真っ赤にしているが、多分雨宮にされたことじゃなく自分の叫びっぷりに赤面しているだけだろう。

「その猫はあまり気にしないでくれ。それより、これから俺たちは君の心の中にいって、ふさぎ込む原因になつて認知を盗み出してくる」

「なるほど…だから、『心の怪盗団』なのか…」

「そうだ」

「…」

双葉は口をつぐみ、黙って私のほうをチラリと見る。なんだか助け船が欲しそうな目をしていたので、しようがなく私の方から口にする。

「ねえ雨宮。双葉も連れて行っていいかな？」

「連れていく？」

「うん。自分の目で見たいんだってさ」

そう言うと、雨宮はモルガナの方を向き、本人がパレスの中に入っても問題ないのかと聞いた。返事はYesともNoともとれない曖昧なもので、そもそも試したことが無いかから分からない、だそうだ。

「何が起きるか分からない以上、連れていくなら相当慎重にいかないとだぜ？」

「もちろん。それは百も承知で」

「…向こうで何か起きたら取り返しつかないぞ」

やや語気を強めたモルガナに頷いて見せると、やれやれとでも言いたげに頭を振って渋々了承してくれた。確かにリスクを伴う行為ではあるものの、私が傍についてやっつていれば大抵のことはなんとかなるだろう。これは根拠のない自信なんかじゃない。

結局、双葉には私がきつちりと護衛という形で付くことになり、この場に居る全員でパレスへの侵入を試みることとなった。

ナビを起動してしばらくすると、私たちはいつの間にか広大な砂漠の真ただ中には、立っていないかった。

「おおおお……」

興味深そうに周囲を見渡す双葉と一緒に降り立った場所は、ぎらぎらと眩しい太陽が輝く砂漠の上ではなく、薄暗くひんやりとした空間だった。

双葉の心が開かれているのが原因か、それともナビを使った場所の方が重要だったのかは分からないが、なんにせよ好都合である。いくら私でも、あの劣悪な環境下でドライビングをしたいとは思っていないかったから。

「ここが私の認知世界」

「おいフタバ？ここからは割と危険な道になる。勝手に一人で動いたりするんじゃないぞ」

「わ、わかった。コイツについていく」

モルガナの警告に素直にうなずいた双葉は、小動物並みのすばしっこさで私の背後にびったりとくっついてきた。うむ。それでいい。

それからはジョーカーが先陣を切り、このピラミッドの内部と思われるパレスを進ん

でいく。

といつても、双葉自身の拒絶が弱いせいか、ピラミッドの中心に向けて伸びる長い階段を遮るものは何も無く、ゲームの様にわき道を進むことを強いられる様子も無い。

それどころか部屋の扉も自分から開けてくれたので、頂上に行くためのエレベーターがあるフロアまで一直線にたどり着けてしまった。

一同、拍子抜けした様子ではあつたものの、戦わずに済むならそれに越したことは無いと先に進むことを優先した。

エレベーターに全員乗り込み、起動スイッチをジョーカーが押すと、足場が真上に向けて急発進し、かなりの高度まで上がってこれた。その場所は斑目のパレスと同じく、歪みの中心点に近い場所であることから、出鱈目に切り離された不安定な足場の集合体だった。ここまできてようやく、シャドウの姿が見え隠れし始める。

「あれは…」

「シャドウだ。襲ってくる敵だから注意しろ」

「敵、なのか。自分の心の中にこんなのがいるって、なんか気持ち悪いな」

遠目から見た見た双葉が眼鏡の奥で顔をしかめる。それをみて、モルガナがすかさず補足を入れる。

「あれも、フタバ自身の認知が生み出した存在だ。といつても、その辺にうろついている奴

らは双葉の認知と直接は関係してない。無意識領域から生まれた自己防衛本能が、その場所に応じた形をとっているだけだ」

「人の無意識からあんな異形が生まれるのか？」

「姿かたちは人それぞれであることに間違いはない。なんてつたつて、シャドウもペルソナと同じ存在だからな」

「ペルソナ……。お前たちが使う力のことだよな」

「そうだ。と、まあここらでいっぺん見せとくか」

一体のシャドウが私たちの存在に気付き、生気を感じられないのろろとした動きで近づいてきた。墓守のような風貌だったそのシャドウは、蛇と人が融合したような姿のシャドウに化け、手に持った槍で先頭のジョーカーに襲い掛かる。

突き出された槍は短剣で弾かれ、反撃の蹴りがクリーンヒット。痛みで手を離し武器を失ったシャドウは狼狽し、ジョーカーに向かって命乞いを始めてしまった。ペルソナのなんたるかを見せようという流れだったのに、なんとも空気の読めないシャドウである。

「すまない」

一応本人も反省の念はあるようだ。

とは言いつつちやっぴかり仮面は入手してこの場は事なきを得た。しょうがないので、

モナがゾロを召喚して双葉に説明を続ける。

「これがワガハイのペルソナ、＼ゾロだ。ペルソナっていうのは、宿主の人格そのものといってもいい。ワガハイの場合、この雄々しき紳士の姿こそが、心を写した姿ってことになる」

「人格を、コントロールするってことか…うん、なんとなく理解はできる気がする」
「まじ?」

「スカルとは大違いね」

「ようするに、自我の一部をコントロールできていない状態だとシャドウになって、その逆だとペルソナになるってことか?」

「大体そういう認識でOKだ。素人にしては中々見どころがあるな」

「…シロウトじゃない。このへんの話は、お母さんの文献であらかた調べてたところだったし」

双葉の言葉に、みな一斉に顔を合わせる。

「君の母親は、どういう人だったんだ?」

フォックスがそう聞くと、双葉は少し声を詰まらせた。

複雑な事情であることはこの場の全員が察していることだとは思いますが、同時に一番気になる部分でもあるはずだ。私たちは自ら怪盗を名乗りその行為に信念を持っている

けれど、その実自分たちがやっていることについて一から十まで説明しきれるかと言われるとそうではない。

そもそもなぜ認知世界なんてものが存在するのか。イセカイナビとはどういう仕組みなのか。そのあたりのことはてんで知らない。

だからこそ、双葉のいう「母親の研究」とやらの興味が沸くのは仕方のないこと。

「私のお母さんは『認知訶学』っていう分野の研究をした。科学じゃなくて、訶学な。……大事」

「それは、認知科学とどう違うの？」

「人の認知が見える景色やその人の人格にどう作用するのかを研究する……ここまでは普通の科学と同じだ。でもお母さんの研究は、その認知に干渉する方法に関するものだった。……私が見た中に、この認知世界のこと書かれてた」

「知っていたのか」

ジョーカーの問いに双葉はかぶりをふる。

「言葉としては知ってたけど、でもまさか、本当に実在するなんて思ってたなかった。便宜上の造語だと思ってたから……」

「そうか。でもすごいな……見たことも無いはずの認知世界について、双葉のお母さんは研究を続けていたんだな」

「うん……。でも、その研究を…私は…」
「…」

その場の全員が双葉の母親についての疑問が喉を出かかったが、さしものスカルも遠慮し誰も口に出すことは無かった。

ここまで話を聞いてきて、次に気になるのは母親は今どうしているのか、だろう。惣治郎に引き取られているところをみるに、あまり芳しい状況でないことはほかのみんなからみても想像に容易いだろう。私がばらすこともできたけど、さすがにそれは少し双葉がかわいそうだ。

と、その場の誰もが二の足を踏んでいると、急にパレス全体がガクンと縦に揺れて、小刻みな揺れが起き始めた。

体勢を崩しかけた双葉を支えながら周囲を見渡すと、下の方から何故か砂がせりあがってきているのが確認できた。幸いここはピラミッドの中でもかなり上の方に位置するから、すぐに飲み込まれるような心配はなさそうだけでも。

またひとつ、大きな揺れが私たちを襲う。今度はさつきよりも大きな衝撃が、上の方から伝わってきた。

「おい、上を見ろ！」

フォックスの声に顔を上げると、ピラミッドの天井ともいえる部分に大きなヒビが

入っでいて、今にも崩れ落ちてきそうだ。

「おい、おいおいおい…!!」

「ウソ…崩れる…?なんで!?!」

「分からない…!だが、心当たりがあるとするれば」

モナはそこで言葉を止め、双葉に目をやる。

「リーサル、オマエは一旦フタバを連れて逃げる!」

「どこに」

「知らん!だがこの状況、一旦パレスの外に出たほうがきつと安全なはずだ!」

「…。モナたちは?」

「なにしにここに来たのか忘れたのか?オタカラを探す!」

「この状況でか!?!」

フオックスの疑問も最もだが、モナは当然と言わんばかりの態度で続ける。

「全部崩れてオタカラが埋もれちゃったら改心できなくなっちゃうぞ?」

「む…それは…」

「こうしてる時間も勿体ねえ!間違いなくオタカラは近いんだ!さっさと見つけてずら

かるぞオマエラ!」

「ちよーつと待った待った」

走り出そうとしたモナを引き留め、双葉をお姫様抱つこの形で持ち上げる。

言っていることは最もだが、ネタバレするところのパレスのオタカラは双葉自身であり、本人がここに居る以上。パレスにオタカラなど存在しない。

「どうせ下はもう埋もれかけてるし、一旦上に…」

言い終わるより先に、もう一度パレス全体をこれまでで一番大きな揺れが襲う。さっきまでの揺れとの違和感に思わず下を向くと、崩れた足場を飲み込んでいく流砂の中から、無数の触手のようなものがうねうねと顔をのぞかせていた。

あまりにも異質なその光景にサツと血の気が引いたような錯覚を覚える。

「なっ…なんじゃありゃあああ!?!」

「とにかく一旦上に逃げるぞ!」

ジョーカーの鶴の一声によって、私たちは全員一斉にその場を弾かれた様に駆けだした。真下はあんなふうになってしまっている以上、一度上から外に出て外側に向かつて突っ走るしか逃げる方法はない。流石のモナもここいらばかりは引き際を弁えて、生き残ることを優先するようだ。

「ジョーカーどつち!?!」

「っ…っ…っちだ!来い!!」

謎の崩壊が始まってさほど時間は経っていないにも関わらず、どこもかしこも瓦礫だ

らけで道らしき道はどこにもない。

3メートル以上は積み重なった瓦礫を乗り越えようと、ジョーカーが足場役を買って一人ずつ上に登らせていく。

パンサー、フォックス、モナ、スカルの順番で瓦礫を乗り越え、上でスカルが待機。

「双葉、立てる?」

「わ、悪い…腰が引けて…」

「うん。ジョーカー」

「どんたんたん」

私が皆まで言わずとも、ジョーカーは手を交差させて合図を送る。

私は双葉をお姫様だっこした状態で少し助走をつけ、雨宮の掌を踏んでふわりと跳躍。上でスカルが補助してくれたおかげで、難なく二人同時に超えることに成功。最後に、ジョーカーが自力で壁を駆け上がり、スカルが上で引き上げて全員が無事向こう側へ。

「オマエラ、これ使って上に行けそうだ!」

「走れ!!」

が、少々もたついたのもあって、さつきは遥か下の方に見えていた謎の触手が、随分近くまで迫ってきていた。一体あれが何なのかは見当もつかないが、間違いなく私たちが

に敵意を持っていることだけは分かる。

モナが待機するリフトの中に全員で転がり込み、最後に入ったジョーカーが近未来的な緑色の光を放つ操作盤のようなものを押すと、足場は浮上しほどなくして最上…つまり外へ出た。

もちろんてっぺんにはほとんど足場など残っていないが、一度外へ出れば後は階段状になっている外壁を駆け下りるだけだ。

リフトから繋がる僅かな足場を飛び越し全力で走る…!

「わたしのせい…？わたしの…」

我武者羅に走っている最中、耳を抑え酷く覚えた様子の双葉の口から、震える声で何かをつぶやいているのが聞こえてくる。…今、彼女の中でどんな思いが渦巻いているのかは、常人に理解できるものじゃないだろう。そもそもこんな状況に陥るだけで普通の人間はパニックに陥る。

「フタバアアアアアア」

「ひっ」

轟音と共に崩れ去るピラミッドを中腹当たりまで下ってきた時、私たちの立つ場所にいきなり大きな黒い影が落とされた。

「シャドウか…!？」

「いや、おそろくだが、あれは……!」

頭上を雄々しい大翼で飛び回っているのは、スフィンクスのような体躯に人の顔を持ち合わせた化け物と呼ぶにふさわしい凶悪な見た目の何かだった。私はこれの正体を知っているが。

空を旋回しながらこちらをねめまわす双眸から伸びる視線は、常に私の腕の中に居る双葉に注がれ続けていた。

だが今はそんなことを気にする余裕はない。一瞬でも足を止めればこのピラミッドの崩壊に巻き込まれてしまう。

「モナ、車くるま!!」

「わかってるよっ……!!?」

全員で必死にピラミッドを駆け下りながら、パンサーが機転を利かしてモナを空中へと放り投げた。そして空中で車に変身したモナはピラミッドを降りきった場所で待機。

どういう仕組みか知らないが車の後方の扉が取り払われ、全員でそこに飛び込む――! 雪崩れ込むように突撃したので車内はあらゆる角度で独創的なポーズをとる人間で埋め尽くされた。その中をかいくぐりなんとか運転席に辿り着いたジョーカーがアクセルを踏み、背後から襲い来る崩壊の余波と謎の触手の猛追を振り切ろうと爆走する。

ニャータリーエンジンがフル回転する音と共に、左右に大きく揺れるままに車内で転

げまわるみんなの呻き声が漏れる。

「ちよつ…どこ触ってんだっつの！」

「しよーがねえだろこんな状況なんだからよ！」

「ぶむう…!？」

「…ごめん双葉。ちよつとだけ我慢して」

「命を削られるようなこの緊迫感…!!そしてこの見渡す限りの大砂原にパレス独特の異様な光景…!!ああ…くるぞ。俺の中の芸術が」

「フォックスちよつと黙っててくれ！」

「オイジョーカー！このまま走ってたらパレス出ちまうぞ!？」

「分かっている…！揺れるぞ！」

直進していた車が急旋回し、後部座席で団子になっている私たちは物の様に車体の左側へと寄る。その直後、かすめた触手によって傾いていた車体は派手に一回転してもう一度走り出す。

身体のうちこちをぶつけながらも、まだこの車の走行が続いているのを見るに何とかジョーカーの運転のおかげで時間は稼げているようだ。でも、このまま走っているだけじゃあ埒は明かない。

未だに姿勢を正せないまま何とか窓の外を覗き見ると、崩れ去ったピラミッドを中心

に発生した大きな砂煙が音もたてずに後ろから猛スピードで迫ってきている。

見た目がただの煙なだけあって、その光景を見たところで特になんの焦燥感も抱かなかつた……というか、抱けなかつた。

その砂煙の塊が私たちの乗る車に追いついた瞬間、モナ車は派手に吹き飛ばされもはや上下感覚など感じられなくなるほど何回転もしたあと、真つ逆さまにひっくり返つた状態でようやく止まつた。

「お、オマエラ……無事か……？」

無事なわけではない。

モナは本来の姿に戻り、私たちは砂の上に放り出され、ふらつきながらも急いで立ち上がる。

「み、みんないる……？」

「おう、聞こえてるぞ……！」

ついさつきまで見晴らしのいい光景が広がっていたこの場所は、今や砂の嵐によつて一寸先も見渡せないような状態になっている。

私も、自分の腕の中に双葉がいることぐらしか状況を把握できていない。できていないが、私たちを追っていた触手が相も変わらず猛烈に迫ってきていることは感じ取れた。

「Charra!」

瞬時にペルソナを召喚し眼前に向けてナイフを振るう。視界こそ塞がれているが、肉を裂く手ごたえは伝わってきた。足元に転がった巨大なタコの足みたいな感触で、何が起きたのかは想像がついた。

「ゾロー!」

そして、モナがペルソナで疾風を巻き起こし周囲の砂を払おうとしたが規模がデカすぎてほとんど視界は確保できなかった。

それを見てジョーカーも、手持ちのペルソナを切り替えて疾風魔法を発動しようやく、ほんの少しだけ見通しは良くなった。けどまだ足りない。

私は二人の起こした旋風に向けて手をかざし、ジョーカーと共に特訓して手に入れた力を使おうと意識を集中する。

…大事なのは、目的をはき違えないこと。これは誰かを害するためじゃなく、ただこの砂煙を払うために使う。この広大な砂漠を丸ごと飲み込むような巨大な嵐を振り払うための、ド派手な爆発を…!

指を鳴らした瞬間、二人が生み出した小規模な竜巻の中にかすかな閃光が迸り、次の瞬間爆音とともに炎が爆ぜて自分の体ごと周囲のものすべてを吹き飛ばした。

足を踏ん張る間もなく体は浮いたので、双葉の頭と顔をしっかりと覆うようにして抱き

かかえながら着地の衝撃に備える。

そして背中から叩きつけられ何度も砂の上を転がりながら、ようやく止まった。今日はこんなおぼつかりだ。三半規管がいかれそうだし、そもそも砂の上を転げまわっているおかげで服の中まで砂だらけだ。

「双葉生きてる?」

「も、もうなにがなんだか」

よかった。息はしてる。

他の皆もかなり遠方かつ四方に散らばってはいるが、ただ吹き飛んだだけで砂の上に着地しているので大したダメージはなさそうだ。ともあれ、これで視界を遮るものはなくなり景色は一気に明るくなった。

相変わらず、清々しいほどの青空には双葉の認知上の母親が飛び回りながら様子を伺っていた。

そして…。

「佐倉、双葉」

「…え?」

地の底を這うような暗く冷たい声を響かせたのは、私たちの正面に立つ、金色の瞳をした双葉のシャドウ。

私の知るような雰囲気とは違って、なんだかやけに攻撃的な雰囲気を纏っている。

「何故、まだ生きてる。お前は母親を殺した大罪人。それなのに、何故？」

「…」

「どうして、怪盗に縋った。どうして、希望を感じた。どうして、生きていていいと、思った？」

「フタバア！お前のせいで私は死んだっ!!お前さえいなければ!!あの研究を完成させられたかもしれないのにつ!!」

憤怒の形相で、大空を旋回していた化け物がそう叫ぶ。双葉はその劈くような咆哮に耐え切れず耳を塞ぎ、私の胸に顔を押し付けて目を閉じた。さつきよりも息は上がっているし震えも大きくなっている。酷なのは分かるが、ここは本人に意地を見せてもらおうしかない。

縋り付く双葉を無理やり引き離し目と目を合わす。

「『思い出せ』」

「え？」

「直視して。あれは双葉の、認知上の母親だよ」

「…」

「もう一度言う。あれは、双葉の認知上の母親」

「わたしの、認知上の？わたしの…あたまのなかの」

彼女ならば理解できるはずだ。あの異形こそが母親であると、自分の頭の中で勝手に作り上げてしまっているという事実を。

「そいつの言葉に耳を貸すな、佐倉双葉」

膝をついて見つめ合う私たちに向かって、離れた位置に立つ双葉のシャドウが割り入ってくる。

「今まで自分の目で見てきたものが全てだ。お前のせいでお母さんは、ノイローゼを起こして自殺した。遺書にもそう書いてあった。親戚にもそう責められた。誰もお前を必要としなかった。それが全てだ」

「…」

「分かっているだろう。自分には生きていく価値が無いと。でも自分で終わらせる覚悟も勇気もないから、ただふさぎ込むことしかできずに生きることから逃げているだけだった。だから、怪盗団を利用しようとしたんだろう？」

「ちがう…！」

「なら、望み通り殺してやる。哀れなわたし」

その言葉を最後に、シャドウは手を翻す。

虚空に蛍光色に光る魔法陣のようなものが浮き出て、そこからさっきの触手が無数に

生えてきた。

真つすぐこちらに向かつてきた触手だったが、それは側面からの電撃を浴びて動きを止める。電撃が飛んできたほうを見ると、スカルがダツシユで私と双葉の元に駆け寄ってくれているところだった。

「リーサル！よく分かんねえけど、俺たちはとにかく時間を稼げばいいのか!？」

「うん。それでよろしく」

「おうよ！そういうことなら……!」

私たちの前に立って襲い来る触手をいなすスカル。何も考えていないようで、その実自分でできることは何なのかを常に考えているのがこの男だ。無駄な腕つぶしもこういう時には役に立つ。

他のみんなも触手を足止めすることに加勢してきてくれた時、これまで様子見を続けていた認知存在の双葉の母親もついに動き始めた。

巨大な獅子のような腕を大きく振りかぶりながら地上に急接近し、座り込む私たちめがけて爪を剥き出す。

「アルセーヌ!」

が、その攻撃が届くより先に、ジョーカーの雄たけびとともにその巨体は横に逸れ地面に叩きつけられる。アルセーヌの攻撃によって体勢を崩し、そのまま着地したよう

だ。

「若葉は任せろ」

すれちがいがまにそう言い残し、距離を取った認知存在を追うジョーカー。今の言葉の節に、私はどこか違和感を感じずにはいられなかつたが、今はそれを考える時間じゃない。こうしている間にも双葉のシャドウとみんなとの攻防は続いていて、状況は刻一刻と動き続けているんだ。

「…どうして邪魔をする、怪盗団」

「仲間が傷つけられるのを黙ってみてるわけねえだろー！」

「何も知らずに付き合ってるのか。可哀そうに」

「ああ？」

「佐倉双葉は死んで当然の存在だ。でも現実じゃ死にきれないから、お前たちを利用してこちらの世界へきて、逃れられぬ死を享受しようとしているんだ」

「死んで当然の存在なんて、そんな人この世に居ない！確かに私たちは、双葉ちゃんの事情をこの目で見てきたわけじゃないけど」

「そう、お前たちは何も知らない」

双葉のシャドウが一步、前に入る。

スカル、パンサー、モナ、フォックスの四人が一斉に腰を低く構える。

「お母さんが死んだのは、事故じゃない。わたしのせいで育児ノイローゼを起こし、そのせいで自殺したんだ」

「自殺…!?!」

「遺書にもそう書いてあった。初めから、わたしのことは大嫌いだったそうだ」

また一步、大きく踏み出す。

そこで気付く。

からだだが、うごかない。

認知の操作か、双葉自身の持つ認知訶学の知識や、長年の引きこもり生活で身に着けたハッキング技術の影響か。とにかく、指先一つ曲げることすらできなかつた。

「わたしは生きていることが罪なんだ。だから、ここで死ぬ。お前たちにはなんの迷惑だつてかけない。だから、」

「だから、何だ」

シャドウの言葉を遮つたのは、意外にも今まで静かに話を聞いていたフォックスだった。

「だから、大人しく死なせろとも言いたいのか?…寝言は寝て言うんだな、臆病者め」

「…なに?」

「分からないか?今の話が本当だったとしても、お前がやろうとしていることは、ただの

現実逃避だ」

「違う。わたしがやろうとしていることは贖罪だ」

「お前はただ、現実から目を背けたいだけだ。……きつと、贖罪したい気持ちだけは嘘じゃないんだろう。それだけ母親のことを思っていたんだろう。だったらなぜ、その母親から授かった命を蔑ろにしようなんて考えられるんだ」

「……」

「よく考えろ！お前がしたいことは、母親を裏切ることか？復讐することか？」

フォックスの言葉は、シャドウだけでなく双葉本人の心にも届いていたらしい。はつと息を呑む音が、二人の双葉から同時に漏れる。

「わからない……」

震える声で、できるだけの声量で言葉を発したのは、双葉本人のほうだ。本人の心の中で、一体どんな感情が渦巻いているのかは分からないが、それでも前を向こうとしていることだけはみんなが感じ取っていた。

と、その時……どこからともなく聞き覚えのない声がその場に響いた。

『「研究の邪魔をしてきて嫌いだった」、鬱陶しかった』

『……どうやら、君のお母さんは育児ノイローゼを起こしていたようだね』

『君のことが足かせになって、生きるのが嫌になっちゃったみたいだ』

『あんなに一生懸命になつていた研究の成果まで投げ出して…』

『自殺だつてよ。よほど娘が嫌いだったんだな』

『あいつのせいで…』

『あいつのせいで』

『あいつのせいで！』

『う…あああああつ?!?!』

続く罵倒の声に双葉は耐えきれなくなったのか、周囲の音をかき消すように叫びながら耳を塞ぐ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…！」

何度も謝罪の言葉を繰り返す双葉を抱えながらも、なお私は体の自由が利かない状態だった。シャドウの攻撃もだんだんと苛烈さを増し、少しずつ前線を押しやられてきている。

おそらくただこればかり、双葉の持つ力の特性が影響してるはず。だったらなおのこと、双葉にはここで覚醒してもらわなくちゃいけない。私たちは、こんな場所で足踏みしてる場合じゃない。

「わたしはここで死ぬべきなんだ！邪魔をするなら、お前も！」

「Chara」

私ごと双葉を貫こうと放たれた触手をペルソナで両断し、そして次は自分の中に呼び覚ます。

「双葉…」

また、私の周りに一瞬ノイズが走る。

動かなかった手足は、もう自由だ。

私は双葉と…フタバのシャドウに向けて言葉を連ねる。

「奇しくもそのオイナリが言った通り…」

「オイナリだ?!」

「…」

「…君はただ、真実に怯えて逃げてるだけだよ」

「っ…何も、知らないくせに!!」

「知ってるよ。死にたいと思ってることも、変わりたいと思ってることも、全部本当だって」

立ち上がり、赤い光を纏った拳を握る。

「どっちも叶えてあげるよ。この場所で今までの君は死に、新しい君に生まれ変わる」

一歩、また一歩と距離を狭めていく間は、やはり鴨志田の時と同じように周りの時が止まったかのような錯覚に陥る。

「わたしはそんなの望んでない！」

「望まれていないと、思い込んでいるだけじゃなくて？」

「…！」

「思い出せ、佐倉双葉。あの遺書が本物だったという証拠はあった？死の間際まで、ノイローゼの兆候なんてあったか？君が信じるべきは本当に、葬式に参列して母親の遺書とやらを大勢の親戚の前で読み上げたあの黒服か？」

「…」

「奇しくも、本当に奇しくも、そのオイナリが言った通り…」

「オイナリだどっ!?」

「…」

「…君が、本当にお母さんのことを信じたいのであれば、信じればいいんだよ」

「信じる…」

「君のお母さんと、そしてなにより、君自身を」

シャドウは一瞬俯き、そしてゆっくりと、決意のこもった瞳で顔を上げた。

「そう、か。やつぱり…違った。『アレ』は、お母さんなんかじゃない!!汚い大人が作り上げた幻想……!」

そう叫び、ずかずかとへたり込んだままの双葉本人に近寄っていく。

「立て、佐倉双葉!もう分かっているはずだ!お母さんの死の真相も、自分が何をすべきなのかも!」

「…うん。分かっている。分かっていたけど…でも、勇気が無くて安易な答えを受け入れちゃったのが良くなかったんだよな」

「わたしが本当にやるべきことは、死ぬことじゃない」

「やるべきこと…やりたいことは、研究を奪って、お母さんとわたしの人生を踏みじつた奴らへの叛逆だ!」

双葉たちは向かい合って、互いに頷きあった。どうやら、きちんと自力で答えに辿り着いたらしい。私がしたのは、ほんの少しだけ、自分の持つ決意に双葉の心の中てさせただけ。あとは全部、双葉自身の力でなんとかなるはずだ。

シャドウが光に包まれ消えた後、双葉は少しの間頭を押さえて苦しそうにしていた

が、それはみんな静かに見守り、やがて反逆の意志が顕現するのを見届けた。

小型の宇宙船のような形をしたペルソナからさつきまでとは少し小振りになった触手が伸び、双葉の身体をその中へと持っていく。

「ふ、双葉ちゃん!? 大丈夫なの?」

『大丈夫! ……なんとかなりそう!』

思わずパンサーが心配の声を上げるが、どうやら中は平和らしい。

それより、と双葉が続ける。

『その癖ツ毛眼鏡! ……ああいや、今は眼鏡してないけど。わたしが援護する! 地上に墜としたタイミングで攻撃してくれ!』

今の今まで、たった一人で一色若葉の認知存在の気を引き続けていたジョーカーに、双葉が助け舟を出す。あくまで時間稼ぎという名目で立ち回っていたせいもあるだろうが、お互いに大したダメージは負っていないように見える。

「フタバああア! ……お前なんて産まなければああ!!」

異形の姿に憤怒の形相。あれが、今まで双葉が抱えていた母親の幻想だ。

真実とはかけはなれたあの姿は、双葉の母親である一色若葉の研究内容を横取りしたのがために、その手のものに吹き込まれた偽りの真実が原因だ。今の双葉には、そんな幻の吐く言葉など届きはしないだろう。

『何を言われようと、わたしは生きる！もう一度と、騙されない！わたしのお母さんはそんなこと言わないっ！』

「黙れっ!!おまえのせいなんだ!ぜんぶ!お前の!!」

『…こんなまぼろしに騙されてたなんて』

「あと少しで『研究成果』を発表できたのに、お前が邪魔をした!!」

『…確かに、そうだった。わたしはわがままを言ってお母さんに怒られた。…でも!そのあとちゃんとお母さんは、研究が終わったら好きなどころに行こうって言ってくれた…!わたしのことを…だいすきだって言ってくれたっ!!』

双葉の叫びと共に、ペルソナから発せられた緑色の波動がパレス全体に波打ちながら行きわたる。

「わたしはもう、幻想なんかには惑わされない。お前はお母さんでもなんでもない、腐った大人が作ったニセモノだ!」

次の瞬間、快晴の空を映していたパレスにたちまち暗雲が垂れ込み始め空模様はおどろおどろしい嵐の様相を呈す。

今までとは違う乾いた暴風が吹き荒れる中、一色若葉の認知存在は大きな翼を翻し空高くまで飛翔した。暗雲の彼方まで飛び上がったのを見届けてモナが警鐘を鳴らす。

「まずい、いつ仕掛けてくるか分からんぞ!」

『わたしに任せて！自分の心の歪みぐらい、 “ハック” してみせる！』

「信じるぞ、フタバ!」

地上にいる私たちからは敵の動きを目視で確認することは不可能で、荒れ狂う嵐の影響で気配の察知も難しい。もしあの巨体の一撃をまともに喰らったりしたらひとまわりも無いだろう。

だけど皆、双葉の力強い言葉に背中を預けることをためらわなかった。その言葉の節々には、今までには無かった自信があつたから。

その時をじっと待つ。

そして、おそらく私と双葉だけが気配の接近を探知して訪れたその時に、暗雲を突っ切つて巨体が高速で地上に向かって体当たりを仕掛けてきた。

視認すると同時に直撃を覚悟しそうになるが、その前に突如として降り注いだ雷が、その両翼を焼き切つた……!

「よし今だ！みんな、やっちゃって！」

どうやら、今の雷は双葉が認知の操作で意図的に生み出したものだったらしい。場所を限定するとはいえ、かなり強力な力だな……と、感心している場合ではない。急いで包囲しトドメをさすために駆け寄る。

それでもかなり開いた距離を詰めるには時間が足りず、翼はなくともその四肢でもう

一度認知存在は立ち上がった。落下した位置から最も近かったのはジョーカーで、誰よりも早く追撃を行おうとペルソナを召喚していた。

「ラクシャール！」

刀を二本持った鬼のようなペルソナは見た目に反して俊敏に動く。その剣撃で四肢を切り裂き、敵を怯ませた間に、追い付いてきた私たちも一斉に加勢する。

私はそのままゼロ距離まで距離を詰めにいき、その後ろからみんながペルソナで攻撃を放つ。

キッドの電撃が巨体を穿ち、カルメンの炎が毛皮を爛れさせ、その炎をゾロの疾風がさらに助長し巻き上げらせる。

「ゴエモンッ!!」

そして苦しみからか手当たり次第に暴れまわる巨体が、ゴエモンの一刀によって片足を切断され地に伏した。

「ふ……ふたば……ああああ!!」

『もう……わたしは惑わされない。他人の嘘より、自分の魂を信じるって決めたんだ』

「死ぬ……のよ!!お前の……ような、忌み子は!!」

『ニセモノに何を言われたって、どうだっていい。何を言われようと、わたしは生きる!』

ダッシュでその巨体の真下に潜り込み、心臓目掛けて手をかざす。

「やれっ!!」

「ペルソナ……!」

イメージしたのはアルセーヌの呪怨の力。

直接心臓を焼く焔は天を衝き、認知存在の消滅と共に暗雲を吹き飛ばした。

かくして、双葉が真に自分を取り戻すことにできたことによりオタカラを得たことになり、パレスは崩壊を始めた。

・
・
・

急いでモルガナカーに乗り込み脱出しようとする最中、認知存在が消滅した場所に一人の人影が立っているのをパンサーが見つけた。

急ぐ必要はあるものの、出口は幸い遠くない。私たちは、その人影に走っていく双葉を見送り、事が済むまで待つことにした。

「お母さんっ」

「双葉……ありがとう。本当の私を思い出してくれて」

「ううんっ……わたし、おかあさんのこと……!」

「大丈夫よ。分かってるから。あなたは賢くて、可愛くて、わたしの自慢の娘」

さつきまでの怪物の姿とは打って変わって、そこに立っているのは穏やかな顔をした、人間の姿の一色若葉…双葉の母親だ。

二人が言葉を交わしているのを遠目に車の中から見守っていると、スカルが口を開いた。

「なあ…結局、双葉の母ちゃんって亡くなってるんだよな？」

皆複雑そうに首を縦に振ると、「やっぱそうだよな…」と顔を俯かせた。

「なんでなんだろうな。自殺では無いんだろ？」

その問いに対し、運転席のジョーカーが答える。

「多分、双葉の母親が研究していた認知訶学に関係してる」

「関係って？」

「例えば、その研究成果を横取りしようとした奴に殺され、遺書を捏造し自殺に見せかけた…とか」

「んなこと出来んのか!?今の世の中で！」

「俺もそうやって冤罪を着せられた」

「…つまジかよ」

「本人から話してくれればいいけどな」

「だな。ワガハイ達から詮索するような内容じゃないことは確かだ。でもその研究…間違はなくワガハイ達がやってることに関係してるぞ。何か情報が引き出せれば、ワガハイの正体にもつながる可能性がある…」

「イセカイナビのことも、もしかしたら知ってるかもしれないよね」

「無粋な連中だ」

あれこれと考えが錯綜している中で、フォックスはただ窓から双葉たちお様子を微笑ましそうに眺めながらそう言った。

「んだとー？」

「先のことを考えるのもいいが、今はただ、ひとつの親子の絆が結びなおされたことを祝福しているだけでいいだろう」

そう言われて一斉に、みんなの視線が双葉の元に集まっていく。

「…だな。もう、死んじまおうなんてかんがえてねーみてーだし」

「ああ。作戦成功だ」

「困ってる人を勇気づけるっていう怪盗団のモットー、達成できたかな」

「できたさ。ワガハイたち怪盗団は決して、目の前の困ってる人々を見捨てない。色々イレギュラーが重なったが、今回も上手くいっただな、ジョーカー！」

「リーサルが仕事を持ってきてくれたおかげだ」

「それはどうも……」

そう言いながら、私に不敵な笑みを向けるジョーカー。

私はなんとなくそれから目を逸らし、窓の外を覗く。

「てかそうだよ！オタカラはっ!？」

「まったくスカルは騒がしいな……」

「モナがオタカラオタカラ言ってたんだろっ!？」

「まったくこれだからアホは……。パンサー、スカルに説明してやってくれ」

「そうだよ！オタカラ、どうすんの!?!まだとってないよね!?!」

「マジかあ……」

ため息をつくモナの代わりに、私がスカルとパンサーの二人に説明してやることにした。

このパレスは見れば分かる通り、ピラミッド。ピラミッドは王の墓だとする説もある影響で、ここも同じく墓のイメージとしてこの光景になった。

つまり、佐倉双葉が死ぬべき場所としてあのピラミッドが出来上がったわけだ。

で、このパレスが出来上がった訳は、双葉は母親の死を捏造しようとした何者かの言葉によって、母親の死の原因が自分にあると思ひ込み、自らの死を望むようになってしまった……という経緯だろう。だから歪みの発生地が双葉自身となるわけで、必然的にオ

タカラも、双葉自身となる。

「なるほど、わからん」

「はあ…」

掻い摘んで簡単に説明した後、私もモナと同じようなため息をつく羽目になった。からかうモナといちやつくスカルの喧騒を横目に見ていると、何故か双葉が私の顔を見ながら微笑んでいることに気が付いた。

「…？」

結局その理由は分からないまま、双葉は母親に別れを告げて車に向かって走りだした。既に疲弊しきっている運動不足の体で、大量の砂の上を走る様は中々に滑稽だったが…。

「ごめん！待たせた！」

私の隣に双葉が乗り込み、ひとまずその場は脱出することとなった。

・ ・ ・ ・ ・

現実へと帰還した私たちは、込み入った話はまた後日としてその場で解散した。雨宮も先にルブランに戻ったので、今双葉の部屋には私と二人きりだ。

「すう…」

「…」

双葉はこつちへ帰ってくるなり電池が切れたように意識を失って眠り始めた。流石に、数年引きこもってた体にあのパレスの刺激は強すぎただろうし、無理もない。私はそんな双葉の寝顔を見下ろしながら、これからのことについて思考を馳せる。

こうして双葉をパレスに連れていきペルソナの覚醒を促したのには、もちろん理由がある。といつても、前々から計画していたものとは少し予定が違ってしまったけれど…。

明智から依頼された「仕事」は思いのほか直球でスピーディなものだった。あいつのことはひとまず逃がしたけれど、それがバレればすぐに私は切り捨てられる。それはまだ、私にとって望ましいことじゃない。

そこで双葉の協力を仰ぐことにしたわけだ。ターゲットには姿をくらませるように言っただけで、それだけじゃ確実に追跡されてしまう。双葉には、ターゲットの情報隠蔽に一役買ってもらおう。死亡確認こそされないものの、完全に消えたとなればそれ以上追うことも出来ず、その人物の抹消という名目は果たされる。…これで、上手くいくこと

を祈ろう。

上手くないかなかったら…その時はその時だ。

できればそんなことにはなつてほしくないけど…場合によつては多少強引な手段に打つて出る必要もあるだろう。でも、そうまでする価値はきつとある。

明智吾郎という人間を、私は救いたい。不条理や理不尽に見舞われ続けてきた彼だからこそ、きつと私の考えには賛同してくれるはずなんだ。

明智吾郎は生きるべきであるという、私の理想に。

「…おやすみ、双葉」

その明智吾郎は、この少女の敵でもあるわけだけど…それは明智を見捨てる理由にはならない。救われるべき人間は私がこの手で救つて見せる。

それこそが、今私がかこにいる意味なんだ。

「…きらい」

「んっ」

双葉の部屋を後にしようとした時、ふわりと自分の右手に何かが触れた。

見ると、それは弱弱しく伸ばした双葉の手だった。寝ぼけているのかなんなのか、まるで「行つてほしくない」と訴えるようなその手を振りはらつて、布団の中におしやる。でも、双葉はしつこく私の手を握ってくる。

「…」

聡明な双葉の事だ。多くは語らずとも、実際にパレスで見せたペルソナで、私の正体には気が付いていることだろう。

初めて双葉と話したとき、私は協力の対価としてアンダーテールの秘密を教えたと約束した。

「キャラ…」

「なに」

「ふへ…」

双葉にこれから頼む仕事の危険さにくらべれば、こんな情報は安いものかも知れない。でも、私は何としても双葉の協力を取りつけたかった。

気の抜けた気色悪い笑みを浮かべる双葉を見下ろしている間に、なんだか私も眠くなってきてしまった。そもそも今回のパレス、吹っ飛びすぎの転がりすぎでシンプルに消耗したし…。

「やれやれ…」

そんな言い訳を胸に秘めて、なかなか手を離そうとしない双葉に、私は従ってやることにした。

絶対に二人で寝ることは想定されていないベッドの上に寝転がり、目を閉じる。

女王の靴音

6月14日 火曜日

刃と刃がぶつかり合い、利き手に重い衝撃と痺れが走る。

私とジョーカーは放課後、本人の希望もあつてメメントスで特訓を行っていた。内容は特に以前までと変わらず、ただ本気で戦うだけ。

ルールも単純。ジョーカーは私に武器を当てることができれば勝ち。だから私はいつも、極力ジョーカーの攻撃を防御せず回避することに徹している。

でも今日は少し趣向を変え、あえてジョーカーの攻撃を受ける機会を作っている。実際のシャドウが私と同じ動きをするとは限らず、機動性を捨てた防御重視のシャドウだつて、今後は現れてくるだろうから、そのための方策である。

とはいえどちらの得物も小型で取り回し重視なダガーとナイフ。そもそもの戦闘スタイルがヒットアンドアウェイに特化した二人でそれを行えば、絵面は非常に地味になる。

だがそうも言わせない程度には、正面から受け止めるジョーカーの一撃は重たい。武器自体の小柄さに惑わされたなら、すぐに体勢を崩され隙を晒し、止めを刺されるだろ

う。

そんな攻撃を凌ぐためには、受け止め、耐えるイメージよりも、刃を擦り合わせ衝撃を外にいなす必要がある。ただ、普通のシャドウにそこまでの脳は無いだろうし、率直に言つて既にジョーカーの戦闘スキルはこの時点での適性を遥かに超えている。

「アラハバキ」

そしてペルソナ能力。

こつちも順当に力が増しているように思える。召喚されてくるペルソナも徐々に高位のものに変わつてきていて、技の使い分けも様になつてきた。元々の才能と選択肢の増加。そして常軌を逸した成長能力が、ジョーカーをこうさせている。

ただ一つだけ疑問に思えるのは、ジョーカーが未だにアルセーヌの仮面を手放していないことだ。もしこの世界が私の思うようなゲームだった場合、それは少し不自然と言わざるを得ない。

土偶のようなペルソナから放たれる無数の光線を避けながら、そろそろだろうと当たりをつける。

ジョーカーはアルセーヌを、文字通り自らの分身：切り札として使用することが多い。

一気にカタをつけたときや、強敵に出くわしたときなど。

「アルセーヌ！」

今回の場合は、けん制用のペルソナで相手の動きを制限し、必殺のタイミングでアルセーヌによる攻撃を凶つてきた。こんな感じで、ジョーカーはアルセーヌの力を大いに信頼し、活用もしてくる。

大きく翼を広げたアルセーヌから強大な呪怨が放たれる。直前のアラハバキからの攻撃によって私の動きをある程度制限し、広範囲の技を放つことで命中率を上げている。

その攻撃の仕方を見てピンときた私は、あえてジョーカーの狙い通りの動きをしてみることにした。

アルセーヌは頭上から地面に向けて呪怨を放ってくる。そしてそれを避けようと思うと、自然と体は後ろに下がりたくなる心理が発生する。私はわざとそれに乗っかった。

トドメとして放たれたかのように思えた特大の呪怨は、その実次の一手のための伏線に過ぎず、仕掛けもごくごく単純。

連続攻撃で敵の意識をペルソナに向け、後ろに避けるように攻撃の仕方を工夫。そしてまんまとそれを後ろに避けると、アルセーヌの呪怨で私の視界からジョーカーが消える。

そこからほぼ無音で距離を詰めてダガーを振るってくる。私は予め予想していたので対応できたが、並の相手ならここでチエックメイト：いや、もつと早い段階でやられてたか。

「惜しい」

ジョーカーの腕を掴み動きを止めたところで、一先ずこの回はストップ。

当分負ける気はしてないが、それでも成長速度という面ではやはり目を見張るものがある。凡人であればなにか裏があると勘ぐるところだけどこの男ならば、むしろこれが普通だ。

「ちなみにもし俺がリーサルに勝てたら、ご褒美はあるのか？」

「ご褒美？」

もう一度、お互いに距離を取って第2戦の準備を取りながら、ジョーカーは唐突にそんなことを言いだした。今まで考えたことは無かったものの、なにか思いつくかとしてらく考えを巡らせた。

「ないね」

ものの、結局何も思いつくことは無かった。

「だったら、俺が決める」

「ろくなものじゃない気がするんだけど」

一瞬、あの日ジェットコースターに乗りながら押し付けられた賭けの事を思い出し、嫌な予感がした。しかしあの時の勝負は結果的に私の勝ちということを決着が付き、私の、『相手に何でも言うこと聞かせられる権』はまだ保有してある。とんでもない要求が飛んできたとしても、それを打ち消す準備は万全だ。

「二度だけ俺の言うことを何でも聞く」

「やっぱり……」

ジョーカーから飛び出てきたその言葉があまりに想像通りすぎて特にリアクションもできなかつた。そんなに事あるごとに私に命令したがるなんて、一体何を企んでいるのかと聞いてみても、「それを言ってしまったら面白くない」と切り捨てられる。

一体全体、もし本当にその時が来たら何を要求するつもりなのか、少し気にはなるけど、あいにくわざとでも負けてやるつもりは無いので一生その答えは知らないままだろう。

「勝ったなら、いいけど」

「言質とったぞ」

「どうぞ。それより、もう一回」

私の言葉を皮切りに、再びメモメントスに戦闘音が響き始めた。

いつか、本当にジョーカーが私を超えるようなことがあったなら、それは私の計画が

上手くいっていないということになる。もしもそんなことになってしまったのなら……どうすべきか考えておかないといけない。少なくとも、ジョーカーが私よりも強くなつた時点でこの世界は終わつたに等しい。

私に勝てるのは、私と同じ力を持った者だけだ。ジョーカーに、それは必要ない。

特訓を終え、外で待機していたモルガナと合流。勝負の結果は言うまでも無い。よつて、今回も雨宮の要求は却下となつた。

「雨宮」

「なんだ？」

とはいえ相変わらずケロツとした様子の雨宮に、私は少し気になつたことを聞いてみた。

「いつか私に勝てるって、本気で思ってる？」

蟻の様にこつた返す人の群れの中、駅前のベンチに二人して腰かけながら缶ジュースを開ける。

炭酸の抜ける気味の良い音が二回。雨宮は自分の分のジュースを一口あおってから、

口を開いた。

「いつかは必ず」

ひたすらに真つすぐな瞳でそう言い切られてしまった。この男が言うとなんでも冗談に聞こえないのが厄介なところだ。とはいえ、流石に今回ばかりは冗談で終わらせるけれど。

「本気？」

「もちろん。俺だって、ただ勝ちたいってだけで言ってるわけじゃない」

「ふうん。なにか根拠でも？」

「教えたらフェアじゃないだろ」

「教えたほうがフェアじゃない？」

「なあ、ワガハイ腹へったぞー」

私と雨宮の間に座るモルガナがそう呟き、ふと自分も空腹であるということ思い出す。

「とりあえず帰ろう」

「…そうだな。惣治郎さんも待ってる」

心なしに、話を切り上げられたことにほっとした様子の雨宮に気付きはしたものの、この時の私はそれを追求する気には何故かなれなかった。モルガナだって、妙にさつき

は棒読みだったし。

けれど隠し事をしているのは自分も一緒であるという事実と、聞いたところで決して雨宮は答えてくれないだろうという確信が、私に見て見ぬふりをさせた。

人と人との関係は簡単に変わる。それを怖いと思ったことは今までに一度だつてなかった。

家族との関係は信頼しきっていたから。

友人との関係は、そこまで固執していなかったから。

でも、仲間との関係だけはどうしても、変えたくないと思つてしまった。これが人間らしさだというのなら、この弱さも悪くはないのかもしれない。

ルブランへと帰り夕食を済ませた後、私は惣治郎宅へと足を運び双葉の部屋を訪れていた。昨日からずっと寝たきりな様子 of 双葉の傍らに座り、しばらく待つても目を覚まさないので軽く頬を叩いてみる。

変化は無し。ついでにひっぱったりつねったりしてみても、起きる様子は無い。

私はスマホを取り出し、双葉の耳元で大音量のアラーム音を鳴らし始める。そこまで

すればさすがに身じろぎぐらいはしたものの、目を開けようとはしない。

「おーい」

「あと十分…」

起きてるじゃないか。

右手の中指を親指に引つ掛けて力を籠める。そして限界まで力を溜めたのち、中指を抑えていた親指の力を抜く。

「いたつ…！」

額に受けたデコピンの衝撃で、ようやく双葉は目を覚ました。

当たった場所をさすりながら体の向きを変え、仰向けから横向きに。

「今何時だ…？」

「21時」

「まじか…」

「起きて」

「起きる…けどなんで？」

「いいから」

もともと芋虫のような緩慢な動きで身を起こすかと思われた双葉だったが、その半ばで再び重力に従って横に倒れ込んだ。眠いのは百歩譲って仕方ないとして、このまま

では二度寝という強烈な欲求に負けてしまう。

無理やりに双葉の身体を起こすと、ほぼ開いていないような目をこすりながら一分ぐらいの間ぼーつとしていた。

「だんだん覚めてきた」

「それはよかった」

「…で、なんの用なの？キヤラ」

さつきまでより随分と低いトーンで、わたしの名を呼ぶ。

「お願いしたいことが二つあってね」

双葉の正面にあるデスクからチェアを引つ張りそこに座る。

「まず、昨日のことちゃんと覚えてる？」

「覚えてる。…覚えてるに決まってる」

「うん。双葉は今、私たちと同じ力を持つてる状態。つまり…」

「怪盗になるかってこと？」

「そう。どうかね」

「…わたしは、お母さんが死んだ理由をちゃんと知りたい。し、研究を奪った奴も、放つておきたいはない」

「そう。じゃあ歓迎する」

「軽いな……」

元より、双葉がペルソナを覚醒した時から仲間の皆はそのつもりだった。少しとはいえ双葉の過去を知った彼らが、今更彼女の加入を拒む理由は無いだろう。

「大丈夫だよ。それより、双葉の方は大丈夫なの？」

「え？」

「怪盗団の仕事についてはもう知ってる通り。異世界で力を使って戦いながら、悪人の歪んだ欲望を奪い出す。そんなことを日常的にやってる。思ってるよりもハードかもしれないよ」

まあ口でこうは言いつつ、双葉には怪盗団に入ってもらわないと困るんだけど。

一応念を押してみても、双葉の答えは変わらなかつた。改心の効果かは知らないが、双葉の決意は脆くないようだ。自分を変える第一歩として、この手段を選ぶ……それも、双葉なりの叛逆の形ということか。

ちなみにコードネームは既に思いついているらしく、後日改めて全員集まった時に発表するつもりらしい。

「じゃあ次。こっちは私の個人的なお願いなんだけど」

「なんだ？ 犯罪には加担しないぞ？」

「……」

「……え？」

これから依頼する内容を鑑みてみると、部屋の中に重苦しい沈黙が流れた。

「…今から言うことは双葉にしか話してない重要な話ね。いい？」

「くり…」

「私は今、廃人化事件の犯人と協力関係にある」

「…」

そう告げた瞬間、双葉は大きな目を真ん丸に見開いて、数秒の間脳の処理が済むまで呆然としていた。まあ、それは当然こうなる。

双葉の母親が死んだ原因となった交通事故も、元はと言えば巷でウワサになっている廃人化現象によって引き起こされたもの。いわば廃人化事件の犯人とは、双葉にとって最も忌むべき敵。

「…どういうこと」

「二重スパイみたいな話。犯人の代わりに廃人化を請け負うフリをして、犠牲者が増えるのを防ぐこうとしてる」

「なる…ほど」

「でも、殺せって言われた奴がずっと生きてるんじゃすぐに怪しまれる。だから、私が廃人化させたように見せかけて逃がした標的の情報を、双葉には隠蔽してほしいんだ」

「そんな危ないこと……」

そう簡単に二つ返事で応じることのできる内容じゃないことは理解している。でも、私にはこの誘いを双葉が絶対断らないことに確信があった。人の良心に付け込むようで少し気は晴れないけど。

「それ、怪盗団の連中は知ってるのか？」

「知らないよ。まだね」

「……いくら何でも危なすぎる。わたしだって、それに加担してバレたりしたら……」

「もし双葉ができないって言うなら、もう直接犯人に直談判するしかないかな」

「もう……」

頭を掻きむしりながら、双葉はこれ見よがしにため息をつきながら私の脇を通り過ぎてPCの前にドカッと座る。……が、そこにあつたイスは今私が使っている。

コントのように盛大にずっこけた双葉は腰をさすりながら立ち上がり、私からイスをひったくる。

「はあ……で、誰だ？」

「青野秀一。国会議員」

「分かった。明日までにやっとく」

やけっぱちのように承諾した割にはやけに乗り気である。私がそれを指摘すると、双

葉は口の端を大きく吊り上げ、私によく似た笑みでこう答えた。

「綺羅はどう思ってるか知らないけど、私にとってはもう憧れの存在なんだよ。ほんで、今のわたしのポジ的には完全に縁の下の力持ち。相棒ポジションってやつだ」

「そうかな」

「そうだ！だからやる気になるのも必然なの」

「じゃあ、これからよろしくね。報酬は何か考えとくよ」

酷く冷たい夢を見る。

この夢を見るのは初めてではない。本来は一度だつて見ることはないはずの夢。冷たさしか感じられない寒々とした暗闇の中で、ただ立ちすくむ夢だ。

誰もいない。ついさつきまで自分は、仲間に囲まれて過ごしていたはずなのに。

…いや、正確には居る。間違いなくここには、誰かが居る。

そう感じてすぐ、懐かしくも忌まわしいあの光景がよみがえる。

気が付くと、また自分は電車の中で目を覚ましていた。当然これも夢の中の映像なのだ…。

この時の感覚はよく覚えている。

直前の記憶とあまりにも乖離した目の前の光景に、頭が理解が追い付かず、困惑した。

自分はどうしてこんな場所に居るのか。なぜあの場所に居ないのか。

この時の自分には、何一つ分からなかった。

全てを終えた自分はこの場所に別れを告げたはずだった。それなのに、今日の前に広がっている光景は見覚えのあるものばかりで。

ありていにいって、時間が巻き戻ったかのような不思議な感覚だった。決していい気分ではなかった。

だけどそのすぐあと、自分のその感想は確信めいたものになる。

自分以外にも、同じような違和感を覚えている者に出会えたからだ。

やはり今自分が居る世界は何かがおかしい。一体何が起きているのか調べなければならぬ。

とはいえ調べようにも何から手をつければいいのかさっぱりわからず、ただ二度目を淡々と過ごしただけになった。

そして迎えた最後の日に自分は気づいた。
居るはずの人間が、そこに居ないことに。

.....

6月15日 水曜日

「きらら……？」

この日、私はいつものように兩宮より一時間ほど早くに起床し、どんな寝起きドツキリで迎えてやろうかと吟味していると、兩宮が何やらつぶやきながら目を覚ました。寝言自体珍しいし、そもそも私の事はいつも妻木と呼んでいるのに下の名前を口にしたことに少し驚く。

「…おはよ」

「ああ…おはよう」

「オマエにしては珍しくぐっすり寝てたな」

モルガナのその言葉を聞いておもむろにスマホの画面を見る兩宮。

「えっ」

そして現在の時刻を確認するや否や、脱兎の勢いでベッドから飛び降りて登校の準備を急いで開始した。今回の寝起きドツキリはあえて遅刻ギリギリの時間になっても起こしてあげないドツキリである。モルガナはチュールを引き合いに出せば簡単に寝返った。

「モルガナめ…！」

「自分で起きれないやつが悪い」

「くそ…」

焦りのあまり、堂々と私の目の前で荷物を用意と着替えを一瞬で終わらせ、慌ただしく階段を下りていく雨宮と、その後をついていくモルガナを見送る。

はて、今のは本当に私の名前を呼んだんだろうか？それとも言葉端が切れていただけか……どちらにせよ、随分と妙な感覚だった。

なつかしさでは無いな。

「んー」

考えても答えは出なさそうだったので、大人しく自分の荷物を持って一階へ。

「よお。まんまと嵌められたみたいだな」

「すいません惣治郎さん。今日の朝ごはんは……」

「持ってけ。これなら歩きながらも食えるだろ」

寝ぐせなのか元々なのか微妙に分かりづらい頭のままルブランを出ようとした雨宮に、なにやら惣治郎が手渡していた。小さなお弁当箱みたいなものを風呂敷で包んである。

「え、ずるい」

「お前が食つてたのと同じだよ」

同じってことは、あの中にはサンドイッチが入っているらしい。手ごろなサイズだし、確かに登校しながらでも腹に詰めることはできそう。とはいえ中身が違ったら大変

なので、一口ぐらいは私もいただくでしょう。

「ありがとうございます。行ってきますっ」

「おう。気をつけろよ」

雨宮が風呂敷片手にルブランを出るのに続いて、私もドアに手をかける。

「行ってきます」

「あいよ」

・
・
・

「なあなあ、ワガハイにも一口……」

「駄目だ」

「私にも一口……」

「無理だ」

「俺にはくれるよなーレンレン？」

「却下だ」

いつも通りなあなあで同じ電車に乗った坂本と私たちは、電車を降りて駅から学校への通学路を歩きながら、サンドイッチを頬張る雨宮に粘着し続けていた。

たまご、ハム、レタス等見る限りは至極シンプルな具材で構成されたサンドイッチだけど、朝自分で食べたからこそ分かる。それは絶対に美味しいと。

しかし何度懇願しても雨宮は決してそれを譲ろうとしない。話の分からない奴だ。

「あ、妻木さんっ!」

そんなこんなでじゃれ合いながら歩いていると、不意に背後から名前を呼ばれて振り向く。

そこには何となく見覚えのあるような無いような、絶妙に記憶に残らない平凡な顔をした女子生徒が立っていた。

「おはようー……ございます?」

「誰?」

「がーん!」

目の前の彼女は分かりやすくショックを隠し切れないといった様子で自分の顔に指を指す。

「あたしだよあたし! 秋山玲央!」

あきやまれお。

その言葉を頭の中で何度も復唱してみてもピンとくることは無く、変わらない、というかどンドン曇っていく私の表情を見て、秋山なる人物はこれ見よがしにがっくりと肩

を落とす。

「え、マジで知らねえの?」

「ごめん」

ぽかんとした表情で成り行きを見守っていた坂本がそう聞いてきたので、正直に答える。

「新手のナンパか?」

「違うよっ!てか知ってるよ!絶対に!だって二人きりで会話したこともあつたよ!」

ふむ。ナンパでないとすると、詐欺の類か、あるいは宗教への勧誘かといったところだろう。見たところ同じ年で秀尽の生徒であるところを見るに、親から無理やり宗教への勧誘をお願いされて…という可能性も無きにしも非ず。

「なんかめっちゃ真面目な顔で考えてるみたいだけど、絶対違うからね!」

「宗教の勧誘ならお断り」

「はい不正解!」

どうやら違つたらしいが、だからといって何か閃くわけでもなし。小首をかしげていると、秋山は憤慨した声でまくしたてた。

「もう、約束してくれたじゃん!あたしに勉強教えてくれるつて話!」

と、それまで朝食を食べることに集中していた雨宮が私の方に向き直り、コクコクと

頷いた。どうやら雨宮は彼女のことを覚えているらしい。でも、彼女にとって用があるのは私なのに、その私が覚えていなくて関係ない雨宮が覚えているというのも変な話だ。

「そう！ヘンなの！」

必死に思い出そうとしている私の横で、雨宮が当時の状況を簡単に説明しだした。曰く中間試験の結果が張り出された日に話していた…みたい。そしてにわかには信じがたいが、私と秋山は連絡先も交換しているらしい。

疑心暗鬼なままスマホを確認すると、なんと本当に連絡先が登録されていた。そこまでの条件がそろってついに私は、目の前に立つ人間の存在をうつつすらとだけ思い出した…！

「あー」

「思い出した？」

「なんとなく」

そういえばそうだった。確かあの日は、一人で超巨大ハンバーガーを食べに行った夜…私は確かに勉強を教えてあげると、最後に言った気がする。それを思い出した途端に前言撤回したくなってきてしまったが…。

「ツマキ、一度約束したのならちゃんとしてやれよう？」

「ええ……」

「ネコっ?」

案の定、聞こえてきた鳴き声を辿って、秋山の視線は雨宮のカバンから顔を覗かせていたモルガナのものでピタツと止まる。

まるでもぐらたたきのような動きで頭を引つ込めたモルガナだったが、その後すぐに引つ張り出されて散々秋山の手によつてモフられていた。わざわざ私の退路を断つた報いだ。

・
・
・
・
・
放課後…… 図書室

結局その後、私は話を聞かれていた雨宮たちに追い込まれる形で、仕方なく放課後の時間を使って秋山玲央の勉強に付き合うこととなった。

別に、他に何か用があつたわけじゃないから構わないのだけど……。正直、世界の命運に関わらない人間に興味は無い。こいつの事を覚えていなかったのもそのせいだ。

私にとって、残された時間はそう多くないのに。

「妻木さん」

「ん」

「ど、どんな感じかな…」

半ば放心状態でぼーつとしてしていると、隣に座る秋山に声をかけられた。どう、と聞かれても特に何も見ていなかったので適当な返事しかできない。が、所作からして今解いていた数学の問題集の回答がどうなのか、と聞いているらしいので、さつと手元の回答欄を流し見る。

目立った間違いも無いけれど、ケアレスミスが目立つと言えば目立つ。理論上は理解できているみたいだけど、凡ミスが多い。これはただの集中力の問題で、学力の問題では無さそう。

本人にそう伝えながら、間違っている箇所を指さしていく。

「これだったら、別に私が教える必要もないと思う」

「ううん。違うの。そのケアレスミスをなくしたいの」

「難しいことを言うね」

…なんだか面倒くさそうな展開になって来た。

問題の解き方を教えるぐらいなら誰にだってできる。でもこういう類のミスは本人

の中でどうか解決策を見つけてもらおうほかない問題だ。おそらく地頭は良い方だから、努力次第としかアドバイスのしようがない。

「どんなに頭が良くても勉強が出来ても、百点満点なんてめったに起きないことなんだよ……でも妻木さんはさ、それが出来た。だからあなたに聞いたの」

「別にあなたの知らない秘訣とかがある訳じゃない」

「天才だつていいたいの？」

「違うよ。ただ、沢山頑張つただけ」

私が今嘘をつく理由なんてない。今回に至つてはただテストで満点をとつただけの話だけど、それに限らず私はあらゆることに置いて中途半端で済ますような真似はしてこなかった。やるなら徹底的に、一番になりたかつただけ。

「でも、妻木さんつて普段は全然まじめに授業受けてないつて聞くよ？」

「今はね」

「そっか……。でも、それでいうならあたしだつて、必死に勉強してるつもりなんだけど……」

俯く秋山を見て少し考える。

何かにおいて成功することには努力は必須だ。

でも、努力さえすれば必ず成功するわけじゃない。才能や運だつて必要だ。努力しな

ければ成功しないと、努力すれば成功するのでは言葉の意味が変わってしまう。

そして、目の前の彼女も例にもれず勉強で成功するために努力はしているのだろう。それでも手が届かないというのなら、才能が欠落しているかあるいは努力が足りないか。どっちが原因でも私がどうにかしてやれるような問題ではなくなってくる。

「そこをなんとか! どうしても、今の点数じゃ足りないの!」

なおも食い下がる秋山はやけに余裕なさげだった。たかがテストの点数にそこまでこだわるワケが、きつとなにかあるのだろう。

「どうして、そんなにこだわるの?」

「…前も言ったけど、多分忘れてるよね。行きたい大学があるの。なんとしても、絶対に行かなきゃいけない。そのためには、今のままじゃ…」

「じゃあ、どうしてその大学に行きたいの?」

質問を変えると、秋山は少し視線を逸らしてこう続けた。

「あたし、二つ上の姉がいて…。同じとこに、入りたいなって…」

なんとなく、今まで見せていた熱量に対して動機が薄いなど思わなくもないけれど、まあ極度のシスコンなのかもしれないしそこは突っ込むべきところではないのかもしれない。

「足りないのは、努力じゃなくて決意かも」

「…決意」

「本気でその大学に入りたい、姉と同じ大学にいきたいって思うだけじゃ努力にも身が入らない。その大学に入るって『決意』するの」

「…難しいなあ。具体的には？」

説明する方が難しいのだけど…今回だけは特別だ。

「したい、なりたいたけじゃ気持ちが届いてないってこと。そうなるって自分の中で強く決めることが出来れば、努力の質も上がるはずだよ。事実、私はそうやってきたし」

「へえ…。ちなみに妻木さんはなんのために勉強を頑張ったの？」

「…。負けず嫌いだから」

「ええ…たつたそんだけで…？」

「それだけでも、目標は大きいと思うけど。こっちにきてからは一回目の学年一位だけど、前まではずっと私が独占してたからね」

「ええっ!?!…って、そりやそうか。満点取れる人が居たらそうなるか…」

まあ実際は、それだけでは無かったわけだけど、そこまで話す義理はない。

呆れたように笑う秋山は視線を落とし、考えるような素振りを見せた。

「難しいけど…でも、妻木さんから見て、あたし自身の学力的には大丈夫そうってことでいいの？」

「うん。足りないのはケアレスミスをなくす工夫と地道な努力じゃないかな。頭は良い方でしょ、きつと」

「そっか…」

私がそう言つてやると、秋山は嬉しそうに笑い、少しだけ自信を取り戻したような表情で感謝してきた。朝あつた時は随分快活な様子だったのに、問題集を目の前にする和别人のように表情が固くなつていた。おそらく彼女にとつて、勉強はさほど好きなものではないんだろう。目標はあれど打ち込み切れていない…そんな印象だ。

これ以上は、私が首を突つ込むような問題ではないのかもしれないけれど、少し気になつたのは事実だつた。

「…うん！ありがとう！なんかちよつと自信出てきたかも」

「それはどうも」

「あ、でもあたし普通に英語苦手だから、そこはやさしく教えてもらえつてもいい？」
なんとなく、心の奥に闇を抱えていそうな…そんな気がしてしまった。

少し前の私ならさして気にも留めなかつただろうに、一度気付いてしまったからにはなんだか放つておけなくなつた。誰かさんのお人よしが移つたのかも知れない。

そんなこんなで私は、かれこれ小一時間は秋山の勉強に付き合つた。六月の夕方…あまり外の明るさは変わつていないけど、いい時間なのは間違いない。

「今日は、一先ずこの辺りで」

「うん。ありがとね、妻木さん！」

「明日はどうする？」

「えっ？」

「やるなら付き合おうよ」

荷物をまとめて椅子から立ち上がった姿勢のまま、秋山は少しの間驚きの表情で固まっていた。私の態度からして、あまりこの勉強会に前向きじゃないことは察していたんだらうけど、流石にその反応は失礼つてもものだろう。

「いいの？」

「中途半端は嫌いなんだよ」

「イケメンすぎ」

「目標があつたほうがいいよね。次の試験は20位以内を目指そう」

私のその提案に、秋山は一瞬顔を曇らせた。

前回の中間試験の結果的には、秋山は平均ラインのやや上程度だったらしい。そこから一気に上位を狙うというのは、確かに現実的ではないように思うかもしれない。

でも、私から言わせれば秋山は地頭は確実に優秀だ。正しく導いてやれば、20位以内程度、狙えるだけのポテンシャルは秘めている。

「やりたいかやりたくないかで言えば？」

「やりたい、です」

「なら、やろう」

下校時も、駅までは同じ道のりの秋山と二人で帰った。

道中、噂の転校生である雨宮の話を興味深そうに聞いてきたので、見た目に寄らない変態であると宣伝しておいてやった。ついでに、よく一緒にいるところを目撃される坂本や杏についても、聞かれるがままに答えた。

「やっぱり、雨宮君もそんなに悪い人じゃないんだね」

「やっぱり？」

「妻木さんの友達だし、そうじゃないかなって思ってたんだ。流れてた噂も、結局鴨志田先生の仕業ってだけでしょ？」

私は頷き、話の続きを促す。

「不憫だね…彼も」

同情するように、秋山はそう呟いた。一体誰と比較して彼“も”と表現したのかは、

聞かないでおいた。必要以上に踏み込む必要はない。

「そういえば、その関連でひとつ言いたいことがあつただけだ」

「なに？」

「うちの生徒会長、いるでしょ？新島真さん」

にいじままこと

その名前には、もちろん覚えがあつた。何をかくそう、その新島真もいずれは怪盗となる人間の一人だからだ。

新島真は秀尽学園3年で生徒会長を務めている女子生徒。生徒たちからは庶民的な印象を持たれていなくて、よく鉄人だのと揶揄されているぐらいには真面目で模範的な人間。というのが周囲の認知。

「あの人、なんだか最近雨宮君のこと調べてるみたいだよ。この前あたしにも聞いてきた。例の、鴨志田先生の時の予告状？あれを貼つた人を見てないか……とか。多分遠回しに、雨宮君じゃないかって疑つてる様子だったよ」

「ふうん」

「こつちに来たばつかで雨宮君にそんなことできるわけないのね。怪盗なんて子供じみた噂、なんであの人が調べてるんだろ」

「信じてないんだ。怪盗」

「信じてないわけじゃないよ。だって明智君も、怪盗がいたらいいなって言ってるんだ

もん」

思わず秋山のほうを向いてしまったが、別に何もおかしな会話で無いことに気付き正面向き直る。どうやら今の声色からして、彼女は探偵王子支持側らしい。だからと言つてどうという訳でもないが、奴の本性を知っている以上メディアで見せている明智吾郎の仮面を信じ切っている人の言葉を聞くと、少し胸糞は悪い。

「明智君かつこいいいよねえ。あんな彼氏がいたらもつと勉強も頑張れるのに！」

「そういうもの？」

「そういうものだよ！妻木さんだつて、誰かのために何かをするつて、とつても大きなモチベーションになるでしょ？」

悩む素振りは見せたものの、実際それはその通りだ。私の場合、それは仲間や家族で、ある人にとつては恋人とかそういう人になったり、あるいは全く別の存在になったり……。それもまた、形を変えて決意を得るきっかけになるのかもしれない。

「じゃあもし、明智吾郎と連絡先交換できるつてなつたら、どうする？」

「え？いやー…どうもしないかな」

「どうして？好きなんでしょ？」

「あたしが好きなのはテレビに出てる明智君だし、プライベートな部分を見て幻滅したくないっていうか…」

正直、彼女との交流には毛ほどの興味も無かったけど、案外私にとっても勉強になる部分が多いのかもしれない。

何の変哲もない人間だからこそ、最も多数派となる意見を持つている。はみ出し者ばかりの怪盗団においては中々触れられない価値観にも、彼女からはお目にかかれるかもしれない。

それから、駅で別れるまで私たちはなんだかんだ話題を途切れさすことなく議論をかまし続けていた。そのことに気が付いたのは、秋山と別れてしばらく口を閉じている間に異常に喉が渴いていると感じた時だった。

改札前の自販機で益ジューズを買い一気に飲み干したその直後、ポケットに入れたスマホが震える。

メッセージの差出人は、明智吾郎だった。

．．．．．

明智は、吉祥寺の一角にあるカフェを待ち合わせ場所に指定してきた。言われるがま

まにやってきた私は、待ち合わせ場所から少し離れた路地裏で、双葉に電話をかけていた。

…が、コール音が鳴り響くばかりで、一向に繋がらない。寝ているのだろうか。

あのターゲットの情報隠蔽が既に済んでいるのなら問題はないのだけど。

明智もまさか、こんな人目のつく場所で例の取引についての話をするわけではないだろうし、でもだとしたら一体なんの用なのか。

一抹の不安を覚えながらも、時間に遅れないように私は待ち合わせ場所まで足を進めた。

そして例のカフェが目の前に見えてきた頃、テラス席に座る明智らしき姿を視認した。近づく toward こうも私の存在に気付き、見事な探偵王子の仮面をつけた笑顔で私を店の中へと手招いた。

店に入り、店員に待ち合わせをしていると伝えてテラスの方へ。

「やあ、妻木さん。急に呼び出してごめんね？」

そして、少しも悪びれる様子のないさわやかな笑みで私を迎える明智の向かいに座る。丸テーブルを挟んで足を組んでいる明智は、手慣れたように店員を呼びホットコーヒーを注文した。既に明智の手元にはマグカップが置いてあるが……。

「奢るよ」

「なんで?」

「呼び出したのは僕の方だからね。これぐらいはさせてよ。…あ、もしかしてコーヒー苦手だった?」

首を振って否定すると、明智はバツと顔を明るくして「それならよかった」と無邪気に笑って見せた。どうにも調子が狂う。

「何の用なの?」

会話のペースを向こうに握らせないために、こちらの方から本題について切り出してみた。すると明智は少しだけ明るかった表情を落とし、自分のコーヒーを一口飲んでから口を開いた。

「別に、大事な話があるわけじゃない。ただ、僕らは互いの事をあまりにも知らなすぎるだろ?」

「私はそれでもいいんだけど」

「そう言わずにさ。僕の『仲間』として、ある程度の事は知っておきたいんだ」

よくもまあぬけぬけと、心にもないことを流暢にしゃべれるものだ。流石に、これまで大勢の大人を相手に本性を偽ってきただけはある。なにせよ、今の明智は私に探りを入れる気満々なことだけはよく分かった。

「と言つても、こっちのほうで少しだけ調べさせてもらったけどね」

「調べた？」

嫌な予感がした。

「君が、特別な家庭に生まれたこととか」

「…そんなの知ってどうなるの。私と君はただの取引関係でしょ」

「そうだね。間違つてはいないけど、だからこそ、コントロールできないのは困る」

組んでいた足を戻し、明智は片肘をつく。

…もしかして、双葉に隠蔽を頼んだターゲットの件について、早速疑いをかけられているのか？

「君、もしかしなくても、初めて〴〵じゃないよね？」

「…」

「その歳で一体どれだけ殺ってきたんだい？」

どうやら、そうではないらしい。むしろ、私にとってはこっちの方が都合がいいのかも知れない。気が狂っていると思われる分には、取引関係を継続するうえでまったく障害にはならない。

「ひみつ」

ニヤリと微笑みそう返すと、明智はごく自然に吹き出した。顔も声も笑っているが、頬に伝う冷や汗までは隠しきれていない。…この調子だ。調子を狂わせるのは私の役

目。

ひとしきり笑った後、明智は小声でこう続けた。

「ほどほどにしておきなよ？僕たち側で情報の隠蔽は完璧に行われるとはいえ、現実で行動を起こせば流石に目立つ」

「分かつてるよ。…でも、同じ人間で異世界と現実で二度楽しめるのはいいね。君には感謝してる」

「はは…それはどうも」

あのターゲットがまだ生きていることはバレていないようだ。明智…というか、獅童の方でも青野の情報は上手く処理するだろうから、その際に色々と不自然な点が発覚したんだろう。おそらく双葉が上手くやってくれていて、現実の青野は私がかしたという認識でいるらしい。

…というか、本当に生存がバレていないのなら、明智とその他の情報の伝達はかなり雑である可能性も出てきた。あと数か月の間なら、なんとか騙し切れるかもしれない。

「でも、本当にこれが初めてじゃないんだね？」

「何度も言わせないでよ。ひみつだって」

「…そうか」

「…なにか？」

「いや、僕たちって案外似た者どうしなのかもって思ってたね」

「…どの辺が？」

「既に人生終わってる辺りが」

…余計なお世話だ。

と、言つてやりたいところだけど…実際明智の言っていることは的を射ている気がしてならない。私も、明智の事はどうも他人事のように思えなかつたから。

「私がどんな家に生まれたかは、もう知ってるんだよね」

「少し悪い気もしたけど、そうだね」

ウソつけ。

「じゃあ、君の話も聞かせてよ。『お互い』の話をするんでしょ？」

「僕の？」

「聞かれないと思つてたの？」

「いや、君つててつきり他人に興味なんて無いものかと思つてたから」

少し黙つた後、明智はチラリと周囲を気にするような素振りを見せて、肩を落とした。

「確かに、僕だけ知ってるのは不公平か」

そうだそうだと目で訴え話の続きを促す。そして、タイミングよく明智が勝手に注文

したコーヒーを店員が運び終わってから、少しづつ、かいつまんだ過去の話を聞いた。

明智吾郎という男は、似た者どうしであると言った端から：私とは正反対といえる人生のスタートを切った。ようは、家族に愛されるような環境では育たなかった、ということ。いわゆる「隠し子」として生まれてすぐ、父親は居なくなり母親は病で伏した。「父親のことは、本当にそれしか知らない。だから親戚に世話になることも出来なかつたんだ」

「…」

「だからといって、母親のほうの親戚には、僕のせいで母が死んだって非難されつばなしでね。我ながら、よくあの環境に耐えてこれたと思うよ」

「脱却するために努力したんだ？」

「まあ、今の地位に立てるぐらいにはね」

へらへらと笑う明智の顔からは、とてもその当時の事は想像できそうにない。ましてや、今メディアでちやほやされ切っている、あの明智吾郎がと考えればなおさらだ。そんなどん底から這い上がってくるのには、それ相応の努力と、なにより才能が必要だったことだろう。

「そう言ってくれるのは嬉しいよ。…でも、今の僕になるためには、才能以外にもっと重要なものがあつたと思ってるよ」

「…へえ」

「“決意”だよ。僕はこんなところで腐る人間じゃない。必ず見返してやるんだってね」

その言葉が。

明智の口から、決意という言葉が出てきた時、私の心は大袈裟に揺らいだ。心底、氣持ち悪くて、疎ましくて…。

それと同時に、同情もした。

「…同情はいららないよ。君だってそうだろう？」

「していないけど、それはその通り」

「そうかな。今の君の眼、僕が一番欲していない眼をしているよ」

「それは…いいこと知った」

憐みこそ明智にとつて最も疎ましい視線であるに違いない。そんなことは私も分かっている、あえてこんな視線を送っている。だってこんなにも哀れという言葉が似合う人間を、私は他に知らないから。

生まれがどうか、それから心が歪んでしまった経緯とか、そんなものなんかよりもっと大きく。この男は、運命に見放されている。生まれつき世界にとつての悪であることを宿命付けられた存在…：そんな部分が、やはり自分と似ているような気がしてなら

なかつた。

「君も人が悪いな」

「お互い様」

現代版、おぬしも悪よのう。悪役じみた笑みを浮かべた二人の間に、無理やり店員が割り入ってやたらデカい皿を私たちのテーブルに置いていき伝票を渡してくる。

「？」

「それも頼んでおいたんだ。せつかくだから二人で食べよう」

「…なんで？」

今度も心の底からの疑問符を浮かべて明智に問う。

「話題性のあるものは一通り食べておきたい性分だね。でも、一人で食べるには流石に量が多いし…」

…確かに、今私と明智の間に鎮座するパンケーキは想像を絶するほどの高さまでトッピングが積まれている。デザートとして食べるにはいささか大きすぎるし、かといって昼、晩の一食分にするには微妙にたりなさそう…そんな、私が考え得る限り最も注文しなさそうなメニューを、明智という男は話題性オンリーで注文しやがった。女子高生か、コイツは。

しかも、スマホで写真を一枚撮った後は特に感動する素振りも見せず割と淡々と食

進める始末。こういうのも今風なんだろうか。

「こういう店、よく来るの?」

冗談にならないほどのポリュームなので、仕方なく私もパンケーキを頬張りながら明智にそう聞いてみた。

「いや、ネットで話題になってるメニューを、毎日いろんな店を巡って食べてるんだ。職業柄色んな人と話すことになるから、話の種は常に仕入れておきたいからね」

「ふうん。じゃあ好きなものとか無いんだ」

「特には。あ、でもお寿司は好きかな。回らないやつ」

「…自腹?」

「まさか。仕事の付き合いで連れて行ってもらうのが大半だよ」

そうか…。あわよくば寿司のおごりも取引の内容に加えようと思ったんだけど。

フォークでパンケーキの端を切り取り、過剰にトッピングされたホイップクリームを口につけないよう気を付けて運ぶ。味はそこそこだが、このポリュームのせいでこの値段になっているんだとしたら、普通のサイズで他のトッピングも楽しめたほうが良いなと、伝票を見ながらふと思う。

そして、まさかこのパンケーキだけはワリカンと言い出すのではと思いきり明智に聞くと、どうやらこっちも支払ってくれるらしい。妙に気前が良くて疑ってしまいそうに

なるが、一般学生よりよっぽど潤ってるんだらうし、さほど気にするようなことでは無いのかも知れない。

「気前がいいね」

「それは僕も思ってるよ。例の話、てつきり報酬の取り分なんかも引き合いに出してくるかと思っていたから」

「たつた今、明智にそう言われるまで気が付かなかった。そういえばそういう手もあったなと。」

でもまあ、だとしても報酬なんてものは必要ない。使い道も思い浮かばないし、それに何より、そういうものを要求してこないことも、私の気が狂っていると思わせる要因になる。

「私は仕事をやらせてもらっただけで満足」

「君がそう言うならいいけどさ。後から言っても払えないよ」

「お金なんていらぬ。どうせもうすぐ、一銭だつて必要としなくなるんだから。」

「…シゴトね。君、自分が何に手を貸しているのか本当に理解してる?」

「解ってるよ。ココじゃ言えない事ね」

「…」

「へまはしない。君に迷惑もかけない」

フオークを置き、空になった皿に目線を落とす。明智はなにか、私に対して聞きたいことでもあるのか、慎重に言葉を選んでいる様子だ。そんなことしなくたって、私は逃げも隠れもしないのに。

「妻木さん」

「…なに？」

「迷信は信じるクチかい？ 幽霊や、宇宙人とか」

明智の目は私の目を捉えて離さない。そこにある感情は複雑に交ざりあっていて、とても読み取れなかった。

迷信…。既に異世界なんてもの受け入れている身としては、信じるとしか答えられないような質問だ。

でも、明智が聞きたいのはそういうことじゃないはず。こういう曖昧な質問をする時、人は心のどこかで欲している答えがあるものだ。その内容がどんなものであれ、嘘であれ真実であれ、自分が欲する答えなら満足する。

それが人間ってもの。

「幽霊も宇宙人も信じてないよ。でも…」

「でも…」

「『神』は、信じてるかな」

「……へえ。それも意外だな」

「運命も、あると思ってる。だからこうなっちゃったんだよ、私たちは」

そういうと、明智は苦虫を噛み潰したような表情をして私から目を逸らした。明智にとつて求めていた答えでは無かったのかもしれない。

明智はどうかなのか聞いてみると、探偵王子は仮面を捨てた眼で私を鋭く睨みつけてきた。

「僕は運命なんて信じない」

憎しみとも嫉妬とも嫌悪ともとれる声色で苦し気に吐き捨てた。運命とは不変のものと考えているなら、その思考はジョーカーのものとよく似ている。でも、この場合は違うだろう。明智は運命の存在そのものを否定しており、ジョーカーは運命が不変であることを否定する。

正反対なようでよく似ているこの二人。似通っている部分は多くあるが、もっとも大きな要素を占める感情の部分では大きな差がある。

人間ならば誰しもが抱える決意が向いている方角。

明智は混沌を生み出すためだけの存在としてこの世界に造られた。そのためだけに苦しい生まれを経験し、自分を偽ることがどんどん上手くなっていった。だからきつと、心のどこかで私に対する嫌悪が同族嫌悪であることにも気づいているはずだ。

私と明智はもつと深い、タマシイの部分がよく似ている。

「僕は君とは違う」

「そうだね」

私はどうしても、そんな明智吾郎という存在を放っておく気にはなれなかった。

明智はそんな私の雰囲気が入らないようだ。

と、その時ケータイのバイブ音が私と明智の耳に届く。太ももに伝わる振動から、これは私のスマホに電話がかかってきたのだと分かる。

画面を見ると、佐倉双葉の四文字。さっきかけた電話に今気づいたんだろう。

「ごめん。そろそろ」

「ああ、分かった。それじゃ、次は仕事の依頼で連絡させてもらおうよ」
「待ってる」

「もしも…」

『だ、ただ、大丈夫だったかっ？』

食い気味に双葉の声がスピーカーから届く。

「うん。問題なかったよ。双葉がやってくれたんだね？」

『ま、まあな……これぐらい朝飯前だ』

不安そうな声から一変、無事なことを伝えるとおちやらかした様子の元気な声が返ってきた。ひとまずは双葉が私のためにきちんと依頼をこなしてくれていたこと、そしてその成果は思った以上だったことを喜んでおくとしよう。

やはり双葉の技能は頼りになる。速さも正確さも優れているし、なにより情報戦は専門的な知識が必要になる分替えもきかない。怪盗団にかかせない存在だ。

『にしてもいきなり吉祥寺？リア充カップルかよ……』

「なんの話？」

『いま綺羅のスマホのGPS追ってた。明智と会ってたんだろ？』

「そうだけど」

……なんで人のスマホのGPS勝手に追えてるんだ。

「ねえ、どうやって私の場所知ってるの」

『企業秘密だ』

思わず聞いてしまったが、双葉はこれといって悪びれる様子もなくあっさりそう答えた。別に見られて困るようなことにはならないだろうけど。

とはいえ、双葉の言う通りいきなりの誘いだったことに違いはない。それも、薄氷の

上に成り立っているような共犯関係である私に対しての。何を考えているのかと勘ぐる気持ちになってしまうのも無理はない。

わざわざ人目のつく場所に誘ったのは明智のほうだ。ならば、本当に取引の話をするつもりはなかったんだろう。

『それはいいとして、大丈夫だったのか？新しい依頼とかは…』

「ない。少しの間は休暇になりそうだね」

『そうか。ところで綺羅……ん？』

駅までの道をのんびり歩きながら、耳に当たったスマホから聞こえてくる声を聞いていると、不自然にその言葉が途切れる。

少しして、遠くから聞こえる誰かの声と、木の軋む音が聞こえた気がした。

「双葉？」

『しー……い』

声をかけると、双葉は「静かにしろ」と訴えてきた。大人しく黙って耳を澄ませていると、聞こえた気がした声はどれも私の知っているものだど気付く。

一つは惣治郎の声。まあ双葉の居る場所に惣治郎がいても、なにも不自然はない。

もう一つは、雨宮の声。どうやらこの三人が一緒にいるらしい。

ずいぶん遠くから声を拾っているらしく、会話の内容までは途切れ途切れにしか聞き

取れない。別に言い争っているわけではなさそうだけど…。

より耳を澄ますと、また違う声が聞こえてきた。今度は、女性の声だ。ルブランに来る女性客なんて、新島冴か武見妙、もしくは老夫婦の婦人の方ぐらいしか知らないわけだが、そのどれとも違う。

というか、私はこの声を知っている。かすかに聞こえてくる声は、間違いない…。

『雨…君ね。…きたい…のだけ…、いい…？』

『あー…なんか…ましたかね。…だつたら申し訳…』

『いえ…少し話…だけ…』

新島冴…ではなく、その妹であり秀尽の現生徒会長、*“新島真”*だ。

何をしに来たのかは不明だけど、どうやら雨宮に用があつて来たらしい。ということ
は、今双葉もルブランに居るってことなんだろうか。だとしたら、もう惣治郎とは話を
したのかも。

私は軽く舌を鳴らして双葉を呼ぶ。

「帰つたら教えて」

『りよーかい』

通話を終えてスマホをポケットに入れると同時に、また通知が鳴った。少しため息を
つきつつもスマホを取り出して画面を確認する。

画面には雨宮の名前が表示されていて、どうやらメッセージではなく通話がかかってきているようだ。

少し迷い、通話に出る。

「もしもし」

『こんばんは妻木さん。わたしのことは知ってるわね？悪いんだけど、今すぐ帰ってきてくれるかしら？あなたに話があるの』

ハキハキとした口調で流れてきたのは、予想通り新島真の声だった。

遅かれ早かれ接触する予定だった相手だ。別にうろたえる様なことじゃない。「少しかかるけど、それでもいいなら」

『…ええ。構わないわ』

「わかった」

想像していた反応じゃなかったことに少し戸惑いは見れたものの、毅然とした態度はそのままだった。やけに自信に満ち溢れているし、鴨志田の件について深く踏み込むつもりなのかも知れない。

やれやれ。今日は色々あるな。

イヤホンを取り出して耳に装着。お気に入りの音楽をかけながら、私はルブランへの帰路を急いだ。

嵐の前

四茶の駅から地上へ出たと同時に振り始めた雨から逃げるようにして、私はルブランへと駆け込んだ。濡れ鼠になった私を苦笑いで出迎えた惣治郎は、手に持っていたふかふかのタオルを投げてよこしてくれた。

礼を言い髪を拭きながら二階へと足早に上ると、本来なら憩いの場であるその空間は一時的に生徒指導室のような空気に満ちていた。

「ごめんなさいね。突然呼び出して」

部屋には、真、雨宮、モルガナ、そして私の四人。双葉は上手く真の目をすり抜けることが出来たようだ。：そして、どういう経緯かは知らないけれど、私もここに呼び出されたということは、真は私がここで生活していることを知ったということになる。大方雨宮から直接聞きだしたんだとは思うけど。

「色々とあなた達には聞きたいことがあるのだけど、今日は本題だけ話すわね」

私がソファに座ると同時に、同じく姿勢よく椅子に座った真が話し始める。

「鴨志田先生の件についてよ。もちろん覚えてるわよね？」

「…ああ」

雨宮がチラリと私を見て、短く答える。

「それなら、貼り紙があつた日のことも覚えてる?」

「多少は」

「そう。わたしはね、あの貼り紙を実際に貼つた人を探しているの。心当たりはないかしら」

さながら、尋問のような口調と鋭い目つきで雨宮を問い詰める真。だが、雨宮は特に狼狽える素振りも見せず、かぶりをふる。流れるように私へも視線が向けられるが、無言で否定。

「率直に言うと、わたしは雨宮君があつた件に関わっていると思つてゐるの」

「どうして?」

「あなたと鴨志田先生との間には少なからず因縁があつたはずだし、それに、同じく鴨志田先生の被害に遭つていた生徒とも、転校したばかりにもかかわらずあなたは交流を深めていた」

「竜司と杏のことを言っているのなら、ふたりはただの友達だ」

「その二人だけじゃないわ。喜多川祐介もよ」

真の口からその名前が出たのには多少驚いたが、私はいつまでたつても決定的な証拠のようなものが出てこないことに違和感を覚えていた。記憶では、坂本が街中で口を滑

らせた内容を録音し、動かぬ証拠として怪盗団に突きつけてくるはず。

もし証拠を握っているのならさっさと提示してしまえばいい。それをしないということはつまり。

「鴨志田先生の時とよく似た状況で、斑目一流齋は罪を自白した。そしてあなた達は、その斑目の弟子だった喜多川祐介とも交流がある」

「たまたまだ。確かにそういう共通点はあっても、それとあの予告をしたつていうのを結び付けるのは、少し無理があるんじゃない」

雨宮の反論に、あまり突かれたくない部分だったのか真は少し苦い顔をした。

でも、真ならそんな反論が来ることぐらい予測済みのはず。それでも真の反応が芳しくないところを見るに、れっきとした証拠はないが賭けで突撃してきたのかもしれない。

真らしくないとは思わず、むしろこの無鉄砲なところも真らしさと言えると、私は思っている。

明晰な頭脳をもって緻密な計算を組み立て、確実な成功を手にする：そんなイメージを持たれがちなのこの生徒会長は、実のところかなりの行動派かつ、突拍子もないことを平然とやつてのける豪胆さも持ち合わせている。

でも今回ばかりは彼女も相当追い詰められているようで。

「鴨志田先生の時も斑目のときも、あなた達は妙な部分で繋がりがあつてゐるし、いくら証拠がなくても疑われるのは当然と思わない？」

「疑うこと自体は構わない。だが、俺たちは関係ないとしたか答えられない。…それだけだ」

「…関係ない、ね」

「そもそも、何故会長がそんなことを調べてる？こんな風に、直々に話を聞いて回つてまですることか？」

「それは…もちろん、生徒会長として学校で起きた事件を整理するためよ。あんなお騒がせな事の真相が謎のままじゃ、他の生徒にも余計な混乱が生じてしまうわ」

真面目なこつた、とモルガナが茶化す。

とはいえ、このままでは話は堂々巡りを抜け出せそうにない。雨宮もそう判断したのか、話を切り上げ真を帰そうとするが、当の本人はまだ粘る気らしい。

「これ以上追及されるとまずいことでもあるのかしら？」

「そう言う訳じゃない。でもこんなの時間の無駄だろう」

「そうでもないわ。それに、わたしが聞きたいことはまだ残つてゐるもの」

そう言つて真は立ち上がり、雨宮が普段使用している作業机へと近づいていく。

それを見てモルガナが焦つたように机に飛び乗るが、既に遅い。

「普段、ここに何をしているの?」

相変わらず、真の言葉の端々には揺るぎない自信のようなものが感じ取れた。絶対に大丈夫、そう尋問される側が思っている、そういう態度で向かわれると思わぬぼろを出しやすいもの。

おそらくは真にとってもシミュレーション外だったはずのこの展開において、優位なのは追われる側の雨宮ではない。

「勉強したり、趣味でモデルガンを弄ったり」

「モデルガン?どこにあるの?」

上手く躲したな…と内心で感心しつつ、作業机の上に置かれたドライバーやレンチの類を持ち上げる真を観察する。

雨宮はしぶしぶといった風を装い、普段使っている武器のレプリカを収納…もとい隠しているダンボール箱を、棚の上から下ろした。

「これだ。一応、取り扱いには気を付けてくれ」

「ええ。分かっているわ」

気を使っているふうに受け取られても良いし、マニアなんだなと思わせてもいい。さりげなく、触りすぎると伝えながら、雨宮は真の追跡をどうにかかわそうと言葉巧みに立ち回っている。…で、私はそれを面白がりながらただソファに座って眺めている。

「え……？」

箱を開けた真は一瞬驚愕し雨宮の顔を見るが、雨宮は気に留めずに見たいなら見ろと手で示す。

「これ……本物じゃないわよね？」

「そんなわけない」

おそるおそる、箱の中から一丁の拳銃……のモデルガンを取り出した真は、まじまじとそれを眺め始めた。真がそういうのも無理はなく、それは雨宮が岩井から直接の取引で手に入れた特別カスタムされた代物。

箱の中身に本当にモデルガンが入っているのを見て少し落胆したように見えた真だけど、今は少し目が輝いているように……見えなくもない。内心ちよつとテンション上がっているのかも知れない。

しかし、あの新島真がそんなことで本分を忘れるわけではない。一通り銃を確認したのち、今度は作業機の脇に掛けてあった布袋を確認しようと振り向いた。

……が、既にその袋は一匹の黒猫と共に元あった場所から姿を消していた。

「あら……？」

「どうかしたか」

「……いえ。ここにさつきまで袋が提げてあったと思うんだけど」

「そんなものあったか？」

協力を仰ぐような目をした雨宮がこちらに話題を振ってきたので、「さあ？」とだけ答えてやる。別にどう転んでも構わないから、私は中立の審判係である。

ちなみに、あの袋には異世界で使う用の煙幕やキーピックなんかがごろごろしていた。さすがに使用用途を説明できないし、追及されたら言い逃れはできなかったかもしれない。

けれどとにかく、この場所にあった非日常を感じさせる要因はこれでほとんどなくなった。

真はそれからもしばらく部屋の物色していたが、揺さぶれるようなものを見つけないとほできなかつたらしい。

「…どうしても認めないのね？あなた達が犯人だと」

「認めるも何も、違う。それ以外に言えることは無い」

「そう。…分かつたわ」

小さく聞こえないように吐かれたため息とともに、真は踵を返して階段を下りようとする。その背中からは、さつきまでの自信は少しも感じ取れないばかりか、ちらりと見えた横顔からは焦燥しか感じなかった。

階段を下り惣治郎に軽く会釈すると、扉へ手をかける。

「おじやました。また来ますね」

平面上は平気そうにそう言い残した真は、通学鞆から折り畳み傘を取り出して、雨の降る外へと出ていった。

それからしばらくはいつ忘れ物を取りに戻られてもいいように気を張り続けていたが、数分して双葉が家からやってきたのを皮切りに雨宮とモルガナは肩を落とす。

「お前ら、なんか会長さんに目付けられるようなことしたのか？」

脱力シルブランのソファに体を預ける雨宮とモルガナを見て、惣治郎が訝しげに聞いてきたので私が答える。

「別に。学校でも怪盗騒ぎがあったから、聞き込みしてるみたい」

「ならいいけどな」

「ところで…、と惣治郎が続ける。

「双葉、お前…どうしたんだ？」

「なにが？」

雨宮の席を挟んで隣のソファに寝っ転がっている双葉を見て、惣治郎は心底不思議そうに目をぱちぱちさせていた。

「なにがって、お前…。つい昨日まで家に引きこもってただろ。それがなんで急に…」

「悪いか？」

「さや……」

普段は私や雨宮に対して厳格な態度でいる惣治郎だが、やつぱり双葉の前だとタジタジである。惣治郎からすれば、長年外出すらままならなかった人間がいきなり家を出ていて、しかも他人と普通に話しているのだから驚いて当然ではある。

「子どもの成長は早いもんなだよ、惣治郎」

「お前いつから俺の事を惣治郎って……いや、まあいいか……」

困ったように頭を掻きながら、いつもの定位置であるカウンターの裏へ戻る惣治郎。

よく分からないといった風でも、やつぱりどこか嬉しそうに見えた。惣治郎にとつては、きつと自分より大切に思っている存在の双葉が、少なくとも今までよりは明るく、元気な姿を見せてくれていたのだから。

「なあ蓮、連絡先もらつてもいいか？」

「かまわない」

……だからこそ、全国の娘を持つ親よろしく、その交友関係には案の定敏感なようだ。

「お、おい双葉。そんな簡単に知らない男と連絡先交換するもんじゃ……」

「知らないわけじゃない。それに、綺羅の友達なら大丈夫だ」

「……今回だけだから。積極的に活動することは止めねえが、くれぐれも気を付けるんだぞ。お前は色々とブランクがあるんだから……」

「あー！もう、分かつてるって！そもそも、わたしだってそんな急に変われないってば！」

双葉はそう言うが、惣治郎からすれば既に十分すぎるほど“急”な変化な訳で、喜びもあれむしろ心配になる気持ちには私にも分からないでもない。

…それに、急な心変わりであることは紛れもない事実だし。

双葉のパレスが特殊なこともあつて、今回は双葉に対して“予告状”を渡していい。

おそらく惣治郎に私たちが怪盗であることが知れることは無いだろうけど、本当にそれでいいのかは私には分からない。どこかのタイミングで明かした方が、惣治郎にも迷惑がかからないかも。

そのあたりは、後々雨宮と相談すればいいか。

「だから、これからはここにいるメンバーで対人訓練していくから。よろしく」

「お、おう…。お前がいいならいいけどな」

「もちろんそうじろうにも手伝ってもらうからな！皿洗いぐらいならできると思うし」「店に立つつもりか？」

雨宮の問いに、双葉は強く頷く。

「…いままで散々迷惑かけたし、挽回していかないとな」

小さなつぶやきではあったものの、その言葉には確かに決意が宿っていた。そこに多少の憎しみが混ざっていたとしても、それはとても立派な決意である。自らの足で歩くという決意は、誰もが当たり前に感じている分難しいこともある。

照れ隠し代わりに、双葉は隣にちよこんと座るモルガナの頭をくしゃくしゃにして猫パンチの報復を喰らっている。

そんなほほえましい光景から惣治郎は目を逸らし、眼鏡を外して目元を拭っていた。

おやおや。

「おやおや」

しまった。心の声が漏れてしまった。

「しまった。心の声が漏れ……」

二やついた顔で覗き込む私を煩わしそうに振り払った後、惣治郎は一つの紙切れと一緒にタオルを顔面に投げて寄こしてきた。

もちろん余裕で回避したその後ろには雨宮が居て、勢いを失ったタオルはそのままプスりと腕の中におさまる。タオルにくるまれた紙にはこう書いてあった。

・にんじん

・たまご

・たまねぎ

・牛肉

・チョコレート

「買ってこい。おつかいだクソガキ」

…酷い言われようだ。ちよつと茶目つ気を出しただけじゃないか。

「そのチョコはお前用以いいから」

「行つてきます」

気に食わない私の顔を見て、惣治郎は吐き捨てるようにそう言った。それならば話は変わってくる。

惣治郎からお金を受け取った私は、似つかわしくない甘酸っぱい空気の漂うルブランを勢いよく飛び出した。

・
・
・
・
・

翌日：6月16日 木曜日 放課後

今日の日直がホームルームの終了を告げ、教室内は下校する生徒や部活へ向かう生徒

でごちゃ混ぜになる。

それまで寝ていた私は眠目をこすりながらも、忘れずにいた約束のため今日も図書室へと向かう。

あくびを噛み殺して廊下を歩いていると、昨日お世話になったばかりの生徒会長様の姿が目に入った。ずいぶんと疲労し切った様子が何となく気になり、行く先を見届けていると、真は校長室の扉をノックしてその中へ入っていった。

「はろー！妻木さん……って、今日は忘れてないよね？」

ぼーっと眺めていた私の後ろから、秋山が無礼極まりないセリフと共に現れた。これから私は昨日に引き続き、彼女との勉強会に放課後の時間を費やすつもりだ。

「忘れてないよ。行こうか」

図書室の丸テーブルに並んで腰かけ、ペンを片手にノートと向き合う秋山玲央の横顔をまじまじと見つめる。その表情は真剣そのもので、目標を達成するために努力している雰囲気は感じられる。

その目に、余裕はひとつかけらも映っていない。姉と同じ大学に行くという目的の割には、少し度が過ぎる真剣さのようにも思えてしまう。私は、秋山と姉の関係を少しも知

らないんだから当然のことなのかもしれないけど。

自分と、自分の両親との関係を、大半の人間が知らないように。

「…あの」

「なに？」

「そんなに凝視されてると集中できないって」

それにしても、やっぱり見れば見るほど秋山は不思議な存在だ。私みたいな人間とかわりを持つような要素は、これっぽっちもなさそうなのに。

「気にしないで」

「無理だって」

外面的にも内面的にも、彼女に目立つ要素は一つとしてない。

それに、と私は初めて秋山と会った日の記憶を無理やり脳の底から引っぱり出す。

雨宮に教えられた通り確かに、私と秋山が初めて言葉を交わしたのは試験結果が発表された日の事。私のテストの点数を見て、教えを乞いに来たんだった。

「あなた、自分で思ってる以上に目力あるからね？見られてる側はとも気が散るからね？」

「…」

「なんで目逸らさないのよ…」

思い返してみても、やっぱり始まりはなんの変哲もない出来事だった。当たり前なのかもしれないけど…。

それに、そう。私が昨日秋山の存在を覚えていなかったのも、出会いが地味だったことが原因ともいえる。：こういうとやや語弊があるような気がするが、私は「自分の目標」を達成するため、怪盗としての日々を過ごしている。つまり、それに関連しないことに興味はさほど湧かないのである。秋山の名前を完全に忘れ去ってしまった程度には。

「いいから手動かして」
「わ、わかつたけど…」

二度目の出会いの事も思い出した。私が一人で夕食を摂っているときに、突然現れて今回のような勉強を教える機会を約束したんだ。これもまた、やっぱりなんてことないきつかけだ。本当に、彼女はこの世界のことになんて関わっちゃいない。いてもいなくてもいいモブ。

それなのに私は、彼女の願いを聞く選択をした。ここで得たつながりなんて、どうせ一年後には無くなってるのに。

本当に、無駄な時間だ。

残された時間は、そう多くないのに…どうしてこんなにも、彼女に気を逸らされてい

るんだ？

と、そんなことを考えていたその時、図書室の扉が静かに開かれ、廊下側からとある人物が顔を見せた。

件の、新島真である。

別に目立った行動もしていないのに、図書室の中の生徒が一斉に姿勢を正し場の空気はピリツとした刺々しいものになる。が、秋山は大してそれには動じず、一瞥をくれただけで再びノートに向き直った。集中したいだけかもしれないが、案外物怖じはしないタイプなのかも。

「ねえ妻木さん。……なんだけど……」

秋山の質問に私が答えている間に、真は私たちが座るテーブルとは違う、別の丸テーブルに腰かけて勉強セットを取り出した。色々面倒を押し付けられているはずだろうに、それでも勉強はしないとイケないんだな。

「あ、というか、今日聞こうと思ってたんだけどさ」

「うん？」

「妻木さんが使ってたノートと違って、ある？昔のでもいいんだけど」

「ない」

「え……」

「いや、ノートは使つてたけど。もう捨てちゃった」

「えー勿体ない……！まあ、無いものは仕方ないか」

嘘はついてない。もう二度と行けない場所に置いてきてしまったんだから、捨てたよ
うなものだろう。

「それよりここ、間違つてる。隣の問題に引つ張られてるんじゃない？」

「あ、ホントだ……」

「またケアレスミス。集中」

「う、うん。分かった。だったら、ちよつと視線は逸らしてくれない？」

「駄目。これも集中力鍛える練習と思つて」

「えー……？」

文句を垂れつつもすぐに勉強に向かい合う秋山。やる気は充分だけど、どうしても集中し切れていない。私の視線なんかよりも、もつと他に彼女の気を逸らす何かがある。そんな気がした。

ひとしきり勉強を終えた秋山はほんの少し休憩を挟み、また短時間集中し勉強を始める……を繰り返し、かれこれ一時間。図書室に居る顔ぶれは私たちが入ってきたときとほとんど変わらない。

当然真もその中にいて、なにやら真剣に一冊の分厚い本を読みふけている。妙に

ページをめくるのが早いように思うが。

「あのさ、妻木さん」

「今やつてる問題に関係することなら聞いてあげる」

「…じゃあ後にする」

「今日の目標までは集中して」

「はい…」

閉校時間30分前である18時を目前に、机とノートに引っ付きっぱなしだった秋山はようやくペンを置いて姿勢を崩した。

「お疲れ様」

「うん…！今日は、一人でやるよりちゃんど集中してできた気がするよー」

「そう？結構気が散ってたと思うけど」

「ま、まあいつもはそれだけ身が入ってなかったってことで…」

そう言っつて頬をかきながら苦笑しつつ、秋山は改めて礼を言っってきた。と言っても、私はただ横に居て聞かれたことに答えてただけ。別に私じゃなかったっていいことだ。

「私居る意味ある?」

「もちろんあるよ!…なんか、はじめてこんなにやる気が出てるっていうか、そんな感じがしてて」

「…はじめて?」

その言葉に引っかけた私は思わず聞き返してしまった。てつきりずつと前からこうして大学を目指して勉強していたものと思っていたのだけ。

「いや、それは合ってるよ?ただ、こんなに勉強に身が入ってることが、初めてつてだけで」

今以上に身が入ってなかったならかなりの重症なのだけど。

とはいえ、少し気になった私は荷物をまとめた秋山と一緒に学校を出て、下校路を並んで歩きながらさっきの話について聞いてみることにした。

ちなみに、背後からさっきまでと同じ本を開いて顔を隠したままの真が付いてきていることはあえて泳がせる。

「秋山はいつから、お姉さんの大学に入りたいって思ったの?」

「うーんと、それが目標になったのは、お姉ちゃんが大学に入ってからだね。だから二年前ぐらい」

気まずそうに笑う秋山は指先を行き場なさそうに弄りながら、私の目を見て続けて

言った。

「妻木さんもなんとなく気付いてたでしょ？あたしが、今までロクに勉強してこなかったことなんてさ」

「そう思ってたわけじゃないけど、中途半端だなどは思ってたよ」

「…あはは。確かに、中途半端だよね」

今日も秋山の勉強に付き合っ、私はよく分かった。彼女の地頭は非常に優秀である。

でも、だからこそよく分からない。秋山玲央の試験結果はものの見事に平均ラインぴったし。私の知る秋山のスペックと明らかに吊り合わない。

矛盾した情報があるのなら、そのうちのどちらかは間違った情報である可能性が高い。そして、この二つの情報の内信用度が高いのは、直接この目で見た「普段の」秋山のほうだ。

「待って」

口を開きかけた私を、秋山が手を出して制する。

「分かっていると言わないで。これは妻木さんとあたしにとって必要な会話じゃないよ」

ふっと一段トーンを落とした声で静かに、しかし力強く発せられた秋山のその言葉の

意味は今の時点では分かりっこない。

「嫌」

口角が上がるのを感じつつ、ほぼ脊髄反射で否定してみると、秋山は少し吹き出してこう続けた。

「性格がいいのか悪いのか、わかんないね。妻木さんって」

「良くはないよね」

「おおかた妻木さんの想像通りだとは思う。けど、答え合わせは期末の後でいいかな。あたし、次の試験では絶対いい成績出すから」

秋山が何を隠そうとしているのかは分からないし、どんな心境なのかもわかっていない。

ひとつだけ確かに言えることは、これまでの試験では秋山は実力を出していなかったらしいということ。そこにどんな意味があるのかまでは、まだ教えてくれそうにない。

「そう。なら楽しみにしてる」

「そうして。…ところで、さ」

「なに？」

「さつき図書室で聞こうとしたんだけど」

秋山は、妙にきらきらした目で私を見てこう続けた。

「妻木さんはさ、卒業したらどうするつもり？」

「何も考えてない」

「それって…目標がないから？」

秋山にそう聞かれ、私は少し考える素振りを見せた。目標がない、というのはある意味での射っていて、もう私には勉強する意味もなければ将来の夢も無い。秋山のように、現実世界で打ち込めるようなものは、今の私には無い。

頷いて肯定すると、秋山は何故か嬉しそうに笑った。

「そっかそっかー」

「…なに？」

「ううん。なんでもない。とにかく、明日からも勉強頑張るから、妻木さんも付き合っ
ね！」

つい、昨日までは。

彼女と過ごす時間に価値を見いだせていなかった。私にとって日常の時間なんてものはもう必要ないものだったから。今更、知らない人間と交友を深めたところで意味なんてないから。

まして、彼女は特別な存在でもなんでもない。どこにでもいる普通の学生だ。いよいよもって、私が秋山玲央という人間と時間を過ごすことの価値はない。

でも。

だからこそ、なのかもしれないな。

こんなどうでもいい日常をくれるからこそ、彼女は私と関わる運命に巻き込まれたのかもしれない。これが今までの私に足りなかつたものだと思えるために。

「…余計なお世話だな」

心底鬱陶しい。どうせ、神様を気取つた不遜な輩は今も私たちの事を見ているはずだ。そして、その中にはこの世界をつくつた張本人だつて。

「妻木さん？」

「…なんでもない」

「そう？…ならいいんだけど」

…喉が渴いた。彼女といると余計にしゃべらされる気がする。

そんな気を知つてか知らずか、秋山も喉が渴いたと言ひだして自動販売機の前で立ち止まつて、何故かこつちを見てニヤリと笑つた。

「なに」

「妻木さんは喉乾いてないの？」

「どちらかと言えば乾いてる」

「でしようねえ」

ウンウンと憎たらし気に頷く秋山。一体何を考えているのか…。

「じゃあさ、指相撲で負けたほうが二人分のジューズ奢るってことでどう?」

「なんで?」

「そんな純粹に聞き返さないでよ…」

ちよつと面白そうなので結局乗ってやることにした。実を言うと、指相撲なんてやる相手がいなかったからほぼ初めての体験。

手を差し出して対戦の意があることを示し、秋山の手と絡み合わせる。

「どういうルール?」

「相手の指を抑え込んで、十秒間キープ出来たほうの勝ちっ」

「おっけー」

秋山の方から挑んできたということは、さぞこの勝負には自信があるんだろう。でも、こんな小さな勝負でも負けたくないのが私だ。本気で勝ちにいかせてもらおう。

「いくよー? よーい、スタート!」

・
・
・
・

その後、手に入れた戦利品を手に秋山と馱で別れた私は、一度渋谷のセントラル街へと引き返して、私たちの事をずっと監視していた人物を裏路地で呼び出した。

「いつまでつけてる気？」

街灯の光が差し込む薄暗い道の真ん中でそう聞くと、曲がり角の奥から意外にすんなりと真が姿を現した。

「…気付いてたのね。あなた、やっぱり…」

そう言いながら髪をかき上げる仕草をしてみせる真。

「今はまだ」ただの学生かもしれないけど、それでも合気道の心得を持っているからか、隙の無い堂々としたその雰囲気は、それだけでかなりの威圧感がある。

「私をなんだと疑ってるの？」

「それを探るためにこうしてつけさせてもらっていたんだけど、残念ながら今日のあなたはただの学生にしか見えなかったわ」

ため息交じりにそう答えて肩をすくめる真。学校で見た時もあったけど、随分と憔悴しきっている様子だ。昨日もかなりの強硬手段だったし、方々からプレッシャーがかかって焦っているのは間違いない。

わたしの記憶の通りなのであれば、今真は生徒会長としての義務や自身の責任感を良

いように解釈され、怪盗や渋谷で起きている詐欺事件なんかの關係ない事柄まで調査を命じられている頃のはず。

「真。ちよつと話さない?」

「…え?」

「立ち話もなんだし、そのビックバンバーガーにでも」

私の誘いに、真は一瞬怪訝そうな表情を見せたが、結局は黙ってついてきた。

裏路地からすぐその某ハンバーガーチェーン店に入り、特に注文もせず適当な席に座る。

「どういうつもりかしら」

「別になにか考えているわけじゃないよ。純粹に、話がしたくなっただけ。随分思い詰めた顔してるから」

「そんなことは…」

「相談できる人とかいないの?」

「…」

真は言葉に詰まり目を逸らす。唯一の肉親とも、そういった話はしていなかったんだろう。

「私でよければ聞くけど」

当然ながら真は怪訝そうな目をこちらへ向けてきた。それでも執拗に裏はないと説くと、仕方なくといった表情でうなずいてくれた。

「…分かったわ。でも、これはただの私の独り言。他言も無用で」

「うん」

一瞬考えた後、鋭く相手を委縮させるようにそう言い放った後、真はひとつ大きなため息をついた。

「実はね、校長から例の貼り紙の件について調べろって指示が出るの。確かに校内で起きた事件ではあるけど、そんなの一生徒である私が一人でやるようなことかしら？手がかりもなければ証拠もない。そんな状態でどうしろっていうのよ…」

「それで雨宮達を探ることにしたの？」

「現状最も可能性がありそうなのは彼と、その友人たちとところだし。あの予告状を見るに、犯人は複数である可能性が高かったから。しかも、雨宮君たちは鴨志田と少なからず因縁があつて、その事件の後、彼らは頻繁に会うようになってる」

「なるほど」

「でも逆に言えば根拠はそれだけ。あの予告をやったのが彼らだって証拠は何一つないわ」

「分かりませんって校長に言えば？」

「…言ったわよ。でも、駄目だった」

「どうして?」

「…」

「お姉さん」が関係してる?」

「え…」

そう言うのと、今まで伏し目がちだった真が目を真ん丸に見開いて、疑問の詰まった目で私を見てきた。

「どうして…?」

「どうしてだろうね。でも、今は気にせず吐き出しちゃってよ。さつきよりは顔色よくなってるし」

「…あなた、本当に何者なの? 今日だって私の尾行に気付いたり、普段の立ち姿も隙が無
う」

「真が全部悩みを打ち明けてくれたら、教えてあげる」

「本当ね?」

「もちろん」

長話を予見した私たちはソフトドリンクを注文し、そして今まで本人以外は知る由も無かった真の胸の内を聞くことにした。

まず前提として、真の姉は若くして検事として活躍しているエリートだ。一度ルブランにも来たことがある、新島冴が、その人だ。

真によく似た美人で若さに見合わない経歴の持ち主と、世間的にもある程度有名だったりする。

そしてそんな冴の妹である真も、姉に劣らず成績優秀で現役生徒会長。周囲の期待に応えたい一心で普段から相応の振る舞いを見せてきたが、そのおかげでどんどん周りの期待もヒートアップしていった。

校内では堅物で真面目な生徒会長としてのイメージが定着しているけど、実際はそんなことはない。血の通った人間なんだ。

「あの人に頼めばなんとかしてくれる…そう思ってくれるのは嬉しいけど、度が過ぎた期待は迷惑でしかないのよ」

真が優秀すぎたがゆえに、ついには校長から学校外の問題まで解決しろとの命が下った。それも、ひとつだけじゃなくって…。

「頼まれることって、他にはなにかあるの？」

「ちようど今あるわよ。渋谷で起きてる詐欺事件の原因を調べろってね」

思わず突っ込みそうになったが、その通り。その詐欺事件は学生が良くターゲットにされているため学校の問題だとして、何故か真がその事件を調べているらしい。

「私は探偵でも何でも屋でもないわよ……」

今までが完璧だった分、ここで折れば周囲からの評価は必要以上に下がるだろう。そのことと姉の評価を引き合いに出されて、真もやらすにはいられない状況になつてい
るらしい。

誰が見ても分かる通り、これは校長の怠慢が原因である。そこにも少なからず原因は
あるんだけど……。

「正直どうすればいいのかさっぱり。怪盗の正体も詐欺の実態も、どこからどうすれば
いいのか……」

「確かに真一人が負うには大きすぎる問題だしね。期待が重荷になるのも分かるよ」

「あなたもそうなの？ 確かに成績は優秀だけど……」

「そう見えない？」

「ええ……正直」

そう思われても仕方ない。実際私は自らへの期待を重荷に感じることは今まで少な
かったから。

なぜなら、私は真ほど多くの人間から期待を背負ったことは無いし、全ての人間の期
待に応えようともしていない。あくまで自分がしたい事を、自分のしたいようにしてい
るだけ。

「真は沢山の人に囲まれた場所に居るから、その分かかる期待も大きい。しかも対等な位置に居るんじゃないやなくて、みんな自分の下か上からしか物を言っつてこないから、相談できる人間も居ない…つてことかな」

「そうかもしれないわね」

「私はそんなに背負うものが多くない。縛るものも無い。だから、息苦しさも無いよ」

「…羨ましいわ」

来た。

「だったら、怪盗団にお願いしてみたら」

「え？」

「だって、怪盗団つてそういう困ってる人を助けてるし」

「…」

「言ってみたらどう？」

「言うって何を、どこで？」

「自由になりたいならそう言えばいい。助けてほしいならそう言えばいいよ」

真の目を真つすぐ見据える。瞳は揺れているけれど、彼女の心の中でも何かが揺れ動いているのは間違いない。もう一押しだ。

「怪盗にお願いすれば楽になるかもしれないよ。詐欺グループだってなんとかしてくれ

るかもしれない」

「…」

「いつまでもそうやって、我慢して優等生を演じていくつもりなら、止めはしないけど」

「我慢…ね。得意分野よ、それは」

「今までは、それでやり通せてきたんだもんね」

「でも…確かにあなたや…それに怪盗団みたいに自由な人に憧れてるのも事実」

「うん」

「こんな心も…怪盗は盗めるのかしらね」

「できるよ」

「ふふ…やけに自信満々に言うのね。まるであなた自身が怪盗みたい」

おかしそうに真は笑うと、飲んでいた飲み物のコップを静かにテーブルに置いて…。

「そうね…私はずっと我慢してきた人間だった。周りの期待に応えようと必死で、自由とは程遠い生き方をしてきたわ」

腕を組み、私の目をキッと睨みつける。

「だからと言う訳じゃないけれど、私は見極めてみたくなかったわ。あなたの言うような生き方が、どんなものなのか」

「…で？」

「怪盗団の正義をこの目で見てみたい。…あなたに依頼すれば通るのかしら?」

姉譲りの眼力光線を真正面から受けながら、私は真の言葉を肯定した。

真だつて心のどこかではいつか抜け出したいと願っていたはず。そのチャンスが目の前にあれば、彼女は可能性にかけることを選ぶ気がした。

聞きたいことが聞けた私は立ち上がり、自分が頼んだ飲み物分の代金を真に渡した。

「近いうち、また話そう。とりあえず一日は待つてて」

「ええ。…分かつたわ」

「…後悔してる?」

「いえ…それより自分のことが不思議なの。どうしてあなたにこんなことを話す気になつたのが分からないわ」

「それは、そのうち分かるよ」

そう言い残して手を揺らし、私は先にビックバンバーガーを後にした。

・
・
・
・
・

6月17日 金曜日

Ren : おはよう

Futaba : そしてごきげんよう

An : え、なにになに？まさか双葉ちゃんも加入？

Ren : その通り

Futaba : よろしくたのむ

Yusuke : 信頼できるのか？

Ren : 大丈夫だ。俺とモルガナと綺羅が保証する

Ryuji : じゃあ問題ねーな！

Yusuke : 分かった。その三人が賛成なら止めはしない。よろしく、双葉

An : よろしくね！

Futaba : 色々と迷惑かけるかもだが、お手柔らかに頼みます

Ren : まああんまり気構えないで、普通に接してくれればいい

Ryuji : あ、つてことはまた歓迎会の流れか？

Ren : それもあるから、今日みんなが集まれるか？

An : わたしはOK！

Yusuke : 問題ない

R y u j i : もち、いけるぜ!

R e n : それじゃ、今日の放課後ルブラン集合で

・
・
・

放課後

雨宮の招集によりルブランの屋根裏部屋に集まった怪盗団。梅雨真つただ中ということもあって外は今日も雨模様。雨宮がリサイクルショップで入手してきた超旧型のオンボロ乾燥機が必死に働いてくれてはいるが、どうあがいてもこの部屋は季節の影響をもろに受ける。故にじめじめ感否めない。

でも、この場の雰囲気はさほどじめつてはいなかった。

改めて、全員で双葉の前で自己紹介を済まし、持ち込んだ菓子を食べながら和気藹々と雑談していた。双葉もすぐに杏たちと打ち解け、たまにテンションのたかがどこかに吹っ飛んでしまうことはあっても、問題なくコミュニケーションはとれていた。

「なんか安心したわ。もっと変人かと思ってたけど、普通に話せんだな!」

「それはこっちの台詞だ。思ったよりいい奴らでよかった。正直、こうして会う前まで

は綺羅と蓮に通訳してもらおうかとか思ってたぐらいだからな」

「そんなこと考えてたのか…」

雨宮が呆れたような苦笑している隣で、双葉は明るく笑う。

「でも、みんなわたしのために体を張ってくれてたのを目の前で見てたから、勇気出た。…あらためて、ありがとな。みんな」

面と向かって言われると恥ずかしいのか、坂本なんかは、照れ臭そうに笑って鼻の下をこすっていた。

そんな中黙々とじやがりこを吸い込み続ける喜多川が急に口を開いた。

「時に、ひとつ聞きたいことがあるのだが」

「聞きたいこと？」

「次に会うときに聞こうと思っていたんだが…結局、双葉の母親は事故死ではなかったということでもいいのか？パレスの中での話だけだと、まだ分からないところも多くな」

「あー、それな…」

双葉は少し言いづらそうに体を縮こまらせたあと、顔を上げて一つ一つ自分の口で説明していった。

「世間的には、お母さんは自殺って処理で終わってる。でもそれは、お母さんの研究を奪

おうとした奴らのせいでそうだっただけで、実際は違う……だから、事故でもなくて、本当はただの他殺なはずなんだ」

「マジかよ……てか、双葉の母ちゃんの研究って……」

「認知訶学な。りゅうじに説明してもよくわからないだろうからその話は省くけど……」

「てめこのつ」

「少なからず、あの世界にも関係する研究だったはず。それできつと、誰かにとつてその研究成果が価値のあるものだった。だから、奪おうとする奴が現れた」

「それで身寄りがなくなつて、今はマスターと住んでるんだね……」

「うん。だから、わたしが怪盗団に入ったのも、そいつを改心させてやりたいって思いが強かったからなんだ……。すごく、自分勝手な動機だけど……」

俯きながら、しりすぼみになる声をなんとか絞り出した双葉の肩を、坂本がポンと優しく叩いた。

「そんなことねえよ。そいつのことを許せねえって思つてるのは、お前だけじゃねえからな」

「だろ？」とも言いたげな顔でみんなの顔を見回す坂本。もちろん、それを否定する意見が出ることは無かった。

それを見て双葉も安心したようで、気の抜けたように笑っていた。

ひとしきり打ち解けた後で、話題は次へと移る。雨宮が口火を切り、全員その言葉に耳を傾ける。

「それじゃ、次のターゲットについてだけだ」

「斑目の時よりも大物……が狙いだつたな」

「祐介の言う通りだ。妻木さん」

雨宮はこちらを見て話題を振ってきた。昨夜、この話を雨宮に持ちかけたのは私であることから説明を担う。

「実は、最近渋谷とある詐欺事件が横行してる。その大元を狙うのはどうかな」

「確か、その詐欺事件って、学生がよくターゲットにされてるんだつたな？」

モルガナの問いに首を縦に振って肯定し、話を続ける。

「その詐欺グループの元締めの事は警察も追ってるらしいけど、未だに尻尾は掴めていないらしい」

「なるほどな。ケーサツも手を焼いてる獲物を改心させるってことだな」

「たしかに、それは斑目の時よりも大事になりそう！」

「そうなれば、ワガハイ達の行いもより多くの人間に伝えられる」

「ふむ……美しい筋書きだ。だが、実際問題警察が捜査して逮捕できないような奴を、どう

特定する？名前が分からなければ手を出せないぞ」

「ふっふっふ……」

喜多川の当然の疑問に対して、私と雨宮の間に座る双葉が怪しく笑みを浮かべる。

「早速わたしの出番のようだな！」

「というわけ。そいつの情報は双葉に調べてもらおうことにする」

詐欺グループの元締め…金城の改心に対しては異論は出ず、あっさりと全会一致。まずは双葉の情報収集に期待し金城の名前を特定してもらおう。それから先はイセカイナビの検索機能でどうとでもなる。

「それじゃ、次の作戦は双葉の報告待ちってことだね！」

「うん。それと、もう一つその関連で話しておきたいことがあるんだけど……」

こっちは、まだ雨宮にも話していないこと。

昨日の、新島真との出来事だ。

「秀尽の生徒会長…新島真が怪盗団について調べてる」

喜多川以外はまあ大方予想の範疇だったようでさほど驚いてはいなかった。これまでも何度か校内で出会うたび、坂本や雨宮達にも警戒した素振りで接してきていたらしい。

「んで、その会長サンがターゲットの話とどう関係すんだよ」

「それが、会長は例の詐欺事件のことも追ってるらしいんだよね」

「はあ？なんで会長がんなこと…」

「…学生がターゲットだから、か？」

「うん」

雨宮の答えはそれなりに的を射ていた。正確には、学生がターゲットの犯罪が自分の学校の生徒にまで及ぶ可能性があるため校長が何とかすべきところを、何故か会長が生徒代表としての責任という名目で無理やり背負わされてるだけなんだけど。

「会長さんも大変なんだね。自分の意思でやってるわけじゃないんだ」

「そう。だからさ、ちよつと二人で話してみただよね。実際のところ、どう思ってるんだろうって思ってる。そしたら会長も、本当はもつと自由に生きたいって」

そう言った時、坂本と杏はあからさまに意外そうな顔をして固まった。おそらく秀尽生のほとんどが同じようなリアクションを返すことだろう。校内で見せる厳格な雰囲気だけが、真の本質では無いんだ。

そんな真の心を引き上げるために、またもや怪盗団は一肌脱いでみることにした。

「真に、私たちの正義を見せてみない？次のターゲットは真も追っていた相手になるんだし、ちよつどいいと思うんだけど」

「正義を示すって、まさかまた向こうに連れていくとこかって話か？」

「察しがいいね。坂本の分際で」

「てめこの二人そろってバカにしゃがって……!」

「大丈夫なのか? そんな安易に素性を明かすような真似をして……」

喜多川の心配は最もだけど、ここは私を信じてもらうしかない。間違はなく成功することがわかつている以上、ここで私が引け腰になるわけにはいかない。

どうにかこうにか皆を説得しようとしたとき、意外にもあつさりとリーダーである雨宮からの許可が下りた。私からすれば正直予想通りではあつただけど、妙にあつさり過ぎた気はした。

気のせいって可能性の方が高いけど、やつぱり少し気になる。こここのところ、私の雨宮に対するごく細かく小さな疑問は積もるばかりだ。アルセーヌを手放さないことも、言葉の端々にこもる読み取れ切れない謎の意志も……。

・ ・ ・ ・ ・

6月18日 土曜日 昼休み：

この日、私は杏と二人で中庭のベンチに座り互いの昼食を頬張っていた。私が食べているのはもちろん惣治郎の：ではなく、今日は自分で作った弁当だ。そして、杏が食べているのも、同じく私が作ったものである。

どうせ特に意味は無いんだろうけど、ふと私が料理ができると言った時、「今度作ってきて」としつこくせがんできたので今日は作ってあげた。：といっても、ソーセージと野菜のシンプルなソテーとポテトサラダ、それに伝家のカレーでアレンジしたきんぴらごぼうを詰め込んだだけ。

そんな何の捻りも無い弁当を、杏は絶賛しながら笑顔で食べ進めていく。まあ、美味しいのは当然である。

そう思いつつ自分でも一口。

「綺麗って料理までできちゃうんだねー。本当にできないことなんて一つもないんじゃない？」

「そんなことないよ」

「えー？じゃあ例えば何が苦手なのよー」

「…」

苦手…そう聞いてぱっと思いついたものは、多分この質問の答えとしては相応しくな
いものだったけど、これ以外にすぐ思いつくものが無かったので反射で正直に答えてし
まった。

「辛いものとか」

「味？でも、そっか。辛いのは駄目なんだ」

「…スパイスとかの刺激は大丈夫なんだけど」

「ふーん。なんかかわいこと聞いちゃった」

「言わなきゃよかった」

からかってくる杏から視線を逸らしたその時、偶然実習棟から中庭通路に出てきた秋
山玲央と目が合う。

気付いた秋山から元気に手を振ってくるので、一応小さく手を振り返してやる。

「あれって、秋山さんだよな？この前勉強教えてもらいに来てた」

「そう」

「おーい！こっちおいでよー」

急に立ち上がって何を言いだすかと思えば、遠くにいる秋山を呼びだした杏。秋山も秋山で、小脇にノートやら筆記用具を抱えたままうきうきした様子で近づいてくる。： 昼休みなのに、勉強でもしていたんだろうか。

「やつほー、二人とも！お昼ごはん中でしょう？大丈夫？」

「いいのいいの。というか、呼んどいてなんだけど、秋山さんこそ大丈夫だった？お昼はどうしたの？」

「それが、今日は何も持ってきてなくて…。仕方ないから自習してたんだ」

「わ、真面目」

「まあ、これも妻木さんのおかげだね」

照れ臭そうに言う秋山の視線は少しづつ落ちていき、やがて私の手元の弁当箱に行きついた。

「…食べる？」

「いいの!？」

ほぼ言い終わると同時に身を乗り出してくる秋山を押しわけ、予備の割り箸を取り出す。

「誰が作ったの？」

「綺羅だよつ。すっごい美味しいから食べてみて！」

「妻木さん、料理もできるんだ…。敗北感がヤバイ」

「別に普通だって」

「どれどれ…いただきます！」

そんなに注目して食べるほどでもないごくごく一般的な献立の弁当だというのに、嬉しそうに頬張る秋山を見ると、少し懐かしい気持ちになった。そもそも、私が料理を学んだのも、勉強を頑張れたのだから…。

「…!!」

「ど、どしたの秋山さん？ベロでも噛んだ？」

ふと、そんな杏の声に意識は引き戻されて秋山の様子を見てみると、卵焼きを口に入れたまま驚いた顔で硬直していた。

「おいしー」

たかが卵焼きでそんな大げさな、と杏と二人で呆れていると、なんと秋山の目の端から涙がひとつ零れ落ちた。

慌てた杏が取り乱すものの、秋山はそれを手で制して笑って見せた。

「ごめん…何でもない！…っていうのは嘘かも…。でもよく分かんないや。こんなにおいしい卵焼き初めて食べたっていうか…」

「大袈裟すぎる……」

「そうだけど、そうじゃないんだって！本当に…美味しいよ、これ」

「…ふーん」

「びっくりしたー…。でも、よかったじゃん綺羅。泣くほどおいしいってさー！」

少し前の自分なら、安っぽい言葉だと一蹴できただろう。でも、今の私は目の前で泣き笑いしている顔を見てなんと言葉をかけていいのか理解しかねていた。

胸をしめつけてくるようで苦しい。でも、不快ではない。

この感情は、何て言うんだっけ。

「…普段ろくなもの食べてないんじゃない」

「そんなことないよ…。でも、ごめん。びっくりさせちゃって」

「ああ、いいのいいの。綺羅はいつもこんなテンションだし、わたしも全然気にしてないし」

「ありがとう。高卷さん」

「杏でいいよ。友達の友達は友達でしょ！」

「そ、そう？ いいのかな？ 妻木さん」

…なんで私に聞くんだ。

「良いと思うよ」

「ホント？ じゃあこれからあたしのことも玲央って呼んでね！」

「もちー」

…そんなに繋がりやりの深くなかった二人が何故か盛り上がっている間、私は空いたままの小腹を埋めるために、弁当箱と一緒に持ってきていたナッツ入りのチョコを開封して食べ始めた。

「じゃ、じゃあ…妻木さんも、いいかな？」

「下の名前で呼ぶってこと？」

「う、うん。もしいいならそうしたいなって」

「別にいいよ。秋山の事もそう呼ぶっていうならそうする」

「い、いいの!？」

「別に減るもんじゃないし」

私は基本的に他人の事は苗字で呼ぶ癖がついているもので、別にそこに他意はなかった。頼まれて断る理由は無い。

「ありがと綺羅ちゃん！」

…ちゃん付けか。

「それより早く食べなよ。昼休み終わるよ？」

「え、でも…」

「いいから食べちゃってよ。私はもうお菓子食べだしちゃったし」

「綺羅ちゃん……! 相変わらずのイケメンぶり……!」

「玲央、ここはお言葉に甘えておきな。綺羅は意外と頑固だから断つても退かないよ」

余計なお世話だ、杏。

杏の脇腹を小突きながらも、私たちは三人で昼休みを最後まで過ごした。ただくらない話で盛り上がって、くだらない食事を楽しんで、まるで普通の高校生かのような、そんな凡庸な光景がそこにはあった。

そんな日常が、最近私でも悪くないなと思えるようになってきた。どうせ残り短い時間、こうやって過ごしているのも悪くはないのかもしれない。

・
・
・

放課後……

「で、なんで私まで付き合い合わされてるのさ」

「何言ってるの？ 綺羅も一緒なのは当たり前じゃん。ね、玲央」

「そっだよ。どうせ他に予定もなかったでしょ」

玲央の言う通り、特にこれと言った予定は無かったものの、だからと言って杏と玲央の映画鑑賞に付き合い合わされる道理はまったくない。というか物言いが失礼。

私を通して知り合った二人は何故かとても反りが合うらしく、すっかり意気投合していた。今度、入院している親友である鈴井志帆にも紹介して「四人」でどこかへ遊びに行こう、なんて話までしていた。きっとその四人には私も含まれているんだろう。

「そうだけどき。そもそも、これってどんな映画？それすら知らないまま連れてこられるんだけど」

「今話題になつてる恋愛小説の劇場版。わたしも玲央も気になつてたやつなの」

「しかも主題歌が『久慈川りせ』なんだよー？絶対良作だつて！」

「主題歌は内容に関係ないと思うけど……まあ、そつか。恋愛映画なんだね」

まあ女子三人で見に行くには無難なジャンルだろう。券を購入するための列に並びながら、今月の上映ラインナップを見ても、この中から選ぶなら確かにこの映画だと納得できる。

もちろん個人的にこの映画に興味があるわけではないけれど、別にどんなジャンルでも楽しめるので問題ない。

それにしても、映画館か。久しく来ていなかったような気がするな。なんだか懐かしい。最後に来たのはいつだっけ。

「そう言えば、綺羅って趣味とかあるの？」

「いきなりなに」

「いや、映画とか見るのかなーってさ。放課後はよくマスターのところでお手伝いしてるみたいだし、あんまり外で遊んでるとこ想像できないんだよねえ」

「マスター？」

何気ない案の台詞に、玲央が疑問符を浮かべる。

「ああ、そっか」

「色々あつて、ある喫茶店のマスターのところに居候してるんだよ。それで、店の手伝いもしてる」

「色々？」

「うん。色々」

言葉を濁しなんとなくでごまかしていると、自分たちの前の客がカウンターに呼ばれ、その後ろに居た私たちも隣のカウンターに通される。

三つ並んで空いているのが最前列の席しかなかったけど、別に憂うほどの事でもない。むしろ前のスペースが広くて足がくつろげるといふ利点もあるし、なによりスクリーンとの間に動くものも無い。私としてはむしろ都合だ。

チケット片手にポップコーンや飲み物を購入して、目当ての劇場に辿り着いた。私たちの席はA列の15、16、17番。真ん中に私を挟む形で座る。

「杏ちゃん、いっぱい買ったね…トレイ溢れそうじゃん」

「つい、映画館に来るとこうなっちゃうんだよね……。売店にあるの、全部美味しそうに見えちゃってさ」

「あはは。分かるよー」

「二時間で食べきれなの？」

「それは余裕」

右隣に座る杏の席には、ポップコーンだけでなく、チュロス、スイートポテト、ドーナツ等々……とにかく大量の甘いものが鎮座していた。そんな色々あつて映画に集中できるのだろうか。

「モデルなのに大丈夫？体形維持とか……」

「そこは大丈夫！ちゃんと運動はしてるから！」

「流石だね！運動って、ジョギングとか？筋トレとかもしたりするの？」

「あーいや、そういうんじゃないかって、なんだろ……鞭を振るのには色んな筋肉を使うと言いますか……」

「ムチ!？」

鞭と聞いて玲央の視線がだんだん上へと向いていき、心なしかほわんほわんと回想シーンにでも移行しそうな効果音が聞こえた気がした。

間違いなく何か勘違いを起こしているっぽいので、玲央の頭の上を手で振り払い現実

へと引き戻す。

「多分、玲央が想像してるようなものじゃないよ」

「そ、そーそー。ただ、ヒールで踏みつけながら鞭を振るのに、体幹が必要ってだけで…」

「ヒールで、踏みつけながら…!?!」

「…」

「モデルって、色々大変なんだね…。今度詳しく聞かせてください」

私のささやかなフォローは甲斐もなく、玲央の中にいらぬイメージが定着した。

弁明の時間もなく広告が流れ出したため、私たちは揃ってスクリーンに向き直る。

…まあ、とりあえず今は映画を楽しむとしよう。

映画のクライマックス…周囲の視線など気にせず、主人公がヒロインに想いを伝えて、ヒロインはそれに笑って応えた。社会の最底辺でくすぶっていた主人公でも、努力次第で世界は変えられる…なんとなく、怪盗団の理念に近いものを感じる内容だった。

主題歌も楽しみにしていた玲央と一緒にエンドロールまで見終わって、私たちは劇場

の外へと出た。

「はああ…やっぱああいうのっていいよねええ」

「分かるよ…杏ちゃん…。いいよねえ」

銭湯帰りのオヤジ二名と並びながら、ふと杏の手元に視線を落とす。…あんなにたくさんあった軽食の類はキレイさっぱり無くなっていた。これで特に食事制限もせずエクスサイズもせず体形が変わらないんだから、そりゃあ同業者からは煙たがられるってもんである。

「ああいうのが良いの？」

「綺羅はぐつと来ない？ああいう、真っ直ぐ愛を告白されるようなシチュ〜」

「うーん」

グツと、か。来るかもしれないし来ないかもしれない。

「じゃあ綺羅ちゃんは、逆にどんな感じで告白されたい？」

「…うーん」

告白。自分がそんなことをされている光景はこれっぽっちも想像できないけど、もしそんな関係に誰かとなるとすれば…。

「…普通がいいかな」

「普通って？」

「なんか…映画みたいなロマンチックな展開じゃなくて、普段と変わらない感じのほうがいい」

と、そこまで言ったところでにやけ面の杏と目が合う。

「…」

「ふーん、そつかそつかーなるほどですねー」

「…何?」

なんだその顔は。この上なくウザい。そして謎に恥ずかしい。別に大したことは言っていないのに。

「ちなみにさ、それってどれぐらいの時間でとかどんな場所とか、理想はある?あるなら是非とも…」

「知らないよそんなの」

というかそれを知ってどうする気なんだまったく。

だんだんウザ絡みが加速してきた二人を振り払って映画館を出ると、空は大分薄暗くなっていた。時刻にして午後六時過ぎ。帰るにはちょうどいい時間だ。

「え?何言ってるの?」

え?

「まだカラオケに行っていないじゃん」

え？

「いや、私は帰るけど」

「だーめ」

まずい。完全に若気の至りだ。こんなエネルギーギッシユな流れに巻き込まれたら元の私に帰って来れる気がしない。

「分かった！じゃあ好きなチョコ買ってあげるから！」

「綺羅ちゃん、チョコ好きなんだねっ？あたしも買ってあげる！」

「……！」

……。

「いや、帰る」

「ちよつと待って……！ね？さっきの話の続きをするだけでも……」

「もつとしない……！帰る……！」

駄々をこねる杏と玲央にしがみつかれながら、マナーモードにしていたスマホを元の設定に戻そうとポケットを探る。

暑苦しい環境下でなんとか取り出したスマホを起動すると、映画を見ている間の時間帯に双葉から怪盗団グループへメッセージが届いているのに気付いた。

杏もそれを見て「あ」と声を漏らすと、自分のスマホを取り出す。

「え、どうしたの？」

「ごめん。用事できた」

「あ、わたしも…」

「いや、杏は大丈夫。」

「ここで二人とも急にいなくなったら、少し玲央が可哀そうだ。それに、“明日”に向けて体力を温存しておいたほうがいいのは、私たちよりもきつと“彼女”になるはずだから。」

「玲央と一緒に行っておいでよ。私も今度は行くからさ」

「え、綺羅ちゃん本当に帰っちゃうの？」

「ごめんね。また今度行こう」

「色々納得した様子の玲央を杏に任せ、私は人ごみの中へと紛れメッセージを確認する。」

その内容を見て、私は少し笑ってしまった。相変わらず仕事が早い。やっぱり双葉は怪盗団にとって心強いバックアップだ。初仕事としては十分すぎる。

Futaba: あーあーマイクテストマイクテスト

Ryujii: いらねーだろ！チャットには！

Futaba: うむ。りゅーじは期待を裏切らないな！

F u t a b a : それはそれとして、業務連絡だ

F u t a b a : 昨日話してた詐欺グループの元締め、特定したぞ

R y u j i : マジかよ！はやすぎね？

F u t a b a : 天才ハッカーアリババにかかればこんなものよ！

R y u j i : ありばば？

F u t a b a : すまんこつちのはなしだ

Y u s u k e : それで、元締めの名前は？

F u t a b a : “金城潤矢”だ。名前のほかにも色々あるが…どうする？

ターゲットの名前は捉えた。あとは居場所を突き止めて追い詰めるのみ。ここまで
の状況が揃えば、後はみんなの力だけでもなんとかしてくれるはず。

駅前公園を通り改札の前まで来たところで、真に明日の予定を空けておくようメッ
セージを送った。

ストーリーは順調に進行している。このままの調子でエンディングを迎えることが
出来たら、きつと私の計画も上手くいっているはず。

今の世界が一体何度目なのかは分からないけど、ここはまだまだ道半ばだ。こんな場
所でつまずいては居られない…。

「…」

懐に隠したナイフの刃を握る。

鉄の冷たさと鋭さが、私にとって何が一番大切なことなのかを思い出させてくれる。
私の正しい居場所はこのように平和で穏やかな日々ではない。

「…」

『やあ、君か。…無言電話かい?』

「明日から始まる。準備をしておいた方がいいよ」

『…分かった。ちなみに、次のターゲットの名前は何て言うんだい?』

「聞いてどうするの」

『どうもしないよ。ただ僕にも報告の義務はあつてね』

「…カネシロジュンヤ。これが誰なのかはわかるでしょ」

『なるほどね。怪盗団も良いところに目をつける…確かに、警察組織も手を焼いている
犯罪者が相手となると、社会への影響も大きそうだ』

「実際そういう狙いだよ。…放っておく、でいいんだね?」

『もちろん。僕の伝えた通りで頼むよ。怪盗団にはせいぜい活躍してもらって、消える
べき時に消えてもらうだけだ』

「分かった。それじゃあしばらくは様子見で…」

『ごめん、一つだけ聞いてもいいかな？そのカネシロの名前はどうかやって調べたんだい？』

「リーダーの伝手だよ。知り合いに記者が居るらしくて、そこから」

『…そうか。ありがとう。助かったよ』

「用は終わり。切るよ」

通話を切ってひとつ息を吐く。

「…ふう」

さて、切り替えよう。

仕事の時間だ。

女王君臨

6月20日 月曜日 放課後：

ターゲットの名前が発覚したことで本格的に動き始めることとなった怪盗団の元に、私は満を持して新島真を連れてきた。まだ真に対して警戒心を抱いている皆からすればリスクのある行動のように見えるだろうけど、私にはこれが成功するという確信がある。

「やっぱり、あなたたちだったのね」

ひとまずの集合場所として定めた渋谷駅ビルの連絡通路にて、真はズラリとならんだ面々を流し見ると、納得したようにそう漏らした。

「で、どうする気だよ？」

あくまで毅然とした態度を崩さない真に、坂本はまだ警戒心を解けないでいるようだ。皆からすればまだ真とはほとんど面識がないのだから無理はない。

私は少し話しくそうにしている真に目配せをして、皆に向かって話すよう促した。

「…まずは、あなた達に謝らせてほしいの」

「謝るっ？」

「鴨志田先生の件で。わたしは、先生が裏で何をしているのか、薄々勘づいてはいた…それでも、何もできなかった。そのせいで、鈴木さんも…」

「…なにそれ」

「本当にごめんなさい」

複雑な表情を浮かべながらつぶやいた杏の声は、少しだけ震えていた。

杏の親友である鈴木志帆は、鴨志田が顧問だったバレエ部で酷い体罰を受けた挙句、身体目的の関係まで迫られていた。その挙句、彼女は精神的に追い詰められ、屋上から飛び降りてしまつて、今は何とか意識を取り戻したものの重体のまま。何より、心の傷は一生癒えることはないだろう。

もつと早く、私がこの世界のこと気が付いていれば、彼女のこと救えたかもしれない。

「知つてたの？ 鴨志田の事」

「確信があつたわけではないけれど、でも、そうじゃないかとは思つていたわ」

「…杏」

頭を下げたままの真に対して、杏は怒りとやるせなさが入り混じつた、複雑としか言えないような表情で、何かを口にしかけて、飲み込んだ。雨宮の制止で思いとどまつたようだ。

「頭上げてよ。別に、新島さんの事を恨んでるわけじゃないから」

ツインテールの先を人差し指でくるくると弄りながら、杏はそう言った。真はゆつくりと顔を上げ、もう一度謝罪を口にする。

「…ごめんなさい」

「だから、もういいって。それより、うちに何の用なの？」

「わたしが校長からなんて言われてるかは、知ってるのよね」

その話は私からしておいた。真は鴨志田への予告状を貼った人物を探そう校長に命じられている。つまり、怪盗団のこと。

こうして怪盗の正体が明らかになった今、真はいつでも私たちを突き出すことができず、状態になったわけだけど…。

「でも、わたしはあなた達を突き出すことが本当に正しいことなのか迷っている。だから、あなた達の言う正義を、わたしに見せてもらいたい」

「…つつつてもな。どうするよリーダー」

「無理を承知でお願いするわ。あなた達が普段していることを見せて」

「まあ、連れてきてしまった以上受けるしかない。ただし、俺たちの正体についてはくれぐれも…」

「ええ、分かっているわ」

たしかにそう。雨宮の言う通り、正体を明かした以上真の依頼を断るわけにはいかない。私もそれが分かってから、こんな強引な方法を選んだ。

雨宮もそれには気付いていたらしく、呆れたように苦笑いを浮かべていた。

「まあ口であれこれ言うより実際に見てもらいながらのほうがいいだろう。早速今から出発だ」

「出発って、どこへ？」

「怪盗団^{俺たち}の仕事場だ」

雨宮の先導で怪盗団一行と真の全員で渋谷の駅前まで繰り出した。道中人ごみにもまれないよう双葉は私と手をつなぎながらの移動になる。

駅前に出た私たちは例によってスマホを取り出した雨宮の近くに寄って、ナビを起動。予め調べておいてくれたキーワードと、双葉によって判明したカネシロジュンヤの名前を入力。

東京の人ごみに紛れるようにして、私たちはそのまま認知世界への移動を果たした。

その先の世界は異様な雰囲気満ちていた。おどろおどろしい、緑がかった空に覆わ

れた渋谷の姿、そして闊歩するATMから手足が這えた異形。驚く真にみんなが丁寧にパレスやシャドウについて説明している。

その、傍ら。

「…」

「どうした？」

私は空を見上げていた。

正しくは、空に在る何かに視線を向けていた。

私はジョーカーの方を振り返り目で促すと、ジョーカーも私が視線を向けていた方へ顔を上げる。焦点は定まっていなくて、私のように正体までは見えていないらしい。ただ、仮面越しに虚空を睨みつけているだけだ。

「これ、マダラメの時と同じか？」

そこから視線を外し、ジョーカーは私に聞いてきた。確かに、マダラメのパレスの時に感じた謎の気配に似ているような気はするけど、その正体が掴めないままだから判断なんてつけようがない。

「分からないけど、多分そう。ジョーカーは何か感じる？」

「さっぱり…という訳でもない。そこに何かあると思ってみてみると、何かがあるような気がしないでもない」

「曖昧だね」

「リーサルも変わらないだろ」

たしかにそうなんだけど。

ただ、一つだけ分かりそうなことはある。

私たちがパレスで戦ったあのマダラメのシャドウ：私の知るものとは大きく外見が異なっていた。性質こそ似ていたけれど、確実に元のマダラメよりも強かったことは確かだ。

パレスの中に他に不自然な点が無かったことから、やっぱりあの謎の気配がマダラメの豹変に関わっていた可能性はある。

そして、今回もそれと同じようなものを感じている。警戒しない理由はない。

「なるほど。仕組みについては、なんとなく理解したわ」

「マジ？会長サンといい、ナビ」といい、理解はやすぎね？」

「スカルとは脳をつくりからして違うんだらうな」

「うっせーぞモナ！」

「それでもないわ。社会認知心理学上の錯視の応用のようなものと思えば……って、えっ!?なにこれっ……化け猫!?!」

「誰が化け猫だっ!」

「モルガナだよ。ジョーカー…彼のカバンに入ってたネコ」

そんなことを考えている間に、向こうでは既にある程度話が進んでいたようだ。真に對する説明も済み、さあこれから探索かといったところで、私はあることに気が付いた。

ここに来る前に決めておいたコードネームを呼ばれてさぞご満悦だろうと思っていた双葉…ナビの表情が優れない。といつても、彼女の怪盗服の場合ゴーグル部分で半分ぐらいは隠れてしまっているので、あくまで雰囲気の問題だけだ。

それを見て私もようやく気付く。ナビのペルソナは戦闘能力はほとんどなく、代わりに探知能力に長けている。ナビなら、この気配のことも察知しているのではないだろうか？

「ナビ」

「なあ…パレスって、いつもこんな感じか？」

「こんな感じとは」

「なんていうか、パレスの主以外の気配が強い。なんかヘンなものか混じってる」
「ふむ」

パレスの主以外の気配と。確かに「これ」は言葉通りのものだろうけれど…。
だったら、一体なんの気配だっというんだ？

「多分イレギュラー。念のため気をつけておいて」

「わかった。動きがあったら伝える」

ひとまずナビにはそう伝えておいて、この話は切り上げた。気にしていても正体が分からないんじゃないかと気があかない。気がかりなのは間違いないものの、私、ジョーカー、ナビの三人だけでひとまず情報を共有しておき、様子を見ることにした。

それからしばらく真と共にパレス内を探索しながら、怪盗団の仕事についてより詳しい説明をモナにしてもらっていた。道中、身体がATMになった人間たちをいくつも目撃し、カネシロの人間性もなんとなく把握できた。

が、実のところこのパレスは歪みの範囲がいままでのもそれとは桁違いに大きく、渋谷という街全体が歪み切っているせいで、肝心のカネシロの居城がどこなのかは歩き回って探すしかない。それがわかると、真はいつもこんな行き当たりばったりなのかとどこか呆れていた。

それに対して、モナが小さくため息交じりに答える。

「いや、今まではこっちに來た時点で、歪みの中心は一目瞭然だった。マダラメならアトリエ。カモシダの時は学校、だが今回は一級品の犯罪者だ。そのアジトなんて、当事者以外は知る訳もない」

「それもそうね…」

「でも、この街のどこかには絶対あるはずだよ？それに、今までのパターンから言う

と、でつかくて派手な建物とかになってるはずだから…」
「つつてもよー、そんなギラギラした建物なんてどこにも…」

両腕を頭の後ろに組んでもおむろに空を見上げたスカルの動きが、そこで止まる。

よんだ上空の遙か彼方から、何かが徐々にこちらにむかつて浮遊してくる。それは近づくとつれその全貌を明らかにしていく。

カネシロのパレスのキーワードは、『渋谷』と『銀行』。その名の通りの銀行が、渋谷の空に浮いていた。

「う、浮いてる…!？」

宙に浮かぶ銀行という現実離れた光景を目の当たりにした真は、始めこそ困惑していたがすぐに納得して目の前のことを現実だと認識しなおしていた。

銀行が浮かんでいる理由は、歪みの根源であるカネシロ自身もつ、自分は絶対に足がつかないという確信に起因している。認知世界らしいトンデモな仕組みだ。

「どうすんの？あそこに入らないといけないんだよね？」

「ワガハイがヘリにでもなればな…」

「ネコがヘリに変身するアニメでもねーかなー。そしたらそれをどうにかして流行らせてよお」

「無いし、流行らないだろうな」

スカルの提案はフォックスによってあっさり切り捨てられた。

しかしそれを聞いていた真が、何かに気付いたような素振りでも口を開く。

「ここは認知の世界……。現実での認知が、この世界にも直接影響を与えるってことなのよね。だったら、ひとつ案を思いついたかも」

「マジか？」

「かなりの賭けに……なるけど」

真の提案とやらを、一度みんな聞いてみることにした。

そして、全て聞き終えた上で、みんなの反応はあまり芳しくなかった。本人も言っていたように、その作戦はかなりリスクで、かなりの賭けになる。しかも、そのリスクを負う役目を、真自身がやらせてほしいと志願してきたのだ。

「わたしが現実でカネシロの金づるにでもなれば、わたしはあの銀行にとつての“客”になる。そうすれば、あの銀行まで入る手段が現れるんじゃないかしら？」

「その作戦が上手くいっても、その後新島さんはどうするつもりだ？ どんな追立が来るか分からんぞ」

「大丈夫でしょう。あなた達が改心させてくれれば」

おそらくは記憶通りの展開になる。それを確信した私はその作戦に賛成した。ただし、真一人だけではなく、全員でサポートしながらという条件はつけてだ。

「本当にやるの？だって本物の犯罪者相手だよ？」

「慣れてるわよ。わたしに任せて」

・
・
・
・
・

翌日 6月21日 火曜日 放課後：

翌日、再び真も含めて集まった私たちは落ち着かない態度で渋谷の街並みで待機していた。作戦の手筈はおおむね私の記憶通り。違うのは、私たちと真の間で意思の共有が出来ている点だ。

雨宮のスマホに電話がかかってきたら合図。言い方は悪いが、真をエサにして現実の金城まで接近する。そうすることでカネシロの認知を変え、パレスの攻略を可能にするんだ。

一応全員で待機しているけど、現場に立ち会うのは私と双葉を除いたメンバーだ。タクシー一台に乗り切るには多すぎるし、なにより今の双葉には少し刺激が強い。

「ホントにあいつ一人で大丈夫なのかよ？今からでも俺が行った方が……」

「御しやすそうに見えたほうがこの作戦では有効だからな。会長を信じるしかない」

坂本がひとときわそわそわしだしてすぐ、雨宮のスマホが着信を知らせる。真からの合図だ。

スピーカーからは真と知らない男の声が途切れ途切れに聞こえてくる。真は男に対して金城の名前を出して、自分に会わせろと交渉を始める。

経緯は似ていてもどんな結末になるかは私でも分からない。少し緊張しながら、事行く末を見守る。

『金城つて人に会いたいんだけど』

『はあ?』

『話があるの。いいから連れて行きなさい』

実際に聞いているとかなり冷や冷やする交渉の仕方だけど、むしろそれが功を奏したのか真は車に乗せられてどこかに連れていかれる準備が着々と進んでいる。

「雨宮、そろそろ」

「ああ、行つてくる。双葉は任せた」

雨宮達はあらかじめ聞かされた地点でタクシーを拾いにいき、私とは別行動になる。

…ま、こつちの役割はただ待つてただけだが。

「なあなあ」

取り残された私たちは特にすることもなく立ち尽くしていると、双葉が人差し指で私をつついできた。

「なに？」

「あの生徒会長…新島つてやつは、なんなんだ？仲間つて事でいいのわ？」

「まだ分からない。でも、怪盗団のやつてることに対して否定的つてわけでは無いから…、まあこれから次第だね」

「そっか」

とはいえ、勝手にどこかにうろついていい状況ではない。向こうで何が起きるかなんて、私にも確実なことは言えないんだから。何が起きてもいいように、心の準備はしておかないと。

「…」

「…」

双葉もそのことは分かっているみたいで、弱音を吐きつつも慣れない暑さを我慢しようとして頑張ってくれているみたいだ。

…でも。

目の前にコンビニやらファミレスやら薬局やら、いかにもエアコンが効いてそうな空気がひしめき合っている。それを見た私たちは顔を見合わせ、そして無言でうなずい

た。

「ふー……生き返るー……!」

さすがにがつりファミレスに入ることとは避け、私たちはコンビニの中に一時的に避難してきていた。せつかく入ったので何かしら冷たいものでも買おうかと吟味しながら、雨宮達からの連絡を待つ。

「な、綺羅」

「奢らないよ」

「いや、そうじゃなくってさ」

アイスの入ったボックスを眺めながら、双葉はこう言った。

「これ、蓮にも相談したんだけど……。そうじろうのこと」

「惣治郎?」

「うん。今まで世話になってきた分、どうやって恩返ししようかって、ずっと考えてるんだ」

「それで?」

「蓮はな、『双葉が元気になっている姿を見せるだけでいい』って言ってくれたんだ。わたしもそれでいいって思った。だから…」

双葉はそこで言葉を切つて、気まずそうにこちらの表情を覗き見てくる。

「みんなとの仕事を全力で頑張つて、いつか、お母さんのことも明らかにできたら…その時は、惣治郎に正体を明かしたいんだ」

恐る恐る聞いてきた双葉に対して、とりあえず反対の意思はないことを伝えると、ほつとしたように頬を綻ばせた。双葉が現状で思いつく限りのものがそれだというのなら、私が止める義理は無いし、惣治郎になら、という信頼もある。

どのみち惣治郎にはいずれ正体を明かすことになりそうだったし、それまでバレない保証も無いけどね。

「もちろん、それ以外にも色々挑戦してみるつもりだぞ！例えば…み、みんなでバーベキューにいったりとか」

「なんでバーベキュー？」

「そりゃあ、いかにもなりア充的イベントで経験値を溜めて成長するためだ！綺羅にも協力してもらうからなっ。提案してきたのは杏だけだ」

バーベキュー…久しく行ったことのないイベントだ。

どうやら雨宮とも話は進んでいるようだから、きつと夏休みにでも計画しているんだ

ろう。…メジエドの件も心配する必要ないし、暇つぶしにはちょうどいいか。海水浴にいくよりかは私としては助かるし。

「え？海も行く予定だけど…。なんかまずいか？」

「まずいというか、海つて大してやることないし」

「水着に着替えて泳ぐだけでも結構な〴〵やること〴〵じゃないか？」

水着…そして海水浴…これらふたつの単語は私にとってはありていに言つてタブーというやつである。

普段から上半身だけは長袖を手放せないように、身体の痣を見せないためにも肌の露出は極力控えている。

水着など到底着れたものではない。しかも無理やり海に飛び込みでもしたら全身にあの潮水が染み入ってくるだろう。想像しただけで激痛である。

自分の体を指さして、双葉に水着は無理だとかぶりをふつて伝える。

「〴〵これ〴〵があるから泳げないよ。水着も無理だし」

「あー」

あからさまに残念がる双葉。そんな悲しそうな顔をされても無理なもんはムリである。

「そうかー…じゃあしようがないかー…」

そう。しょうがない。だから、いつまでもそんな迷子の子どもみたいな瞳でこつちを見るんじゃない。そんな顔をされてもこの体の傷は消えやしないんだから。

…別に悪いことはしていないのになんだか気まぎれなくなった私は、何とはなしにスマホを取り出して視線を画面へと逃がした。

「…いや、ごめん。ちよつと、デリカシーに欠けてたかもしれん」

「別にいいよ。バーベキューのほうは、行ってあげないでもない」

「ほんとか?」

「うん。バーベキューのついでに、キャンプとか」

と、そこまで言いかけたところで、手の中のスマホが震えた。

同時に双葉が画面をのぞき込んできて、「作戦の成功」を知ると互いに口元を緩め、頷いた。

帰ってきたジョーカー達の様子から察するに、かなり危なげな状況だったらしいがな

んとか目的は達したらしい。期限は今日から一週間。カネシロに三百万を支払えなければ、*「破滅」*させるとのこと。例によっていつもの流れである。

とにかく、これで真を客として認めたカネシロの銀行は、宙に浮いた状態から地上へ向けて階段を伸ばしてくれる。真の同伴が条件にはなるものの、これでパレスへの出入りは可能になった。

階段を上がりいよいよ銀行の入り口の前に立った怪盗団。その真ん中に囲われるようにして立つ真が、ジョーカーに問いかける。

「それで、具体的にはこれからどうするの？」

「パレスには、この世界を形成している力の核のようなものがあって、まずはそれを探し出す」

「歪みの源ってわけね」

「そうだ。でも、パレスの主はそれをなんとかしてでも守りたい。だから、警備や衛兵の類がわんさかいる。そいつらと遭遇したら、強行突破しなきゃいけないこともある」

「なるほど。そうなたらわたしに任せておいて。護身には多少の心得があるもの」「頼もしい限りだが、あいつらに普通の人間の攻撃は効かない。あまり前には出るな」

そう言つて、ジョーカーは真にあるものを手渡す。

視線を落とした先には、この前ルブランに來た時に見せた銃のうちの一つ。一応、無

いよりマシ程度に渡しておくようだ。

「これ……」

「前見てた時、なんか気に入ってそうだったから」

「……そんなことない、けど。一応借りておくわね。……というか、これ本当にエアガンよね？」

「もちろん。でもこの世界では『本物』になる。作りがこれだけリアルで本物同然なら、ちゃんと弾もでるし威力もある」

「……そうか。認知世界だものね。じゃあ、その武器もそういうこと？」

ジョーカーの持つダガーナイフを指さして真がそう言うのを見て、私はさっと視界に入らないように自分のナイフを後ろ手に隠した。

「ああ。とにかく、敵が襲ってくる可能性があるから気をつけろ」

「承知したわ」

「よし。みんな、行こう」

「あれ、今回は正面から入んのか？いつもみたいには抜け道からのほうがよくね？」

正面玄関の扉にジョーカーが手をかけた時、スカルがそんなことを口にした。確かに、マダラメやカモシダの時は正面から入らずにわき道から侵入した。今回そうしない理由は、モナが説明する。

「今回はワガハイ達がここにやってくることを知られた状態での攻略になる。今はまだ客の状態である以上、コソコソする必要は無いのさ」

「ねえ…昨日から思ってたんだけど、モナは、一体何なの？」

「何といわれても、ワガハイはワガハイだ！オマエラと同じ志を持つ仲間ってことだけ分かってればいい！」

…と、改めてモルガナの存在に懐疑的になってきた真を無理やりに納得させ、今度こそ扉を押し開く。

足を踏み入れるのと同時に、警備シャドウがジョーカーの前に立ちはだかる。反射的に真が構えるのをスカルがなだめていると、私の記憶通りどこからかカネシロの声が聞こえてくる。

『応接室に通して差し上げろ』

簡潔なその指示に従い、シャドウは無言で道を示す。わざわざそれに従ってやる義理も無いのだけど、この先に起きることを知っていればそう言う訳にもいかない。

大勢のシャドウに見張られながら、私たちは大人しく奥の応接室までやってきた。

部屋の中は無人で、中央に置かれたテーブルの上にはいかにもアタツシユケースが蓋を開けられた状態で鎮座していた。中身はもちろん、大量の札束。

ナビヤスカルが札束の山に目を奪われていると、部屋の壁に備え付けられたモニター

に電源が入り、そこにこのパレスの主の姿がでかど映し出された。

『ようこそお越しくございました。新島真さん』

「金城……」

『おっと、勘違いしないでいただきたい。我々はただ正当な取引がしたいだけなのですよ』

「ふざけないで。あなたがやっているのは正当な取引じゃない。立派な詐欺よー」

真の反論に、画面の向こうの金城はただくつくつと笑うだけ。そして少しも悪びれる様子も見せずに言葉が続ける。

『仰っている意味が解りません。我々はただ、無知な若者に無知の代償を払わせているだけ』

金城潤矢……この男の率いる詐欺グループの所業と言えば、学生をターゲットに違法な裏バイトを高額な報酬で斡旋し、それをダシにして身内や家族を恐喝してより多くの金を巻き上げるといふ卑劣な手口。ここまでは真も調べていたところのようだ。

『ところで、本日は例のご用件でいらつしやつたんですよね？現役検事新島冴の妹さん？』

「なんで、それを」

金城が嫌味たっぷりと言い放った検事という言葉に、少なからず私以外のみんなから

驚きの声が漏れる。みんな、まだ真のことを知らない段階だし当たり前だ。

『我々の情報網を舐めないでいただきたい。いやはやそれにしても、そのコソ泥どもには感謝しなくてはいけませんね。こんないい商品を提供してくれたのだから』

「商品だ？ テメーのほうこそ舐めてんじやねーぞカネシロ！ すぐにでもオタカラ奪って改心させてやらあ！」

『馬鹿はうるさくてかなわん。他の奴らに用はない。消せ』

冷たく吐き捨てるようなカネシロの命令通り、私たちのすぐ後ろについていた警備シャドウが動き出す。

同時にジョーカーと私が銃を引き抜き、真に向かって手を伸ばしていたシャドウの頭に向けて発砲。それに続いて他の皆も銃で先制し部屋からの脱出路は一時的に確保した。

「え…!？」

「ついでこいー！」

狭い部屋から抜け出すために、ジョーカーが真の手を引いて一番に応接室から飛び出していく。

…さて、この先どう演出するべきか…そんなことを考えながら後に続いて部屋を出ると、何故か立ち止まっていたジョーカーの背中に豪快にぶつかり、後ろに続くみんなも

私の背にゴツゴツとぶつかってくる。

「ジョーカー?」

「…避けろっ!」

状況がつかめずジョーカーの背中越しに前方を確認しようとする、鬼気迫った声が直線状の広い廊下に響き渡った。

弾かれた様に横に跳ぶと、後ろを確認する暇もなく目の前が赤い閃光で埋め尽くされた。

「…!?!」

悲鳴も耳に飛び込んできたものの、なんとか後ろのメンバーも直撃は避けられたみたいだった。…一体なにが起こった?

「ナビ、大丈夫!?!」

「う、うん…!」

パンサーがナビに手を貸してあげているのを流し見ながら、確認し損ねた廊下の前方…壁に埋め込まれた砲台のようなものを視認する。おそらくあれから砲撃されたように、床には直線状に焼け跡が残っていた。あんな設備、私は知らない。

「くそっ…どうやらワガハイ達が来るのを待ちわびてみたいだぜ」

「無策なわけではないと思っていたがな」

察するに、カネシロは既に侵入者対策を万全に施しているつもりらしい。現に、今まさに私たちを追い詰めようと、廊下の前後から大量の足音が近づいてきている。逃げ場を失くして人海戦術で押し込めば、どうにかなると思っっているんだろうか…？

「ど、どうするの!？」

さっきの砲撃を見て顔を青くしている真がジョーカーに指示を仰ぐ。

「正面突破だ。はぐれるなよ」

先頭に立つリーダーは、不敵に笑ってそう答えた。

「リーサル、後ろは任せた」

「私が前でもいいけど」

「ここはリーダーが前だ」

「言い方変えるよ。私も前がいいんだけど」

「リーダー命令だ」

「えー」

「言ってる場合かつ!!」

パン：と乾いた音と知った痛みが頭に走る。スカルとパンサーが相変わらずどこかに隠し持っていたらしいハリセンで、何故か私もろともジョーカーを叩いたらしい。なんて非人道的行為。

…なんてやってる間に、足音の数に見合った大量の警備シャドウが私たちの元に集まってきた。とりあえず出口まで行きたために、正面のシャドウはみんなで撃破し、殿は私が押しとどめる。

「ペルソナ」

Charaを自分の心に呼び起こし、目の前のシャドウの群れへと意識を集中して左手の前に出す。

イメージしたのは、この真つ直ぐな道に溢れるシャドウをまとめて貫く稲妻。キャプテン・キッドのそれと同じような、豪快な雷砲。

指を弾けば目の前に閃光が迸り、耳をつんざく轟音が銀行中に響き渡った。

稲妻がシャドウ達を貫いていき、あれだけ居た跡形も無く消し飛んでいた。威力は上々。力も上手く制御できている。

『後方からさらに増援！』

「オマエラ前進だ！」

ナビの報告を聞き、一斉攻撃で切り開いた道をモナの号令と共に突き進む。

後ろから大量のシャドウが追いつがつてきている中、ひとまずは一本道の廊下を抜けて玄関ホールへと出ることに成功。そしてその直後、細長い真つ赤な光が視界に飛び込んできた。

思考の隙は一瞬だったけれど、それでも自分の身に何が起きたのかは想像に難くない、本能的に危険を察知した脳はすかさず全身の神経に「回避」の指令を飛ばした。

だけど、その指令を私の身体は無視した。

こちらへと伸びる細長くて赤い光：レーザーポインターとしか思えないそれを辿った先には、冷たい輝きを放つ巨大な銃身。そこから覗く暗い銃口が、真っ直ぐ私たちを見つめていた。

「Charra!」

避けるのは簡単だったけど、同じ場所に固まっている怪盗団が全員無傷で済む保証はなかった。

だから私は、Charraを天井からつり下がっているその機銃の隣に召喚し、根元からナイフで断ち切ってやった。

「な……」

火花と黒煙を上げながら地面に落下してきたそれを見て、奥の部屋から出てきたカネシロのシャドウは目を真ん丸に見開き、そして憎らし気に私の顔を睨みつけてきた。

「コソ泥が……この設備整えるのに一体いくら使ったと思ってるんだ!」

「知らないよそんなの」

大量のシャドウを引き連れて現れたカネシロだが、どうやら本命はこのパレスのセ

キュリテイそのものであるらしい。それがあつけなく壊されて怒り心頭といった様子のカネシロだが、そんなことは私たちの知ったことでは無い。

本人が登場した今、ここでとつちめてやることもやぶさかではないんだけど…：そうはできない理由が、私にはある。

足を止められたことで、またすぐに四方をシャドウに囲まれてしまったわけだが、突破しようと思えばその方法はいくらでもある。でも、ここは一度様子を見て追い詰められたふりをしてあげなくちゃならない。

じりじりと包囲網を狭めてくるシャドウを見て、真は不安そうにあたりを見渡す。

「姉はあんなに立派なのにねえ。妹ちゃんは一人じゃ何もできないか」

「…お姉ちゃんは、関係ないじゃない」

「そんな口きける立場か？ 賠償するのはそつちだぞ」

…賠償とはいうが、部屋に連れ込まれた真をみんなが助けに入っただけだ。カネシロがいう「例の件」…それはそのイライラを解消するために、女に手渡した300万をお前らが賠償しろという内容だ。

「このままだとオマエの姉ちゃんに迷惑がかかるぞ？ そうなればお前自身はどうなると思っ？」

「なにを…」

「苦労して育ててきた妹がこんな役立たずだなんて……絶望するだろうなア。周りからの評判も地に落ちて、今のお前は跡形も無く崩れ去る」

「……」

「それが嫌なら明日から客をとれよ。そうすれば姉さんには黙っておいてやる」

嘘だ。真を利用して稼ぎながら、それをダシにして姉の冴をも利用しようとするだろう。

「我慢していいなりになってればいいの。安心しろ、今までと何も変わらねえよ」

“我慢”。

その言葉をカネシロが口にした瞬間、真の拳がピクリと震えた。

「我慢……?」

「さて、大事な商品以外にはここで消えてもらおうか。現役美人生徒会長……クク。これはいいいネタが手に入った。感謝しますよ」

醜悪な笑みを浮かべるカネシロは手を叩いてシャドウどもに号令をかける。

私たちを包囲していたシャドウが一齐に飛び掛かってきたけれど、第一陣は全員でなくなく迎え撃ち、そして真めがけて飛び掛かってきたシャドウはなんと真自身の拳によつて吹き飛ばされていた。

さすがの私も少し驚いた。まだペルソナにも目覚めていない生身の女子高生が、シャ

ドウを拳ひとつで吹き飛ばせるなんて。：私が言えたことじゃないか。

まるで拳から煙でも立てていそうな威圧感を漂わせた真は、前に居た私の肩に手を置いて一歩踏み出した。

「さつきから黙って聞いてりゃ…」

小刻みに震えさせたその声からは、何よりも分かりやすい怒りの感情が溢れていた。そして真は大きく息を吸い込んで…。

「うぜえんだよっ!!この成金が!!」

心の枷を外した。

「…は？」

ペルソナの声を聞きいれ、心を隠す仮面をはぎ棄てる。唐突な豹変に呆気にとられていたカネシロとその取り巻き共は、覚醒の余波によって大きく後ろへ退いていく。

：絶叫と共に青い光に包まれた真の姿が、徐々に私たちの前に露わになっていく。そこには、もう私たちの知る生徒会長としての新島真は存在していなかった。

バイク型のペルソナに跨る彼女の姿は、漆黒のライダースーツに身を包んだ、まさしく女王の名にふさわしい出で立ちだった。

どう見てもバイクな見た目のペルソナを見て各々感想を漏らすのが、やっぱりみんなバイクという印象しか感じていなかったみたいだった。

「いけっ!!」

真は鋭いかけ声と共にハンドルを豪快に切り、シャドウの群れの中に突撃していった。

躊躇なく全速力でタックルされたシャドウ達は見るも無残な形で弾き飛ばされ消滅していく。そしてそのまま一直線にカネシロの元までたどり着くと、やはり一切の遠慮も慈悲も無くそのどでっ腹に巨大なホイールをぶち当てた。

「人が大人しくしてればつけあがって…いい加減鬱陶しいのよ!」

「ちよ…ま、待て。おいお前ら、奴を止め、」

「いくよヨハンナ…フルスロットル!!」

慌てて止めに入るシャドウどもを、車体（と言っていいのかは分からないけれど）をその場で勢いよく回転させることによって薙ぎ払い、さらにもう一回転して周囲に青白い焔を伴った爆発を起こす。

スカルやパンサーなんかは普通に引いてるし、フォックスはあのペルソナの造形に興味津々な様子。

「そういえばモナ」

「なんだ?」

「真に廃人化のことは説明してあるの?」

なんだか放っておいてもよさそうな雰囲気、真を見ていて気になったことを聞いてみた。モナは当然説明したと答えたけど、今の真はそんなものは無視してカネシロを捻り潰してしまいそうな勢いだ。

実際、私たちは後ろでただ傍観しているだけなのに、可哀そうなくらいカネシロはボコボコにされている。

「確かに……ちよつとほどほどにしておいてやるように言った方がいいかもな」

なおも攻撃を続ける真に向かって、モナが声をかけようとしたその時。

ぞくり、と背筋を冷たい何かがなぞった。

「……ナジ」

「ああ、来てる」

思った通り、入り口で感じた気配の主が動きを見せたらしい。ナジはすぐさま気配の位置を探ろうとネクロノミコンを召喚。しかしそれより早く、ジョーカーが真とモナに向かって駆けだした。

そつちの方向を見ると、今まさに、真がカネシロに鉄拳制裁を下そうとしているのを、モナが止めようとしているところだった。

件のカネシロはもうかわいそうなほどボコボコに殴られていて、ただ命乞いをするだけのコバエになり果てているように見えた。

客観的には、そうだ。

でも私にはわかる。？つきに嘘は通じない。

カネシロは嘘を…。

「ジョーカー!?急にどうし…」

「ナビ、気配の位置はっ?」

「真上…カネシロの真上だ!」

報告が上がリ一瞬の刻を置いて、カネシロの真上…つまりホールの天井が、爆発音とともに崩れ落ちてきた。幸い近くに居た真もモナも機敏に動けるタイプだったから、特に崩落の影響は受けなかったみたいだけど、問題はそこじゃない。

この銀行の上に何か落ちてきた…そしてその重量に耐え切れず、その場所だけが崩れたんだ。

その場にいた全員が正しく状況を理解できたのは幸いだったかもしれない。天井に空いた穴から突き出てきたソレを見て、フォックスが息を呑んだ。

「なんだアレは…!?シャドウか?」

「どうみてもただのシャドウじゃないでしょ!」

「っーかキモっ!」

『みんな気を付けて!あの気色悪い奴、ヤバイ…!』

ちょうどカネシロの真上から落ちてきたソレは、外皮がドロドロに溶けた一本の大きな触手のようなもの。はつきり言ってまともな人が見れば間違いない嫌悪感しか感じないであろう、おどろおどろしい外見。

小豆色の汚らしい粘液を纏い、その中から無数の目玉が蠢いている。直視していると正気を持つていかれそうだ。

しかもその触手は、仰向けに倒れていたカネシロに覆いかぶさっていく。

「なんなのこれ…!？」

「ワガハイにも分からん！だが今はとりあえず…!」

カネシロの身体は激しく痙攣しはじめ、くぐもった呻き声が連続して響く。その前にジョーカーがたどり着き、前線に立っていたモナと真を引き戻そうとした瞬間、カネシロが急に身体を起こしてジョーカーへとその手を伸ばした。

当然その程度は簡単に躲したかに思えたが、私たちが見たカネシロの姿は明らかに不自然な形をしていた。

脇腹のあたりから生えたもう一对の腕…それどころか、合計で八本の腕が生えた姿。

予想外の角度から伸ばされた腕は、ジョーカーの右手と左足をしっかりとつかんでいた。

「ジョーカー!」

一番近い位置に居たモナはすぐに反応し、サーベルで腕を攻撃した。けど、見た目以上に肌が硬く傷は浅い。振り払われた腕の一撃で、モナは軽く吹き飛ばされてしまう。

…色々マズい状況だけど、一先ずは撤退を優先すべきだ。覚醒直後の真をこれ以上戦わせるわけにはいかない。私は皆のほうを振り返らずに声を張り上げた。

「みんな、一度撤退するよ！真を休ませないと」

「お、おう！」

「了解した！」

「パンサーはナビを出口まで連れてって！先に戻ってもいいから！」

「うん…！行こうナビ！」

パンサーがナビの手を引いて走り出したのを確認し、私とスカルとフォックスはジョーカー達のもとに走り出した。

「スカル、真をお願い」

「OK！」

さつきまでと比べると明らかに顔色の優れない真はスカルに援護してもらおうとして、私とフォックスはジョーカーの方を担おう。カネシロに覆いかぶさっていた触手は緩慢な動きで入ってきた天井の穴から抜け出ていった。後に残った脅威は、異形に変異しかけているカネシロだけ。

ジョーカーは片腕を封じられた状態で銃を抜きカネシロに向けて発砲。それでもカネシロは不気味に笑うのみで意に介さない。

「俺が援護しよう。ジョーカーは任せた!」

「もちろん」

私が一直線にカネシロに近づく最中、フォックスからの援護射撃が背中側から飛んでくる。

フォックスは狙った位置を正確に狙える能力にも長けている。私が十分に接近するまでの一瞬の隙を、カネシロの顔を狙うことによって生み出してくれていた。

そして私の間合いに入ったと見るや、カネシロはジョーカーを盾にしようと身体を向けてきた。その動きに反応し、ジョーカーの下を潜り抜ける形で懐に入り込んでナイフを振る。

たしかに感触は硬かったが、その腕は両断できないほどの硬さでは無かった。

「っあああああ!?!」

掴んでできていた腕が落ちたことで自由を取り戻したジョーカーは華麗に着地し、お返しとばかりに煙幕をカネシロに投げつける。

「リーサル」

「後にして」

「助かった。ありがとう」

後にしろつて言っただろうに、律儀に礼を言うジョーカーと一緒に出口へ向けて走り出す。私たちの前にはスカルが走っており、真はヨハンナに跨って既に外で待機していた。

援護をしてくれたフォックスも追いつきもう少して出口に差し掛かろうというところで、後ろから空気を吸い込むような音がして慌てて振り向く。

消えかけた煙幕の中に見える薄暗い光が、徐々に光を増していく。

そしてその光の向こうに見えたシルエットは……もはや元の人間の姿を思い出させないほどに変異していた。

それを認めた瞬間、全身を打つ見えない衝撃波のようなもので無理やり銀行の外に吹き飛ばされる。何回転かしたあと辺りを確認すると、すっかり人数は揃っていた。

でもそれで安心している場合じゃない。

『今のはただの衝撃波だ！本命が来るぞ!!』

「オマエラ、飛び降りろ！」

モナの指令に全員一瞬驚きを見せたが、次の瞬間に襲い来るであろう攻撃の威力を想像し、咄嗟の勢いで先に飛び降りていたモナの後に続く。

「え、ええ!？」

「行くよっ」

「ちよ、わたしを置いてかないでくれ！」

「掴まってるー！」

かなりの高度からの自由落下になるが、おそらく下でモナが車に変身してクッションになってくれる。

私はクイーンを、ジョーカーはナビを抱えて渋谷の空に身を投げ出す。

結構な高さだけど、モナ車はああ見えてネコバスよろしく伸縮性に優れているはずだから、きっと大丈夫なはず。そんな、半分祈りに近いことを考えながら着地。まあまあな衝撃はあったものの、大したダメージではなかった。

「オマエラ、無事か？」

みんな無事に降りられたことに胸をなでおろす暇もなく、頭上でハリウッド映画顔負けの大爆発が起きた。

あれに巻き込まれていたらと思うと…私だけならそれはそれで楽しそうだったかもしれない。

・
・
・

現実に戻ってすぐ、興奮が切れた真が体力の限界を迎えたので一先ず近くのベンチに座らせて落ち着くのを待った。既に日は落ちかけており、パレスに入る前のように日照りに苦しめられる心配はなかった。

「多分…今が人生で一番疲れている時だと思うわ…」

「無理もあるまい。覚醒に加えて、俺たちにとつてもイレギュラーだったハプニングが多発したからな」

「でも、ちよつとすつきりしたかな。ペルソナの声を聞いたとき、自分がしたかったことがなんなのか、はつきりわかつた気がする」

「根っからの真面目じゃないみたいだな？」

「今まではネコ被ってただけ。周りの大人に媚びへつらつて、みんなが思う理想の私を演じてただけ。…でも、やっぱりこんなのは私の性に合わない。お姉ちゃんみたいにはなれっこない」

「お姉ちゃんつて、さつきカネシロが言つてた…?」

杏の問いに真が答える。

「うん…特捜部の検事だね。怪盗団の事を調べてる」

「いやそれまじくね!?!」

「大丈夫よ。異世界の存在なんて、現実の捜査で分かりっこない」

それに、と真は吹っ切れたように笑いながら続けた。

「お姉ちゃんとは、いつか分かり合えない日が来る気がしてたの。生活のために必死に働くお姉ちゃんには感謝しているけど、時々…哀れだなんて思うこともあつた。まあ、こうなる運命だったんだろいなあ」

探していた怪盗団に自分になる…奇しくも真の言うように、これは運命といつて差し支えないことかもしれない。きつと、真の言う運命と私の言う運命とは、少し差異があるんだろうけど。

…そんなことを考えている間に、みんなの間では真を怪盗団に迎え入れようかという話題で盛り上がっていた。

もちろん私はそれに異論を出すわけも無く、全会一致で真の怪盗団入りは決定した。

「うっし、これでまた仲間が増えたな！」

「よろしくね、みんな」

「うむ。参謀としても戦闘面でも頼もしい仲間が出来たのは、喜ばしいことだな」

「りゅーじと違って頼りになりそうだな！」

「おっフタバ言うじゃねーか！」

「お前らなあ…俺を何だと思ってるんだ？」

いつも通りのじゃれ合いを微笑ましく思っていると、不意に肩を叩かれて振り向く。

「杏?」

「ごめん。ちよつとだけ、この後時間ある?」

みんな解散したその後、杏に言われて私と真だけはその場に残った。杏の表情は何とも言えない複雑なものだったが、深刻そうにも見えなかった。

「二人とも、疲れてるのにごめんね。すぐ終わるから」

「どうかした?」

「ううん。綺羅はここに居てくれるだけでいいの。…新島さん。わたしね、正直少し前まではあなたの事信用し切れてなかったの。他のみんなと同じように、うわべだけ見て判断してた」

「…あなたが気にすることじゃないわ」

「自分が悔しいんだよ。怪盗として正義の味方のつもりでいたクセに、わたし…なにもわかってなかった。志帆の件で、新島さんも教師側なんだって思い込んで…勝手に敵視してた」

「仕方ないわよ。そんな風に振舞っていたわたしにも原因がある」

「ありがとう。でも一度、ちゃんと謝っておきたくつて。新島さんも、わたしたちと一緒にだつたんだね」

どうやら杏は、真に対して偏見を抱いたことを詫びるためにわざわざ私たちに声をかけたらしい。であれば私に声がかかる理由はイマイチ分からないわけだが：仲介役のようなものを期待されても、何もできないし。

「いいえ。やっぱり謝るのはこっちのほうがだわ。鈴井さんの件は、私も共犯のようなものだもの」

「たとえそうでも悪いのは全部、鴨志田だよ」

「ええ……そうね」

「うん。じゃあもう、これでおあいこつてことだ！」

「おあいこつ？」

そう言つて、いつも通りの明るい笑顔に戻った杏に真は呆氣にとられていた。

「だからさ、新島さんももう気つかわなくていいからね。これからは、同じ目的のために頑張る仲間なんだし」

「ふふつ」

「な、なんで笑うの？」

「ごめんなさい。あなたのそういうところ、とつてもいいなと思つて」

「……どういふこと？」

何故か私に聞いてきた杏から目を逸らし心の中だけで答える。それはきつと能天気なところが羨ましいって意味だ。

ともあれ、それから少し話した後途中まで私たち三人は一緒に帰った。二人の間にあつたわだかまりはそこですつかり解けた様子だった。

ちなみに、後から杏に聞いたところによると、私も一緒に真と呼ばれた理由はなんとなく一人だと不安だったかららしい。別に私が居なくたってちゃんとできただろうに、変なところで弱気になるのも杏らしいっちゃ杏らしい。

午後九時過ぎ。帰ってきてすぐに惣治郎宅のシャワーを借りてルブランの二階で休憩していた私に、雨宮が一階からコーヒーをもってきてくれた。

雨宮はよくこうやって、ふとした時にコーヒーを振舞ってくれる。練習も兼ねているそうだが、まだ惣治郎からは完全には認めてもらえていないらしい。

「ありがとう」

ソファに座りながら一口コーヒーを口に含む。すると、雨宮も自分の分をもつて作業机の前に座り話を始めた。

「今日のことだが、“あれ”は何だと思う？」

「さっぱり分からないよ。あんなの初めて見た」

「そうか」

私のこの答えに嘘が入る余地はない。実際あんなものを見たのは初めてだったし、正体についても皆目見当がつかない。でも、今日で分かったこともいくつもある。

コーヒーの香りを堪能しながら頭の中を整理していると、下で食事を済ませてきたモルガナが満足げにゲップをしながら階段からひよっこりと顔を出した。ついでにそのモルガナにも聞いてみたが、案の定心当たりはないようだ。

とはいえ、これからずっとこのままってわけにはいかない。

「謎だらけだけど、放つてはおけないね。あいつに何かされた後のカネシロの変貌っぷり……」

私の言葉に、二人は黙って頷く。雨宮もモルガナも、あいつの存在の異常性については理解しているようだ。それでも、モルガナは私の言葉に疑問を呈す。

「放置しておくわけにいかないのは分かるが……だからってどうする？あてでもあるのか

「？」

「無い、けど……でもあいつの世話は私にしか務まらないような気はする」

「勝手な行動は駄目だぞ」

「……まだ何も言っていない」

雨宮には早くも釘を刺されてしまったが、何のことは無い。そもそも勝手な行動をすゝるつもりならこんな話もしていないんだ。

「次またあいつが現れたなら、私が対処する。それしかないし」

そう言うのと眼鏡を外している雨宮の顔が分かりやすいぐらいに不機嫌色に染まった。普段は鉄のポーカーフェイスなくせに、私の話になるとこれだ。少し過保護すぎる気がしないでもないけど、でも雨宮達側の気持ちを考えれば仕方のないことなのかもしれない。

ペルソナという異能力があっても、体を張って戦っているという行為に間違いはないわけだ。

「先に言っておいてあげただけでも感謝してほしい」

この世界に居る人間のほとんどは、私の事も同じ普通の人間としか見ていない。だとすれば、なるべく危険な行為はしてほしくないというのが本音……というのか、実際そう言っていたか。

「しようがない」

「いいの？」

「仕方なくだ。確かに今はそれしかない」

「でしょ」

「ただし、絶対に無茶はしないでくれ」

語気を強めて言ってくる雨宮に空返事で応じ、コーヒークップをテーブルに置く。

そして通学鞆からほぼ白紙のノートを取り出してペンをとる。それを見て雨宮は不思議そうな声を漏らす、別に何のことは無い。

「珍しいな」

「何が？」

「妻木さんが勉強なんて。ここで暮らし始めて、初めて見た気がする」

「私のじゃないよ」

そう。これは私のためのノートではない。今更学校の勉強のことで、ノートに記しておかなきやいけないことなんて無いからね。

「ツマキのためのものじゃないなら、誰のためのモンなんだよ？」

「…勉強教えてほしいって頼んできた子」

「へえー。わざわざそんなもの用意してやるなんて、ツマキも案外面倒見がいいな！」

玲央からはノートを見せてほしいと頼まれたことが一度だけあったけど、今私が用意している者は、別にそれに関係するものじゃない。ただ単に、玲央がよく間違えそうな問題をピックアップした、彼女専用の問題集を作ってやっているだけである。

モルガナは面倒見がいいと言ったけど、それより以前に私は中途半端が嫌いなだけであって、これは玲央のためというより私の勝手な自己満足に近いものだ。

「俺のは作ってくれないのか？」

「私の分までルブランの手伝いを代わってくれるなら、考えないでもないけど」

「検討しよう」

…自分で言うっておいてなんだが、必要ないだろうお前には。

雨宮と中身のない会話をしながらノートに適当な問題を羅列していき、たまにモルガナを撫でたりコーヒーを飲んだりしてSPを回復する。

そうやって、パレスでのアクシデントがウソかのような穏やかな夜はゆつくりと更けていった。

正体の知れないアイツのことは、今ここで考えても何も分からない。それが今ここに居る三人の中での共通認識だった。そうやってあえていつもと変わらない時間を過ごすことで、胸のざわつきをごまかしているだけと知りながら。

実際の私はずっと、あの醜い触手の姿を忘れられずにいた。きつとみんなも同じはず

だ。

あんなもの、放置しておけるわけがない。

次があるなら、その時は、私が何とかしないと。

ペンを片手にそう決意を新たにしていた私の傍らで、スマホが着信を知らせてきた。

Codename : Queen (挿絵あり)

小刻みに振動しているスマホを手に取り、着信を確認する。

液晶には佐倉惣治郎の文字。

既に店は閉めていて、もう自宅に戻っているであろう惣治郎からの電話…おそらくガス栓のチェックとか、その程度の事だろう。

珍しいことではあったけど特に気に留めず電話に出る。

「はい」

『よお。ちよつと急で悪いんだが、今からこっちの家来れるか?』

「いいけど…なに?」

『あーその辺は来てから話す。すぐ終わる話だから、頼んだぞ』

「…わかった。じゃ」

通話を切ると、雨宮が要件について聞いてきた。

「別に。ちよつと出かけてくる」

「そうか。気を付けてな」

惣治郎からの電話ってことは伝えずに、部屋着のままブランク徒歩30秒でたどり

着ける佐倉宅へ。

まさか呼び出されるとは予想していなかった私は、惣治郎のいう「話」の内容にまったく心当たりがなかった。まさか冷蔵庫の中にあったチヨコレートを勝手に食べたのがまずかつたんだらうか。

少し不安に思いながらも扉を合鍵で開けリビングへ。

そこには、当たり前だが食卓の椅子に腰かけた惣治郎が待っていた。

「悪いな。ちよつと話しておきたいことがあつてな」

「…なに？」

「ま、座りな」

と、机を指先でトントンと叩きながら促す惣治郎。私の経験上、こうやって始まる話は本当にすぐ終わったためしがない。

嫌な予感がよぎりつつ、私は惣治郎の向かいに座って言葉を待つ。

「実はな。今日の昼お前の親御さんから連絡があつた」

「…！」

「お前のこと、全く探していなかったわけじゃあなかったみたいだな。心配もしてたよ」
…。

一体、何の話かと思えば…どうやらそういうことらしい。

それを聞いた私としては、驚き半分、嬉しさ半分といったところだった。実際、家出をしてからも学校側からそれを指摘されるようなことは無かった。向こうもむむこうで、必死になって私の所在を探しているというわけではないと、それでなんとなく納得はしていたから。

でもどうやら、そうではなかったらしい。どうやったのかは知らないが、私が今惣治郎の元で暮らしていることを嗅ぎつけ、それで確認をとってきたということだろう。

「…それで？」

「いや、それだけだ。お前が無事だつて知れただけで満足だつてな。つたく、この親子は…」

「ううん。むしろ安心したよ。もし帰ってこないなんて言われたらどうしようかと…」
…そこまで言うて。

惣治郎の目が、すつと冷徹なまなざしに変わったことに気付く。

「お前の本心がどうなのかは知らねえけどな。ただ同じ親の立場から言わせてもらおうと、少なくともお前の親御さんは“そう”は思っていないはずだ」

「…」

「俺は別に強要なんてしないからよ。ここに居るか、親御さんの元に帰るか、お前が決めればいい。ただ、俺はずつとここにすることが正解だとは思わないつてだけだ」

そんなはずはないのだけど、ほんの少しだけ、「早く出て行け」と遠回しい伝えられたような気がして胸が痛んだ。そんな意味じゃないことは重々承知だが…。

少なくとも惣治郎が言っていることは正論だ。だから、これはただの、私の我がままであり、嘘でもある。

「惣治郎。私は…もうしばらくは、ここに居たい」

目をチラリと盗み見ながらそう言うと、惣治郎の目からはもう冷たさは消え去つていた。

「いつかは戻る気でいるんだな？」

「…いつかは」

「そうか。なら構わねえよ。気が済むまでここに居て良い」

どうやら。

惣治郎は、私と私の親との関係の間に自分が居ることに、少し思うところはあらしむ。当然と言えば当然。

でも、別に私がここに残ることを徹底的に否定したいわけじゃないらしい。なんとも寛容なことである。この善意に甘えさせてもらっているのには恩義を感じずにはいられないので、できるだけ店の手伝いはするようにしている。

無論、いつかは帰ると言っているが、そんな日が来る予定は今のところない。

「ま、実際お前が来てくれたことで助かってることも多いしな…」

「でしょ?」

「お前がその気なら、もう少し本格的な仕事を教えてやってもいい」

「それってどんな?」

「そうだな…綺羅一人で店を回すことができるレベルのノウハウをだな…」

.....

6月23日 木曜日 昼休み…

教師の声とチャイムの音が朧気に頭の奥で響いている。毎度よろしく授業を寝過ご

した私は、ぼーっとする頭を目覚めさせるために、前に座る雨宮の肩に消しゴムをのつけて落とさないようにキープする遊びを決行。

「それで目覚めるのか……」

真つ黒毛のネコがなにやらうるさいが無視。

当の雨宮は肩に乗つけた消しゴムを落とさないようにしながら、かばんから弁当を取り出して食べ続ける遊びを始めていた。この勝負、負けるわけにはいかない。

「どういう意味？ 真剣に分からないんだけど」

「杏のようなお子様にはまだ早いよ」

よし。そろそろ目が覚めてきた。

絶望的に猫背な雨宮のアンバランスな肩に消しゴムを置き去りにし、私は玲央の待つ中庭へと向かう。

今日はきちんと二人分の弁当箱を用意してきている。別に楽しみなんてしていないが、玲央がどうしてもというのでまた作ってきてあげた。今回は米では無くサンドイッチの詰め合わせだが、正直これの味には自信がある。

「お待たせ」

「お待たされてた」

そんな日本語は無いと心の中で突っ込みながら、ベンチに座る玲央の隣に弁当箱を置

き、そのまた隣に私が座る。

「ごめんね。あたしなんかのために」

「いいよ。大した手間じゃないし。特に今日のは」

初めて玲央が私の弁当を食べたあの日以降、聞けば最近の彼女は昼ごはんを抜くことが多いらしい。それでテストへの集中力が削がれてしまうのは由々しき事態なので、たまにこうした機会を設けてやることにした。

「どうせ朝は時間余ってたから、ちようどいいよ」

「ありがとー……！それじゃ、いただきますー！」

元氣よく合唱し、手ごろなサイズのサンドイッチにかぶりつく玲央を見ながら、私も自分の分を手にとって片手間に玲央から渡してもらったノートを拝見する。無論、こうやって彼女の苦手な部分を見つけ出すためである。

「これおいしい！なに入ってるの？」

「ただの冷凍食品」

「ええっ？サンドイッチってこんなにおいしくなるんだ……」

「相変わらず大袈裟だね……」

「大袈裟じゃないって！」

まあ実際、コンビニで買えるものよりは数倍美味しく作れることには変わりないわけ

だが。世の人間は冷凍食品の偉大さをもっと知るべきだろう。

…なんて、今日もらしくないのんびりした時間を談笑して過ごしていると、玲央が何かを思い出したかのように声を漏らす。

「あ、そう言えば綺羅ちゃんは知ってる？なんか最近話題になってる裏バイトの話」

「裏バイト？」

詳しく聞いてみると、どうやらその裏バイトは私たちのターゲットの犯行とみてほぼ間違いなさそうだった。軽い気持ちで勧誘を受けた生徒が被害に遭っているという話が、ここにも随分広まってきたようだ。

となれば、元締めである金城たちはそろそろ手口を変える必要があるかもしれない。だと、果たして次はどんなやり口を考え付くのか…。

「怖いよねー。うちの生徒も何人が巻き込まれてるらしいし」

「玲央は引つかからないようにね」

「あたしとかいかにもカモにされそうなキャラだもんね」

自分で言うな。

「でも大丈夫。今は勉強一筋だから！」

「ならいいけど」

自慢げに言う玲央にノートを返すと、一気に風船がしぼんだようにしゅんと身体を縮

こまらせる。

「ど、どうだった？」

「…」

「無言?! どういうこと!?!」

・
・
・
・
・

放課後…ルブラン

「ただいま」

「…おう。おかえり」

今日は潜入の予定はないため、放課後は店の手伝いをして過ごすことに決めていた私は、下校のついでに惣治郎に頼まれていた買い出しを済ませてきた。

食材が詰まったレジ袋をカウンターの裏に置き、生鮮食品は冷蔵庫の中へ。

「悪いな」

「いいよ。今日は予定無いし」

その中に紛れ込ませておいたチョコレートもこっそりと冷蔵庫の奥に挟み込ませたあと、立ち上がって制服の上からエプロンを着ける。仕事のない日の、ここ最近での私の過ごし方だ。

といつても放課後の時間帯はほとんど客など来ず、その合間はコーヒーを淹れて見たりして時間を潰している。流石にまだ常連の客に出させてもらえるような腕前では無いらしく、客に出すほとんどは惣治郎が淹れたコーヒーだ。

カレーに関してはその日の仕込みは惣治郎が完全に担っているし、私も案外まだまだ見習いレベル。

だからこそ。

「惣治郎」

「よし。じゃあ始めるか」

私が準備を終えたことを伝えると、惣治郎は読んでいた新聞を畳み、タバコの火を消した。

これから、惣治郎直々にルブラン秘伝の術を教えてもらうことになっている。心配はいらぬ。どうせ客など来ないのだから。

「…メモは」

「一度聞けば覚えるよ」

「聞かれても答えてやらねえからな。それじゃあまず、コーヒーからだ。一回淹れてみな」

何故こんなことをしているのかと言えば、それはもちろん私なりの恩返しのもりだから。惣治郎も、それを受け入れてくれたからこそ、こうやって私がこれからもルプランに居るのを前提にしたことをわざわざしてくれているんだ。

惣治郎のような正しい倫理観を持った大人であれば誰しもが、私は元の場所に帰るべきだと思はず。それなのに、大した理由も話さずに居座っている私の我がままを、この人は多くを語らずに許してくれている。

しかも私はそんな人に嘘をついている。いつかは帰る、なんて心にもない嘘を。

だから、これはせめてもの贖罪。

私みたいな人間にできる精いっぱいの正義だ。

「…ふむ」

しかもつらで私の淹れたコーヒーを飲み一息つく惣治郎を見て、私はなんだか懐かしい気分になった。こんな風に誰かにモノを教わるといふのは、なんだかとても久しぶりな気がした。

「どっつー」

「筋は悪くない。初めに教えたこともちゃんとできてたしな」

そして、こんな風に誰かに認められてうれいと感じることも、とても懐かしかった。「これならもう少し上の段階までいけるだろうな。今から言うことをよく覚えるんだぞ」

「うん」

「まず、これは分かつてると思うがもう少しお湯はゆつくり注げ。時間をかければそれはしつかり味に反映される。それから…」

いつだったか、私が初めてつくった料理を…あの人たちに食べてもらった時以来、か。そういうえばあの時作つたのって…。

…いや、いや。思い出しても特にいいことなさそうだし。

思考を締め出し、目の前でお手本を見せてくれている惣治郎の手さばきを見て覚えることに専念する。

今までも惣治郎がコーヒーを淹れている姿を見てはきたが、こうしてまじまじと見てみると一つ一つの動きにちゃんと意味があるのだと分かる。こんな態度だけど、客に出すコーヒーに関してはいいつも妥協は無しだったんだな。

そして淹れ終わったコーヒーを飲ませてもらうと、やはり自分のものとは別物という感覚に陥った。使っている豆も水も器具も同じはずなのに。

「もう一回良い？」

「ああ、もちろん」

夕焼けが差し込み豊かな香りが漂う喫茶の中、私にとって貴重な時間は非常に有意義な流れ方をしていった。

ついさつき得た学びをもともにもう一度、丁寧にじっくりと、かつ風味が逃げないよう急ぎながら、今の自分が出せる最高品質のコーヒーを淹れる。

途中、さつき買ったチヨコレートのことが頭をよぎって集中が乱れそうになるのをなんとか振り払い、自己評価的にはさつきよりも良さそうなものを淹れることに成功した。

「…ふうむ」

「…どう？」

「悪くないな」

なんであろうと人から評価を貰うのは嬉しいもので、惣治郎に褒めてもらえたことは私にとってもかなり嬉しいことだった。

飲み込みは早い方だと自負はしているものの、コーヒー淹れなんてここに来るまで全くの未経験だったわけで、多少なりとも緊張はする。その分新鮮さがあつて楽しいんだけど。

それからしばらく私と惣治郎の特訓は続いたけれど、幸運なのか不運なのかその間

に客が来ることは無く。

差し込む夕日が街灯の光に変わりだし、特訓のメニューがコーヒーやカレーから外れだした頃、ようやくその固い門戸は開かれた。…それも客では無く、もう一人の居候者が帰ってきただけだったんだだけ。

「ただいま」

扉が開き、雨宮とその肩から顔を覗かせるモルガナが帰宅を知らせる。

「おかえり。蓮、お前もやるか？」

「何ですか？」

「いま綺麗に直接コーヒーの淹れ方やらを伝授してやってたところだ。お前も興味あるならいいぞ」

「興味はありますけど…いいんですか？」

「いいよ」

代わりに私がそう答え、テンポを崩された惣治郎がガクツと肩を落とした。

「じゃあ、俺もお願ひします」

「決まりだな。じゃ手洗って着替えてこい」

雨宮は惣治郎の提案に二つ返事で応え、着替えをしに部屋へと上がっていった。モルガナもその後を追ひ、階段を駆け上がっていく。

その背を見届けたあと、惣治郎は私に目を合わせないまま呟いた。

「…はあ。お前と言いいいっつといい、なんでこんな人間が面倒被ってんだらうな」
「？」

「綺羅。俺はお前がいつか元の場所に帰ればいいと思ってる。だが、ここにいるなど言ってるわけじゃねえ。…言ってる意味は分かるな？」

「…なんとなく」

曖昧な答えに惣治郎は「ならいい」とだけこぼしてカウンターを出た。そのまま玄関扉を開き、表の看板を“close”へと戻す。

「もう閉めるの？」

「今日“は”客が来なさそうだからな」

まあ確かに、今日に限っては珍しく客が少ないし、閉めてしまっても問題ないかもしれない。

そう思った矢先、閉じかけたドアの向こう側に人影が写った。

「悪いね。今日はもう…」

「わたしだ！」

お前か。

ドアの隙間から顔を覗かせる双葉を見て思わずそう突っ込んでしまった私をよそに、

雨宮が階段を下りてきてシンクで手を洗い出す。

「そろそろ帰ってきてる頃だと思つてな。遊びに来てやったぞ！」

「ちようどいい。なら双葉も手伝え」

「へ？」

そんなこんなで集結してしまつた佐倉一家とプラスアルファで、なんやかんやと惣治郎主導の元ルブラン仕込みのいろはをみんなで教わつた。ついでに、今日の晩御飯づくりもかねてだ。

こんなに賑やかな晩御飯も久しぶりだと、双葉も惣治郎も感慨深そうにしていたけれど、そう思つたのは二人だけじゃないだろう。

私だつて、このどうしようもなくあたたかな時間が愛おしく感じていた。ずっとこんな時間が続けばいいのに、と思いたいところだけど、そうもいかない。私がこの場の空気を吸えていること自体が既に高望みでしかない。これ以上の贅沢は言えない。

「ぎゃー!!」

「ど、どうした双葉っ!?!」

「洗剤出しすぎた!」

「…そんなんでいちいち叫ぶんじゃねえよ」

「ゴシユジン、ワガハイの分はあるんだらうな!」

「んん…？またなんかネコが喋ってるな」

「『ワガハイのはあるのか』…っていつてます」

「え、モルガナの一人称ってワガハイなのか？それとも意識か？」

「直訳です」

「そうか…？っておい綺羅今なに食べたっ？」

「…」

こちらへの気が向いていない瞬間を見計らい、カレーに使う隠し味の内の一つであるチョコレートをひとかけら口に放り込んだものの、惣治郎に見つかってしまった。

「なにも」

無心でカレー鍋の中身をかき混ぜながら、恐る恐る横目で惣治郎の方を盗み見る。

「ウソつけチョコ食べただろ。まったく…客の前ではつまみ食いするなよ」

「…はい」

…なんて茶番がありつつも、初めて一から自分で作ったルブランカレーと、雨宮の淹れたコーヒーが出来上がり、ついでに惣治郎が手作りしたねこまんまと一緒に、みんなで食卓を囲むこととなった。

私が作ったカレーは、一応教わった通りにできたつもりだ。皆からの評判も良かったし、冷ました分はほんの少しだけモルガナになめさせたりした。…ネコの舌には少しス

パイスの刺激が強かったらしいけど。

そして、雨宮の淹れたコーヒーもなかなかのものだった。怪盗としての仕事や学業なんかにも励んでいるのに、いつの間にかこんな技術を身につけていたのやら。惣治郎も少し驚いていた。無論、カレーとの相性はばつちりだ。

「二人とも天才だな。惣治郎の味にここまで近づけるとか!」

「久々にネコ缶以外のモンを食った気がする…!感謝するぞゴシユジン!」

「そーだ惣治郎!どうせならこの二人にルブランの新メニユーとか考えてもらおう?」

「新メニユー…?まあ…:そういうのもありなのかね…」

「私たちに後を継がせるなら、必要じゃない?」

「もう継ぐ気かよ…」

ただひたすらに平和な時間。

こんな日々が自分の手でつかみ取ったものであれば、どんなに心地よかつただらう。いくら笑つても、喜んでも、私にとっては未だ不完全燃焼感が否めない。

たしかに、今この時間を過ごさせているのは、ここにいるみんながいてくれるからに他ならない。

それでも、私は知っている。

“こうなる”ことを仕組んだ奴が、まだ私たちの運命の糸を握っているのを。

こうやって私たちに希望をちらつかせるのが、外の人間のやりくちだ。いつだって、あいつらは私たちを使って遊ぶことしか考えていない。

だから、やっぱり私が終わらせるべきだ。

真実を知っているのは私だけなんだから。

その後晚餐を終えた私たちはみんな後片付けをして、眠そうにしている双葉を先に家に帰らせた。このままだと私か雨宮のどちらかがソファで寝る羽目になっていたところだった。

ちやんと夜に眠気が来ているあたり、生活習慣も少しずつ改善しつつあるようだ。

そんな双葉の様子を見て、惣治郎は私たちに感謝の言葉を伝えてきた。ネットだからんだかのことは分からないが、それでも双葉が変わったのには、私たちの影響が大きいんだと。

この時点で既に薄々勘づいてはいるのかもしれない。最近話題になりがちな、人の急な心変わりや豹変に、双葉の様子が似ていることに。

「双葉があんなに明るく他人と喋ってるのを見るのは、正直言ってお前らが初めてだ」

何やら複雑な感情を抱えながらも、嬉しそうではある。同時に、私たちに言いか言いたげでもあつたけれど、結局惣治郎はそれ以上は何も語らなかつた。

始末を済ませおやすみを伝えた後は、いつものように家に帰つてしまった。

「ゴジュジン、なんか言いたそうじゃなかつたか？」

「…確かに」

「気にしても分からないでしょ。私たちも寝よう」

「そうだな…。明日に備えて」

「うむ。腹もいっぱいだし、ゆつくり休めそうだけせ…」

惣治郎が何を言おうとしていたのかは分からない。でも、私のことを受け入れてくれるだけ、もう十分伝わつた。そもそもこんなに温かい空間に居させてくれるだけで、勿体ないほどの贅沢。

こんな贅沢を楽しむ私を、奴らは望んでいるのだろうか。

「ツマキー。明日の作戦もあるんだから、もう寝ようぜ？」

…そんなはずはない。こうして幻想を見せつけた後で突き落すのが、奴らの常套手段。

「うん。今行くよ」

全部、私の手で終わらせて見せる。私たちはくだらない娯楽のために存在しているの

ではなく、ただ自分の意思で生きただけだと、証明してやる。

6月24日 金曜日 放課後： カネシロパレス

口をつぐみ、音を殺して闇に乗じる。そんな怪盗としての振る舞いも板についてきた、私たちが心の怪盗団。今回の攻略は、チームを二つに分けての作戦に決定した。

理由は、警備が嚴重すぎて大人数では固まって動きずらかったことが一つ。もう一つは、この銀行の内部が思ったよりも広く、手分けしてオタカラへの道を探す方が効率的だとジョーカーが判断したためだ。

私と一緒に動いているのはパンサー、フォックス、そしてナビ。向こうはジョーカー、モナ、スカル、そして今回が初めての作戦参加となる、"グイーン"。

二つのチームはナビの通信範囲である適度な距離を保ちつつ、互いの目が届かない場所を探しながら進む。監視カメラや、カネシロが用意したであろうセキュリティなんかは、逐一ナビがペルソナを使って位置を報告してくれる。そのおかげで接敵も最小限

に抑えられ、結果かなり深い場所までたどり着いたものの、周囲の警戒度はそれほど高くなさそうだった。

「結構進んできた気がするんだけど、オタカラってまだ先なの？」

「折り返し地点は過ぎてる。反応は近いぞ」

「ジョーカー、そちらの状況はどうだ？」

『今、ロックされた壁の前にいる。隣に番号が入力できる操作盤があるが、手掛かりがない』

『その辺にメモでも落ちてねーか探ってみただけだな…。ここを開けねえ分には、こっちのルートは進めそうにねえ』

向こうも向こうで順調に進んでいたみたいだけど、どうやら道がロックされていて進めないらしい。どうやらクイーンに考えがあるようで、もう少し辺りを探ってみることにしようだ。

であればそちらは任せておくとして、私たちは…。

「了解。こっちはこれから戦闘になりそうだから、少しの間通信は切ってるよ」

『分かった。気を付けて』

吹き抜けになっっているフロアの階下に見える警備シャドウは、上から見下ろす私たちに気が付いていない。奇襲を仕掛けるなら好機だ。

数は見回りで歩き回っている奴が一人。そこから少し離れた場所に見張りが二人。

まず私が先陣を切って飛び降り、見回りの仮面をはぎ取る。変身前のシャドウは皆仮面を身に着けていて、それを不意に外されると前後不覚に陥り致命的な隙を晒す。

その隙にナイフで急所を一突き。異変に気が付き戦闘態勢をとる見張りの二人はもちろん、パンサーとフォックスによつて素早く対処される。

『周囲に敵反応なし。流石だな』

周囲の安全が確保されると、後からゆつくりナビが降りてくる。

「うちらも結構サマになつてきたよね」

「ああ。二人とも、相変わらず美しい身のこなしだった。…ところで、これは一体？」

互いにたたえ合う私たちの前にあったのは、どうぞ奪ってくださいと言っても言わんばかりにひけらかされていた大量の札束。バラエティ番組なんかの景品でも乗つていそうな丸テーブルに赤いテーブルクロスが敷かれていて、その上に札束は鎮座している。

「…なんだろうね」

「百パー罨だし、触らない方がいいよね。こんなの奪つてもどうしようもないしさ」

パンサーの言うことは最もだけど、だからといって辺りに他の何かがあるかと言われればそうでもない。

とりあえず敵の処理は終えたとし通信をナビに再開してもらった瞬間、向こうのチーム

の声が耳に届く。

『こちらクイーン。そっちは大丈夫？』

「問題ないよ。どうかした？」

『こっちは手掛かり見つけたから、先へは進めそう』

「ちなみにどうやったら開いたの？」

『ここに来るまでにいくつか謎の数字を見かけていたのよ。思い出してつなげてみたら、語呂合わせになってることに気付いたのよね。例えば2319 “ブサイク”とか、

1841 “イヤシイ”とか』

「それが暗証番号になってたの？」

『自分で設定したにしては妙よね。まあ、だからこそってことなのかもしれないけれど』

「クイーンたちのほうが最深部には近いな。きつとオタカラもそっちにある」

『了解。オタカラがあったらまた知らせる』

ジョーカーがそう言い残し、通信はまた中断された。どうやら向こうのチームが進んだ道が正解だったようだ。

こっちの道はこの先に続いてもいないし、黙って撤退したほうが賢い選択なんだろう。

それでも、私たちの視線はずっと目の前の札束の山に注がれ続けていた。どうみても

罨で間違いないのだが。

「押すなって言われると押したくなるのが人間だよなー」

ナビのその言葉が、私たち全員の心の内を表していた。やけに気になる…これが生物的本能だとしたら、この時私が踏みとどまらなかったことを誰も責められないはずだ。周りの誰も止めなかったし。

気付けば私の手の中に一つの札束が収まっていた。すると、アニメよろしくゴゴゴゴという地鳴りのような音が鳴り響き、札束の置いてあったテーブルの下が開き、5体の警備シャドウがポーズをとって登場した。

なんだこいつら…と呆れる間もなく、そのシャドウ達は次々に口上を述べる。

「かかったな賊め！」

「こんなあからさまな罨に引っかかるとは！」

「所詮怪盗団もこの程度か！」

それに負けじとこっちゃんも感想を述べる。

「拍子抜けだな。まさかこの程度の仕掛けだったとは」

「どうせなら派手に大爆発でもしてくれたりよかったんだけどな」

「まあ、ホントに爆発したらタダじゃ済んでないんだけどね…」

苦笑いするパンサーをよそに、フォックスとナビはわざとらしくがっかりした様子で

肩を落とす。どうやらその反応が癩だったらしく、シャドウ達は憤慨し戦闘態勢をとる。

私としても残念だが、嘆いても今からこの仕掛けが豪華になることは無い。さつさと始末してジョーカー達と合流してしまおう。

アイコンタクトで完璧な意思疎通を終えた私たちのスキルによって、目の前のシャドウはさつきまでの威勢がウソかの様に一瞬で消滅。どうあがいても私たち相手に雑魚シャドウが太刀打ちできるわけではない。

ため息をつきながら地に伏して助けを乞う最後のシャドウにとどめを刺すと、そのシャドウが何かを残していった。

「それは…カードキーか？」

刀を収め周囲の警戒を行っていたフォックスが、私の方に近寄り目を細める。

「そうみたいだけど、ここに来るまでに使えそうな場所は無かったよね」

「ああ。わたしのマッピングにも記録されてないから間違いない。帰ったら、ジョーカー達に聞いてみればいいんじゃないか？」

ナビの提案に頷き、私たちは本当にやることのなくなったこの場を後にして、一度パレスの入り口まで撤退することにした。

「カードキー？」

「うん。そつちで使えそうな場所ってあった？」

銀行の外でジョーカー達と落ち合い、互いの探索成果を報告し合うこととなった。

まずは先に帰還してきた私たちのほうから、ジョーカーチームに情報を共有してみたわけだが、めぼしいものはやはりあの謎のカードキーのことだ。

どうやらジョーカー側はその使い道に心当たりがあるらしく、今度はそつちの成果についての話になった。

「まず、オタカラの場所はこつちで判明した。最深部に堂々と安置されてた。それとそのカードキーのほうだが、多分使えそうな場所に心当たりがある」

「どうする？今から行ってもいいけど」

私がいまにそう聞くと、全員体力は有り余っているらしく、もう一度ジョーカーの先導の元銀行内部へと潜入することにした。今度は全員一緒にだ。

私たちの通ったルートは警備が比較的薄かったらしく、こつちのルートはやりすぎな程に様々な警備システムや見回りが配備されていた。気配を殺して移動しながら、モナがシャドウを見下ろして呟く。

「大切なものに繋がっている道だからこそ、嚴重に守りたい……そういうことだな」

一度通った道らしく、最適なルートで敵の視界を欺きながらどんどん先へと進んでいくジョーカー。

その後を追いたどり着いた先は、二体のシャドウが護る巨大な金庫の前だった。扉の横には、確かにカードリーダーのようなものがある。

「俺とリーサルで手早く片をつける。いくぞ」

シャドウの元へ行くまでに、身を隠せそうな場所は見当たらない。であれば、正面突破あるのみだ。

合図と同時にジョーカーが自作した小型の爆竹をシャドウに向けて放り投げて目くらまし代わりにする。生み出せる隙は一瞬だけど、それで十分。

慄いている間に距離を詰め、二人で一体ずつ、シャドウに組み付いて仮面を剥がす。そうして生まれた今度の隙は致命的。ペルソナを使い、一撃で片を付けた。

「敵反応、なしっ。お疲れさん」

さて、満を持して……ってほどでもないけれど、これだけでかい金庫に入っているものとなれば、自然と心が躍るといふもの。ただの金だったらしようもないけれど。

「なあ、早く開けようぜ？きつとすげえ大金が……」

「スカル……品がないぞ」

「るせつぞモナ。そういうお前もちよつとは期待してんだろ？」

「ま、まさか！ワガハイはそんな俗世に囚われたような考えは…」

スカルの言葉を否定するモナの尻尾は、それでも左右に大きく揺れていた。

「開けるよ」

固唾を飲んで見守るみんなの前で、私はカードキーを装置にスライドさせた。

加圧され嚴重に閉じられていた扉がゆっくりと開かれ…その中にはぼつんと一つだけ、小さな紙切れが粗雑に捨てられていた。

拾い上げると、内側に汚い文字で何かが描かれていることに気付く。

「『混沌』…『力』…と、あとは…」

…うーん。汚すぎて読めないな。

「どれ、貸してみ？」

首をひねる私に、スカルがそう提案する。

大人しく手渡すと、顔を横にしたり逆さまになってみたり色々試した結果、なんて書いてあるかは分かるけどその漢字の読み方が分からないという。まったくもって本末転倒であった。

「つか！こんなバカでかい金庫にこんな紙クズしか入ってないってどーいうことだよ！？」

…確かに、拍子抜けではある。でも、こんな場所にあるのであれば、それなりの意味を持つているはずだ。

私はひとまずその紙切れを預かり、現実に戻ってからゆつくりと解説することに決めて、今日のところは撤退した。

・
・
・

夜…

「ただい……………え？」

「あれ？」

パレスから帰還した私と兩宮が、ルブランで一番に目が合った人物…それは惣治郎でも常連の爺さん婆さんでも無かった。

「どうしてここに？」

「どうしても何も…たまたま雰囲気の良い喫茶店を見つけたから、一息入れてたところ
なんだけど」

そこにいたのは、何故かカウンター席に我が物顔で足を組んで座っている、明智吾郎
だった。

「君たちこそ、どうしてここに？」

「ここに住んでる」

「え？それは凄い偶然だね。あまり運命って言葉は好きじゃないんだけど、君とはやっぱりそういうものを感じるね」

にこやかに雨宮に話しかける明智の脇を通り過ぎて我先に上階へと駆け上る。これ以上ここには何を言われるか分かったものではない。少なくとも私の面倒を煩わせることだけは確かだ。

荷物をソファに置き、誰かさんが上がってこないうちに素早くスカートを脱いで部屋着へと変身。

安全を確保した私は、荷物の中からパレスで拾った紙切れを取り出す。相変わらず読めたものではないけれど、かろうじて解読できる前後の文字列から内容を推察することは可能なはず。

スマホを片手に紙の字と似ていそうな字を検索しながら、互いに見合わせて少しずつ読み解いていく。

「混沌の使者とかいう奴が言うには」：「おれ」：「力」：。

：見ているだけで頭が痛くなってくるな。きつとこれはカネシロが書いたものなんだろうけど：読めたところで全く意味が分からない。初めのほうに書いてあることは

なんとなく読み解けたが：「混沌の使者」が指すものがなにか、皆目見当もつかない。果たしてこれは怪盗活動に関係のあるものなんでしょうか？

こんなもの、私の記憶には無い。混沌の使者なんて単語も、ゲームには出てこなかったはず。

そして、知らないものといえば「アイツ」のこともそうだ。今日の潜入では姿を見せなかったが、間違いなくあの場所に存在していたことは確か。分からないことどうし、なにか関係があつても…。

「混沌…」

様々な事象が入り混じっている状態を指す言葉。今まさに、「アイツ」が現れたことで混沌がもたらされようとはしている。であれば、混沌の使者とはあの触手のことか、あるいはその持ち主？

…。

まあ。

其れより以前に、私にはこの言葉に最もふさわしい存在を知っているわけだが。

この世界に訪れて、秩序を乱しているのは、他でもない私自身だ。

ただ、この紙に記されているのが私だとは考えづらい。私とカネシロとの繋がりがなくて、これっぽっちもないんだから。

「…妻木さん」

「もう帰った？」

「ああ。コーヒーを飲んだらすぐに帰った」

「そう」

パレスから帰ってきたときはそうでもなかったのに、今は物凄く疲労しているように見える雨宮は、潜入に必須な諸々が詰まった荷物を下ろしてベッドに腰かけた。

いつの間にかモルガナもその傍らに寝そべっていて、毛繕いを始めている。

私も紙切れをしまい、座っていたソファに寝そべる。正直雨宮の寝ているベッドよりも寝心地は良いと思う。

「明智とは、何か話したの？」

「いや、特には」

…本当に明智は何しに来たんだ。ただの嫌がらせか、それとも何かの視察のつもりだったのか。余計なことを口走ってなければいいけども。

私との妙な関係はあるものの、明智と怪盗団の対立関係はこの世界でも変わらない。みんなに妙な刺激は与えないようにしないと。

「で？そつちのほうはなんか分かったのか？」

「さっぱりだよ。でももう少し考えてみる」

「ツマキでも分らんか……。ワガハイもそんなものには全く心当たりがない。あのデカブツのこともそうだが、ただ単に悪人を改心させていくだけとはいかなそうだな……」

異世界のことに多少なりとも詳しいモルガナでも見当がつかないとなると、いよいよもって謎は深まるばかりだ。それに、オタカラまでのルートを確認することには成功しても、本番の日にもまた「アイツ」が現るかどうかが問題だ。

そうでなくても、あの時のカネシロはどうにかなってしまっていた。潜入中は全く姿を見せなかったが、きつと最深部で私たちを待ち構えているはず。

だんだんと、歪みが浮き出てきているような、そんな気がしてならない。

嫌な予感、胸に募っていくばかりで、自分の手でその原因を摘み取るまでは、この懸念が消えるようなことはなさそうだった。

3日後……6月27日 月曜日

『次のニュースです。今朝、東京都渋谷区付近で、またもや心の怪盗団が現れたとのこと

です』

『街のいたるところに予告状がばらまかれており、警察は現場の監視カメラ等で捜査中のことですが、新しい情報は出ていません』

朝食のトーストを頬張りながら、ニュースから流れるキャスターの声を聞き流す。

「また怪盗団か？ そろいもそろって怪盗怪盗ってよ」

惣治郎も既に怪盗団という言葉の響きに飽き飽きしているようで、ろくな関心を示さずに雑誌を読み漁っている。この人に関してはそれで良いけれど、気になるのは世間の反応だ。

とはいえ食事中にスマホを弄りだすと惣治郎がうるさいので、さっさと食事を済ませてしまおう。相変わらず絶妙な焼き加減のトーストとコーヒーを胃に流し込み、ごちそうさまを言つて上の階へと戻ろうとした時、惣治郎に呼び止められる。

「あー悪い。あいつにこれ持って行ってやってくれ」

「えー……」

まだ上で寝ている雨宮の分の朝食を惣治郎に渡され、渋々それをもって部屋へと戻る。

この男と過ごしてきたことが、すこぶる朝が弱いということ。

怪盗なんて闇の稼業をしているせいで、朝日への抵抗が薄れてしまっているのかもしれない。

れない。ついでにモルガナも、よく雨宮の身体の上か頭の上に丸まって一緒に寝ている。今日もそれは例外ではない。

テーブルに持ってきたトーストの皿とコーヒーを置き、そして少し後ずさって助走をつける。

距離を調整し、飛び上がって仰向けで寝ている雨宮にボディプレス。

「がはっ…!?」

「ぎにゃ!!」

質素なベッドが大きく軋み、雨宮とその隣で寝ていたモルガナがつぶれる音がした。

「おはよう」

「お、おはよう…」

「朝ごはん置いてるから食べなよ」

「ああ…ありがとう…」

困惑しながらも起き上がろうとする雨宮の両腕を押さえつけて反応を楽しむ。寝起きの頭が働いてない雨宮を弄るのは非常に楽しい。これはここに居る私にしかできない遊びだ。さあ、もっと困れ。

「…すー」

…寝るんかい。

早々に諦められてしまったので仕方なく解放してやる。このまま寝られて困るのは私の方だ。

「おかげで目が覚めた」

「いつも遅すぎるのが悪いけどね」

「なんでワガハイまで…」

「モルガナも一緒に寝てないで起こしてよ。今日は『大事な日』でしょ」

「まあな…。そういうツマキも、準備は万全だろうな？」

当然、と首を縦に振り、トーストにかじりつく雨宮を見やる。まだぼやーつとしてるが、放課後になればいつも通りシヤキツとしていることだろう。

予告状を世間にばらまいたということは、今日がカネシロのオタカラを奪う作戦の決行日になる。しかも今回は、どうやら一筋縄ではいかなさそうな予感がしている。いつも以上に、気を引き締めてかからないと。

・ ・ ・ ・ ・

金を貪る暴食の大罪人、カネシロジユンヤ殿。

詐欺に明け暮れ、未成年だけを狙う愚劣な手口。

我々は全ての罪を、お前の口から告白させることにした。

その歪んだ欲望を、頂戴する。

心の怪盗団『ザ・フアントム』より

・ ・ ・ ・ ・

放課後：

鴨志田卓。

私たちの通う秀尽学園高校所属の体育教師。バレーボールの元オリンピック選手で金メダル獲得の実績有。その栄光を振りかざし、教師という立場を悪用して生徒たちへの物理的、精神的な虐待を働いていた大罪人。これは私たちの手によって肅清され、既に悪は滅した。

斑目一流斎。

私たちの仲間である喜多川祐介の絵の師だった人物。日本画の大家として全国的に有名だったが、その作品は全て弟子の着想を奪って作られたもの。人を人とも思わぬ振る舞いと多くの人間をだまし続けてきた罪は、怪盗団によって暴かれた。

そして、金城潤矢。

学生をターゲットに詐欺を働き、さらにその親族へも脅迫し金と同時に他人の人生をも奪い取ってきた男だ。被害者の数は、これまでの二人とは比べ物にならないだろう。なにせ、金城はいまこの町全体を牛耳っているんだから。

クイーンが身を張って証明してくれたおかげで、私たちの中に躊躇はひとかけらも無い。奴は正真正銘の存在悪だ。

「ジョーカー」

背を向けて歩き出すジョーカーに声をかける。

「気を付けて」

「ああ」

短いやり取り。

それでも、私はその返事に心強さも感じていた。ジョーカーなら大丈夫。

そうして私の元からいなくなったジョーカー達。私は何をしているのかというと、銀

行には入らず外で待機だ。

正しくは、*“其処”*に居る*“何者か”*の監視。大方の想像通り、パレスへと入った瞬間に例の気配が肌を刺した。パレスの外で、ただ何も無い空間に*“何か”*が佇んでいる。姿こそ見えないが、確実にそこに居る。

みんなが安心してカネシロの元へ向かえるように、私がこいつを見張っておく係というわけだ。

昨日、私はなんとかジョーカーを説得して、この役目を一人に任せてもらった。

カネシロパレスの空は薄暗い緑色をしていて、とても清々しい日とは言い難い。そんな空を延々と見つめていること約数分……上空に浮いている銀行から思い地響きのようなものが聞こえた気がした。

「…」

始まったのかな。

そう思い少しだけ視線をそちらへずらす。

その刹那、突如として今まで何もなかった空間に*“影”*が落ち始めた。

宙に浮きあがる無数の小さな影は、やがてひとつの大きな影と成り、次第に私の想像を大きく絶する巨大さへと膨張を繰り返す。

「———でか」

初めて、私の目の前に全貌を晒したそいつは、全く持つて想定外のデカさを誇っていた。すぐそばにあるカネシロの銀行なんて、もうゴミのような大きさにしか見えない。私が見上げていたはずの空は、全てこいつのグロテスクな外皮で覆われてしまっている。

コイツの外見を一言で言うならば超巨大な脳みそだ。気色悪い肉の塊に無数の瞳が浮き出っていて、あちこちから細かったり太かったりする触手が蠢いている。端的に言うてすごくキモイ。

あの時見た触手は、真正銘体の一部でしかなかったと言う訳だ。

これには少し驚かされた。今いきなり地面に落ちて来られたらシンプルに詰む。しかしいくら走ろうとこいつの体積の外に出られる気はしない。

：様子を見ている場合じゃない。そもそもこいつはカネシロに協力するような真似をした奴だ。攻撃をためらう必要なんてどこにもない。

「ペルソナ」

Charaを召喚。ゴエモンの生み出す冷気のような鋭さをイメージし、生み出したのは氷の槍。

試しに打ち放つては見たものの、本体に直撃する前になにかの干渉を受けてあらぬ方角へと曲げられてしまった。

どうやら遠隔手段は通用しないらしい。これだけデカくて飛び道具に耐性が無ければただの的だったんだが。

それからもういくつか遠距離攻撃を試してみたものの、暖簾に腕押しというしかないほど手ごたえがなく、反撃する素振りすら見せない。

知性を感じさせない佇まいからは何もくみ取れない。目的も存在も何もかも、その外見を晒したばかりに余計謎が深まった。

「なんなのお前」

思わず独り言ちると、そいつから伸びた一本の触手がいつかみたいに銀行の上へとずるりと伸ばされた。

そして、まるで豆腐に箸でも刺すような滑らかさでそれを貫いた。

「なにしているのかなんて教えてくれたりは」

しないよね。

相変わらず読めないが、今は私でも手が届く場所に奴の身体が降りてきているチャンス。攻撃が通用するのかどうかだけでも、確かめさせてもらおう。急いで地上に伸びる階段を駆け上がり、銀行の壁を無理やりによじ登る。

そしてついに目の前までたどり着いたとき、軽く樹齢百年以上は有りそうな大木ほどの太さを持つ触手がずるずると上に向けて蠢きだす。

この機を逃せば、謎の浮遊体を斬るチャンスはいつ訪れるか。私は全力を籠め触手に向けてナイフを振るってみた。

感じたことのない手触りがナイフ越しに伝わってくるものの、比較的柔らかい外皮はいともたやすく両断できた。あまりに太すぎて触手自体を切り落とすことはできなかったが、一応斬撃は有効なようだ。

そうやって効果を確かめている間に、触手は本体の元へと引っ込んでいき…。

「え」

そしてその本体も、まるで役目を終えたかのように一瞬にして私の目の前から消え去ってしまった。今はもう、かすかな気配すら感じない…。

「なんなんだ本当に…」

斬りつけたときに顔についてた返り…これは血でいいんだろうか？をふき取る。少しだけ目に入ったぶんもあるが、妙な疫病なんか持ってないだろうな…。見た目的にはかなりそれっぽかったけど…。

…気にしても仕方がない。監視対象が居なくなっただけ、私がすべきことは…。

真下を見下ろして気付く。身もすくむほどの高さだけど、奥から漏れる眩い光の中に異形が蠢いている。

「ジョーカー？」

通信で問いかけてみるも返事はない。戦闘中なら返事する余裕は無いか。聞ける状態にはしておくと、出発前に釘をさしておいたから、きつと聞こえてはいるのだろう。

「今からそつち降りるから、そいつそこに留めといて」

そう口にして行動に移すまでの時間は無いに等しかった。

通常なら自殺行為ではあるものの、この世界であればなんとかなるだろうとどこかで油断していたのかもしれない。もしこれが間違いだと知っていても、こうするのが一番手っ取り早くみんなの元に辿り着く手段だというのなら、私は同じことをしたと思う。

円柱状に空いた穴の先へ、真っ直ぐ急降下していく。速度は増していき、どんどんと眼下に映る地面と、そこに立つ異形の姿がはつきり見えてくる。

この前見た時よりもはるかに大きく、そして毒々しくなったそれ目掛けて、落下の勢いそのままにナイフを振り下ろした。

ついさつき、触手を斬った時と同じような感触が、ナイフを伝って私の手に伝わるよりも先に、勢いを殺せずに巨体を下敷きにして地面に着地。

どうやら私が下敷きになっているのはこの何とも言えない異形の頭部に当たる部分らしく、足の間から覗く蠅に似た眼と目が合った。

「いっきげんよう」

『キサマ……!?この前の……!』

目測で見て三メートルはゆうに越していそうな巨体へと変貌していたソレは、やはり元はカネシロのシャドウだった者のようだ。見た目は……どこかで見た蠅の姿をした悪魔によく似ているが、腕というか足の数はそれよりも多く、そのうちの一本は大きな錫杖を握っていた。

伸ばされた腕を回避しつつ一度距離を取り、ジョーカーの横に並び立つ。

「色々とツツコミたいが後にしてやる」

「そうして」

軽口をたたきながら周囲の状況を確認してみる。

降り立った瞬間から気にはなっていたけれど、ジョーカー以外のみんなはそれぞれ散らばって小型のシャドウを相手取っていた。そしてそのシャドウの群れに守られるように、この大きな間の奥に金ぴかな巨大金庫が鎮座していた。

どうやらあれにオタカラが護られているようだけど、シャドウをかき分けて金庫に辿り着いても、強固すぎてこじ開けることはできていない。

あれを叩ければ、カネシロの弱体化を狙うことができるだろう。

「こいつをシメてからゆつくり開ければいいんじゃないの」

巨大な蠅の悪魔の姿となったカネシロを見上げてそう呟く。

「それだとスマートじゃないだろ」

その横で、ジョーカーが呑気にそんなことを言う。

「どうやればスマートなの」

「オタカラを盗んでくれ。後は任せろ」

手短かにジョーカーが伝えたあと、話は終わりだと言わんばかりにカネシロの放った光線が私とジョーカーの間を割る。ここは言われた通りにやってやるか。

凶体に似合わないスピードで伸ばされたカネシロの腕を躲しがてらナイフで切りつける。

怯んだ隙に脇を走り抜け、雄たけびと何かがぶつかり合う音を背に、正面の中型シャドウの群れへと突撃する。

「うおっ！リーサル、来てくれたのか！」

「どいつからやればいい？」

「片端からぶつたおす！」

「おーけー」

まずは一番手前で、ジョーカーとカネシロの戦いに割って入ろうとする雑魚を足止めしていたスカルの援護に。

余計な言葉は必要なく、ただ目の前のシャドウを叩き伏せていくうちに自然と連携の取れた動きになっていく。

『カネシロ様の金に手を出すなア!』

「もとは他人から盗んだ金だろうが!」

今までは迎撃するだけだったのが形勢逆転し、シャドウの数は目に見えて減っている。そうしてこの小隊の長である鬼の姿をしたシャドウのもとへスカルが肉薄する。

とつさに防御の姿勢をとったシャドウだったが、キャプテンキッドの全力タックルを受けられるほどのタフネスは無かつたらしい。

『ナイスだスカル! 敵の陣営に穴が出来た!』

「うっし! 今のうちに全部ボコすぞ!」

各々応戦していたシャドウ達に若干の焦りが見える。

調子に乗り出したスカルはガルでも喰らわれない限り止まることは無い。フォックスと罠迫り合いになっていった金色の鬼を弾き飛ばし、パンサーへ向けて氷結魔法を放とうとしていた赤紫色の鬼を電撃で怯ませる。

「オイスカル! あんま飛ばしすぎるなよ!」

かなり前衛へ出ているスカルに、遊撃していたモナが回復魔法で援護する。

その間に私は、パンサーが相手取っていた鬼を背後から斬り倒し、Charaを召喚してフォックスの相手も同時に倒す。これで残るは有象無象の雑兵どもと、クイーンと絶賛戦闘中の真つ黒な鬼のみ。ここまで数が減れば、後はどうにでもなる。

残りのシャドウをみんなに任せて、私はオタカラの隠されている金庫へと走り出す。それを阻止しようと、クイーンと対峙していた黒鬼が立ちはだかつた瞬間、その右頬にヨハンナのホイールがめり込んだ。

動揺により生じる隙、怪盗団はそれを見過ごさない。

よろけたシャドウの身体を上り首筋を搔つ切る。当然一刀で消滅である。

『敵増援、無し！今のうちに金庫を！』

残りの雑魚も掃除し終わったようで、ナビから全滅の報告が上がる。

とはいえ、ジョーカーが今一人でカネシロを食い止めている状況。あまり悠長にはしてられない。金庫の大きさはちょうど、私の知っている「ブタ型機動兵器」と同じぐらいの大きさ。

「……ふう」

いかにも嚴重そうな扉の前に立ち小さく息を吐く。

「どうする気？わたしの正拳突きでも壊せなかったわよ？」

「……そりゃ拳じゃ開かないでしょ」

「あなただって、そのナイフ一本でどうする気？」

「まあ見てろって、クイーン」

何故か得意げにしているスカルと不思議そうな目のクイーンに見守られながら、私は

自分の目の前へと意識を集中する。

…。

もう一人の自分を心の内に呼び出して、両手に持ったナイフを金庫へとまっすぐ振り下ろす。尋常ならば当然刃など通さないはずの鋼鉄に、すんなりとナイフは入り込んでいく。

「え」

ナイフを中心に広がったヒビはやがて全体に行きわたり、指で軽く小突くだけで立派だった金庫は粉々に崩れさった。

瓦礫の真ん中には案の定、超巨大な金の延べ棒があらわになっている。また私はカネシロの恨みを買うかもしれない。

『キ、キサマ…!!オ、オレ…オレノ…!!』

振り向くと、すぐそこまでたどり着きかけていたカネシロが力なく崩れ落ちていくところだった。あと少しの所で間に合わなかったらしい。

カネシロ本人にとっての核と言えるオタカラを守る殻が壊れたことで、シャドウの力も急速にしぼんでいくのがわかる。

「観念するのね。カネシロ」

うつぶせに倒れるカネシロに銃口を向けながらクイーンがにじり寄る。起き上がる

気配を見せずに寝転がっているだけのカネシロからは、もはや戦う意志は感じられない。ただずつとうわごとのように、独り言をつぶやいているだけ。

『オレダツテヒガイシヤダツタンダ…。サンザン…ヤラレテ…ヨウヤクハイアガツテ…』

どんな事情があろうと、カネシロの所業は罪のない人々から理不尽に幸福を奪い取り、人生までも食い物にする最低な行為だった。同情の余地などない。

「待って」

だから、これは情けなんかじゃない。

私の制止でみんなが包囲を狭める足を止める、

詐欺という狡猾な手段でこれまで生き延びてきた男だ。このまま、諦めて終わるわけがない。そう思いついた瞬間、気付いたころには体が浮いていた。

浮遊感というよりは、無理やりに強い力で動かされている感覚。似た経験をよくしていた私は本能的に受け身をとることに成功したが、他の皆はそうはいかなかつたらしい。

実に面倒だ。何を勘違いしているのか知らないが、どうやらカネシロはまだ自分が勝てる可能性があると思じ切ってしまったている。こういう奴の相手は全く持つて面倒で、手間がかかる。完膚なきまでに叩き伏せられるまで、その考えが間違いだと気づかな

い。

『オレダツテ、サンザン、ヤラレテ、キタンダ。ヨウヤク、オレガ、シヨウシャニ、ナルバン…』

『み、みんな構えろ！ヤバいのが来る！』

『ジャマスルヤツハミンナキエロ！キエロオオオ!!』

カネシロの持つ錫杖に光が集まっていく。黙つて見ている理由は無い…！

「ペルソナ！」

力を溜めているカネシロの傍にCharaを召喚。カネシロは咄嗟に錫杖を向けて、中途半端な威力のレーザーをCharaに向けて発射した。

当然そんなものは回避したうえで、錫杖を持つ腕を一振り切り落とす。

落ちた腕の断面からは血では無く大量の黒いモヤのようなものがあふれ出す。

それらは意思を持っているかのように宙を漂い続ける。あれがなんなのかは分からないが、目に見える脅威が取り除けた今、距離を詰めるには今が好機。

「援護してジョーカー！」

Charaを呼び戻し、ジョーカーの返事を待たずに私は駆けだした。

今カネシロの注意は完全に私に向いている。他の皆が接近戦に加わるのには時間がかかるだろうから、ここから先は私の独壇場。

力は使わず、完璧に勝つ。

全速力で走りより、間合いに入る寸前にスライディングでカネシロの股下を潜り抜ける。

その反動を手で殺し、床を蹴って斜めに飛びながら、振り返るカネシロの顔にナイフを突き刺し、そして引き抜く。

傷口からはまたしても黒いモヤのようなものが漏れ出てきたが、至近距離で見ればそれが小さな蠅の大群であることに気付く。

「デカラビアー！」

私の身体にまとわりつこうとするそれを、横から割って入った熱い焔が焼き払った。ジョーカーのペルソナによる火炎魔法だ。

その炎によって私とカネシロは、互いに一瞬だけ相手の姿を見失った。

この姿のカネシロは、察するにあまり動きが速い方では無い。こういう時にとる行動はたいてい、守りの一手。

私の相手をするなら、防御は最大の悪手。

炎を突き破り相手の意表を突く。案の定カネシロはバリアを張って待ち構えていた。

透明な壁越しに目が合う。

ニヤリと笑う、私の目と。

ナイフの切っ先は容易くバリアを破り、そしてカネシロの目を貫いた。痛みを感じているのかは定かではないけれど、醜い悲鳴を上げながら必死に暴れまわり、四方に凶悪な威力の魔法をまき散らしてくる。

またしてもあふれ出す蠅の群れは、すかさずジョーカーによって焼き落され、そうこうしているうちに他の仲間たちも態勢を立て直していた。

ふと、手元のナイフを見てみる。刃の色は、変わらず鈍い銀色の光を放っているだけだ。もつとも、今「力」を使っていれば、最初の一撃目で倒していたはずだからね。

『ミエナイ……ナニモ、ミエナイ……』

嘆き続けているが、その間も錫杖を振り回して高位の魔法を当てずっぽうに飛ばし続けている。その軌道に注意しながら、一定の距離を保ってカネシロの前に立つ。

「全員気を抜くな！向こうはまだやる気みたいだ」

ジョーカーからの檄が飛び、全員無言でうなづく。

『カワツタンダ……オレハ……!!』

カネシロの周囲に無数の魔法陣が展開される。すかさず全員で攻撃を叩き込み体勢を崩すと、チャンスとみたジョーカーの指示で一斉に距離を詰める。

私もそれに倣ったが、もう少しで間合いに入るところで、カネシロから発せられる妙な威圧感に足を止めた。

他の皆も同じように足を止めていた。何か本能に警鐘を鳴らす嫌な空気を感じ取ったんだろう。

一瞬の躊躇の隙、慟哭とともに地面に突き立てられたカネシロの錫杖を中心に、フロアの床全体に闇が広がる。

ここにはまらずい。そう頭では理解しつつ、回避する術がないことも察知する。

「ジョーカーつアルサーヌを！」

ジョーカーに一番近い位置に居た私。アルサーヌを召喚するよう叫んだところで、時間切れの合図。足元に広がる闇から、大量の蠅が飛び出してきた。

さつきまでカネシロの身体から出てきていた奴とは違う、もつと巨大で橙色の光を放つ文字通り異色の蠅。

視界は覆われ耳障りな羽音が聴覚も遮ってくる。でも、それだけじゃない。まとわりつかれている間は、まるで自分の寿命をそのまま抜き取られているような気味悪さが襲ってくる。

…いや、ようなじゃなくて、実際にそうなのかも。

全身から力が抜けていき、次第に体は崩れ落ちて、意識も底に落ちていく。

何故か他人事のように思えた私は無意識的に仮面に手をやっていった。

何かを考えていたわけでも、思いついたわけでもない。ただそこに仮面をとったとい

う事実があるだけ。

ただ、このままではみんなが危ないという意識があっただけ。

頭の中に聞き覚えのある声が響いて…それから…真っ白な光が辺りを覆いつくした。自分でもなにをしたのか分からない。ひとつだけ確かなことは、私はみんなを守ろうと
したってことだけ。

.....

・ ・ ・ ・ ・

あと 1体 のこっている。

閑散とした川辺をひたすら歩く。もともと賑わっている場所では無かったが、それでもむかしはこの住人のことはちらほらとみかけたものだ。今では一つとして、動く影は無い。

物陰からかすかに音がした。

頬が緩むのを感じながら、音のした方へ向かう。すると、そこには恐怖の色で染まつた目をわたしに向ける、哀れな怪物の姿があった。

「みつけた」

ようやくみつけた獲物を逃がすまいと、意気揚々に武器を振りかざす。

わたしの手の中で、あっけなくまた一つの命が散った。

しんだ。わたしが殺した。また、※※※が上がった。

もうここに用はない。

最後のボスを、仕留めにいこう。

それがすんだら、またころさないと。

たのしみだな。

どんなはんのう、するんだろう。

・ ・ ・ ・ ・

わたしは……

「……妻木さんっ。聞こえる？」

「クイーン……」

……どうやら気を失っていたらしい私の傍らにいたのは、仮面を上げたクイーンだった。いきなりコードネームそっちのけで私の名前を呼ぶと、いきなり口元に何かを押し付けてきた。

「薬よ。ジョーカーから貰ったから、大丈夫だと思うけど……」

武見のとこの薬だろうか……。まあ品質的には問題無いんだろうけど、今の私に効果があるのかは疑問だ。

「あなたが目を覚ましたのも同じとこの薬のおかげよ。ほら、早く飲んで」

「んぐ……」

寝転がったまま、ナントカカントカとかいう怪しげな薬を飲まされてしばらくすると、大分意識ははつきりしてきたように思う。正直効き目がありすぎて心象的には気味が悪い。

回復した私は今いる場所を見渡してみた。どうやらまだカネシロパレスの中のように、ここはそのセーフルームらしい。

聞けば皆は無事らしく、あの攻撃の影響で倒れた私をクイーンがここまで運んできてくれたんだとか。

「ごめん。手間かけたね」

「謝らないで。むしろ、あなたのおかげでわたし達は助かったんだから」

「どういうこと?」

「覚えてないの? あなたのペルソナがあの蠅を一身に引き受けてくれたのよ。そのおかげで他の皆は無事だったけど、あなたに全部の負担が行っちゃったみたいね」

「…そう。覚えてないな」

「それでもいいわ。事実だもの。それより、もう大丈夫そう?」

「うん。私はもう大丈夫」

「じゃあ戻るわよ。まだみんな戦ってる」

手甲をはめ直しながら、クイーンが挑戦的に笑う。言う通り、まだみんなが戦ってる

ならこうしている場合ではない。早く駆け付けなければ。

「行くわよ。乗って！」

言われるがまま、セーフルームを出てヨハンナに跨るクイーンの後ろに乗る。

「これって交通法的には違反だよな？」

「ヘルメットを着けてない時点でね」

クイーンに掴まるや否やなんの前触れもなく急発進しだしたヨハンナ。初速なんて概念はこのペルソナには無いのか。

「速度的にも違反だよなこれ」

「既に違反してるんだから今更気にしても同じよ！」

警官志望の言うことじゃない…。

つつ込む暇もなく最高速度で最深部までの直線を駆け抜けるクイーン。あつという間に戦線に復帰した私は、カネシロの目の前で急旋回したヨハンナの勢いを利用して跳躍。すれ違いざまにナイフで斬りつけ、着地の勢いを足で止める。

「リーサル！」

「ごめん。お待たせ」

私の一撃を受け膝をつくカネシロの周りを、ヨハンナに乗ったクイーンがぐるりと一周し、核熱の焔が取り囲む。

クイーンは逃げ場を失ったカネシロの頭上に跳び、核熱を纏った拳を引く。

直撃必至のその一撃は真つ直ぐカネシロの脳天にぶちかまされ、世界がまるごと揺れたかのような大きな地響きが起きる。

『目標ダウン！今がチャンスだ!!』

「総攻撃っ!!」

「了解!!」

倒れたカネシロにここぞとばかりに総攻撃を叩き込む。ここまで人数が増えてなお、この動きだけは一糸も乱れず、洗練され切っている。

相手を全方位から叩き反撃の隙も与えない高速の連撃。全員で力を合わせるからこそ、この芸当は成立する。

しかし相手は得体の知れない力を持つシャドウ。最後の抵抗か、何かの魔法を唱え始めた。

『させるかっ!』

その瞬間カネシロの周囲に緑色のノイズが走る。ナビのハック能力によって一瞬だが動きが止められ…。

「これで、終わりよっ!!」

そのどでっ腹に、クイーンの正拳が突き刺さった。

まるでマンガみたいな吹っ飛び方をしたカネシロは壁に叩きつけられ、全身から大量の蠅を溢れさせながら力なくその場に倒れ込んだ。

大量の蠅は一か所に集まり、一つの大きな人影のような形になって、私が落ちてきた穴から出ていった。

「…やったか？」

『フォックス、それフラグな。一応、もうあいつからは力の反応は無いぞ』

ナビの声に従い、カネシロに歩み寄る。いつの間にか姿は元に戻っており、壁にもたれかかったままうなだれる彼からは、さっきまでの威圧感は消え失せていた。

「なんだよ…クソ…。結局俺は…変わってなんか、なかったんだな…」

「…」

力なく自嘲するカネシロに、ジョーカーが歩み寄る。

「観念したか？」

「…ああ。もう懲りたよ。これだけやって敵わねえなら、もうどうしようもねえ。現実に戻って、改心するさ…」

あれだけの抵抗を見せた割にあっさりと負けを認めたカネシロ。こいつが改心するというのなら、それはそれでいい。でも、私にはコイツに聞いておくべきことがある。

「最後に一つだけ聞かせて。あの気色悪い触手のこと、何か知ってるの？」

「…俺にも分からねえ。ただ、アイツに身を任せれば力が強まっていくのが分かった。だんだん自分の意識が薄れていくのも構わずに、俺は負けたくない一心でアレに身体を明け渡した。…それだけだ」

…結局、カネシロもあれについては何も知らないってことか。私たちに改心されまいと力を求めているカネシロには、あいつの正体なんて些細な疑問だったのかもしれない。

このパレスもなにもかも、所詮はカネシロ自身の力や才能が微塵も影響していないことがはつきりわかる哀れな結果となった。とはいえ当初の目的は達し、カネシロのシャドウは改心して現実へと消えていった。

そしてお約束通りパレスの崩壊が始まり、私たちは急いでむき出しのままだった巨大な金の延べ棒を車に詰め込んで、急いでパレスを後にした。

.....

夜……

色々あつてクタクタになりながら帰還した私たちは、持ち帰ったオタカラであるアタツシユの中身がおもちやの札束であつたことに落胆し、早めに解散という流れになつた。

私とモルガナと雨宮はそのまま部屋で休憩していたけど、気付けば一眠りしていたよ
うで時刻は夜の十時を指していた。

「いたた……」

ソファに座つたまま寝落ちていた私は、痛む首をさすりつつ階下へ。既にルブランは
閉店作業を済ませていて、惣治郎がいつものようにテーブルの掃除をしていた。

「よお。お目覚めか」

「……おはよう」

「全然早くねえけどな」

「コーヒー」

「は、いよ」

絶対却下されると思ったが、案外言ってみるもんだった。

カウンターに座りうつらうつらとしてみると、次第に漂ってきたコーヒーの香りが目
が覚めてくる。

「こんな時間に起きたら夜寝られないぞ」

「昼間に寝るから大丈夫」

「授業は受けるよ……」

目の前に置かれたカップを手に取り、コーヒーを啜る。

「ねえ惣治郎」

「なんだ」

「当分帰る気は無い。これは私の気持ちの問題だから、そのうちは」

「分かっているよ。好きさだけで休憩していい」

全てを言い終わらないうちに遮られてしまったけど、きつと惣治郎には私の気持ちは
伝わってる。こんな聖人も世の中にはまだ残ってるんだな。

「…ありがとう」

「ただし、今まで以上に店の手伝いはしてもらおうからな。ちなみに前のカレーとコー
ヒーは及第点ってところだな」

「厳しいね」

「まだまだ精進しろってことだ」

多くを語らない惣治郎のやさしさに感謝しつつ、私はほんのひと時心を休ませることができていた。

しばらく無言の時間を過ごしていると、階段が軋む音がした。雨宮も起きてきたようで、眠そうな目をこすりながらいつも以上に髪の毛をあちこちに跳ねさせている。

「ふっ」

「笑うな」

「お前もいるか?」

雨宮は頷き、私の隣に座る。

「明日も学校だろ。これ飲んだら早く寝ろよ」

そう言つて雨宮の分のコーヒーを淹れた惣治郎は帰り支度を始める。

やっぱり私たちが今日帰ってくるなり爆睡してた件についてはなにも触れなかった。本当はなにか勘づいているんだろうけど。

扉が閉じられ、ここにはまた二人きりとなる。

「雨宮」

「なんだ」

「おつかれ」

「ああ」

「私が来るまでは一人でカネシロとやってたんでしょ？よく粘ったね」

目を合わせず、互いにカップを除きながらぼつぼつと言葉を交わす。こうしている間はいつともよりずっと時間の流れが遅く感じる。

「…正直予想外の強さだったし、かなりギリギリだった。オタカラを守る金庫がなくなってもあの強さだったからな」

「うん。私としても予想外だったよ。全部、あの正体不明の奴のせいだろうけど」

「でも、あの時妻木さんが守ってくれたおかげで、なんとか勝てた」

「よく覚えてないんだけどね、それ。なんとなく、呪殺の類だったことは察したから、ジョーカーにはアルサーヌを出せて伝えたけど…」

「でもその後、妻木さんがペルソナを出して俺たちを守ってくれたんだ。姿はよく見えなかったけど、いつものペルソナじゃなかった気がする」

「…ふうん」

「なににせよ、やっぱり怪盗団には妻木さんが必要だったことがわかった。ありがとう」

「…」

雨宮は、私がいるからみんなを守れているのだと思ってくれているらしい。

…多分、真実はそうじゃない。私が居るからこんなイレギュラーが起きて、みんなを余計に危険な目に遭わせているんだ。だったら、多少の無茶はして然るべき。今日のこ
とだって、して当然のこと。

「妻木さんに頼らずに済むように、強くなりたいとな…」

私の想いとは裏腹なその決意は、静かな店内でより澄んで聞こえた気がした。

でも、本当に強くならないといけないのは、私の方だ。

私の決意は胸に秘めたまま、凄絶な戦いの夜はゆつくりと更けていった。

愚者

7月7日 木曜日

金城が改心したこの日、私はメメントスで明智に呼び出されていた。用件はもちろんこれからの怪盗団の扱いに関して。

「今回は随分と派手にやったね。この件で怪盗団の名はまた大きくなっただろう。…君のおかげなのかな？」

「さあ…まあ多少は楽しめたけど」

今日のニュースは金城の自首騒ぎで持ち切りだった。改心はまたしても問題なく成功して、大々的に予告状をばらまいた成果もあって一躍時の人といった流れだ。

金城との戦いから日を空けしばらくはメメントスでの活動を主としていた怪盗団。アンチ怪盗団側である明智はメディアでの対応が面倒くさいと愚痴りながらも、その表情は満足げだった。

怪盗人気が高まるのは明智にとって好都合なこと。名を売らせた後に、どん底に叩き落して自分たちの株を上げられるから。

「ところで、もう次のターゲットの目星とかはあるのかい？」

「無いよ。今日金城の件が終わったばっかりだし」

「まあ、だよな。そう思つて近いうち、こちらから怪盗団に向けて新たな標的を提供する予定なんだけど……」

明智の言う標的とは、おそらくは「メジエド」のことだろう。双葉が以前名乗つていたハッカー界での義賊としての名だ。おそらくはその名前を騙つて、素人の集まりである怪盗団相手にデジタル戦をしかける寸法だ。

この勝負は負けても勝つても明智側にとつてメリツトしかない出来レースだ。それを知りつつ、私はこいつの提案に一度乗つかつてやるしかない。

「この程度で負けるようなら、怪盗団にはそれほどの利用価値しかないつてことで。彼らが上手くやれるように手回しておいてくれ」

「……分かつた」

「それと、怪盗団のリーダーについてだけど」

仮面越しに見える明智の目から、感情が消えたのがわかる。意図的なものかは分からないけれど。

「彼には手を出さないでくれ」

「どういう意味？」

「あの男だけは、僕が直接殺したい。腹立たしいことに、彼はこの僕と肩を並べられるポ

テンシヤルを秘めているように思う。それでいて、あんな最低な生活を強いられているのにも関わらず、腐らない精神力：厄介極まりないよ」

「嫌いなんだね。あいつのこと。お好きにどうぞ」

「嫌いなんでもんじやないよ」

明智はそう憎々し気に吐き捨てた後で、予想だにしていなかった提案を私に持ちかけた。

「と言う訳で、これからストレス発散も兼ねて適当にシャドウを狩って回ろうと思うんだけど、一緒にどうだい」

「なんで？」

思わず純粹に聞き返してしまっただけど、明智に言わせれば、一応協力関係にある以上一定の信頼関係は築いておきたいとのこと。当たり障りのない物言いだが、ようは私の力を探っておきたいんだろう。

別に他の用事も無かった私は少しだけならと承諾し、明智の後をついていく形でメントスの深部へと潜っていく。

階層を隔てる壁は明智が前に立つとすんなりと開いた。そうしてたどり着いたのは、最深部の一步手前。深い暗闇に包まれた危険地帯。言葉少なにシャドウへと突っ込んでいく明智に続く形で片端から薙ぎ倒していく。

もつとマツドな感じで潰していくのを想像していたから、なんとなく拍子抜けである。

「物足りないって顔してるね」

明智は自分のペルソナ：「ロキ」を背後に顕現させたまま、倒れたシャドウから武器を抜き取ってこちらに振り返る。

凜猛な目が私の視線を捉え、これから告げられる言葉を何となく察した。

「どうかな。一度僕と手合わせでも」

「めんどくさい」

「はは…そういうと思ったよ」

纏うオーラがウソかの様な柔らかい笑みを浮かべたかと思うと、突如として明智の服装が真っ白な「オモテ」の装束へと変わる。

気配の変化を感じ取った私は反射的に回避行動をとった。それが吉と出て、明智のもつもう一体のペルソナ：「ロビンフッド」の光の矢は私の背後の壁に突き刺さった。

それにつつ込む暇も無く、再び現れたロキの呪怨魔法と万能魔法が連続して放たれる。

「初めて見た時から気になってたんだ。君のその力の本質が」

「…君には関係ないよ」

「純粹な知的好奇心だよ。間近で君の力を見てみたい」

そういう明智の声に嘘の色は無かった。本当に彼の言う通り、ただのちよつとした好奇心でこんな申し出をしているんだろう。殺さない程度に手加減すればいいと思ってるんだろうけど、実際はそんな簡単な話じゃない。

そう説いても分かってくれそうにはないので、少しだけ明智の遊びに付き合つてやることにした。

目をつぶつて、心の中にもう一人の自分を呼び覚ます。

元々深い闇闇の中だったメメントスが、完全な闇に染まる。

この世界に私と明智の二人しかいないような錯覚に陥る。

「…いいね。そうこなくちや」

…今だけだ。明智にこれ以上余計な気を起こさせないために、今だけは“演技”でこの力を使う。

今にして思えば、あの明智がゲームの中で見せた真の力、あれも私の力に似ているよな気がする。

強すぎる歪んだ意思の力…それが明智にとつても、他者から与えられたものであることも、よく似ている。

そんなことを思いながら、一步踏み出す。

ロキの容赦ない攻撃を避けながら明智に接近、間合いに入った瞬間にナイフを何度か振ってみるが、さすがはこれまで一人で戦ってきただけはあつて簡単にいなしてきた。どこまでの手加減が必要なのか計るため、こちらも段階的に力を見極めさせてもらう。少しづつ互いの攻撃が苛烈になっていき、取り巻く時間の速さまで変わっているような気になる。

「そんなものかいっ？本気で掛かってきてくれないと痛い目見るよ」

「…そんなにいうなら」

明智だつて、まだ本気は出していないだろうに。

君の本質は、私にはわかっているんだから。

今度は決意を籠めた一撃を放つ。今までの攻撃とは一線を画す速度で放ったそれを、明智は回避しきれずサーベルで受け止めようとした。しかしそれでは、私の刃は止まらない。一撃目で武器を破壊し、足を掬って転倒させる。

そして全力を籠めた一撃を、明智の顔すれすれに振り下ろす。

「――」

「…満足した？」

「…はは。これは、想像以上だな」

仮面の奥で冷や汗を流していた明智の、私に似た色の瞳には…忌々しいほど目をきら

めかせる私の大嫌いな顔が映っていた。

目を逸らし立ち上がると、使い物にならなくなった得物を捨てて明智が言った。

「満足したよ。これではつきり、君が既に壊れた人間であることが解った。…俺とおなじように」

「…同づゑ」

「君は普通に生きること諦めているし、生きる意味も失っている…違うかい？」

見透かしたような素振りで言い放されたが、実際その通りであるから否定もしなかった。確かにそういう意味でも、私と明智は似ているといえるのかもしれない。

明智は、ただ復讐のためだけに今を生きている。自分を捨てた父親への報復…それだけの動機で、今の明智のすべてが構成されている。決して未来を見ちやいない。

「妻木さん、君は俺からの仕事が終わったとき、どうするつもりなんだ？」

「どうもしないよ。役目を終えたら私は居なくなるだけ」

「いなくなる？」

「文字通りね」

「…君、よく言葉足らずだって言われなにかい？」

言われるが、私に反省する気は無い。

「そういうところは、君は彼とも似ているよね。君も、*“僕”*に無いものを持つてる」

「…」

「彼…雨宮君とは、仲がいいのかな？よければ彼のことを色々教えてほしいなってるんだけど」

「なんのために？」

私がそう聞き返すと、明智は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「彼という存在が僕にとつて未知数な存在だからだよ。互いに無視できない立場にある以上、情報は多い方がいい。この間ルブランで待ち伏せていたのもそのためさ」

苦渋の表情を浮かべているあたり、明智も雨宮の特別性については認めたくはない事実なんだろう。それだけ警戒しているということでもあり、それは明智というエリートが雨宮に一目置いてしまっているということにもなる。

私としては明智と時間を過ごすことは非常に有意なことなので断りはしない。できるだけ、この男とは信頼関係を築いておかなければならない。

．．．
と言う訳で現実に戻ってくるなり、私は明智に連れられて吉祥寺のとあるジャズクラブへとやってきていた。落ち着いた照明に音楽、広すぎない店内…いかにも明智が好き

そんな店だ。…そう思うのと同時に、雨宮も気に入らなそうだなと思ってしまう。

こういう店に来るのは初めてだけど、なんとなく懐かしさを感じさせる。内装の影響だろうか？

「悪くない雰囲気だろうか？」

「よく来るの？」

「たまにね。こういう場所は考えを整理するのにうってつけだから」

「ふうん…」

ふと視線を落とすと、テーブルに置かれたノンアルコールカクテルが目に入る。ベリー類がメインのカクテルらしく、とてもきれいな赤が目鮮やかだった。

一口飲んでみたけれど、一瞬でただのジュースとは訳が違いと分かった。ルブランでもやってみたらどうだろう…カクテル。

なんとなくカクテルを作っている惣治郎を想像してしまい心の中でやけていると、舞台上で演奏している奏者の入れ替わりが始まった。ボーカルは男性から女性へ。曲調はよりゆっくりとした調べに。

「雨宮もこういう店は好きだろうね。最近はよく夜の新宿にも繰り出したりしてるし」

「…奇遇だね。僕も同じことを思った。今度は彼も誘って三人で来てみようか？」

それは勘弁してほしい。二人の間に板挟みになっては、せつかくの落ち着いた雰

困気も台無しというものである。

「冗談はさておき、せっかくだから互いの話でもしようか」

「先にどうぞ」

「あ、そういう感じか……。なにか質問してくれば僕としても話しやすいんだけど」

質問とは言うが、私は明智吾郎という人間の生い立ちはある程度知ってしまったている。とはいえここでその話をしないのも変なので、明智の身の上話でもさせてみることにした。

「構わないけど、あまり楽しい話ではないよ?」

「知ってる。君がなんで『そう』なったのかを知りたいだけ」

「うん。大前提として、僕は『産まれることを誰からも望まれてなかった』。父親と、その愛人との間にできた子だね。当然父親は姿を消したし、母親は幼いころに病気で亡くなった。基本的に一人だったのさ、僕は」

「母親が亡くなった後は?」

「親戚間を転々とする日々さ。そんな毎日を送っていく中で、僕の中である反骨心が芽生えたんだ。どん底から這い上がって、僕と母さんの人生を無茶苦茶にした父を、見返してやりたい…。その思いだけで、ここまで来た」

ここまでなら、純粋な努力話として聞けたのだけど、この話はこれじゃ終わらない。

実父を見返すとは言っているものの、その実やろうとしていることはむしろ復讐と呼ん
だほうがしっくりくるもの。

廃人化や精神暴走事件の実行犯は確かに明智だけど、その裏で指示を出している黒幕
こそがその実父。

明智は正体を隠してその黒幕に迫り、協力するふりをしながらその時を今か今かと待
ち望んでいる。怪盗団との対決も、明智にとってはまだ自らの目的に近づくための手段
に過ぎない。

「もちろん簡単じゃなかったけど、でもここまでやってこれた。たった一人で。だから
必ず、僕は成功して見せる。何を犠牲にしてもね」

「…」

「…なんてね。半分ぐらいは冗談みたいなものだよ」

半分は本気と。

「じゃ、次は君の番だ。正直僕も興味があるんだ」

「興味って?」

「もちろん君の意志の源についてだよ」

遠回しな言い方だけど、ようするに私の認知世界での力の出所を明智は知りたいた
ろう。純粹な疑問であると同時に、排除対象になり得るかも知れない以上知っておかな

ければならないという面もあるのか。

仕方がないので適当に、私も自分自身の生い立ちのようなものについて軽く話すことにした。といつても、大方は明智の方で勝手に調べられていたみたいだったから、パアの癖のことなんかも真顔でさりりと受け流していた。

「そうか。妻木さんは僕と違つて、両親からの愛情は受けていたんだね。でもだったらどうして、この僕よりもあんなに強い憎しみを抱けるんだい？」

「…憎しみとは呼ばないよ。あれは」

たしかに似た感情ではあるけれど、それよりもつとふさわしい呼び方がある。

「私のあの力はね、『決意』の力なんだよ。なにかを始めるための力であると同時に、終わらせるための力」

「…なるほど。決意か。なんとなく腑に落ちたよ僕が目的を果たしたいと思つているように、君にもなにか大きな目標があるってことだね」

私は頷き、そしてそれ以上は語らずにおいた。

雨宮と同等に、明智吾郎という男も頼りになる反面危険な人物でもあると認識している。私のいるこの世界においては、よりその危険性は高まるだろう。

与えられた立場こそ違うが、明智も雨宮と同じ素質と力を持つているのだから。余計な情報は与えず刺激は最小限にしなければ。

「うん。妻木さん、やつぱり君も面白い人だ。だんだん興味が湧いてきたよ」

まったくもって嬉しくはない。嬉しくはないが、私に関心を示してくれているのは良い傾向だ。計画通りといつていい。

「君、演技力も中々だよ。僕もそれなりに自信あるつもりだけど、未だに君の本心がどれか分からない」

「分からなくて結構」

「『仕事』を楽しんでいる風にも見えれば、ごく普通の高校生の様にも見える。生きることに執着なんてなさそうに見えるのに、君の心には強い決意がある」

「…」

明智はこれまでに見せたことがない、心底楽しそうな笑みを浮かべてテーブルに両肘をつき、次々と脈絡のない質問を私に投げかけてきた。一見他愛のない会話の一部のようだったけれど、これは一種の尋問のようなものだろう。

結局これによって明智の中で私の印象がどう定まったのかは分からなかったが、なんだか満足していそうな雰囲気だったので、その日は良しとしておくことにした。

7月8日 金曜日

放課後、何故かいきなり雨宮と坂本の二人に誘われてしまった私は、特に用もないのに渋谷某所にあるスポーツジムに来ていた。

来たといっても私はランニングマシンでひたすら走っている二人を眺めているだけなんだけれども。

「お前は走んねーのかっ?」

「着替え無いし」

「んなもん受付で借りられるぞっ」

「面倒くさい」

「最初からそっちが本音だっただろっ!」

半分正解だけど、今朝通学中に急に誘われたから着替えがないのも事実。流石に制服のまま全力でトレーニングする気にはなれない。そして受付で借りてまでという気にもならない。

渋っている私に、坂本はこのトレーニングの後ラーメン屋に行くと言ってくれた。：なるほど、確かにひと汗かいた後のそれは悪魔的な誘惑の強さではある。

少し迷って、結局私も受付でウェアを借りて一緒に走ることにした。待っている間も暇だし。

更衣室で通気性の良いさらさらとした感触のウェアに着替えてきた私は、坂本の隣のマシンを起動して、まずは遅めのペースでランニングを開始した。

「妻木って、普段トレーニングとかしてんの？」

「よくそのペースで走りながら喋れるね。トレーニングとかは、今はしてない」

「昔はやってたのか？」

「こんな感じでは無いけど、多少は」

「ま、当たり前だよな。なんもやってない奴が向こうでいきなりあんなに動けるわけねえ」

坂本はかなりのハイペースで走り続けながらも、息を切らすことなく、それでいて私とんでもないかのように雑談を交わしている。元とはいえ陸上部。走る時のフォー

ムやらなにやは、体に染みついているんだろう。

「ちなみに、一番先にリタイアしたやつがラーメン奢りな！妻木はちよつとタイムラグあつたから、マイナス10分！」

「なにそれ聞いてない」

「言つてなかつたからな！」

初耳も初耳なそのセリフを聞いて思わずふざけるなど言いそうになつたが、よくよく考えればこの中で最下位になる可能性はゼロのような気がしたので、気を取り直して走り続ける。

はじめは饒舌に話をしていた坂本も徐々に口数が減つていった。雨宮ははじめから大して喋つていなかったが、涼しい顔をしたまま姿勢を崩さずに黙々と走り続けている。

「蓮…お前見かけによらず体力あんな…！」

「…竜司こそ。本当に陸上引退してたのか？」

「へっ。まあこれぐらいは毎日やってたかな」

正直私も、この中だと一番先に脱落するのは雨宮かと踏んでいたのだけど、意外にも勝負は拮抗していて勝負は長引きそう。

夢中になって走り続けているうちにか一時間ほどは経過していた。マシ

ンの速度は三人とも同じでかなりのハイペース。駅伝にでも出れるんじゃないかと余計な考えが混じり始めた頃、坂本の提案で走りながらしりとりをすることに。

少しでも答えに詰まったらそいつの負けとルールを定めて、あっさり二巡目で坂本がキリンと答えたことにより唐突に勝負はお開きとなった。

さわやかな笑いが起き、ゆっくりとマシンも速度を落としていく。

やがて足を止めた私たちは、それぞれシャワールームへと別れていき、着替えを済ませた状態でジムの外で落ち合った。

「リ्यूージは相変わらずだなー！自分で仕掛けた勝負で負けるなよ」

「しよーがねーだろ走るのに集中してたんだしよー！しかも二人ともまだまだいけそうなの霧囲気出てたし、あのまま走ってたらラーメン食う時間なくなるっつーの！」

まるでわざと負けてやったとでも言いたげな坂本を、私と雨宮とモルガナの三人で冷たくあしらひながら駅へと急ぐ。

坂本の案内の元たどり着いた件のラーメン屋に入った私の感想は、“狭い”のただ一言に尽きた。

店主の立つ厨房、そしてそれに向かい合う形のカウンターに並ぶ席。ざっと八席程度のスペースしかないうえに、後ろの壁もやたらと近い。

「せま」

「ばっかそれがいいんだろー？ 店長、しょうゆチャーシュー三つ！」

どうやら店長一人で切り盛りしているようで、坂本とは顔なじみらしい。頼んでもいないのに私たちの分も注文を済ませられ、そのままちよこんと席に座る。走った後はしょうゆチャーシュー以外ありえない：そう坂本の目が訴えていた。

いかにもな見た目をした店長は慣れた手つきで麺を茹で、たれとスープを合わせたどんぶりに盛り付ける。結果、数分と経たぬうちに出来立てのラーメンが人数分私たちの前に並んでいた。：早すぎる。これがプロか。

「きたきた……いっただつきまーす！」

我先にとかぶりつく坂本を尻目に、私と雨宮も手を合わせて麺を啜り始める。

「なあ、ワガハイのは……」

あるわけない。足元のカバンから顔を覗かせるモルガナに目で伝えると、悲し気に眉を提げて引つ込んでしまった。こればかりはしようがない。

「なあ、二人に聞きたいことあんだけど」

「どうした改まって」

「いや、たまにはこういうのもいいかなってさ。お前らってさ……ぶっちゃけ付き合ってるの?」

「…なにかと思えばそんな話か」

箸を片手に振り返る兩宮と目を合わせる。

「俺とお前らの仲だろ?そろそろ白状してくれてもいいんじゃないやね?」

「色々な事情が重なってたまたま同じ場所で生活してるだけだ。それ以上でも以下でもない」

「いや俺は騙されないぞ。一か月以上同じ部屋で男女が過ごして、何も起きねえはずがねえ」

残りのラーメンのポリウムから逆算しコショウの投入タイミングを予先はいつの間にか私に向けられていた。

「だって俺はしよっちゆうレンレンから聞いているぞ!朝起きたら同じベッドの上にいるとかザラだって!」

「その言い方だと語弊だらけだよ。しよっちゆう寝起きドツキリを仕掛けられてる、が正しいね」

「ふざけんなそんな羨ましいドツキリがあつてたまるか!」

「羨ましい…?」

坂本の叫びに、雨宮は眉をひそめた。私がこれまで雨宮にしかけたいたずらの数々を思い出しているのだろう。朝起きたらナイフを振りかぶった黒ずくめが自分に馬乗りになっていた光景は、今でも雨宮のトラウマとして深く刻まれているようで、私は悦に入っていた。

「竜司、なんなら一日変わってやってもいいが?」

「え?」

「寝ぼけた頭のままで妻木さんのナイフを避けれる自身があるなら、な」

「…ドウイウコト?」

寝首をかかれないよう稽古をつけてやっているわけだが、雨宮も中々に狡猾であらゆる手を使って私のいたずらを妨害しようとしてくる。一見して見た目では分からないようになってきているが、実はルブランの屋根裏部屋は少し前から私と雨宮にとって寝室以外の機能も發揮している。

雨宮が坂本にこれまでに吹っ掛けられたいたずらの数々を説明してやっているうちに、私は黙々とラーメンを食べ進めた。

脂身の多いバラのチャーシューは後で二人のどちらかにあげるとして、モモの部分は充分に味わわせていただいた。老舗の味とはこういうものをいうんだろうな。

「(´)ちそうさま」

「あいよ！美味かったか？嬢ちゃん」

「とても。また来ます」

「そりや嬉しいねえ」

店主に礼を言つて、一足先に箸をおく。隣の席ではいまだにくだらないボーイズトークを繰り広げながら、何故か坂本が雨宮のラーメンに謎の調味料を入れようとしていた。赤くどろつとしたそれは、最近流行りの具入りのラー油らしい。

「妻木もいれつか？…つてもう食い終わつてんじやねえか！」

「二人ともさつきと食べなよ。伸びるよ？」

私の言葉を聞いてぎよつとした二人は慌てて残りのラーメンを食べ進める。流石にそのへんはわきまえているようだ。

「ま、さつきのは冗談だったけどよ。でもお前ら二人、最近結構噂なってるぜ？蓮は登校初日から鴨志田のせいで謎に有名人だったし、妻木はその有名人の仲良しって粹だな」

「そうなの？全然そんな感じしないんだけど」

校内では寝てる時間の方が多いし、自分の噂話が耳に入ってくることなんてほとんどない。最近では雨宮のほうも誤解が解け…てきているのかは分からないけれど、鴨志田の自白があつて以降は、陰口の類は多少鳴りを潜めているように思う。いまさら何を噂に

なることがあるのか。

「この前の中間試験、妻木一位だったろ？あれで注目されない訳はねーだろ」

「それだと雨宮は関係ないじゃん」

「考えてみるよ。ただでさえお前らは同時期の転入生で、片方は鴨志田のせいでかなりの有名人。片方は来て早々学年一位。こんな濃いキャラクタータッグ噂んってあたりめーだろ」

坂本の説明を聞いて、私と雨宮は確かにと言葉を飲み込まざるを得なかった。あまり気にしてなかったけど、噂話が広がるにつれて変な尾ひれがついてくる可能性もある。一応二重生活をしている身。目立つのはできるだけ避けたほうがいい。

「見た目も結構目立つしな」

「私？」

「見た目の話なら俺では無いだろう」

「そうそう。結構目立ってるぜ？髪の色と、それから…」

自分の目を指さして坂本が伝えてくる。

「目の色も結構目立ってるぞ。それって遺伝か？」

「うん。そうだね…父親譲り」

赤い瞳の所以を知ると坂本はすかさず謝罪してきた。別に気にしてないとはぐらか

して、ついでに髪の色は母親譲りであることも話した。

私の目の色は鮮やかすぎる赤色。元の世界でもこうだったが、世界を渡っても魂が私のものである以上は同じになるらしい。かつてはこの目の色で色々ないざこざもあつたものだけど、幸い今の世界ではそうでもない。せいぜい珍しい色だねと言われるぐらいだ。

そして髪の色は鳶を連想するような茶色。基本的に杏や某美少女怪盗のような髪色は珍しい秀尽においては、この髪色も目立つほうではあるか。

「わりい。こういう話はタブーだよな」

「別にいいよ。今はもうあの人たちとは関係ないし、会話に出てくる程度ならどうでも」
「…そうか」

私が出した経緯を一応ではあるが知っている坂本は、両親の話題を出したことを律儀にも後悔しているようだった。確かにいつもデリカシーの欠ける言動が多い坂本だが、こういうところは素直だし誰よりも真面目だ。

私としては特に気にするようなことじゃないのだけど、まあ周りのみんなからはそう思えないだろうから。

…そうだな。気にしてないついでに思い出話でも二人にしてやろうか。

「思い出話？」

「うん。昔の話」

そう聞くと二人は割と真剣に興味を示してきた。自分で言うのもなんだけど、私は仲間の間では謎の多いほうだろうから、物珍しさはあつたのだろう。

「小学校中学年ぐらいのころだったかな」

ちようどいいので、さつき坂本にも聞かれた私の運動能力についての昔話を。

「私もね、ずっと一番だったわけじゃないんだよ。なにせ親が両方とも運動音痴でその血を引いてるわけだからね」

歩けば何もないところでつまずくし、走ればすぐに息が切れる。スポーツなんてもつてのほか。これが私のパパとママだった。私が園児だったころからそのザマはダサイなど思い続けていたのを覚えている。

そして例にもれず、私もそんなに運動神経が良い方では無かった。自分でもそれはなんとなくわかっていたけど、小学校に入ってからそれは確信に変わった。

「想像できないな」

「でも本当だよ。だから私は頑張つて特訓したんだ」

はじめからなにもかもできたわけじゃない。苦手な部類は得意になるまで徹底的に練習した。身体の柔軟性を高めて、それから色々なスポーツに取り組んだ。

勉強で褒めてもらうことには慣れていたので、パパとママが出来なかつたことを出来

ればもつと褒めてもらえる…そんな幼稚な考えで、私はトレーニングを続けていった。「やっぱ想像つかねーわ。そんなに親に褒められたがってたとかさ」

頭の上に吹き出しでも浮かんでいそうな顔でしばらく想像をしていた坂本。それは長く続かずに、首を横にブンブンと振って言い捨てた。

「正直妻木のそういう人間らしさというか子供っぽさみたいなもんで、俺たち全然イメージ湧かないからなあ」

「まあ…そうだよね」

「それってよ、今のお前には認めてほしいとか思ってる奴がいなくてことになんねえか？」

「…。そうなるかも？」

ひどく曖昧な感想…だけど、その言葉は奇しくも的を射ている。坂本がどこまで察してそう言ったのかは分からないけれど、確かに今の私にはさっき言ったような感情はほとんどないに等しいような気がする。

どうしてそうなったのかもわかってる。

私が、未来を見なくなつたからだ。

何かを手に入れても、それは未来に持ち越せない。それを知つていながら努力する理由なんて、どこにもない。

余命宣告とは訳が違う。私のしようとしていることは、過去にも未来にも現在にも、何一つ私の痕跡が残らないようにすることだ。

それでも、私がみんなと…惣治郎や玲央と…時間を共に過ごすのに喜びを感じているのはどうしてだろうか。

7月9日 土曜日

始めて来るこの場所のむさくるしさに一瞬驚きつつも、狭い廊下を抜けて目的の扉の前までたどり着いた。なにやらここにくるまでに無数の好奇の視線にさらされてきた

が、今更私が気にする道理はない。

数回のノックの後、開かれた扉の中からは絵の具の独特な匂いとともに、怪盗団の仲間の一、喜多川祐介が顔を出した。

「いきげんよう」

「ああ。わざわざ来てもらってすまないな」

「これ。約束の」

私が来たのは喜多川の通う都立洗星高校の学生寮。喜多川の部屋に入っていく私を複数名の男子生徒が見送り、扉は閉められる。

部屋に入ると、私はカバンからタッパーが入ったレジ袋を取り出して、喜多川に手渡す。

「おおーありがたいー!」

タッパーに入っているのは言わずもがなルブランで私が作ったカレーである。別に頼まれてもいなかったが、ちよつとしたお節介を焼いてみたくなった。

喜多川は普段の仏頂面からはあつと表情を明るくし、小型の冷蔵庫に小走りで向かう。

タッパーを入れる瞬間に見えた冷蔵庫の中身は見事にスカスカだった。戸を閉めた後冷蔵庫の電源をケーブルをコンセントに挿すのを見て、私は今まで以上に喜多川の食

生活が不安に思えた。

「さて、それじゃあ本題と行こうか」

「うん？」

「妻木さんを初めて見た時に感じた心を、ようやくキャンバスに描き表せた」

喜多川が部屋の壁際に置いてあるキャンバスに近寄る。それには薄緑色のクロスが掛けられていて、まだそこに描かれている内容までは見えない。

「どうやら、私をモデルにして描いた絵が出来上がったので見てほしい…そういう要件のようだ。一度は喜多川の前で全てをさらけ出した私だが、果たして脱ぐ必要はあったのか…どんな絵になっているんだろう。」

「テーマは、魂だ」

怖さ半分楽しみ半分な期待を胸に、ゆっくりとクロスが取り払われていくのを見届ける。

横長のキャンバスが端から露わになっていき、そして私の目に色の情報を送ってくる。

恐らくは光の表現である白と明るい黄色。その反面、影というよりは闇に近いニュアンスのタッチで黒と赤が使われている。カラフルではあるものの、片方の色はもう片方と水と油のような関係性にあって、決して混ざり合わない…。

ある部分には翼に見えるものも描かれていて、またある部分には瞳のようなものもある。

「タイトルは」

「特に決めてないが……しいて言うなら俺から見た妻木さんそのものだ」

「…解説よろしく」

「いいだろう」

素人目にはただぐちゃぐちゃな絵としか映らないそれについて、描き手本人からひとつひとつ説明してもらったことにした。

「まず、テーマは魂といったが、その魂に俺は真つ先に二面性を見出した。妻木さんから感じるオーラから、光と影のような両極端の色が見えたんだ」

「ふむ」

「それでいて、そのどちらともつかない色も見え隠れする。人の心を描くのは難しいと知っていたが、今回はさらに難解だったよ」

まあ、確かに人の心なんてものは一色や二色で表現できるようなものじゃあない。わかりやすい性格だったとしても、その色になるまでの過程が、色として混ざってくる。

喜多川から見た私の場合、白と黒という反対色がまず同時に強く見え、そしてその奥に様々な色が交じり合っている……と。

「どの人間も同じようなものじゃない？」

「そうでもない。それに、妻木さんの場合はそこまで単純じゃない」

「というと」

「君が併せ持っている心は、この絵の右半分まで、だ」

喜多川に言われて絵に向き直る。

「そして左側が、妻木さんの中にある、別の人格」

「…」

「その間にあるものが、妻木さんの心の最奥」

「…すごいね」

言われてみれば、なんとなく合点がいった。月並みな表現だが、右半分が光、左半分が影を表していて、その中枢に決意の赤が見え隠れしている。

「ここまでのことを、私を初めて見た日に感じ取っていたということだろうか？だとしたら喜多川の審美眼とやらはまさしく本物らしい。」

「描きあがってからもなお、俺の中で妻木さんは謎に包まれた存在だ。だからこそ、興味も湧く」

「好奇心はナントカも殺すらしいよ」

「君のすぐ近くにいる猫はまだ殺されていないだろう」

笑えるような、笑えないような。そんな冗談を口にする喜多川は、なんだかいつもまして楽しそうにしていた。単純に食料が入ったことの喜びが、時間差でやってきているだけかもしれないけど。

私もなんだかんだで、喜多川への興味は沸いてきていた。聞けば、この絵はまだまだ改良の余地があるとの事らしく、もっと私の話を聞かせてほしいと言ってきた。

別に減るものじゃないし言っただけでもいいんだけど、ただ単に私自身のことを喋ったって芸がない。

「喜多川は、どんなに救いようのない悪党でも、努力さえすれば変われると思う？」

「…。俺たちの立場では、明確な答えは出しづらいが…俺は人である以上、変わることは可能だと思っている」

かつて、自分が刺し向けられた質問を、喜多川にしてみる。

「人は変われる。変わってしまったら、特に俺は、恩師が変わってしまった様を目の前で見た」

「そうだね。じゃあ改心についてはどう考えてるの。あれも人の心が変わってる？」

「その点は俺は明確に否定したい。改心は心を変えるのではなく、改めているだけだ。誰しもが初めから悪人なわけでは無い。だから怪盗団は、心の邪な部分を取り除き、もとあった心だけを残す…そう考えている」

…そう。喜多川は正しく認識している。怪盗団の行う改心とはそういうものだ。

「なら、君の描いた絵みたいにな、初めから悪として生まれたものは、どうすれば変われるのかな。本人の努力次第で、歪んでしまうみたいにな、善人になることなんてあるのかな？」

「…それは、妻木さんがそうだと言いたいのかな？」

「ある意味では。でも、前世の話みたいなものだよ」

喜多川は少し考え込み、歩き回り、座り、立ち上がって、また座った。

「？」

「実に難解だが、俺に言えるのは、やはりこの絵を見てほしいということだけだ。俺に見える部分は右半分、君の善良な部分だけだ。その過去がどんなに暗いものであつても、俺にとつての妻木さんは既に変わった後の姿。まさしく希望だ」

「なるほど」

「うむ。長々と喋りすぎて自分でもよく分からなくなつてきた。とりあえず妻木さんも座つてくれ」

言いながら差し出された椅子に腰かけ、ずらりと並んだ他の絵画たちを眺める。寮の一室のはずだが、生活感のある物は限界レベルで少ないうえに絵ばかりが目に入ってくるせいで、部屋というよりはアトリエにいるような感覚に陥ってしまう。

そんな空間で、喜多川からの質問攻めにあったり、逆に喜多川の絵について話させたりと、少し新鮮な時間をこの日は過ごしたのだった。

・
・
・
・
・

7月10日 日曜日

金城が改心して数日たった今でも、未だに明智の言う次の動きは見えてこない。十中八九メジエドだろうから、いつ来てもほとんど変わらないようなものなんだけどね。

とはいえずつとこうしているのも暇と言えば暇だ。メモントスでの依頼も今はめぼしいものが見つからないし、純粹な待機時間だ。

「なーなー綺羅ー」

客の来ないルブラン。テーブル席に寝転がっていた双葉が声を上げる。

「なに?」

「ゲームしよー」

「惣治郎帰ってくるまで駄目」

「いーじゃんどうせ誰も来ないんだしー」

本人の前で言ってみろそれを。

とはいえ駄目なものは駄目である。今惣治郎は買い出しに出かけていて、その間の留守は私に任されているのだから。こういう時、大体雨宮はどこかに出かけている。どうせ今頃は他の誰かと取引を進めているんだろう。

実際暇だしゲームしたい気持ちもあるけれど。それは惣治郎が帰ってきてからだ。

「やったー！じゃあ今日はスマ●ラな！」

「はいはこ」

うきうきしている双葉の側面、ルブランの扉が開き、入ってきたのは買い出しに行っていた惣治郎ではなく、同級生の秋山玲央だった。

惣治郎だと思つて油断していた双葉は、いきなり現れた見知らぬ顔に驚いて脱兎のごとく二階へと逃げ出していった。そんなにビビらんでも。

「ごめん、ください？」

「いらつしやこ」

「いらつしやいましたー！」

相変わらずのヘンな日本語を発しながら落ち着かない様子で店内をキョロキョロと見回す玲央。普段制服姿しか見ないせいで、何の変哲もない洋服を着ているのに違和感

を感じる。

「いい雰囲気の店だね」

「そういうのは店主に言つてあげて。今は買い出し中で居ないけど、もうすぐ戻つてくると思うから」

今日はあらかじめ、玲央が来ることは惣治郎にも伝えておいた。双葉にはさっきのリアクションが見たくて言つてなかつたけど。何気に今日は初めて玲央と校外で約束して会う日だ。

コーヒーは普通に飲めると事前に聞いていたので、とりあえず一杯振舞つてやる。

「どうぞで」

「て、手慣れてるね。想像通りというか……、とりあえずいただきます」

私と玲央が落ち合うときというのは、基本的に勉強目当ての時だけ。けれど、今日はテスト勉強を休止にするということまで待ち合わせた。たまにはこういう時間も必要だろう。

「おいしい。缶コーヒーとは訳が違うね」

そりやあそうだ。

惣治郎が聞いたら呆れかえつてしまうようなことをのたまう玲央は、双葉がダツシユで消えていった階段の奥へ目をやる。

「綺羅ちゃんって、ここに居候してるんだね。上が部屋？」

「うん。部屋というか、物置というか」

「なんで居候してるか…ってというのは」

「秘密」

予想していた答えだったらしく、私が理由を明かさないことには大して落胆も驚きもしなかった。

それからしばらく二人で他愛もない会話を続けていると、この店の主が帰ってくる。

「ああ、いらつしやい。嬢ちゃんがコイツの面倒見てくれてるって子か」

「あ、はい！そうです！」

逆だ逆。どう考えても私が世話してやってるだろうに。

「ま、仲よくしてやってくれな。友だち出来にくいタイプだろうから」

「はい！だと思えます！」

「ちよつとちよつと。さつきから何勝手な」

私の制止も聞かず、何故か惣治郎と玲央で話が盛り上がってきたのを無理やりに切り上げ、玲央を連れて双葉の潜む二階へ。

初見の玲央は階段を上がりきるなり落ち着きなく辺りを見渡すが、真つ先にその視線は部屋に居た先人の場所であつた。言わずもがな双葉と玲央の初邂逅は唐突に訪れ

たのであった。

「妹さん？」

そんなところであるかもしれないけども。

「マスターの娘だよ。兼私の友だち」

簡単に説明してやると、双葉の方から名乗りあいさつを交わした。さっきの即逃亡がウソのようだった。そう思っていると何故か双葉に睨まれた。…なんで？

「はじめまして。秋山玲央つていいいます。綺羅ちゃんとは同級生で、勉強を手伝ってもらってます」

「あーうん。綺羅からなんとなく話は…今日も勉強か？ だつたらわたし帰った方が…」

居心地悪いから退散しようとしているのか、それともただ気を使って言ってるのか。多分両方だなと分かりつつも、今日は勉強しに来たわけじゃないと双葉を止めて、三人でゲームをして遊ぼうと提案してみた。

…自分で言つて気付いたが、誇張でもなんでもなく私と双葉のゲーム対戦は割とガチなレベルになるので、おそらくライトなゲームである玲央と遊ぶのに向いているゲームをチョイスしなくちゃいけない。こっちにパーティゲームの類は置いてたっけ。

そんなひとりごとをつぶやきながら箱を漁っていると、玲央のほうからおもむろに口を開いた。

「綺羅ちゃん」

「んー？」

「この部屋、男の人入れたことある？」

「入れたっていうか、住んでる」

「そっか。…ええ!？」

「雨宮蓮ね。知ってるでしょ？」

「どど、どーゆうこと!？」

ちよつとだけ面倒なので説明は雑に双葉に任せ、続けて箱を漁り続ける。

アクション要素が出来るだけ少ない、だれでも楽しめるような奴…そういうテーマで見ると、この雨宮が趣味で買ったゲーム達の中にはほとんどないことが発覚した。たまに双葉が遊びに来るときに、少しづつ種類も増えてきたはずんだけどなあ。

「双葉ちゃん説明してっ」

「お、おおう。えつと、二人ともわけあって同じタイミングでここに居候する羽目になったっただけで、別にそれ以上の事は…って、なんでわたしが説明してんだ？」

「そ、そうなの？なんか、トクベツな関係とかじゃなくて？」

「まあ、二人とも普通では無いという意味では特別なかもしれないけども…」

「確かに学校内でまことしやかに話題になってた二人ではあったけど…。まさか本当に

…

ちよつと待て待てなんか壮大な勘違いが発生してる気がする。

思わず箱漁りを中断し振り返る。

「あの、後半の内容は双葉がちよけてただけであつて、重要なのは前半の部分だけだから」

「いやーそれでもこの年代の男女が同じ部屋で寝泊まりするなんて、やっぱりけしからんと思うのですよあたしは」

「おっさんか」

しかも一人称があたしのおっさん。

それから、私の住居環境を知るや否や、玲央のミーハー魂に火が付いたかのようにトークが展開され始めた。私にも双葉にも留める力はなく、完全にこの場の流れを掌握されてしまい、なんだか随分と女々しい雰囲気部屋が満たされていった。

きつとこの場に杏もいたならこれはさらに加速しただろう。たまたま呼ばなかったが、正解だったな。

「いや、正直雨宮君結構イケてるなとは思ってたよ？初めの方は、あたしも怖い人なのかなーとか思ってたけど、なんか最近はそのことなさそうな感じだし」

「急に口数増えたな…」

若干引き気味の双葉を置いてけぼりに、意外にも雨宮に対する評価が高いことを熱弁する玲央。明智しかりなにかしらロマンティックな要素を求めてしまうのは、この年代の女子にはありがちなことなのかもしれない。

多分雨宮が転校生ですらなければ、それだけで見え方はかなり変わっていきそう。

「そういえばよく一緒に登校してたよね。なるほどそういうことかあ」

「他言は無用で」

「もちろんもちろん」

全く信用ならない軽口を背中に受けつつ、箱の底にあったひとつのパッケージを取り出す。

『垢太郎鉄道』。サイコロで出た目の数だけ自分の列車を進めてゴールを目指すゲーム……の第一作目。こんなニツチなソフトを何故か雨宮は好んで買って帰ってくる。一体どこで手に入れてるんだか。

どこでもいいが、とにかくこれは少し古すぎる。他にもっといいゲームは……。

「綺羅ちゃん、さつきから何探してるの？」

「ちよūdいゲームが無くて」

「いま入ってるのいいよー。あたし結構ゲーム得意だよ」

「いや、止めといたほうがいいぞ新人。自分で言うのもなんだが、わたしと綺羅も相当

…

「大丈夫だいじょうぶ。一回やってみようよ」

私と双葉は目を見合わせる。正直気は進まないけど、本人がそこまでいうならやってみてもいいかもしれない。そう思って、試しに一度三人でスマブラをプレイすることにしました。

. . .

あまり乗り気でない状態で始めたゲーム対戦は思いのほか白熱し、気付けば想定していた以上に時間が経ってしまっていた。

熱中している間、雨宮が外から帰ってきてもう一度バイトに出かけてまた帰ってくるまで続くぐらいには、私たちの戦力は拮抗していたのだ。

「まだやってたのか」

「雨宮君もやる？」

「玲央はもう帰る時間でしょ」

「あ、そっか…」

呆れる雨宮をよそに、スマホで時刻を確認して肩を落とす玲央。ずっと勉強ばかりし

ているようなイメージだったし、ここまでゲーム好きだとは私も思つてなかった。普段の会話からもそんな感じはしなかったし。

「じゃあまた今度やろうね。双葉ちゃんも綺羅ちゃんもすつごく上手だったから熱中しちゃったよー」

「玲央もなかなかやるな！今度は蓮も混ぜてみんなで遊ぼうな！」

「うん！つて、ごめんね雨宮君！勝手に部屋でくつろいじゃつて」
「構わない。随分打ち解けてるな、二人とも」

意外そうに双葉と玲央を見る雨宮は、手に抱えた荷物をベッドの上に下ろす。すると同時に、肩にかけてカバンからモルガナが飛び出し、玲央がすかさず食いつく。

撫でようとするとい目散に逃げられてしよんぼりしていた玲央だったが、やがて荷物をまとめて帰り支度を始めながら大きいため息を吐いた。

「はあ……」

「なんでため息？」

「ううん。なんか、楽しかったなあつて思つて」

そう言う玲央の表情は本当に名残惜しそうだった。まあ、私も三人以上でこうやつて部屋で遊ぶなんて行為自体久しぶりだったわけで、なんとなく気持ちは分からないでもない。

「綺羅ちゃんならもう気づいてるかもだけど、あたし勉強よりゲームとかで遊ぶ方が好きなんだよね。できれば一生遊んでたいぐらい」

「…それを私の前で言う?」

「や、もちろん今は勉強第一に頑張ってるけどね!?!」というか、綺羅ちゃんのおかげで、頑張ってるってほうが正しいケド」

なんとなく、今日のことと玲央のことがまた少し分かった気がする。あまり勉強に集中できていなかったことは分かっていたが、それの他にやりたいことや好きなことがあったのが原因だったらしい。純粋にゲームにうつつを抜かして、点数をとれなかったなんてことにはなつてほしくない。

でも…それだけが理由ではないんだろうけど。ここで明かすような話なら、あえて隠したりはしない。

「それより、大丈夫なの?もう結構な時間じゃない?」

「だいじょうぶだいじょうぶ。今日は遅くなるかもって伝えてあるから、ゆっくり帰っても平気だよ」

「どれぐらい?」

「え?…えーつと、今が7時過ぎでしょ?10時ぐらいまでは大丈夫じゃないかなあ?」
それを聞いて、私たちはピンと思いついた。こうなればここでやることは一つだ。

「玲央、おなかすいてない？」

・ ・ ・ ・ ・

7月11日 月曜日

夏休みを目前に控えたこの季節、どこか街の雰囲気も浮ついてきているように感じる。でもそれ以上に、この都会の夏特有のまとわりつくような熱気が、私にとっては活気を削ぐ原因でしかなかった。

衣替えは勿論行ったわけだが、夏用の制服を家に置いてきてしまっていた私はどうしたものかと一瞬悩んでいた。しかしそれは杞憂に終わり、ご丁寧にルブランへと宅配で届けられた。どうせなら他の私物も送ってきてくれたらよかったのに。

そんなことを考えながら歩く私をよそに、お付きの侍女二人は元氣澁刺である。

真と杏（主に杏だけど）に引きずり込まれる形で、シヨツピングに付き合わされていた。なんでも、今年の夏用のアイテムを手に入れたいとのこと、随分と気合が入っている。

「当然！だって今年はみんな遊びに行くでしょ？色々必要でしょ！」

「色々って？」

「水着とか！」

「…ほう」

「もちろん綺麗なものも今日選ぶから」

なるほど。なんだか最近怪盗団のみんなが私の扱い方に慣れてきている気がするがしてやや腹立たしい。あらかじめ用件を伝えると断られるのが目に見えているから、とりあえず引つ張ってくる人が多い。…そうして今日もここに連れてこられたわけだが、私も誰かさんのお人よししが伝染ってきたかな。

「二人はもう買ったの？」

真と杏にそう聞くと、どうやら二人の分は既に見繕つてあるらしい。本格的に苛め抜かれそうな予感がしてきた。

「もちろん、あなたの事情を踏まえた上で、ぴったりのものを探すのよ？だから安心して」

「そーそ。今時は色んな種類があるからね。きっと良いの見つかるよ」

「はあ。ま着たところで水に入ったりはしないけど」

「淡水でもだめ？」

「いや、淡水なら……え、海じゃないの？」

「それだとあなたが遊べないじゃない」

「…」

はあ、なんとまあ、律儀というか。てつきり海に行く計画を立てているものだと思うていたら、どうやらそうではないらしい。

呆れていると腕を引かれて店の奥へと連れ込まれる。どうやら杏とここの店員は顔見知りらしく、気さくに話しながら私を着せ替え人形にする算段を組み立てていく。水着だけで済ます気もなさそうだ。

原宿系とはあまりイメージの違う、黒髪ロングの清楚な雰囲気の店員にまあまあと窘められながら試着室へと誘導され、サイズの測定が始まる。

バストに関しては当然正確なサイズを測りたいため一時的に服をまくり上げてくれと頼まれる。しかし身体の傷を隠すように、いつも巻き付けている包帯を外すのは面倒だし見られたくも無かったので丁重にお断りさせてもらった。

「じゃあブラジャーのサイズだけ教えていただけますか？」

お前らには教えないからな。

それから、私の傷だらけの身体の事を考慮した水着選びという難行が店員を襲った。種類があらうとなんだらうと、水着というのは否が応でも肌が出る。それが水泳を目的としたものでは無く、あくまでレジャー的なフアツションを目的としたものならなおさらだ。なにより、選ばれる側に立つ私がやたらと恥ずかしい。

そんな私に店員がもってきたのは赤と黒が基調のゴシックな意匠の水着。普通に露出度は高めだ。

「これと組み合わせられるのがコレなんですけどー」

それと一緒に店員がもってきたのは、同じシリーズのものらしき、オフシヨルダーのトップス：に見える水着と、シヨートパンツ：にみえる水着。ほぼレース素材なのでかなりスケスケだが、肩から下は元の色の関係でかなり傷が見えにくくなっている。

「今時はこんなものもあるのね。形は普段の私服と変わらないけど、清涼感もあっていいんじゃないかしら」

「うんうん！ね、一回着てみてよ！」

ここまで協力してもらっておいでここで断れるほど、私は冷酷じゃない。こつぱずかしいながらも着替えを済ませ、包帯も取ってみる。

鏡に映る水着姿の自分はとても自信なさげで格好がついていなかった。…駄目だな。

もつと堂々としてない。

後ろも確認してみると、背中側の生地はやや大きめに垂れ下がっており、シルエットはなんとなく自分も好きな雰囲気だった。

恐る恐るカーテンを開けてみると、三人分の視線が突き刺さる。

「「おおー!」」

「どうですか?着てみた感想は?」

「まあ…無理なく隠れてるし、これなら人前で着てもいいのかも」

「いいー!いいよ!!」

「ええ、よく似合ってるわ」

妙にむず痒い気分だけれど、そこまで悪い気はしない。こういうのも、あまり経験無かったから。

ひとまず目的のものが手に入ったので、それからはぶらぶらと色々な店を見て回った。服屋、ジュエリーショップ、クレープ屋…クレープはファッション関係ないな。

こうやって適当に食い散らかす割には体形をキープできているせいで、杏はよく同業

者から反感を買っている。

「んー……クリームマシマシのこの背徳感がいいんだよねー！」

「本当に美味しそうに食べるわよね。確かにおいしいけど」

「そうだね」

「綺羅、あなたもよ」

いつの間にか名前呼びになっている真は、口の端を指さしてはにかむ。指で拭つてみると、まんまとひつついていたらしいチョコクリームが取れた。

「二人とも、大概甘いもの好きよね」

「甘いもの食べてるとなんか満たされた気持ちになるじゃん？」

恍惚の表情を浮かべながらホイップクリームに顔をうずめるようにかぶりつく杏。自分では気づいてなかったけど、真の目には私もこれと同じように映っているらしい。甚だ信じがたい話である。

どちらかというスイーツの類は作っている過程を見る方がワクワクするものだ。むかしは家でケーキを作ったりもしていた。

「え、綺羅ケーキとか作れるの？」

「一応」

「いいじゃない。ルブランでもスイーツメニュー提案してみたら？」

たしかにルブランにはスイーツメニューがほほえないに等しい。真の提案は有りかも
しれないけど、惣治郎は容認するだろうか？

頭によぎったカレー味のケーキというふざけた発想を振り払おうとしてクレープを
頬張る。

「綺麗って意外と家庭的だよな。料理とかは、家で習ったの？」

「うん。私の持つてる知識は基本的にママ直伝。…というか、意外ってなにさ」

「本当に同年代なのかな…。わたし時々綺麗が物凄い年上を感じるんだよ
ね」

「よくもそんなにすらすらと無礼な言葉を」

「それ、私も分かるかも」

「真まで…」

「でもね、それと同じぐらいの間隔で、たまにとても年下の幼い子供のように感じるこ
もあるのよね」

「あ、分かるー！」

「どうしてかしら、と首をかしげて私の顔を覗き込む真は真剣に原因を考えているみた
いだった。」

…相変わらず、どうしてこうもこの連中は妙なところで鋭いのだろうか。もつとも答

えを知る由が今は無いので、正解に辿り着く可能性はゼロだろうけど。でも、今二人が言っていたことは間違いなく、私の本質を示している。

Charaとしてのわたしと、妻木綺羅としての私。喜多川もよくよく私の中の二面性について触れてくるが、どちらも原因はこの私の魂の在り方に依るものなんだろう。

「まあ綺羅がミステリアスなのは今に始まったことじゃないけどねー。そのうち洗いざらいあんな秘密やこんな秘密を吐いてもらうから」

「期待してるようなのは無い」

「じゃあ早速スリーサイズから聞いていこうかな！あの水着だと分かりにくかったけど、やっぱり結構あるよね、綺羅」

「オツサンだ」

「おっさんね」

.....

7月12日 火曜日

期末試験の日が近づいてきている。玲央と私の勉強会もスパートをかけていて、私が直々に作成した、本人の苦手分野に特化した問題集で隙を無くしていつている。最終的には本人次第ではあるけれど、乗り掛かった舟だしやれることはやっておいてやりたかった。

そして放課後、勉強会を終えた私は待ち合わせていた渋谷駅へと急いでいた。

思っていたより今日の勉強は長引いた。約束の時間には遅れたくない。そんな一心で駆け足気味に先を急ぐ。

そうして約束の場所に辿り着いた私は、スマホに届いていたメッセージを見てすぐにイセカイナビを起動しメメントスへ。

「お、ジョーカー。来たみたいだぜ」

最初に出迎えたのはモナ。その傍に棒立ちで虚空を見つめているジョーカーが立っていた。そいつはモナの呼びかけにハツとして、私のいる入り口のほうに振り返る。

「来たか」

「お待たせ」

「おかげで充分準備することが出来た。早速始めよう」

「なんかあつた時のために、今回はワガハイも付き添う。巻き込まれないようにはするから、気兼ねなくやっていいぜ」

待ちかねていたのか早く始めようとせつつくジョーカー。それにしても、準備…一体どんな隠し玉が飛び出すやら。

だが、そう。今日はジョーカーとの決闘の約束もあつたのだ。少しづつ…もとい急速な勢いで力をつけてきているこの男の、力を見極める時間だ。

距離を取って互いに武器を構える。

「いくぞ」

「なんだか今日は自信ありげだね」

「もちろんだ」

いつにも増して不敵さを纏うジョーカー。一瞬、その目の色が変わったかと思うと、躊躇なく銃を抜いて引き金を引いてくる。距離の空いた状態での牽制としては、ピストルの銃撃はかなり優秀。より実戦的な立ち回りだ。

しかし、まだその動きは洗練されきつてはいない。懐から銃を取り出し、構え、狙い

をつけて、撃つ。ここまでの間に弾道は簡単に予測できた。

もちろんジョーカーにとつてもこの銃撃はただの布石。もう片方の手で仮面に手をかけ、ペルソナを召喚してくる。

「ホワイトライダー！」

現れたのは目玉だらけの白馬に乗った、長弓を持つ骸骨。

矢は私の頭上へ弧を描くように放たれ、それは中空で弾けて無数の光の矢となって地面に降り注いでくる。

「ランダー！」

そして上空からの弾幕を縫うように、正面から新たなペルソナが黒い長髪を振り回し無数の針を飛ばす。一歩間違えればハチの巣になりかねない攻撃も容赦なく打てるようになったのは、まず成長の一つ。

文字通り針の穴を通すような僅かな隙間に身体を通して回避し終えるや否や、一気に距離を狭めてきたジョーカーと鏢迫り合いになる。

「クー・フリーン」

刃と刃がぶつかり合う瞬間、確実に一瞬足を地面から離せなくなるその一時を狙いすましたかのように、ジョーカーの背後に顕現したペルソナの槍が突き出された。

私は一撃目を片手で受け、もう片方の手で槍を掴んで逸らすことで直撃を避ける。

「惜しいね」

「いい加減ペルソナを使ってほしいな」

ジョーカーは大きく飛び退き再び距離を取って仕切り直す。

：まったくもって油断ならないが、まだ生身で捌ける程度ではある。正直ここまでやっているだけでも十分異常なんだけど、それで満足する男では決してない。

その後もジョーカーは多彩な属性魔法で波状攻撃を繰り返して来る。回避に徹すれば躲すことは簡単だったけど、私には一つ気になることがあった。

それはジョーカーの使う魔法の使用順番。属性の相性を無視した一見不規則に見える攻撃だけど、ジョーカーに限って考えなしの無差別攻撃という作戦をとるかと言われるれば、こたえはNOと即答できる。

怒涛の連続攻撃をいなしていくなかで、私の周囲を囲む環境はがらりと様相を変えていった。

後方は炎で塞がれ、天井には氷の柱が無数に立つ。

そして次に放たれた疾風魔法によって、炎は活性化し氷柱は切り落とされてつららとなつて降り注ぐ。もちろんそれだけならさっきの弾幕の二番煎じだが、ジョーカーの手はまだ止まらなかった。

「流石に勘がいいな」

「次はどうする気?」

挑発じみた言葉を皮切りに、ジョーカーは降り注ぐつららを掻い潜りながら近接戦闘を仕掛けてくる。本人も危険を背負う戦法。この行動にはそれだけの決意が含まれているはず。

炎と氷に囲まれた異常地帯で短剣を避け、時には受け、そして刃が擦れ合い火花が散ったその瞬間、足元の違和感に気付く。いつの間にか地面にうつすらと水が張っていた。

「ああ、そういうこと」

加速する剣戟をいなすためには私もナイフを振るう必要が出てきた。ほんの少しではあるが地面に張る水の位も上がってきていて、立ち回るほどに水しぶきが舞う。

「いくぞっ!」

思考を読まれたことを察し不敵に笑うジョーカーは一瞬腰を低く構え、仮面を剥がす。

「バロン!」

現れた聖獣は澄んだ咆哮を上げ、それと同時にジョーカーは上空へと飛んだ。

私もそれと同時に、あるいはより早くに、地面から足を離していた。これまでの攻撃のすべてがこの一撃のための布石。溶かした氷で水の張ったこのフィールドに、ペルソ

ナの生み出した特大の雷が落ちる。

予め落ちる場所を予測して避けたが、このまま重力に従えば私も雨宮も足場の水を通して感電してしまうだろう。

「アルサーヌツ！」

片やジョーカーはアルサーヌを召喚し自らの身体を持ち上げさせさらに上空へ。

私に翼は無い。もはや逡巡の隙も無く、地面に足をつけた瞬間、タイミングよく落ちた雷が伝播し両足に強烈な痺れが走る。ジョーカーとの立ち合いでまともに痛みを感じたのは、これが初めて。

針の穴を通すような戦いの中で、その一瞬のチャンスをジョーカーは見逃さない。翻したアルサーヌの掌から放たれた呪怨はまっすぐ私を襲う。

「Charra」

回避するのは難しいと判断し、やむを得ず、Charraを召喚し同じ呪怨魔法で相殺して事なきを得る。

そして身体を駆け巡る痺れを押し殺し、中空で隙を晒すジョーカーの足首をジャンプして掴み、地上へ引きずりおろす。

引きずり下ろすと同時に背中から地面に叩きつけたジョーカーの首にナイフを押し当て、ため息をつく。勝負はここでおしまいだ、ジョーカーはとても晴れやかな顔を

していた。はなから私にペルソナを使わせることだけが目標だったらしい。

「これで、一步前進だ」

「…」

私のほうからは積極的に攻撃を仕掛けていないとはいえ、どうしてもこの成長速度には違和感を感じずにはいられない。明らかに力の伸びが速すぎるし、戦闘慣れもしすぎている。

「二人とも、大丈夫か？」

「大丈夫だよモナ。ジョーカーも、大したことないでしょ？」

「問題ない」

モナが回復するまでもなく、ジョーカーは少しよろめきながらも立ち上がった。

…私としてはこの辺りで既に十分すぎるほど強さは得ているから、これ以上続けなくても別にいいと思ってしまうわけだが…どう転んでもここで満足してもらえないわけはない。特訓はこれからも続いていくだろう。

…強くなることにデメリットは無い、とは言えない。この世界においては。

ジョーカーにおいては、特に。

強さを求めるのは悪いことじゃない。ただ、力を得た人間は必ず邪心も芽生える。それがどんな種類の力であれ、本人の意志とは無関係に。

私もかつてはそうだった。

「リーサル？」

「ん」

「聞いてなかったのか？」

ふと、モナに話しかけられていることに気付く。

「聞いてたよ」

「じゃあなんの話してたか言ってみろよ」

「今日の晩御飯の話」

「と？」

と？…当てずっぽうで言ったがどうやら片方は当たったらしい。

「ジョーカーの女関係」

「ちげーよ！どんな聞き間違いしたらそうなんだよ！」

…違ったらしい。

「この特訓の話だよ。次からはペルソナも使ってやってってくれってさ」

「ああ…そっか」

「なんか考え事か？」

どこか上の空のように見えたかもしれない。モナが少し心配そうに私の顔を覗き込

んでくるが、どうしても私は他の事が気になって仕方なかった。

本当に、このままジョーカーに私の戦いの粋を教え込んでもいいものだろうか？

胸の奥で得体の知れない恐怖が渦巻く。脳裏に刻まれた何か恐ろしい記憶が、私の不安を加速させる。

思わず、私の少し前を歩くジョーカーの腕をつかむ。

「……どうした？」

「……」

少し驚いたような素振りでも振り返ったジョーカーの目が、一瞬私の目と同じような赤色をしているような、気がした。瞬きの中にそれは消えてしまったから、見間違えかそうでなかったのか定かではない。

胸騒ぎが止まない。

「……なんでもない。早く帰ろ」

沸々と湧き出した不安を押し切るように、半ば強引に私はジョーカーを連れてメメントスを出した。この日の晩御飯は、ろくに味を感じなかったような気がする。

7月13日 水曜日

「だーりーなーくそー」

「うっさい。こつちにまでだるさが伝染るじやない」

「はあ…試験なんか無くなればいいのになー」

いつものように、雨宮、坂本、杏の三人と通学路を往く今日は期末試験の初日である。坂本は案の定だるさを隠しもしない様子でゆっくり歩こうとするが、なにやら杏はいつにも増して堂々としていた。

雨宮のカバンから顔を覗かせるモルガナもそれに気付いたようで、なにかいいことでもあったのかと聞くが、杏は適当にあしらうだけで教えようとはしなかった。

一方雨宮はというと、いつにも増して眠そうな目をかろうじて開けて…すらいなかつ

た。目を閉じたまま歩いている…。

「それ、寝てるの？」

「ああ」

「…」

眠そうな態度とは裏腹にいつもと変わらない抑揚で返事されてしまったせいで、余計に寝てるか寝てないのか分からなくなった。

そんな私たちの後ろから、なにやら忙しない足音が聞こえてきた。

振り返ると、手を振りながら駆け足で寄ってくる玲央の姿があった。

「おはよう綺羅ちゃんっ」

「おはよう。昨日はよく寝れた？」

「うん。アドバイス通りに早めに寝たよ。おかげで脳がしゃっきりしてる気がする！」

この中で誰よりも今回の期末に気合が入っているのは、間違いなく玲央だろう。

先週からは私が玲央の苦手部分を分析して作成した問題集で徹底的に苦手を克服するための手段を講じた。玲央も真剣にそれに取り組んでくれたし、そして当日をもっともよいコンディションで迎えることが出来ているのは僥倖以外のなにものでもない。

次の試験で学年20位以内に入る…それが今回の目標。私がわざと問題を間違えたりして一位を誰かに譲ってやれば、その目標は果たされやすくなるが、あいにくそうま

でしてやる気は無い。

「あ、雨宮君も今回はライバルだね」

「たしか、20位以内を目指してるんだったな？」

「うん。雨宮君は目標ないの？」

「無論学年トップだ。今回は狙いに行く」

雨宮はそう言つて、目を閉じたまま私の方に顔を向ける。その行為に意味があるのかはさっぱりだし、そもそも気配だけで私のいる方角を正確に捉えすぎだ。

「おおお……じゃ、じゃああたしも、気持ちだけはトップを狙うくらいで臨もうかな」

やや冗談めかして玲央が言うが、気持ちだけの問題ならいくらでも高みを目指してもらつて構わない。そちらのほうが結果が付いてくるということも、しばしばあるものだ。

などと話をしてる後ろで坂本は丸まった背をさらに縮こませて大あくびをしていた。お前も少しは勉強しろとモルガナがツツコミ、それをみて玲央が雨宮の背後に回り込んで学校に着くまで中のモルガナをモフリ続けていた。…はたからみれば、さぞ不可解な光景だつたらう。

7月16日 土曜日 : 試験最終日

全生徒が解放感から晴れやかな顔をして下校していく中、私は校門前で雨宮と二人で玲央を待っていた。雨宮には先に帰れと言ったのだけど、何故か居座り続けていた。少し彼女のことで気になっていることがあるらしい。それが何かは知らないが。

しばらくすると件の人物が玄関から姿を現し、疲れたようなやりきったような笑みを浮かべながらゆつくりと階段を降りて来る。

「ふたりとも、おつかれさまー」

「お疲れ様。秋山さん的には、手ごたえはどうだった？」

「うん、自信はあるよ。なんてったって天下の妻木先生につきつきりで教えてもらってたからね」

どうやらそのようで、いつもよりテンションが控えめなのはネガティブな意味ではなさそうだった。

意味のない生徒同士の答え合わせなどは行わず、ぽつぽつと言葉を交わしながら静かに駅までの道のりを歩いた。精神的にも疲れてるだろうからすぐにでも家に帰りたところだろう。

そう思ったけど、どうやら玲央は別の事を考えていて、雨宮も同じことを考えていたらしい。

「秋山さん、うちに寄ってかないか？ 頭脳労働後のコーヒーはいいものだぞ」

「いいの？ 実はあたしも行きたいなーって思ってたんだ」

そう言っただけで私の顔を伺う玲央に構わないと伝えると、嬉々として帰り道とは逆方向となる四茶方面へ行く列車に乗り込む。運よく席はがらんとしていて、三人とも並んで座ることが出来た。

到着するまでの間、徐にスマホを取り出した玲央が見ていたのは怪盗お願いチャンネル、その掲示板だ。

「二人はさー、怪盗に改心してほしい人とかいないの？」

画面を見つめながら藪から棒にそんなことを言いだす玲央。その言い方だとまるで自分には居ると言っているように聞こえるわけだが。

「二人いるかな」

「へえ。なんか意外。雨宮君て基本淡泊だし、あんまりそういうの無いかと」

「実はそうでもない。妻木さんは？」

「私は……」

雨宮に話を振られて少し考えてみるも、そんなには思いつかない。強いて言う

とすれば、そいつは今私たちの生きる世界には存在しない。よって答えは特になしだ。

雨宮の言う相手も気にはなつたけど、私は先に玲央はどうなのか聞いてみた。すると以外にもあつげらんかんとした軽い口調で「いるよー」と答えた。

「秋山さんにもいるんだな」

「そりゃあ人間ですもの。でもまあ、あたしはどつちかかって言うといケメン怪盗に心盗まれたい側だけどね」

「探偵王子はどうしたの」

「明智君は、怪盗とあたしを取り合つてほしい」

やたらと真剣なまなざしで熱弁する玲央をみて思わず私と雨宮は笑ってしまった。本人からすれば顔の引き攣るような話題であるものの、話の浅さが心を軽くさせるのだろう。

「けど実際おもしろいよねー。怪盗と探偵、なんてさ。本当に現代なのか疑っちゃうよ」苦笑する玲央。その目は、心を盗む怪盗なんて本気では信じていないと訴えていた。が、もし心の底からそう思うのであれば、こんな話はしない。少なからず、玲央は怪盗に興味を抱いている。

雨宮も私と同じように何かいいかげんではあつたものの、あえてその話を広げることにはせず、当たり前障りのない会話で目的地に着くまでの時間をやり過ごしたのだった。

一週間後：7月23日 土曜日

終業式が終わり、今日の学校は午前で終了。雨宮からのチャットで怪盗団全員で集合し、帰路を歩いていった。

「花火大会？」

「おう！カネシロの件の打ち上げも兼ね…」

双葉と喜多川を除く怪盗団が集合している以上通学路をあるくにはそれなりな人数で固まっているのだ。そんなただでさえ目を引く状態でターゲットの名前を出す坂本の腹を真が小突き、小さく咳ばらいをする。

「二期終了祝いね。いいじゃない」

「さんせー！というか、そういうことだったら玲央も誘ってみない？」

元氣よく返事をした杏はそんなことを口にする。一応金城改心の打ち上げでもあるが、どのみち花火大会で人がごった返す中で怪盗関連の話をするわけでもなし。別に玲

央が同伴していてもなんら問題は無い。

喜多川とはほとんど交流のない関係だけど、まあ玲央の性格なら特に問題はないと思う。

仲間内でも特に異論は出ず、玲央も花火大会に誘うことになった。私とは言わずもがな、杏ともそれなりに交流があったようだし、最近は雨宮とも話す機会があった。そんなに気後れる理由は無いし、きつと来てくれるだろう。

「ところで竜司。試験結果はどうだったの？」

日程を決めたりして盛り上がっていた坂本に、ぴしやりと冷水のように冷たい真の声がかかる。

「……やーまあ、そこそこっすかね」

「リ्यूージは赤だつてよ」

「のあつ……モルガナてめー！」

分かりやすく動揺した坂本をよそに、あつさりとモルガナが告げ口をする。試験前には真はあまり浮かれすぎると口を酸っぱくして言っていたらしく、完全にお説教モードに入ってしまった。

……うん。他の皆はもちろん蚊帳の外である。私はもちろん、今回は雨宮も杏も前回よりかなりいい成績を残していた。

そしてこの場に居ないもう一人も。

「そういえば、秋山さんの結果ってどうだったんだ？」

「うん。それはね」

私は件の人物にチャットで現在地を聞く。すると間髪入れずに返事が返ってきて、どうやら今渋谷駅につくところらしい。ちょうどいいので、そこで少し待っていてもらうことにして、私たちもそこへ向かった。

シーズンということもあって若者たちで溢れる渋谷駅前。そのど真ん中で、私はただでさえ暑苦しいのにとある人物に抱きつかれ身動きをとれずにいた。色々と苦痛である。

「ありがとう……！本当にありがとう綺羅ちやああん……！」

「うん。分かったからとりあえず離れて。人目だらけだから」

「やだ！」

「殴るか蹴る」

「やだ！」

「……」

さすがにここでいきなり暴れだすわけにもいかず、しばらく私は渋谷のど真ん中で玲央にされるがままにされていた。しかも、怪盗団のみんなも後ろで見てる中で。

「良かったな」

「うん……！ 雨宮君もね！」

「惜しくも二位だったけど、悔いはない」

「やったね玲央！ がんばった甲斐あったじゃん！」

「杏ちゃんもありがとう！ 全部綺羅ちゃんのおかげだよー！」

私越しに会話を続けるな。

……結果から言うと、玲央の今回の試験結果は学年10位という非常に優秀な結果となった。目標だった20位以内からかなりの余裕をもつての達成である。もちろん試験結果が発表された日にも同じように玲央には迫られたもので、その時に比べればいくらか締め付けは緩くなっているような気がしないでもない。

私は首に回された玲央の腕を優しく叩いて、「そろそろ離せ」と訴える。そうすると玲央は申し訳なさそうに眉をさげ、すげすげと後退する。

「あ、ごめんつい」

「いいけど……。それより玲央。月末の日曜日の予定は？」

「え？ 特にない、と思うけど」

「ここにいるメンツで花火大会に行こうかって話になつてるんだけど、一緒に行かない？」

「玲央の目標達成祝いつてことで！」

「杏ちゃん…綺羅ちゃん…うん！行きたい！」

「おっけ！決まりだね！」

思つた通り、快く承諾してくれた。それから坂本や真ともあいさつを交わし、いつの間にか自然と輪に加わっていた。この様子なら当日も問題なさそうだ。

「良かったな」

そんな玲央の様子を見ていた私の隣に立ち、雨宮が小さくつぶやいた。

それが、玲央が目標を達成できたことに対する言葉なのか、それとも別の意味なのかは分からなかった。わからなかったけど、私はとりあえず頷いておいた。

自分でもこの気持ちがあるのか、はつきりとはわかりかねているけれど…「良かった」と思っていることは事実だったから。

．．．

.....

おぼろげな世界が見える。

これはおそらく夢だろうが、そうは感じさせないほど鼓動が高鳴っているのを感じる。しかし光景はどこまでもぼやけていて、あたりが深い霧に覆われているかのよう。

分かることは、私は両ひざをつけて地べたに座り込んでいるということ。

目の前に人影らしきものが揺らめいていること。

その人影の目は赤く輝いていること。

なぜかは分からないけど、私にとつてはその人影がそこに居てはいけないものという認識であるらしく、何度も何故、どうして、と問いかけていた。

そして、その謎の人影は、涙を流していた。

私も泣いた。

それから後のことはよく分からなかった、水に垂れた血の様に、赤色が滲んで、にじんで、にじんで、染まって、そまって、そまっていく。

これは、なんだっけ？

.....
「……」

目を覚ます。

何か、嫌な夢を見ていたような気がするが判然としない。なんにせよ気分が悪いし、妙に目がさえてしまっている。とりあえず手洗いにも行こうか……そう思い布団から出た時、そこにあるはずのものが無いことに気付く。

あるというか、いるはずの人間が。

出かけているのか……スマホを見ると時刻は午前3時。いくら明日から夏休みとはいえ、こんな時間になんの用事だ。

少し疑問に思いながらも階段を降りて、少しぼーっとする。立ちすくんだまま、数瞬間立ち眩みがして頭を無意識におさえていた。もしかしたら体調を崩す予兆かもし

れない。

コーヒーでも淹れようかと思っていたが、ここは大人しく寝ておくことにした。
…それが間違いだったと知ることになるのは、もう少し先の話。

明日になっても帰らなかった雨宮の存在に気付いた、後の話だった。

Episode: 2

reach out to the truth

7月24日 日曜日

朝、いつもとおなじように目覚めて傍らを見ると、ベッドの上はまだ空いていた。夜に見たしわの形と一切変わっていないことから、あれから一度も帰ってきていないことがわかる。モルガナも一緒に出ているらしく、姿は見えない。

一階に降りると、相変わらずの仏頂面で新聞を眺める惣治郎がいた。

「おはよう」

「おはようさん。アイツはまだ寝てんのか?」

「ううん。早朝からどこかに出かけてるよ。起きたらいなかった」

「そうか。とりあえずメシにするか」

惣治郎に朝食をもらうことを伝え、顔と手を洗うために洗面台へ。季節に関係なく冷水しか出ない水道だが、夏の朝の気つけにはちょうどいい。

それにしても、本当にどこへ行ったのやら。チャットにも連絡はないし、まさか美人局にでも引つかかって夜遊び三昧なんてワケじゃないだろうな。

雨宮に限ってそれは無いか。

考えても仕方無い、と思考を切り替えて顔をタオルで拭い終えたら、速やかにカウンターに腰かける。既に店の中には芳しいカレーの香りが漂っていて、私の食欲を刺激してきていた。

思わず喉を鳴らしたと同時に、目の前にカレーが盛りつけられた皿と水が差し込まれる。

「いただきます」

いつものように、手を合わせてそう言っていると、惣治郎はぶつきらぼうな返事を返してくる。夏休みに入って時間はゆっくりと流れていくような気はするが、このやりとりは変わらない。

いつもと同じ。

「そういや、聞いたぞ。また試験で一位だったんだってな」

「一応」

「蓮の奴も二位だつて?…すごいじゃねえか」

「本人は悔しがってたけどね」

「たまには、保護者っぽいことしてやらねえとな」

傍から見れば寝起きとは思えないスピードでカレーをかき込みながら顔を上げると、

ニヒルに笑う惣治郎と目が合う。

「どっか飯でも行くか。お前らと、双葉も一緒にな」

食い物を食べながら次の食事の話とはこれいかに。でも魅力的な提案であることは確か。

私は二つ返事で承諾し、ついでにとスマホで雨宮と双葉にも連絡しておいた。もしOKなら今晩はご馳走にありつけるかもしれない。そんな期待を胸に、柄にもなく少し浮ついた気持ちで朝食を食べ終えた。

「ごちそうさま」

「皿洗わなくていいから、着替えて武見先生のところ行つてこい」

「え？・なんで？」

「経過観察だと。すぐ終わるらしいからさっさといつとけ」

…ふむ。特に身体に異常は無いけど、呼ばれてるのであれば行つておくべきか。

渋々ではあるものの、適当に着替えてルブランを出た私は真つ直ぐ武見診療所へと向かった。歩いて2分とかからない近きであるため、なにを考える暇も無く受付までどり着いてしまう。待合室には一人の小さな女の子と、おそらくその保護者の男が並んで座っていた。

軽く会釈をし、受付の前に立ついつものパンクな服装に白衣を羽織った武見の姿

を、部屋の奥に確認する。

少しして書類と、薬か何かが入った小袋を手に持った武見が振り返る。私の顔を見て少し微笑んだあと、窓口まで悠々と歩いてきた。

「少し待ってて」

武見は私にそう言うと、先に待合室にいた二人を呼び出し、小袋と紙を渡してさつさと帰らせてしまった。もう少しクールさを抑えたほうが医者としては適格なのでは、なんて本人の前で言う度胸は無い。

余計な一言が口をついて出そうになると、武見の方から診察室へと迎えられる。

「こんにちは。ちゃんと来たわね」

「一応。経過観察ですか?」

「もちろんそれもあるけど、今日はもう一つ聞きたいことがあってね」

ため息交じりに武見はつぶやき、椅子に座らせた私の身体を診ていく。

初めてここに来た時に処置をしてももらった足の傷は、痕こそ残ったがそれ以外は全く支障がない程度に回復している。傷跡に關しても特段酷いものでは無いし、武見によれば時間経過でそのうち完全に癒えるとのことだった。

検査はあつという間に終わり、問題無しとのお墨付きをいただいた。…もちろん、正

常人人間として見れば問題だらけだけど、と釘を刺されはしたが。

「聞きたいことつていうのは？」

「あなた、彼がここの薬で一体何をしてるのかつて知ってる？」

「彼…？ 雨宮ですか？」

「ええ。この前、いつもとは比べ物にならない量の薬を買っていつてね。流石に適正摂取量を超えるから駄目だって突き返したんだけど、どうしてもつて頼んできて」

「この前つていうのは」

「二日前だったかな…その辺に書類があつたはずだけど、まあいいか」

…そんな話、私は初耳だった。二日前となると、カネシロのパレスとは全く関係のない話だ。そんな時期に、雨宮は今までとは桁違いの量の薬を、武見から買おうとしていたらしい。

普段から特別に薬を融通してくれている武見でも、さすがにその時は違和感を覚えていたらしい。

「同棲してる貴女なら、なにか知ってるかと思つて」

「残念ながら初耳です。いつもの薬も、何に使つてるか知りません。あと、私と雨宮はそういうんじゃないんで」

「そう…。一応見知つた仲ではあるから、彼が何か危険なことに手を染めてないか心配

になつてね」

らしくもない、まるで医者様のようなセリフが出てきたことに多少驚きつつも、私の意識はやはり雨宮のことに向いていた。

「あなたしつかりしてそうだし、ちゃんと彼を支えてあげるのよ」

「はあ」

「健康を第一に考えるよう貴女の口からも言つておいて。相手のことを氣遣うのもパートナーの役目よ」

「別にパートナーではないですけど、分かりました」

「あら、パートナーじゃなかったらなんなの？」

「…戦友とか」

その日の夜、いつものようにルブランで惣治郎の手伝いをしていたが、いつまでたつても雨宮は帰らなかつた。チャットにも音沙汰無し。双葉も同様。せつかく今夜は豪華なダイナーにありつけると、私も惣治郎自身も楽しみをしていたというのに。

呆けた面でやつてくる常連のおじおばも、今日は雨宮が不在なことを知ると少し寂し

そうにしていたし。まったくどこで油を売っているのやら。

流石にほぼ丸一日姿を見ず連絡も来ないととなると心配にもなるつてもので、惣治郎が今電話をかけているが、やはり出る気配は無い。

「夏休みだからってハメ外してるんじゃないだろうな」

「雨宮に限つてないと思うけど…」

「お前は本当に何も聞かされてないのか」

「うん、何も」

やれやれと煙草に火をつける惣治郎。心なしかいつもより吸うペースが早い。口には出さないけど、やっぱり心配しているんだろう。いつもの様子から考えて、どこかで遊び惚けているとも考えずらいせいで、どこにいるのか見当がつかない。

一応杏や坂本にもチャットしてみたが、そっちにもまだ返事がない。

「双葉、まだ寝てたの？」

「ん？ああ…まだ今日は部屋から出てねえな。あいつも夏休み気分なんだろう」

「双葉には夏休み関係ないでしょ…。ちよつとたたき起こしてくる」

一旦エプロンを外して、私は惣治郎の家に行つて双葉を起こしてくる。

と、惣治郎にはそう伝えたが、実際は本当に部屋に居るのか確認しに行く意味合いが強かった。いくら双葉とはいえ、最近は生活リズムも改善しようと頑張っていたし、割

と朝型に戻りつつあったのだ。そんな双葉も一日音沙汰がなく、しかも姿も見られていない。

：よく分からない不安感が胸に募る中、早足で家に向かい鍵を開ける。そして中に入って階段を駆け上がって二階に行き、双葉の部屋の扉をノックする。しかし、応答はなく声をかけても返事は返って来ない。

いつものように眠っているのだとすればそれも自然なことだが、朝から一度も姿を見ていないという事実が、妙な胸騒ぎを呼ぶ。

「双葉」

呼びかけながらドアノブに手をかけると、それは驚くほど軽く回って開かれた。思っていないタイミングで押し開いた扉とともに一步部屋に踏み込んで、そう広くない部屋を見回す。

いない…。

一応押し入れの中も見たがもぬけの殻。

おかしい…。双葉が何も言わずにどこかに遠出するとは考えられない。ひたりと背中を冷たい汗が伝って、少しづつ鼓動は早まっていく。

それから私は家中を探し回った。けど、どこにも双葉は居なかったし…最後に確認した玄関には、双葉がいつも履いている靴が置かれていなかった。つまり自分の意思で外

に出たことは確かで、もしかしたらどこかで道に迷っているのかも。

「いや、それなら連絡がこないことへの説明がない。スマホを落としたっていうのも無くはないが…。

「…どうしよう」

普通ならいち早く惣治郎にこのことを伝えようと思うだろう。私も実際そうしようとした。

でも、もし双葉がないことの原因が私にあるとしたら。

というかそうとしか考えられない。このおかしな状況、私がいることで起きた世界の歪みが影響している。

もし双葉の身になにかあれば、その時は私の責任。世話になっている惣治郎に負担をかけさせたくないし、嫌われたくもない。そんな思いが一瞬の躊躇を生み、しばらくその場で立ち尽くした。

でも、やっぱり惣治郎に何も言わずすぐに解決できるようなことじゃないから、大人しく伝える方がいいだろう。そう思った私は家を飛び出し、すぐさまルブランにいる惣治郎に事態を説明した。

家に双葉は居なくて連絡も取れず、ついでに雨宮も昨日の早朝から行方不明、と。

惣治郎もどうしていいか分からない様子だったけど、とにかく今日は店を閉め、心当

たりのありそうな場所を手当たり次第に探してみるようになった。

私は真つ先にメメントスへと赴いた。この世界に起きる異常事態は、たいてい認知世界がからんでいる。もし今回がそうなのであれば一刻を争う事態になりかねない。

焦燥に駆られながらも、電車に乗って渋谷に辿りついた私はすぐにナビを起動しメメントスに入った。

当然、入つてすぐの場所には人の姿は見受けられなかった。それどころか人の気配すら全くない。もともとこんな場所だつていうのは分かつてるけど……こんなに静かだつただらうか。

怪訝に思いながらももう少し奥を探してみようと足を踏み出したとき、突然現れた気配に気づいて振り向いた。

そこには、群青色の衣装に身を包んだ、背の低い少女が二人立っていた。

「ほう……我らの気配に気付くとは、やはりキサマただの凡愚では無さそうだな」

眼帯をつけた片割れが尊大な態度でそう言うと、もう片方が静かな口調で続ける。

「カロリーヌ。今は本題を」

「分かっている。そう慌てるな、ジュステイーン」

開口一番偉そうな口を叩いてきたほうが、カロリーヌ。それとは正反対の、物静かで冷たい口調の方が、ジュステイーン。

彼女らはどちらも若い少女の姿をしており、外見は瓜二つ。特徴的な色の看守服は、とても見た目通りの年齢の少女には似つかわしくない。が、私は彼女らの正体を知っている。自分の前に顕れたことに対する驚きはあれ、それほど衝撃的な出来事では無かった。

「我らの正体についてはいまは捨て置き。貴様の探し人の場所を教えてやる」

…なぜこの二人が私に有益な情報を教えてくれるのか。その理由は分からないが、向こうにもなにやら事情があるらしい。

カロリーヌとジュステイーヌ。この二人は、ジョーカーと特別な協力関係にある人ならざるもの。ベルベットルームと呼ばれる、夢と現実の狭間にある世界で、ジョーカーのペルソナを合体させたり生みだしたりと様々なサポートを行っているはずの存在。

それがわざわざこうして表舞台に出向いてきたということは、それ相応の事態ということ。

「かの賊はいま、貴様の認知世界に囚われている」

「…」

…。

一瞬時が止まったかのような錯覚に陥るほど、私にとってその言葉は想定外の斜め上をいくものであった。

∴私の認知世界？

「あやつは貴様の素性を知らうと、無謀にも本人に内緒でパレスへと出向いたが、失敗に終わったようだ」

「失敗？」

「安心しろ。死んだわけでは無い。ただ、認知世界の中で囚われているに過ぎん」

色々と情報量が多くて混乱しかけているが、ひとまずは冷静になつて今重要なことだけを聞くことに徹した。

勝手な行動をしたことに対する怒りも、信頼され切つていなかったことに対する∴これは、悲しみなのかは分からないけど、それらもすべて今は捨てて。

「どうすればそこに行けるの」

「方法はいつもと同じようにナビを使って、です。必要な情報は∴場所が世界。キーワードは、ゲーム」

カロリーヌとジュステイーヌの二人から情報を教えてもらった私は、惣治郎に『見つけたから連れて帰る』とだけ連絡をいれ、渋谷でイセカイナビを起動した。言われた通

りのキーワードを入力すると、いつものように異世界へ入り、周囲の景色は一変した。ここにジョーカーがいるというのなら、私に秘密で、わざわざ深夜に出発し、そして朝になる前に帰る算段だった：といったところなんだろう。

：まあいい。余計なことは考えない。ジョーカー達を連れ戻して、それで終わりだ。後にも先にも、なにも続かない。

一応、ここは私のパレスってことになるらしいが、街のど真ん中でナビを起動したにもかかわらず、周囲には建物一つありやしない。ただひたすらに、何も無い真つ暗闇な空間が広がっているだけ。

こんな場所をどうやって探せばいいのかと少し迷ったけど、少し進むと暗闇の中に不自然に浮かぶひとつの建物らしきものを発見した。

いつも俯瞰で見ることがないそれがルブランであることに気付くのに十数秒はかかった。

少し雰囲気は変わっているものの、内装もそのまま。変わったことは特になし。二階も覗いたけど、誰もいなかった。

早々にその場を後にしようと、ルブランの扉を開く。すると何故か、私が入ってきた暗闇が広がる世界では無く、見慣れた秀尽学園の教室の中に出た。

空間のつながりなど、もともと歪みがもとになってできた認知世界においてはさした

る影響はない。もう一度来た道に戻ろうと振り返ってみれば、そこに扉は存在していなかった。ジョーカーを見つけたことが出来ても、連れて帰るのに骨が折れそうだ。

モナが居なければ双葉もない。手探りで探索するにはパレスは少々広すぎる。おまけに道のつながりまで不安定ときたら、迷うのは必然か。ジョーカーも、もしかしたらどこかをずつとさまよいつづけているのかもしれない。早く見つけないと。

学校の中を歩き回りありとあらゆる場所を探しまわったけど、このパレスの中で、もうずつと人の姿を見ていない。認知存在ですらだ。

…一体このパレスはどういう経緯で、どんな認知を表しているんだ？自分の頭の中のことらしいが、まったくもって見当がつかない。

そんなことを考えながら一階、二階と探索を済ませて屋上へと上る。

そしてドアノブを回して扉を開けた瞬間、その先に広がる光景が大きく歪みだして、気が付いたころには学校の風景が、どこかで見えた覚えのある城のものに変わっていた。案の定、後ろを振り返ってもドアなどはない。

周囲には矮小なシャドウの気配が蠢いている。雑魚だから気にする必要は無いだろうけど、これも全てしらみつぶしに探すのかと思うと自然とため息が漏れた。この調子では惣治郎にさらなる心配をかけてしまう。

そんな焦りを感じ取ったかのようなタイミングで、私の目の前にいきなり扉が現れ

た。木製の、どこかなつかしきを感じさせる何の変哲もない扉。少しサイズが大きいのが気になったものの、躊躇せず中を確認するためドアを開いた。

『いきげんよう』

「っ!？」

その瞬間、ドアの向こうから伸びた細く白い腕が私の首を掴み中へと引きづり込んできて、そのまま後頭部に鈍い痛みが走る。一瞬反応が遅れたが、その次に腹部に向けて突き出された攻撃は相手を蹴ることなどでなんとか回避に成功。ついでに首を掴んでいた腕も離れた。

数歩分の距離を空けて一瞬の硬直。その隙に見えた相手の姿は、私と瓜二つの顔をしていた。

恐らくは私のシャドウか。しかし、赤黒い何かで汚れ切った制服を纏い、不気味な笑みを浮かべるソレを、自分であるとは到底認められなかった。

刹那の逡巡。それ以上には息つく暇も無く、ひたすらに純粋な殺意をもって振るわれる刃を、寸前で躲し続ける。

そのナイフは清々しいほどに真つ直ぐ、私への殺意を伝えてくる。こいつが何を思っているのかは分からないけど、私のシャドウなのだとしたらこんなにも躊躇なく殺そうとしてこないはずだ。本人とシャドウは表裏一体の関係。どちらか

が死ねばもう片方も死ぬのだから。

「君はなにっ？何が目的なの……！」

顔のすれすれまで届いたナイフを避けながら絞り出した問いは、相手の動きを止めてくれた。そして、そいつはこう答えた。

『わたしはChara。真なる、おまえ』

不気味な程赤く煌めく瞳が、私の視線を射抜く。自身をCharaだと名乗ったソレが軽くナイフを持った左手を振ると、見る間にその刀身は真つ赤に染まっていく。

「雨宮は、ジューカーはここに居るの？」

『いるとも』

「そう」

その言葉を聞いて、私は躊躇なく仮面を外した。

どつと、周囲の空気が重くなる。私がするように、目の前の二セモノが決意を心に宿したのだろう。すれ違っただけですべてを粉々にしてしまふような、そんな危うい決意。この世界に、私と彼女しかいないかのような錯覚。生物的本能が鳴らす警鐘がうるさい。

それでも私は一步も引かない。なぜならそれが、私にとって幾度も経験してきたものだから。たとえそれが自分に向けられてこなかったものだとしても、不思議と私の心は

気圧されなかった。

相手がどれだけ強大で、恐ろしくても、自分の意志を貫く決意が私にはある。

事情は知れないが、目の前のこいつがこんな行動をとるのにも訳があるのだろう。少し前までの私なら躊躇なく応戦しただろうが……あいにく私は人としての弱さを手に入ってしまったようで。

仮面は外しペルソナを心に宿した状態にはなったものの、武器も構えずに立ち尽くす私に、敵……シャドウは、躊躇なく決意を込めた一撃を放つ。並の物であれば今ので決着がついていたと思えるほどに、鋭く迷いのない攻撃だったが、私はそれを一歩下がることで回避した。

その余波が肌に触れたかと思うと、今度はとても目では追えない速度でもう一度斬り返してきたナイフが眼前に迫る。

固い金属音が鼓膜を刺す。

敵のナイフは、ペルソナとして召喚したわたしのナイフによって動きを止めていた。もつともこの攻撃を防御することが出来たのは、ひとえに私の意志の力の強さによるものであって、普通にできることじゃない。

「大人しく殺される気は無いよ。君が詳しい理由を話さない限りは」

『きつと理解しようとしな』

「話の内容次第」

…もちろん話の内容にかかわらず、毛頭殺される気などないわけだが…何でも良いから今は相手が私に対して返答をしてくれる状況を作り出したかった。

狙い通り口は開いてくれたけど、それで攻撃の手が止まるわけじゃなかった。直撃が死を意味する凶悪な刃を避けながら、問答を続ける。

『私なら、考えたことはあるはずだよ。この世界がなんなのか。自分はどうかやってここに存在しているのか』

「今は、そんなことどうでもいい。『計画』が上手くいけばそんなことは全部関係なくなる」

『そうだね。でも私は考えていた。どうしてかわかるかい』

挑戦的な笑みを浮かべ、シャドウは私の目を見据えた。

まるでこの世の深淵そのものかのような、深く暗いその瞳で。

『私には、『過去』の妻木綺羅としての記憶がある』
「…」

低く、でも不思議と通る威圧感のある声が、雑音のないこの場に響いた。少なからず、その言葉は私にとって重要な…ひいては私たちの未来にとって、聞き捨てならないものだった。

過去の私と聞いて、純粹に数年前の記憶の事とは思わなかった。この世界が「ペルソナ5」の世界だというのは間違いないはずで、そうなら必ず私たちの動向を見ている何者かもあるはず。そしてその何者かは、世界をある程度自由に操作できる。

気に入らなければリセットして、それを繰り返して、たどり着いたゴールの先はまた一番はじめのスタートライン。私が居る世界はそういう場所のほず。

つまりここでいう過去とは、なんらかの理由で世界がリセットされる前の、記憶。すぐ、そう思った。

私がそう疑問を口にする、彼女は頷いた。

『私自身がそうという訳ではないのだけど。ただ漠然と、そうだった事実が記憶の中にあるだけ』

「それで、どうして私を襲う理由になるの？」

こうして問答を続けている間にも、攻撃の手は一切緩めてこない。本当に、わずかな油断が命取りになる。

『気にはならない？その記憶っていうのが、どんなものか？』

「ならないね」

『このままいけばお前はゲームに負ける。その計画は失敗するんだよ』

ただ事実だけを述べるかのような淡々とした口調で告げられた言葉は、やはり簡単に

は信じられない。しかしその言葉の端々に感じられる自信が、私の口について出そうになつた否定をほんの少し押しとどめた。

信じることはできないが、頭からはねのける気にもならない。

『妻木綺羅がこの世界に存在していることはイレギュラーでもなんでもない。ただの予定調和で、そのレールの上から、誰も抜け出せていない。まだ、私でさえもね』

「まだ?」

『そう。今からは違う』

ピタリと、背中になにかが触れたような気がした。

それはどう考えても気のせいだ、背後には何も無い。ただ、戦わずにやり過ぎすという私の甘い考えを全否定してくる彼女の視線が、私に逃げの選択などないと突きつけてきただけ。

生半可な対応ではやられる。しかしここで手を下げれば今までのわたしとなんら変わらない。彼女の正体を完全に掴み切るまでは、安易に攻撃したりはしない。

私は斜め前に踏み出しシャドウへ向けて本物の殺気を飛ばす。それによつて生まれた、本当に、僅かな隙をついて脇をすり抜けていき全速力で回廊を走る。逃走を図るにはいささか見通しが良すぎる一本道だが、距離はどんどん離れていく。

長い道をひたすらに走っているとようやく曲がり角を見つけた。その先は眩い光に

包まれており、先がどうなっているかは全く知れない。でも他に行く道もなかったは、意を決して光の中へ飛び込んだ。

閉じた目蓋の上から降り注ぐ光に遠慮しつつ、少しづつ目を開いていく。

そこは、さつきまでの光景とはまた一線を画す、開けた場所であった。太陽が燦々と頭上で輝いている。足元にはたくさんの花が咲き誇っている。ぽかぽかとした陽気とさわやかなそよ風が、ことさらのどかな雰囲気を助長していた。

また随分と脈絡のない場所へと移動してきたなと思ったのも束の間、鼻をつく血の匂いで感覚が尖る。

気配のした方を振り返ると、景色に似つかわしくないほど真つ黒な人影がそこに立っていた。

遠目から見ても分かる。かなりボロボロだが、あれは私が探していた人そのものだ。

「…ジョーカー！」

「つ……！」

私が生をかけると、ジョーカーは緩慢な動きで武器を構えた。警戒した視線はおそらく、シャドウのほうの私を見た後だからだろう。

「…本物だよ。帰りが遅いから迎えに来たんだよ」

迎えに来たとはいっても、私自身帰り道がどこかさっぱりわかっていないのだけど…。

ジョーカーは私の事をシャドウではないと認めると、ほっと脱力して背後に振り返り手を振った。すると、どこに隠れて居たのかほかの怪盗団の面々もぞろぞろと顔を出してきた。

しかし再会の喜びよりも、みんなはどこか申し訳なさそうな表情で、私と目を合わせうとしない。見る限り全員かなり疲弊しているようだ。

…やれやれ。

「とりあえず、帰ろう。ここは危なすぎる」

説教もなにも全部無事に帰ってからにすればいい。…惣治郎も待つてる。

殆ど無言のまま、私はみんなをつれて先頭を進む。花畑を抜けた先は若い木々が並ぶ林となり、申し訳程度に舗装されているように見える道を、ただひたすらに歩いた。

このパレスに入ってきたときは光景が様変わりしてしまっているせいで、出口とい

うものか何なのかも定かではない。それでも、進まないわけにはいかない。私には皆を守り導く義務がある。

一切会話を交わさずに歩き続けていると、やがて木造の質素な小屋を発見する。一度目に学校に飛ばされた時も、その後鴨志田のプレスそっくりの場所に出た時も、その後私のシャドウと思しき存在に引きづり込まれた時も、空間を移動した時には何かしらの扉をくぐるのがキーになっていた。

中が気になったわけでは無く、そういう思考で小屋の扉を少しだけ押し開けると、中から白い光が漏れ出てきた。狙いは正しかったらしい。

「…多分この中に入ったらまた別の場所にいくだろうけど、どこに出るか分からないから警戒しておいて」

そう言つて、私が一番最初に扉を開けてその先へと入り込んだ。

…それから先は、かなり長い道のりになった。

まず小屋を抜けた先は雪の降り積もる謎の寒地で、そこを抜けた先は日が当たらず常に薄暗い湿地。やたらと屋外が続くなど思っていたら、今度は武見診療所そっくりの場所に出たり…とにかく滅茶苦茶な場所だった。

そうして色々な場所を巡っていくうちに、一番初めに入ってきた、暗闇で覆われた何もない空間に出た。

そして、おあつらえ向きに、堂々と鉄製の扉が私たちの正面：数十メートル先に鎮座していた。今までの場所と比べて間違いなく出口に近い予感はある。でも、罠の可能性もある。

慎重に、扉に向かって一歩踏み出す。

ナイフを握る手に力が入る。

ほとんど無意識だったその行動は、本能による脊髄反射。

暗闇の中にぼつんとある扉の前、ゆっくりと滲むように人の姿が形成されていく。

見覚えのあるナイフを持った、私と同じぐらいの背丈で、真っ赤な瞳が異様な輝きを見せている、シャドウ。

私は舌打ちしたくなる気持ちをぐつとこらえ、前だけを見据えたまま声を張り上げる。

「私が引きつけるから、先にあの扉まで走って！」

私のシャドウ相手に、今の皆が太刀打ちできるとは思えない。そして、私も皆を守り切れるとは限らない。さっさと戦線を離脱してもらうのが最善策だ。

Charaを隣に召喚し、私は左手にナイフを持ち、右手で銃を構える。

「…走って！」

私の声とともに弾かれた様に走り出す仲間たち。

正確に狙いをつけ放った弾丸を、現実離れた速度でシャドウは躲し、脇を通り過ぎようとするジョーカー達には目もくれずに、私に肉薄してきた。

とつさにバックステップでナイフの間合いのギリギリ外へ出るが、シャドウはその場でナイフを持っていないほうの手を握る。

するとシャドウの背後に無数の赤い刃が展開され、その切っ先達と目が合う。

雰囲気の変化に気付いたみんなが、扉の前で私の方を振り向く。早くいけと言つてやりたかったけれど、あいにくそんな余裕すら今は無かった。

『話の続きはいつしてくれるの?』

話?

そんなもの今は不要だ。

殺されないことだけ、考えないと。

反撃さえしてしまえばそれは、大したことでは無い。でも私は、まだ彼女に手を加える気にはなれなかった。自分と同じ姿をしているから? 違うが、とにかくそうするべきという気がする。

ナイフの波状攻撃をいなしながら、背後に回り込んだCharaにシャドウの動きを止めてもらうことを狙ったが、体格差があるせいで力業では押し負ける。…ナイフさえ使えれば。

シャドウは私の姿をしているだけあって、決意の力を使えているし、一撃一撃も鋭く油断ならないものばかりだ。：ただ、要因までは分からないが、妙な感じがする。手を抜いているわけじゃなさそうなのに…。

『このままだとお前は負ける。一番勝ちたいと思っっているあいつらに。そうなれば私の存在だつてなくなる』

：まだだ。

行動は殺意剥き出しなのに、言動がそれに合っていない。本当に私を排除するつもりなら、言葉を交わす必要すら無いはずなのに。

それに、どこか彼女の表情は苦し気だった。張り付けたような笑みが仮面となって、その真偽までは分からない。

寸でのところで回避したナイフが怪盗服を切り裂いた。ギリギリ肌には触れていないが、左肩のあたりが少し風通しが良くなった気がする。

「つペルソナ…！」

Charaを心の中に呼び戻し、反射神経を瞬時に高め、周囲を囲むように展開し一本ずつ射出される紅いナイフを転がりながら避ける。

態勢を立て直すとともに直接振りかざされたナイフは横に跳んで回避。どうせ当たる訳が無い、とはなから諦めて放った私の銃弾はあつけなく避けられたが、ほんの一瞬

…私が立ち上がるまでの時間ぐらいいは稼げた。

…やはり防御という手段がとれないのはそれなりに立ち回りづらい。避けられない攻撃があつても、決意を使わずにナイフで受ければ刃ごと身体を引き裂かれるだろうか。

「そんなに話がしたいのなら一度武器を置いてくれないかな」

当然ともいえる私の問いかけはまた当然のように無視され、戦闘は継続。チラリと扉の方を見やると、既にみんなは扉を潜っている。私も、今はこれ以上留まる理由はない。

四方から飛び交うナイフを避けながら前進し、シャドウに向けてナイフを振るう。もちろんこれはただのフェイクで、敵が回避行動をとろうとして生まれた一瞬の隙に扉まで走る。

一心に扉を目指して駆け、ドアノブに手をかけた瞬間、危険を感じ少し身をよじる。するとおそらく鉄製であろう扉を、まるで砂の中でも進むかのような勢いでナイフが通り抜けていった。

血の気が引く思いを抑え今度こそノブを回して扉を開けようとした私の手に目掛け、ナイフが飛んでくる。

咄嗟に手を引いて直撃は避けたが、そのせいで扉のノブが破壊されてしまい、力づくでぶち破る以外に開ける手段がなくなってしまった。

「…ああもう」

そんな暇など与えてくれるはずもなく、振り返った時にはもう目の前までシャドウが迫っていた。

ナイフは避けられたがもう片方の手で首をつかまれ、後ろの扉に押し付けられる。…だが、そこで何故かナイフでの追撃は放ってこなかった。

『聞いて』

それどころか、シャドウは思いもよらなかつたセリフを連ねた。

『私は自分の身体を完全には制御できていない…こうして手を止めて話しているだけでも精一杯』

早口でまくし立ててくる間にも、首を絞めてくる力は際限なく強まっていく。解こうと思えば解けるだろうが、相手の言葉を今は待つ。

震える手で少しづつ持ち上げられていくナイフからは、目を離さずに。

『ここは、ただのパレスとは違う。私も、ただのシャドウじゃない。きっとそこに、計画を達成するための鍵が、ある』

気管が圧され少しづつ視界もぼやけてきたが、まだ私は話を聞き続ける。この機を逃せば次は無いかも。

『このパレスを調べて。それから…ジョーカー達のことも』

ジョーカー「達」？調べる？

疑問は尽きない。が、そろそろ互いに限界に近い。お話はおしまいだ。

真つ赤に煌めくシャドウの瞳の奥に、確かに金色の輝きを見たかと思えば、振り上げたまま静止されていたナイフが、私の顔に目掛けて振り下ろされた。

そのままの状態では避けられないため、首を絞めていた腕に肘を打ち力が緩んだ隙にできる限り身をよじることで直撃は回避できた、けどまだ腕は完全に離れたわけじゃない、そのまま扉とは反対方向に力任せに投げ飛ばされる。

転がりながらノールックで発砲し、追撃警戒で指を鳴らして炎を眼前に放つ。

ダメージを与えるのが目的ではない。ただ、こちらからも能動的に動かなければどう考えてもいなしきれない。

今の彼女からは、なにかたかが外れてしまったような感じがする。

「Chara!」

ぬるい抵抗はかえって隙を生むだけ。ジョーカーとの特訓の時の様に、相手を信頼して全力で攻撃する。

火炎魔法のスキルでけん制した後は、私とCharaで挟み込むように位置取り相手を意識を割かなければいけない場所を増やす。そうして少しでも扉に迫り着くための時間を稼いでいく。

シャドウは私たちの攻撃にも対処しつつ、的確にナイフを飛ばしたりして反撃を行ってくる。それ以外の攻撃方法が見られないのは、果たしていいことなのかどうなのか。言い換えれば、手の内を隠されているということとも考えられる。

『やつぱり面倒だね、わたしは』

さつきまでの声色とは見違えた獰猛な声。シャドウは手に持ったナイフをほぼノーモーションで勢いよく振り上げた。

その刃は私のナイフに触れ、体勢を大きく崩されそうになる。このまま隙を晒すぐらいであれば、いつそナイフを持つ手は放してそのまま勢いに身を任せてしまった方がいい。

一瞬のうちにそう思い至り実行。ナイフは捨てて来る追撃をかわすために意識を集中する。

『死んでよ』

…が、いつまでたつても想定していたような攻撃は来なかった。かわりに眩かれた深い闇を含んだ呪詛の言葉は、認知世界というこの世界では闇を纏って私の耳に届いたような気がした。

…いや、実際に飛んできた。身の毛もよだつようなその言の刃は、間違いなく視覚化して私を襲ってきた。

言葉は音となりシャドウの口から発せられ、否が応でも私の脳に届く。迫る刃は避けられても、音を避けた経験は流石に無かった私は、呪いの言葉をそのまま丁寧に受け取ってしまった。

音は波となり、水となり、霧となつて体内へ沈み込んでいく。やがてそれは魂へと届き、呪いは生を蝕んでいく。

『死んで』

どうして。

『死んで！』

どうして。

私は彼女に何か恨まれるようなことをした覚えはないが。

いや今は、そんなことを考えてる場合じゃ。

無いか。

だんだん頭がぼんやりしてきたせいかもしれない。まさかこれが言霊とでもいうつもりなんだろうか？

視界が沈み身体が崩れる。

似た感覚を最近も味わった気がする。たぶん金城のパレスの中でだ。

向こうは、強い妬みが生気を奪っていくような感覚だったけど、こっちは私への純粹

な殺意だけが心に突き刺さってくる。

そこに確執や理由などなく、ただひたすらに真っ直ぐに、私という存在を壊そうとしている。それ故に呪いは濃く鋭い。まともな人間であれば一言聞くだけでゲームオーバーだったか。

『はやく、死んで』

…だけど、私は。

「嫌、だ」

その呪いの言葉に打ち勝った。私を排除しようとする強い意志に、より強い意志で抵抗した。

お前のために死んでなんてやるものか。壊れてなんてやるものか。わたしは、私のやるべきことを終えるまで、負けるわけには。

「私は死なない」

口にして、今、自分が負けることなどあり得ないのだと、確信した。

おぼろげで不完全な決意は少しずつ私の中で形になって。

カネシロパレスでの出来事…あの呪怨攻撃を受けた私たちは、私一人のダウンを除いて無傷だった。

予告状を出して乗り込んだあの日、クイーンによれば私がペルソナを召喚して、呪い

を一手に引き受けたと言っていて、ジョーカーによればその時のペルソナはCharaでは無いように見えたと言っていた。

その日から私の中で、ずっと燻っていた何かがあった。もつと正確に言えば、カネシロパレスであの謎の触手との邂逅を終えたその時から。

『やっぱり、そうなんだね』

シャドウは意外そうに言って、口端を上げる。

不可避かつ即死。音とは、凶悪な攻撃だったが、私には無意味だった。為すべきことを為すまでは終われない。私の中にあるもう一つの：正真正銘私自身の、決意がそう囁いている。

為すべきこと。

歪んでいく世界線で起きうる危機から、みんなを護ること。怪盗として、世直しに協力すること。

そしてこの世界を緊縛から解放すること。

なにより、外の世界に本当の私を見せつけること。

目の前に立つ私はまさしく、外の世界が求める私自身の姿だろう。暴力的で、残忍で、血みどろで、狂っている。そんなわたし。

「違う」

そうじゃ、ない。

『本当にそう?』

心でそう強く願うと、目の前の私は否定してくる。

言葉で。体で。心で。全てが私の意志を否定してくる。

『我は、汝』

「違う」

『血と憎しみに塗れた姿こそ私に相応しい。お前みたいな偽善で着飾った姿なんて似合わない』

「違う……!」

『お前が使うことを嫌っている力はなんだ?使わずにいれば、見ないふりをしていれば、それがお前の力じゃないと証明できるとでも?そうはならない。その力は…何かを傷つけ壊すことしか能のないその力は、ずっとお前の中にある。ずっと昔から、お前の魂に初めから』

目を背けているわけでも、認めていないわけでもない。確かにこの力は私の中に初めから在ったけど、でもだからって、それで私自身の在り方が決められる筋合いはない。

求められていなくても、私がこう生きたいと願ったんだ。誰とも知らない他人にそれを歪められたくはない。

少しだけ視線を落とすと風を切る音がした。

気付くと、鼻が擦れ合うほど近くに私の顔が寄っていた。

『お前が生きたいと思うように、私はお前を殺したい』

だから、死ねと？

冗談じゃない。

そんなの、“前”となにも変わらないじゃないか。プレイヤーの決意を宿し、世界を壊す。そうやって手に入れたはずの世界も、結局は完全な解放には至らなかった。

ただ自分自身を失ったばかりで、何も得られやしなかった。

肌を刺す殺気が一気に増したのを感じ、咄嗟に後ろに飛び退きシャドウとの距離を離す。さっさと帰りたいところだが、今のままだとシャドウの背中側にある扉まで走ることすら難しそうだ。

どうにかして隙を作る必要がある…どうやって逃げおおせるか…シャドウが手をかざすのを見ながらそのことだけを考えていた。

ただ隙を作るだけでいい。それなら…。

「Chara！」

仮面を外して、手をかざす。

向こうもそれに応じて無数のナイフを放ってくるが、それらは軽々と躲してお返しと

ばかりに、火炎、氷結、疾風、電撃の四属性魔法を連続で放つ。ジョーカーとの特訓でもここまで連続で、しかもフルパワーでぶっ放したことはない。

当然のようにこっちが放った魔法も向こうのナイフを一振りでかき消されてしまうが、なにもしないだけでは生まれない隙が生まれた。

そのままシャドウ本体に詰め寄り私への意識が集中したところで、ペルソナを使って本気で命を狙ったナイフでの一撃を放つ。

勢いよく振り切った一撃は、シャドウの私をもつてしても本気で避けなければいけないと思わせる威力のものであったらしく、今までになく大きな動きで回避行動をとった。それを予見していた私は速度を落とさないうまま一直線に走り、そのまま出口（多分）の扉まで走る。

……ただ、距離とスピード。両方をみて考えても少し届かない。一撃はやり過ぎす必要がある。

案の定背中鋭い殺気が触れ、扉まであと少しといったところで振り向いた。

「
」

眼前に迫る真っ赤なナイフ。

それに対して、なにを思ったか手を翻した私は見た。

純白の翼をたなびかせた何かの背中を。

そして私は言った。

自分ですら認識できなかったが、確かにその名前であろう言葉を。

そして、“それ”が生み出したであろう光の壁に、シャドウが放ったナイフが弾かれていくのを見届けた私は、急いで扉の先へと飛び込んだ。

・ ・ ・ ・ ・

ぐるぐると歪んでいた視界が徐々に元通りになつていく。気が付けば、そこはナビを起動した渋谷駅前の人ごみの中だった。こんな場所にいきなり現れて大丈夫だったろうか……と心配するよりも先に、辺りを見渡してみんなを探す。

すると、軽い足音が近づいてきて私の胸に何かがぶつかってきた。腕の中にすっぽり収まつてきたのは、体を震わせた双葉だった。

「綺羅あ……！」

「ごめん。思つてたより遅く……」

「ちがう……謝るのはわたしらのほうだ……！」

かぶりを振る双葉。その向こうから、みんなも申し訳なさげな、どこか気まずい表情で歩いてきた。当然と言えば当然だが、そうされるとこつちも居心地が悪くなつてしまう。説教をするのは雨宮だけでいいし、ここは穏便に済ませよう。

「気にしてないよ、みんな。無事でいてくれてよかった」

慣れない種類の笑みでなんとか気を紛らわそうと試みたけど、やっぱりぎこちなかったのか空気はさほど変わらなかつた。

雨宮が一步出て事情を説明しようとして口を開きかけたが、それを手で制す。

「いつ知ったのかは知らないけど、私自身のパレスなんて私に相談できるわけなかつた。これは分かるから黙っていったことにはついては不問。気になることについては、また明日に」

もう遅いし、とスマホを見やると、それに倣ってみんなもスマホを見る。

雨宮は昨日の夜中から姿を消していた。私に黙ってパレスを調べようとしたからだろう。つまりほぼ丸一日休んでいないということになる。

色々と言いたいことは募るが、ここは一旦休むべきだろう。

「それでいいよね?」

「わりいけど、そうさせてもらうわ…。なんも頭働かねえし…」

「うん…わたしも…」

無理やり言いくるめてその場は解散の流れとなり、残ったのは雨宮と、モルガナと双葉だけになり、気まずい沈黙が流れる。

普段からやかましいと思っていた街の喧騒は今日も変わらないどころか、一層増して喧しく思える。もう少し静かなところで、ゆっくりと話がしたい。ちらりと顔をみやる

と、双葉は言わずもがな、雨宮も相当疲弊している様子だった。

…本当に、よく無事だったな。

心の中でそう呟いた。きつと私のシャドウも本気ではかからなかったんだろうけど、本当によく生き延びたものだ。

「雨宮、ちよつと止まってる」

「？」

念のためにといつも懐に忍ばせてある絆創膏を取り出し、小さいが痛々しい、こめかみのあたりにある新しい切り傷の所に貼ってやる。

「…すまない」

「いいよ。で？惣治郎になんて言い訳するかは考えてあるの？」

「いや…全く…」

「心配してたよ。とりあえず謝つとした方が身のためだろうね」

雨宮は深く頷き、前髪をつねった。何か考えてるときの癖だが、今回は帰った時のことを考えているに違いない。

「なあ、ツマキ…オマエさえよければ、今日の内に、今回のことについて話し合っておきたい」

「私は良いけど、そっちは大丈夫なの？かなり長い間向こうに居たんでしょ」

「気にするな。こんなに気になってることが多い状態じゃあ、満足に眠れないからな」
 その肩に前足をのせて顔を覗かせているモルガナが私に言う。雨宮もそれに頷いたが、双葉は既に歩きながらにして眠りに落ちかけていた。事実、頭は私の肩に完全に預けられている。

おそらく雨宮とモルガナも頭は働いていないだろうが、私としても話し合っておきたことはたくさんある。それらを全てスッキリさせておきたいという気持ちは、私も同じだ。

私のシャドウ。パレス。これだけでも予想外の要素だというのに、その中身までもが謎に包まれ切っている。

惣治郎に帰宅の連絡を入れながら、私はひそかに軽くなつた懐を手で探った。

飛ばされたナイフも置いてきちやったし。あまり気は進まないが、あのパレスにはまた赴く必要がある。

「『このパレスを調べて。それから：ジョーカー達のことも』」

それに、私のシャドウが言ってきた言葉もある。その気がなくとも、向こうを調べる必要はありそうだ。

紆余曲折あつて双葉を先に家に送つてきた私は、ようやくルブランへと歸つてきた。扉を開けて中に雨宮と惣治郎がいることを確認した時には、店先の看板はとつくに閉店時の向きに変わつていた。

雨宮は平身低頭で惣治郎に謝つていたが、惣治郎はさほど気にしてない様子を装つていた。私を送り出したときにはそこそこ焦つた顔が見れたものだが。そんなことを思つていと惣治郎がじろりと眼鏡越しに睨んでくる。余計なことは言うなど。

「ま、別に大事無くてよかつたね、惣治郎」

「休みで気が緩むのは分かるがな。遅くなるなら連絡は入れろ」

「すいません…」

「すまなかつた…」

小さくため息をついた惣治郎は、カバンから出てきたモルガナを見て少しだけ表情を緩め、おもむろにエプロンを取り出した。

「…で、腹は減つてるのか？」

言われた雨宮とモルガナは目を見合わせ、そして自分の腹を見下ろしたタイミングで、誰のとも言えないお腹の鳴る音が静かな店内に鳴った。かくいう私も晩御飯は食べそこなつていたのですつかり空腹ではある。

手伝おうとしたところで今日はいい、と惣治郎に止められた。疲労は顔に出てるし、それを氣遣つてのことかもしれない。

大人しく従つて待つて待っているうちにいつものカレーが出され、とにかくお腹が空いていた面々はそれにながつついた。もちろん、モルガナにも別に食事が用意されていた。

一通り食事を終えたところで、惣治郎は眠そうな顔で帰り支度を始めた。特段話をしようとする素振りもないところから、既に帰りが遅い理由は雨宮からなにかしら聞かされていたらしい。雨宮が言い訳を思いつかなくてしどろもどろになつて慌てているところを見たかつたのだが。

ともあれ、腹が満たされたことによつてようやく緊張感もほぐれてきたのか、私も少々眠くなつてきてしまつた。

惣治郎に入れてもらつたコーヒーマも飲みきつたところだったのもあり、洗い物を終えた後に私は自分でもコーヒーマを淹れることにした。

「あんまり高い豆ばつか使うんじゃねえぞ」

「はいはい」

「じゃあ俺は帰るからな。おやすみ」

私が豆の入つた瓶を物色しているのを流し目で見た惣治郎は、ひとつ大きなあくびをして去つていった。空氣を読まれた氣がしなくてもないが、惣治郎も安心して急に眠氣

が来たのかもしれない。双葉については先に連絡をいれていたし、実はさっさと帰って無事なのを確認したかったのかも。

パタリと、鐘の音とともに閉じられたドアから視線を外し、食後のコーヒーを啜っている雨宮と、その隣のカウンター席にちょこんと座るモルガナのほうを見る。

さて、なにかから話すべきか。

サイフォンに手をかけながら、私はゆつくりと落ち着いた口調を努めながら口を開く。

「どうする？ 私から質問したほうがいいかな」

「なら、聞かせてくれ。妻木さんはあのパレスのことを知っていたのか？」

問いに応じて雨宮が顔を上げてそう言った。まあ一番に雨宮側がはっきりさせておきたいのはそこだろう。それについては明確に否定した。嘘は十八番だとバレているだろうから、なるべく誠意の伝わるよう真っ直ぐ目を見て。

「そっちは？ いつ知ったの」

「…ずっと前だ。多分、4月だったと思う。あの時は鴨志田のことで大変だったから、存在を知ったってだけだったが」

「どうやって知ったのかは？」

「それは…」

「言いなよ。今更怒ったりしないし」

「いや…なんというか…」

なるべく優しくそうに聞こえるよう努力したつもりだったが、雨宮とモルガナは目を泳がせて言葉を濁らせた。偶然だというのならそう言えばいいし、イマイチ能力もペルソナを得た経緯もあやふやな部分が多い私を疑っていたというのなら、それもそれで構わない。

そう言ってみても、まだなんと言葉にしたものか悩んでいる様子で。

それを見た私はある方便をふと思いつく。

「もしかして、あの青い服着た双子のしわざ？」

雨宮を探す過程でいきなり現れて知ったという体でいこう。別に嘘じゃないし、そのほうが今後の話もスムーズに進みやすい。

「つてことは、ツマキもお…双子から？」

「おっ…」

「き、気にするな！少し噛んだだけだ！」

「ふうん。まあ、そうだよ。最初、雨宮達を探しに行ったのがメモントスで、そこでいきなり現れた双子に、居場所を教えてもらった」

「そうか…」

「知り合いなの？」

「まあ、一応。パレスのことは、俺たちもその二人から教えてもらった」

と、どうやら雨宮達のほうもどうやら情報源は双子の看守だったらしく、比較的自然な流れで話がまとまった。例え雨宮側の主張がウソだったとしても、私の証言は信じてくれそうだ。

どういいう知り合いなのかという質問は後回しにして、次はあのパレスの存在そのものについて話し合う。

どうして曲がりにもペルソナを持つ私にパレスが存在するのか：モルガナ曰く、やはりそれはイレギュラー的な事象であり、本来あり得ないはずのことだという。

「ツマキの力は元々不可解なところはあつたけどな。でも今回のことは、はっきりいつて異常としか言いようがない」

「：薄々思つてはいたが、妻木さんのペルソナは、俺たちのそれとはどこか毛色が違った。パレスまでであると、やっぱりただのペルソナとは違うんだな」

「パレスの事は私にも分からない。見つかった以上放置はできないし、調べてはみたいけど」

「調べるって？」

「歪みがどういったものなのかもよく分からなかったし、あのシャドウのことも気に

なってる。ついでに、忘れ物もしてきちやったし」

首をかしげる雨宮に、包丁へ視線を移して伝える。

「みんなとしても、調べておきたいところではあるだろうし、向こうに行くのは別に反対じゃない。ただし、私は必ず同伴する」

今回は全会一致の条件に私が含まれていなかったようだけど、今後はそうもいかない。事情が事情だけに、私に相談する流れにならないのは分かるけど。

暗にパレスの事を黙っていたことを責めているような語気になった気がして付け加える。

「…私が雨宮でも同じようにしたと思う。だから、今回の事はそんなに気にしてない」

「…」

「…ああ、今でも信用できない？」

「そうじゃないっ」

目を伏せる雨宮にへらへらと笑いながら語り掛けると、突然身を乗り出して反論してきた。かと思うと、小さく謝ってまた元の姿勢に。

「どうしたの」

「すまなかつた。本当は俺が一番信じているべきだったのに…。俺だけは、信じていないきやいけなかつたのに…。本当にすまない」

「だから、気にしてないって」

「俺が気にしてるんだ。反省してる。もう二度としない」

若干こちらが引いてしまうほどに猛省する雨宮は私に対して頭を下げてきて、決して上げようとしめない。全会一致のルールや私の事で、雨宮なりに思うところがあるのだろうか。そこまで気にしなくてもとは思うけど。

ずっとこのままなのも面倒だしかわいそうなので、助け舟は出してやる。

「みんなは俺の声を信じただけだ。だから…」

「うん。もう、分かったから大丈夫。そんなに気にされるとこっちもやりづらいし」

「レン。大丈夫だってよ」

「…ああ。それじゃあ、次からは妻木さんも一緒に、あのパレスを調査してくれるってことでいいか」

「もちろん」

「だが、気をつけなくちゃならんのは、あそこがツマキのパレスだつてとこだ。本人があまり長く居すぎるとどんな影響があるかはワガハイにも分からんからな」

その部分だけ見れば双葉の時と状況は同じだ。探索に毎回私に加わるとなると、一度の潜入をいつもよりも短期に済ませる必要があるかもしれない。

撤退の時間も含めると、あのパレスを調べつくすには、かなりの日を要しそうだ。

幸い夏休みに入ったばかりで、学生の私たちには時間が有り余っているけれど。

「雨宮もいる？」

何かを想い考える雨宮に、カップを手にして問いかける。いつもならいると即答してくれそうなものだったが、意外にも拒否されてしまう。今日はもう休むそうだ。

モルガナと一緒に一足先に屋根裏部屋へと、頼りない足つきで上がっていくのを見届けて、私は自分のカップに出来立てのコーヒーを注ぐ。今日の豆はマンデリン。酸味よりも苦味が際立つのが特徴の豆。

ミルクも砂糖も入れず、苦味をそのまま味わう。

舌の上を通って喉を通過するたびに、眠気が侵食してきていた脳が覚めていく。そして、今日対峙した自分のシャドウの事を思い出す。

パレスと言いいシャドウといい、色々と不自然な点が多かった。いきなり襲い掛かって来たかと思えば、警告じみた言葉を言ってきたり…。

そして途中からシャドウは様子が違っていた。

一体私の頭の中で何が起きているのか。それは、もう一度あのパレスに行ってみないことには、分かりそうにない。

コーヒーを半分ほど飲み進め、冷蔵庫になにか甘いものでも入っていないかと思つて立ち上がったその時、テーブルに置いていたスマホが震える。

なんとなく良くない予感がして恐る恐る画面を見ると、すぐ上にいるだけの雨宮から「おやすみ」とメッセージが届いていた。

「…どういう意図？」

…まあ、いいか。

気を取り直して冷蔵庫の中を物色するも、これといってコーヒーに合いそうな代物は入っていないかった。強いて言えばチョコレートだが、これはしかるべき時のためにとつておいてあるものだ。今食べるべきではない。

少し物足りなさを感じながらも、諦めてコーヒー単体で楽しむことにした。

しかし、私が言えた義理じゃないかもしれないが、雨宮も中々に何を考えているかわからないものだ。武見のところでは何を調達しようとしていたのもそうだけど、意外と私の知らないところでは何をしているかわからないものだね。

「よお。まだ寝ないのか？」

不意にかかった声に階段のほうを振り向くと、モルガナが軽快に下へと降りてきていた。

「モルガナこそ」

「ワガハイにとっちゃ一徹ぐらいは大したことじゃないのさ」

「夜行性だから？」

「ネコじゃねー」

軽口を叩き合いながら、私とは真逆の青い瞳と目を合わせる。冗談めかしていたにしては、その目は割と真剣そうに見えた。

「ツマキ」

「なに？」

「…勘違いされてたら面倒だから言っておくが、ワガハイ達はオマエのことを信用してなかったわけじゃない。レンの様子を見りや分かるだろ？ アイツも、オマエにそう思われたんじゃないかって気にしてんだ」

「らしくない」

「そうか？ ああ見えてアイツも結構ナイーブなどころはあるんだぜ？ この前も、借りてた本の返却期限が過ぎてたのに気づいてへこんでたしな」

モルガナはあえて軽薄そうにそう言うが、私にはイマイチピンとこなかった。そんな風に氣遣われるほどのことを、私は雨宮にしたらどうか。

とはいえ、モルガナがらしくもない氣を使つて私にこんなことを言いに来たことが氣遣つてのことだとは理解出来る。私はその氣遣いに感謝しつつ、隣に座るモルガナの背を撫でる。本物のネコよろしく手入れを欠かしていないおかげで無駄に手触りがよい。

「無駄についてなんだよー」

「ありがとう、モルガナ」

「…な、なんだよ。ワガハイはただ事実を言っただけだぞ？」

「それでもだよ」

想いもよらなかつたパレスの発見。シャドウとの邂逅。この世界で意味のないことは起こらない。あの世界には、重大な何かが隠されている。それは火を見るよりも明らかで…。

「私を受け入れようとしてくれてるってだけで十分。だから、モルガナも気にしないでいいよ。裏切られたなんて思っないから」

これから私たちは、妻木綺羅という人間の認知世界を調べていくことになる。そこで目にしたものや耳にしたことは、今後の怪盗団の行く末を大きく左右するだろう。それが良い変化となるかどうかは、私達自身にかかっていることだ。

「フン…オマエこそ、今日ほらしくないぞ」

「うるさい」

例えなにか待ち受けていようと、私の決意は変わらない。

目の当たりにしてやはり確信した。あのシャドウの有様は、外の連中が私に望んでいる姿だ。凄惨な顛末こそCharaにふさわしい、と。

私は、そんな奴らの思い通りにはなつてやらない。

必ず、
私は世界を奪って見せる。